038

高槻市文化財調査報告書　第13冊

上牧遺跡発掘調査報告書

1980年2月

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査報告書　第13冊

上牧遺跡発掘調査報告書

1980年2月

高槻市教育委員会

序　文

高槻市の南を流れる淀川は、古来、瀬戸内と京都を結ぶ交通路として、西国街道とともに重要な役割を果たしてきました。この淀川流域の各所に牧があったことはすでによく知られており、「上牧」の地名の由来もそこにあるものと思われます。特に、「上牧」の対岸は摂関家楠葉牧の所在する枚方市楠葉にあたり、本市に所在する上牧遺跡もまた、楠葉牧と深いつながりのある遺跡といえましょう。

今回の調査では、平安時代から鎌倉時代に至る多くの遺構・遺物を発見するとともに、古墳時代の遺構も発見しました。このように淀川に隣接する低湿地の開拓が何故に行なわれてきたのかをさぐるうえで、本調査は貴重な資料を得たものと確信いたしております。

本市の開発は、これまで市内の中心部および南部を中心に行なわれております。この開発の波が徐々にではありますが市の東部・西部へと拡がっている現在、これらの貴重な文化財を保存・保護していくことはたいへん困難となってきております。

このような中、ここにまとめました報告書は、本市教育委員会が昭和46年～47年にかけて調査を行ないました上牧遺跡の調査報告書であります。この報告書が近年、注目されつつあります中世史研究に少しでも役立つならば幸いに存じます。

なお、調査および本報告書の刊行にあたり、ご協力をいただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

1980年２月

高槻市教育委員会

教育長　平井　正吾

例　言

1．　本書は、1971年7月から翌年4月にかけて高槻市教育委員会が発掘調査を実施した上牧遺跡の発掘調査報告書である。

2．　調査は、高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏を調査担当者とし、高槻市教育委員会橋本久和が従事した。

なお、調査にあたって、関西電力株式会社ならびに工事関係者より多大の協力を得た。記して感謝の意を表します。

3．　出土遺物の整理と本書の作成は、原口正三氏の指導のもとに橋本が担当した。

実測・製図および写真撮影は、橋本が行ない、遺物の撮影は立命館大学学生鐘ケ江一朗氏の援助を得た。なお、遺物(写真)の一部は『高槻市史』第6巻から転載した。

4．　遺物の記載番号は、図版・図面とも同一番号を付した。

5．　本書の作成および出土品の整理にあたって下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表します。

鈴木重治・尾上実・鈴木秀典・川越俊一・堀内明博・百瀬正恒・吉田恵二・恵谷英俊・阪口善就・笹木清利・清水重幸・早見国男・新田康二・白銀良子

(順不同　敬称略)

目　次

第1章　はじめに

第1節　位置と環境…… 1

第2節　調査経過…… 3

第2章　遺　構

第1節　遺構と層序…… 10

第2節　弥生・古墳時代の遺構…… 10

第3節　古代・中世の遺構…… 14

第3章　遺　物

第1節　弥生・古墳時代の遺物…… 25

第2節　古代・中世の遺物…… 29

第4章　まとめにかえて

第1節　遺物に関する問題点…… 41

第2節　遺構からみた上牧遺跡の変遷…… 48

第5章　中世土器研究予察

第1節　高槻の中世遺跡と遺物…… 53

第2節　高槻における中世土器の編年…… 86

第3節　瓦器椀の地域色と分布…… 94

第4節　陶磁器の出土状況…… 106

第5節　まとめ…… 111

土器観察表

図 版 目 次

図版第1　遺跡周辺航空写真

図版第2　a．遺跡近景（南から、昭和46年撮影）
b．遺跡近景（南から、昭和46年撮影）

図版第3　a．B区全景（西から）
b．B区全景（東から）

図版第4　a．C区全景（東から）
b．D区全景（北から）

図版第5　C・D・E区航空写真

図版第6　a．竪穴式住居1、土壙墓4（南から）
b．竪穴式住居2（南から）

図版第7　a．竪穴式住居3（東から）
b．井戸10（南から）

図版第8　a．掘立柱建物4（南から）
b．掘立柱建物5（北から）

図版第9　a．土壙1（東から）
b．井戸1（東から）

図版第10　a．井戸2・5・6（西から）
b．井戸2（東から）

図版第11　a．井戸3（南から）
b．井戸6（西から）

図版第12　a．井戸8（南から）
b．井戸9（南から）

図版第13　a．A区全景（北から）
b．土壙墓1遺物出土状態（北から）

図版第14　竪穴式住居1、小形丸底壺C（6・7）・高杯A_1（8）・A_2（9・10）・B_1(11)・B_2（12）

図版第15　井戸10、高杯A_2（14～16）・B_3（13）・脚部（17～19）・鉢A（20）・小形丸底壺C（21）

図版第16　井戸10、甕A_1（22）・A_2（23）・A_3（24）・甕体部（25）井戸11、小形丸底壺C（26・27）

図版第17　井戸11、小形丸底壺C（28）・高杯A_2（29・30）・甕A_3（32）井戸12、小形丸底壺D（33）土壙墓5、甕A_3（35）・甕B（36）

図版第18　土壙墓5、高杯A_2(37)・脚部(38)包含層、弥生式土器壺(39)・甕（40）・高杯（43・44）壺B_2（46）・甕C（47）

図版第19　包含層、壺B_1（45）・C_1（54～57）・C_2（60）

図版第20　包含層、壺C_1(58・59)・B_3(61)・B_4（63）・B_5（64）

図版第21　包含層、甕A_1（65）・A_2（68）・B（70・71）・甕底部（72）・高杯B_1（73・74）

図版第22　包含層、高杯B_2（75)・B_3（76）・A_2（77・78・80・81）A_4（79）

図版第23　包含層、高杯A_2（82・83）・A_3（84）・高杯脚部(85～87・89・91)

図版第24　包含層、壺D（93）・高杯脚部（88・90）・小形丸底壺A_1（94～96）・A_2（97）

図版第25　包含層、小形丸底壺A_2（98・99）・B（100～102）・C（104・105）

図版第26　包含層、小形丸底壺C（103）・鉢B（106・107）・器台B（110・111）・器台C（109）

図版第27　竪穴式住居1、高杯B_1細部(11)井戸10、高杯脚部細部（19）・小形丸底壺C細部（21）井戸11、小形丸底壺C(27)

図版第28　包含層、須恵器・蓋(113～120)・杯（121・122）

図版第29　須恵器・杯（123・124）・高杯（125～127）・壺（128・129）・甕（130）・土師器杯（131）

図版第30　井戸2、瓦器椀（1～4）・小椀（5）・皿（6・7）・盤(42)

・土師器皿Ⅰ（12～14）・皿Ⅱ（32・40）・須恵器鉢（50）
図版第31　井戸4、瓦器椀(103)井戸6、瓦器椀(120)・土師器皿Ⅰ(123・125)井戸8、瓦器椀(133) 井戸9、瓦器椀(138)・皿(140)・土師器皿Ⅱ(145)
溝1、瓦器椀(147～155)
図版第32　溝1、瓦器椀(156・158・159)輪花椀（160・161）・皿(163)・小羽釜(166)・土師器皿Ⅱ(174)
図版第33　溝1、瓦器香炉蓋（221）
図版第34　A区土壙墓1、瓦器椀(230・231)・片口椀(232)・小椀(233～235)・土師器皿Ⅰ(236・239)・皿Ⅱ(240～244)
A区土壙墓2、瓦器椀(245)台付皿(246)・小椀(247)
図版第35　A区土壙墓2、土師器皿Ⅰ(248・249)・皿Ⅱ(250) A区柱穴、瓦器椀(251)・土師器皿Ⅰ(252)溝3、土師器皿Ⅲ(189)・皿Ⅳ(190・191・195) A区包含層、瓦器皿(257)・椀(265～268)包含層、瓦器椀（315）
図版第36　A区包含層、土師器皿Ⅰ(285・286)・皿Ⅱ（262～282）・皿Ⅴ(290)・皿Ⅵ(291) 包含層、瓦器椀（309）・羽釜A_2（376）
図版第37　a．井戸2、須恵器甕（51・52・356・357）
b．井戸2、須恵器鉢(46～49)
図版第38　a．井戸2、白磁椀A_1（57～68）
b．井戸2、白磁椀A_2(69)・B_1(70・71)・B_2(72)・B_3(74)・皿A_1(75)・A_2(76)・碗B(73)
図版第39　a．井戸2、瓦器盤（43・44）・土師器甕A(55)・B(56)・羽釜A(53)・B(54)・脚台（77・78）・皿底部（367）
b．井戸3、土師器皿Ⅱ(99・100)・皿Ⅰ(101)・甕B(200)・瓦器羽釜A(199)・白磁(102)井戸4、緑釉陶器(107)井戸5、白磁碗B（119）
図版第40　a．井戸6、瓦器鍋(201)・羽釜A_1(202)・B(203)・土師器甕B(204・205)・羽釜A(206)
b．井戸8、土師器甕B(209)須恵器甕（358～361）
図版第41　a．井戸9、瓦器盤(209・210)・土師器盤(211)・羽釜B(212・213)・須恵器甕(214・215)
b．溝1、瓦器皿(164・165)・羽釜A_1(222・223)・A_2(224)・盤(225・226)・土師器盤（227）
図版第42　a．溝2、土師器皿Ⅲ(186)・皿Ⅳ(187)・鍋(219)・羽釜A(218)・瓦器羽釜A_2(215)・鍋(217)・須恵器鉢（220）
b．A区包含層、瓦器椀(269～276)・皿（257）
図版第43　a．A区包含層、土師器皿(260)・脚台(292～294)・高台(295)・鉢（371）・甕（372）
b．A区包含層、白磁碗A(296～301)・B(302・304)・皿A(305～308)・B（303）
図版第44　a．A区含層、瓦器盤（339）・須恵器鉢（346～350）
b．A区包含層、瓦器注口(258)・羽釜A_2(333～335)・B(337)・盤（336）・鍋（338）
図版第45　a．A区包含層、須恵器甕(351・353～355)・鉢（228）
b．A区包含層、陶器(352)・常滑焼(362～365)・丹波焼(366)
図版第46　a．A区包含層、土師器羽釜A(340・341・369・370)・B(342・343・368)・鍋（344・355）

b．井戸２、砥石（１）・石鍋（３）井戸９、石鍋（４）包含層、土錘（７）・石斧（６）叩き石（５）・政和通宝（８）

図版第47　a．井戸２、木製椀（89～93）
b．井戸１、曲物底（79～82）下駄（83）

図版第48　a．井戸２、柄杓（94）・扇骨（96）
b．井戸２、用途不明木製品（97・98）・木棺

図版第49　a．井戸２、曲物蓋（84・85・88）
b．井戸２、曲物底（86）・下駄（95）

図版第50　塚原Ｂ33号墳（５）・郡家川西（11・12）・津之江南（58・59）・高田（61）・昼神車塚（67・69）・安満（85～99）遺跡出土の土器

図版第51　宮田遺跡出土の土器・磁器（17～41）

図版第52　宮田（33～45）・大塚（122・128）・柱本（129～148）遺跡出土の土器

図版第53　柱本遺跡出土の土器（151～184）

図版第54　宮田遺跡出土の青磁皿（55・56）・白磁碗（57）

図版第55　宮田遺跡出土の青磁碗（53・54）

図版第56　第Ⅰ期の瓦器椀（21）・第Ⅱ期の瓦器椀（36）

図版第57　第Ⅲ期の瓦器椀（155）・第Ⅳ期の瓦器椀（97）

図版第58　常滑壺（204・205）・須恵器甕（209）・鉢（105・210）・天目茶碗（211・213）・鉢（212）

図版第59　常滑壺（206）・備前甕（208）・瓦器内面細部（１・２・４）・黒色土器内面細部（３）

図面目次

第1図　竪穴式住居1、壺A（1）・甕（2～4）・台付鉢底部(15)　竪穴式住居2、小形丸底壺C（6・7）・高杯A_1（8）・A_2（9・10）

第2図　井戸10、高杯A_2（14～16）・B_2（13）・脚部（17～19）・鉢A（20）・小形丸底壺C（21）・甕A_1（22）・A_2（23）・A_3（24）・甕体部（25）

第3図　井戸11、小形丸底壺C（26～28）・高杯A_2（29・30）・甕A_2（31）・A_3（32）井戸12、小形丸底壺D(33)　土壙墓5、甕A_3（34・35）・B(36)・高杯A_2（37）・脚部（38）

第4図　包含層、弥生式土器壺（39）・甕（40・41）・有孔鉢（42）・高杯(43・44) 壺B_1（45）・B_2（46）・甕(47・48)

第5図　包含層、壺C_1（49・50）・C_2（51）・C_3（52・53）・C_4（54・55）

第6図　包含層、壺C_4（56～59）・C_5（60）・B_3（61・62）

第7図　包含層、壺B_4（63）・B_5（64）・甕A_1（65）・A_2（66）・A_3（67～69）・B（70・71）・甕底部（72）

第8図　包含層、高杯B_1（73. 74）・B_2（76）・B_3（75）・A_2（77・78・80・81）・A_4（79）

第9図　包含層、高杯A_2（82・83）・A_3（84）・脚部（85～91）・鉢B（92）・壺D（93）

第10図　包含層、小形丸底壺A_1（94～96）・A_2（97～99）・B（100～102）・C（103～105）・鉢C(106・107)・器台A（108・109）・器台B（110・111）

第11図　包含層、須恵器蓋(113～120)・杯（121～124)・高杯(125～127)・壺(128・129)・甕（130）・土師器杯（131）

第12図　井戸2、瓦器椀（1～4）・小椀（5）・皿（6・7）・土師器皿Ⅰ（8～16）・皿Ⅱ（17～41）

第13図　井戸2、瓦器盤（42～44）・須恵器鉢（46～50）・甕（51・52）・土師器羽釜A(53)・B（54）甕A（55）・B（56）

第14図　井戸2、白磁碗A_1（57～68）・A_2（69）・B_1（70・71）・B_2（72）・B_3（74）・碗B（73）・皿A_1（75）・A_2（76）・土師器脚台（77・78）

第15図　井戸1、曲物底（79～82）・下駄（83）井戸2、曲物底（86・87）・蓋（88）・椀(89～93)

第16図　柄杓（94）・下駄（95）・扇骨（96）用途不明木製品（97・98）

第17図　井戸3、土師器皿（99～101)・白磁碗（102）井戸4、瓦器椀（103～105）・土師器皿Ⅱ（106)・緑釉陶器（107）井戸5、瓦器椀（108～110）・皿（111)・土師器皿Ⅰ（112～114）・皿Ⅱ（115～118）・白磁碗B（119）井戸6、瓦器椀（120～122)・土師器皿Ⅰ（123～125）・皿Ⅱ（126～131）・白磁碗A_1（132）

第18図　井戸8、瓦器椀（133～134）・皿135）井戸9、瓦器椀（137～139）・皿（140）・土師器皿Ⅰ（141・142）・皿Ⅱ（143～146）溝1、瓦器椀（147～155）

第19図　溝1、瓦器椀（156～159）・輪花椀（160・161）・皿（162～165）・小羽釜(166)・土師器皿Ⅰ（167～169）・皿Ⅱ（170～182）・白磁碗（135～185）溝2、土師器皿Ⅲ（186）・皿Ⅳ（187）溝3、土師器皿（188・189）・皿Ⅳ（190～195）土壙2、土師器皿Ⅰ（197）・皿Ⅱ（198）

第20図　井戸3、瓦器羽釜A(199)・土師器甕B(200)　井戸6、瓦器鍋(201)・羽釜A_1（202）

・B（203）・土師器甕B（204・205）・羽釜A（206）　井戸5、壺（208）　井戸9、瓦器盤（209・210）・土師器盤（211）・羽釜B（212・213）・須恵器甕（214・215）
井戸8、土師器甕（207）
第21図　溝1、瓦器香炉蓋（221）・羽釜A_1（222・223）・A_2（224）・盤（225・226）・土師器盤（227）　溝2、備前焼擂鉢（214）・瓦器羽釜A_3（215）・A_4（216）・鍋（217）・土師器羽釜A（218）・鍋（219）・須恵器鉢（220）　土坑2、須恵器鉢（228）
包含層、須恵器鉢（229）
第22図　土坑墓1、瓦器椀（230・231）・片口椀（232）・小椀（233～235）・土師器皿Ⅰ（236～239）・皿Ⅱ（240～244）　土坑墓2、瓦器椀（245）・台付皿（246）・小椀（247）・土師器皿Ⅰ（248・249）・皿Ⅱ（250）　柱穴、瓦器椀（251）・土師器皿Ⅰ（252）・白磁皿（253）　A区包含層、瓦器皿（259～257）小椀（259）土師器皿（260～262）
第23図　A区包含層、瓦器椀（263～276）・土師器皿Ⅰ（285～289）・Ⅱ（277～284）・Ⅴ（290）・Ⅵ（291）・脚台（292～294）・高台（295）
第24図　A区包含層、白磁碗A_1（296～301）・B（302・304）・皿A（305～308）・B（303）
包含層、瓦器椀（309・310・314～316）・皿（311・312）・土師器皿Ⅰ（317～319）・Ⅱ（320～327・330・331）・Ⅳ（328・329）
第25図　A区包含層、瓦器羽釜A_2（333～335）・B（337）・盤（336・339）・鍋（338）・須恵器鉢（346～350）・甕（351）・土師器羽釜A（340・341）・B（342・343）・鍋（344・345）・陶器（352）
第26図　井戸2、須恵器（356・357）・土師器皿底部（367）　井戸8、須恵器（358～361）
A区包含層、須恵器（353～355）・常滑焼（362～365）・丹波焼（366）
第27図　A区包含層、土師器羽釜B（368）・A（369・370）・鉢（371）・甕（372）
包含層、瓦器羽釜A_2（376）・A_3（373～375）・盤（377）・土師器盤（378）

挿図目次

挿図第1　上牧遺跡とその周辺
2　上牧遺跡周辺地形図と調査位置図
3　トレンチ断面図
4　各調査区断面図
5　竪穴式住居（1・2・3）、土坑墓（4・5）実測図
6　井戸（10・11・12）、土坑墓（1・2・3・6）実測図
7　井戸（2・5・6）実測図
8　井戸（3）実測図、溝（1）断面図
9　井戸（1・4・7・8）実測図
10　井戸（9）実測図、溝（2・4）断面図
11　A区実測図
13　遺構・包含層出土の砥石・石器・土錘
14　土坑墓1瓦器椀・土師器皿法量表
15　土坑墓2瓦器椀・土師器皿法量表
16　井戸2瓦器椀・皿法量表
17　井戸2土師器皿法量表
18　井戸9瓦器椀・皿法量表
19　井戸9土師器皿法量表

20　溝1瓦器椀・皿法量表
21　溝1土師器皿法量表
22　A区包含層瓦器・土師器法量表
23　宮田遺跡・平安京井戸ＳＥ８瓦器椀・土師器皿法量表
24　上牧遺跡周辺の地形
25　弥生時代の上牧遺跡周辺
26　古墳時代の上牧遺跡周辺
27　古代・中世の上牧遺跡周辺
28　高槻市の中世遺跡分布図
29　塚脇・郡家・塚原古墳群、上氷室・郡家川西遺跡出土遺物
30　宮田遺跡出土遺物（1）
31　宮田遺跡出土遺物（2）
32　宮田・富田遺跡出土の中国製青磁・白磁
33　津之江南・富田・天神山・大川・前島遺跡・芥川城跡出土遺物
34　梶原寺跡・安満遺跡出土遺物
35　安満・天川遺跡・梶原寺跡出土遺物
36　大塚遺跡出土遺物
37　柱木遺跡出土遺物（1）
38　柱本遺跡出土遺物（2）
39　柱本・仁和寺遺跡出土遺物
40　大塚・柱本遺跡出土遺物
41　出土遺物からみた中世遺跡の変遷
42　中世土器法量変遷図
43　瓦器椀の地域色と分布
44　楠葉型瓦器椀と和泉型瓦器椀の分布
45　淀川河床の遺跡
46　川尻遺跡出土の瓦器椀
47　高槻市出土の常滑・備前焼
48　高槻市出土の瀬戸・丹波焼と十瓶山・神出古窯の須恵器

表　目　次

表1　上牧遺跡出土の中世土器分類表
表2　淀川河床遺跡出土の瓦器分類表
表3　高槻市における中世土器・陶磁器分類表

別　図　目　次

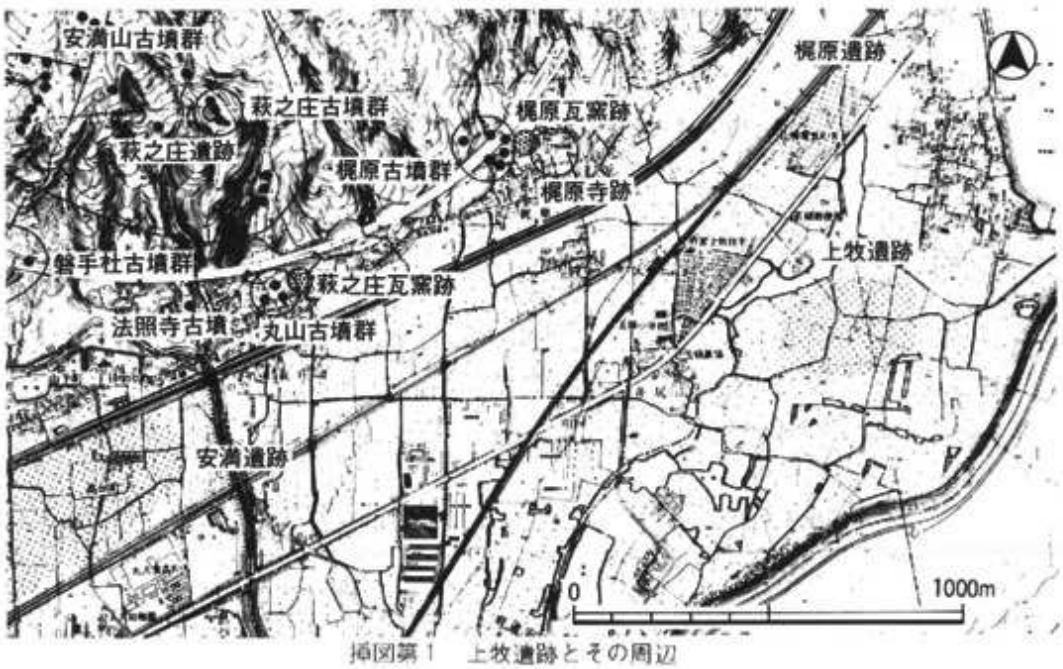
別図1　上牧遺跡遺構図
別図2　高槻における中世土器の編年表

第1章　はじめに

第1節　位置と環境

高槻市の東部、五領地区は淀川が形成した低湿な後背湿地が拡がる。数千年前（河内湾1の時代）にはこの付近は淀川の河口であったため、いくつかの流路に分かれ、その間には中洲が発達した。現在の上牧町・道鵜町一帯はこのような中洲のひとつで、内ケ池・大野池などという分流の名残りをとどめる河跡湖が各所にみられる。自然堤防は発達が悪く、小規模なものが島状に散在するにすぎず、上牧・井尻・鵜殿などの古い集落がその上に立地している。

上牧遺跡は河跡湖のひとつである内ケ池の南側に位置し、すぐ西側には井尻の集落がある。行政区画では高槻市上牧町5丁目にあたる。遺跡の北方約1kmには北摂山地に連なる神内山の山麓がせまり、南方約1kmは淀川本流である。遺跡と神内山の山麓までの間に、京都と大阪を結ぶ国道171号線・国鉄東海道本線・国鉄東海道新幹線・阪急京都線が、山麓には名神高速道路が通過しており京阪神の交通網が集中している。これは、単に現在だけでなく古代・中世においても重要な交通の要衝を占めてきた。上牧遺跡の約4km上流で宇治川・桂川・木津川の三河川が合流して淀川となる。周辺の山崎・水無瀬は陸上・水上交通の拠点であると同時に河陽離宮・水無瀬離宮が営まれ、対岸には石清水八幡宮が鎮座し、古代・中世の政治・文化・経済の



挿図第1　上牧遺跡とその周辺

中心地でもあった。これら古代・中世の繁栄を示すように淀川両岸には各時期の遺跡が数多く分布している。とくに、淀川河床や木津川河床・広瀬南遺跡・前島遺跡では水上交通の繁栄を示す各時期・各地方の遺物が採集されている。また、最近では殿下渡領の一部かとみられる枚方市楠葉東遺跡なども調査されている。①

上牧遺跡周辺に注目すると、この付近は中洲であったため条里制土地区画の遺構がみられず、「上牧」の地名は古代の牧場の所在を示しているようである。9世紀末の記録では淀川両岸の堤防近くに公私の牧があったことを記している。上牧遺跡の南約1kmの鵜殿は土佐日記・平家物語にも記されているが、後冷泉天皇の治暦3（1067）年に藤原兼家の後裔瀧口季秀と弟義秀が開拓し、鵜殿に季秀が居住し鵜殿氏と称した。この時に井尻（井内）も同時に開拓され義秀が居住したらしい。その後、については不明確な点が多いが、室町時代後期には烏丸家が周辺を領地とした。②上牧町1丁目には文明3（1471）年に烏丸大納言の猶子権大僧都日順の開創になる日蓮宗本澄寺があり、境内には烏丸家領を示す境界石が残されている。

上牧遺跡周辺については、これまでほとんど調査は行なわれていなかった。東海道新幹線建設に際して遺跡北方の梶原4丁目において土師器が採集され、1961年頃関西電力の送電線鉄塔の基礎工事中に古墳時代の須恵器が数点採集されたため、この付近に遺跡の存在を知る手掛りとなった。その後1973年に工場の資材置場建設に先立って発掘調査を実施したところ、古墳時代の土師器と溝状遺構が検出された。③神内山西方の山裾にある梶原瓦窯址は、四天王寺瓦窯とともに東大寺造営に使用した瓦を焼いた窯址である。1977年、この東南に隣接する梶原寺跡が調査され、上層からは中世の遺跡や遺物が、下層からは梶原寺跡と関連する遺構が検出されている。また、最近の調査では、この下層に古墳時代の遺構も検出されている。④また、このすぐ西側、谷をへだてた山間には、古墳時代後期の梶原古墳群や萩之庄古墳群があるが、その大半は後世の開墾によって消滅している。梶原寺跡・梶原瓦窯址の西方、安満山には古墳時代後期の安満山古墳群がある。この安満山古墳群に囲まれた一支脈上の尾根に萩之庄1号・2号墳があり、桧尾川以東にある古墳時代前期の前方後円墳として重要な位置を占めている。この墳丘下には弥生時代後期の竪穴式住居跡が検出されている。安満山の南麓には磐手杜古墳群など数基ずつの横穴式石室が分布している。⑤

桧尾川の西岸には弥生時代から現在まで営まれる安満遺跡があり、その南方約2kmには中世の天川遺跡がある。この他、島本町には広瀬遺跡をはじめ古代・中世関係の遺跡があり上牧遺跡との関連を考えるうえで重要である。（挿図第1、図版第1・2）

注①　「楠葉東遺跡」（『枚方市における遺跡調査概況　1968～1976年』　枚方市文化財研究調査会　1976年）

② 天坊幸彦『高槻通史』（高槻市役所　1953年）
③ 橋本久和「梶原遺跡」（『昭和47・48年度高槻市文化財年報』 1974年）
④ 森田克行「梶原寺跡」（『昭和51・52年度高槻市文化財年報』 1978年）
⑤ 原口正三『高槻市史』第6巻（高槻市役所　1973年）

第2節　調査経過

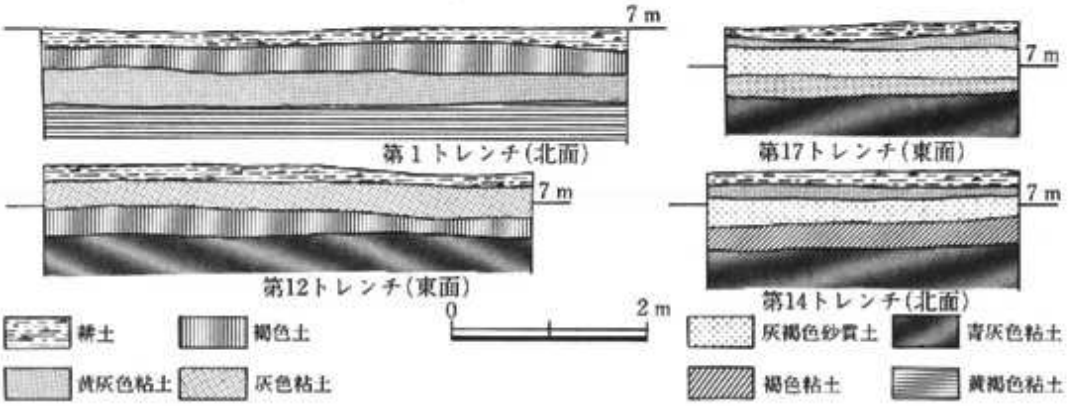
これまで、水田地帯であった上牧町5丁目に関西電力株式会社淀川変電所の建設が計画され、1971年夏から工事が着手されることになった。この地の南を流れる淀川の対岸は、平安時代の殿下渡領として有名な枚方市楠葉にあたり、楠葉牧に関連する遺構の存在が想定されたため、工事関係者と協議を行い、変電所建設用地内の約10万㎡について遺構の確認調査を実施することになった。（挿図第2・3）

第1次調査　確認調査は、まず変電所建設で最も急がれている内ケ池と灌漑用水路との間について7月22日から8月5日まで実施した。

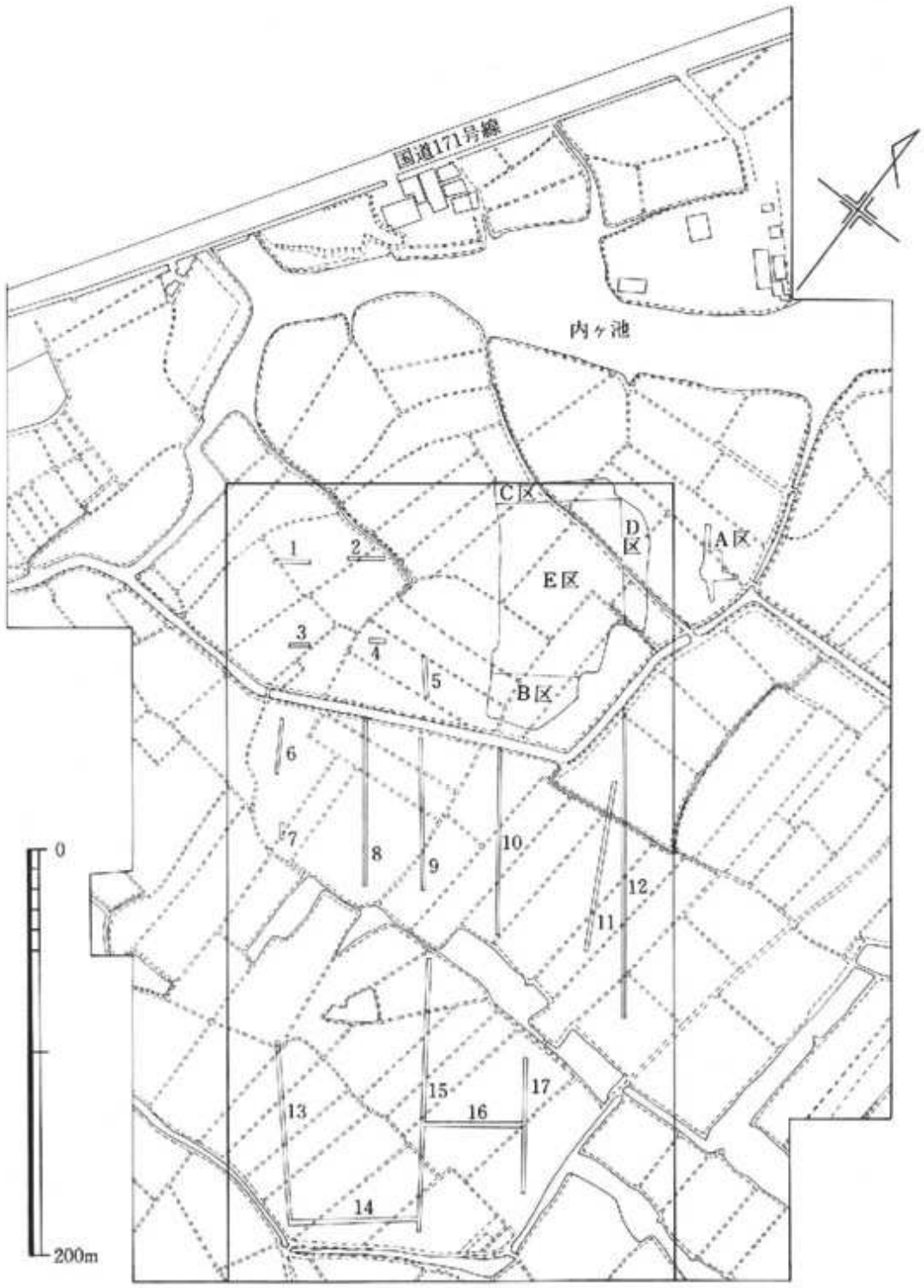
まず、変電機埋設地点を中心に（第5トレンチ付近）ユンボを用いて幅約3mのトレンチを9カ所に設定し、断面の観察・遺構の有無について検討した。第1～第5トレンチは耕土下に0.2～0.3mの褐色土の堆積がみられたが、遺構・遺物は検出されなかった。これに対して、変電所の外周排水路より東側に設定したトレンチでは、褐色土・暗褐色土から瓦器・土師器を多量に検出した。

このため、トレンチを漸次拡張したところ、2基の土坑墓と柱穴を検出した（A区）。外周排水路内側に設定したトレンチ（B・C・E区内）でも褐色土・暗褐色土から瓦器・土師器をはじめ、古墳時代の須恵器・土師器を検出したが、遺構は認められなかった。

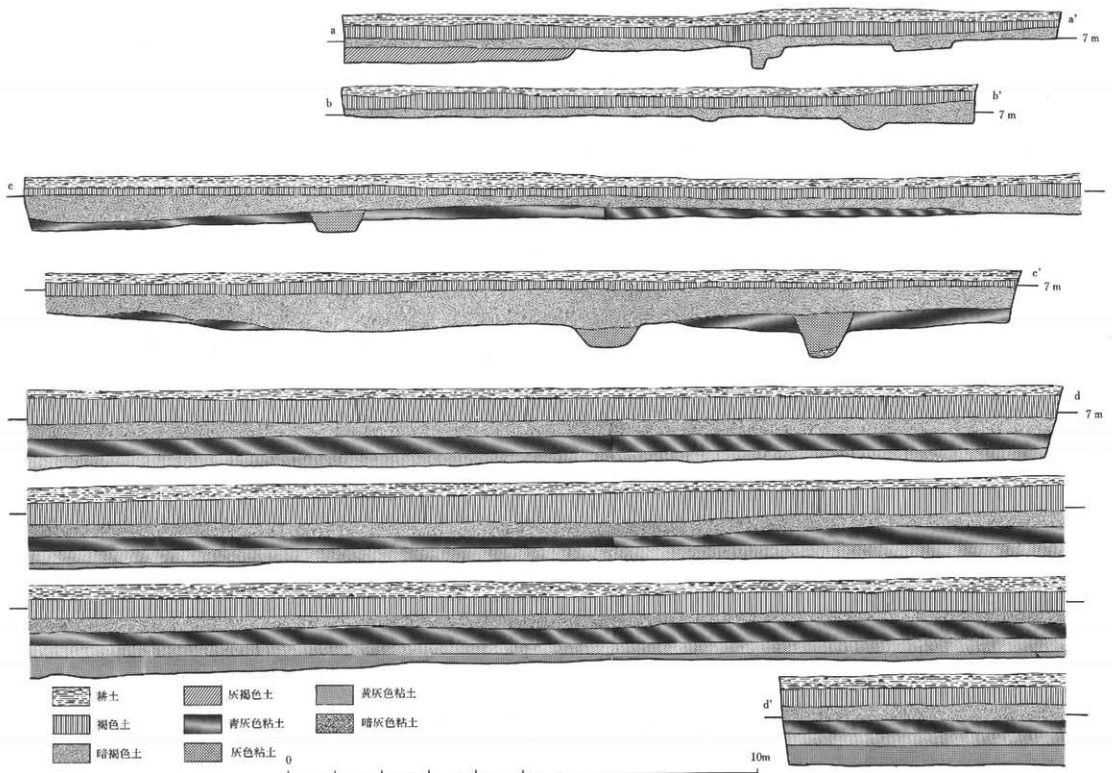
この結果をうけて、直ちに遺跡発見届が文化庁に提出され、上牧遺跡と呼称することになった。同時に関西電力株式会社中央送変電建設事務所から土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の



挿図第2　トレンチ断面図



挿図第３　上牧遺跡周辺地形図、調査区位置図



挿図第4　各調査区断面図

発掘届出書が提出された。遺跡の取り扱いについて、大阪府・高槻市両教育委員会と工事関係者との協議の結果、遺構・遺物の確認された地域について調査を実施することになった。さらに遺跡の拡がりを確認するため、灌漑用水路より南側についても確認調査を実施することになった。

第2次調査　南側の確認調査は8月27日から9月2日まで実施した。前回と同様ユンボを使用した。調査範囲内に第6～第17トレンチを設定して調査を実施したが、もっとも東側に設けた第12トレンチにおいて部分的に褐色土の堆積が認められるのみで、ほぼ全面にわたって淀川の氾濫による砂礫と粘土の堆積がみられ、遺構・遺物は認められなかった。

第3次調査　秋に入り、工事の急ぐB区について発掘調査を実施することになった。調査は10月9日から11月12日まで実施した。この地区では古墳時代の竪穴式住居跡や井戸をはじめ、古代・中世の掘立柱建物跡・溝などを検出した。

第4次調査　翌72年に入り、B区の北側一帯（C・D・E区）の工事が着手されることになり、この部分の調査を2月9日から4月26日まで実施した。当初は外周排水路（C・D区）部分から調査を実施し、遺構の状態によって内側も調査する予定であったが、調査開始と同時に遺構・遺物が多量に発見されたため、内側（E区）も同時に調査を実施することになった。検出した遺構は古墳時代の竪穴式住居跡や古代・中世の掘立柱建物跡・井戸・溝などがある。

調査区が広いため排土作業はユンボ・ダンプカーを使用し、図面作成には航空測量を行なった。作業は4月26日にすべて終了したが、この間、同変電所勤務者の社宅については遺構の存在しない地区に位置を変更するなど工事関係者の協力を得ることができた。

第1次調査

7月22日　試掘調査地区の打ち合わせの後、変電機埋設地点付近に第1～第4トレンチを設定。

7月23日　雨のため休み。

7月24日　第5トレンチの設定。褐色土がみられるが遺構はみられない。

7月25日　雨のため休み。

7月26日　雨のため休み。

7月27日　変電機埋設地区には遺構が認められないため、外周排水路地区の試掘をはじめる。東側外周排水路地区の東にトレンチを設けたところ、土師器・瓦器を包含する褐色土を検出。

7月28日　土師器・瓦器の出土するトレンチを拡張して遺構の確認を急ぐ。この地区をA区とする。

7月29日　A区の褐色土除去作業。
外周排水路の西側（B～E区）にトレンチを設定したところ、褐色

土・暗褐色土がみられ、土師器・須恵器が包含されている。

7月30日　A区の褐色土除去作業。褐色土層から北宋銭（政和通宝）を検出。

7月31日　A区の褐色土・暗褐色土除去作業。暗褐色土層を除去すると柱穴群が検出された。

8月1日　A区の遺構検出作業。各トレンチの実測。

8月2日　A区の遺構検出作業。土壙墓1・2を検出。

8月4日　A区遺構実測。遺構写真撮影。

8月5日　A区、および各トレンチの実測補足。

第2次調査

8月27日　第6～第12トレンチを設定する。部分的に褐色土がみられるが青灰色粘土・砂層が交互に堆積し遺構はみられない。

8月28日　第13～第17トレンチを設定する。細砂の堆積がみられるだけである。

8月29日　各トレンチ写真撮影。

9月1日　各トレンチ実測。

9月2日　各トレンチ実測。

第3次調査

10月9日　B区の調査を開始する。水路付近の表土除去作業からはじめる。褐色土・暗褐色土層に土師器・瓦器が包含されている。

10月10日　表土除去作業。

10月11日　雨のため休み。

10月12日　表土除去作業。以前に採集された須恵器の出土した鉄塔の基礎部分の断面観察。

10月13日　表土除去作業。

10月14日　雨のため休み。

10月15日　表土除去作業。褐色土層から土師器（高杯）出土。

10月16日　褐色土・暗褐色土除去作業。

10月17日　褐色土・暗褐色土除去作業。

10月18日　褐色土・暗褐色土除去作業。

10月19日　褐色土・暗褐色土除去作業。B区の西側で竪穴式住居を検出(2)。

10月20日　褐色土・暗褐色土除去作業。半壊の竪穴式住居（3）を検出。

10月21日　竪穴式住居3の東側に柱穴群を検出する。

10月22日　全体の遺構検出作業。

10月23日　B区東南部の暗褐色土除去作業。竪穴式住居2の調査。

10月24日　B区東部の暗褐色土除去作業。地山面は東へ下がっているようである。竪穴式住居3調査。西部に南

北方向の溝(7)を検出。

10月25日　竪穴式住居3東側の柱穴群調査。地山が東へ下降する付近に杭列らしい小ピットを検出。東側に溝10を検出する。

10月26日　昨夜の雨のため作業中止。排水作業。

10月27日　東南部の暗褐色土層除去作業。柱穴群の調査。

10月28日　南部の暗褐色土除去作業。柱穴群の調査。

10月29日　南部の暗褐色土除去作業。柱穴群調査。竪穴式住居3の東側に南北2間、東西4間以上の建物を検出。東柱を確認する(建物4)。

10月30日　雨のため休み。

10月31日　休み。

11月1日　西部の暗褐色土除去作業。

11月2日　西部の暗褐色土除去作業。

11月3日　西部の遺構検出作業。

11月4日　南部の遺構検出作業。地山が南へ下降しており、竪穴式住居3の南に円形の井戸(10)を検出。内部から布留式土器を検出する。
各遺構断面図作成。

11月5日　井戸(10)の調査。南部の遺構検出作業。

11月6日　南部遺構検出作業。

11月7日　休み。

11月8日　西南部の柱穴群調査。

11月9日　遺構写真撮影。

11月10日　遺構実測。

11月11日　遺構実測。竪穴式住居2の北側に土坑墓を検出する(土坑墓5)。

11月12日　土坑墓5の調査。遺構実測補足。

第4次調査

2月9日　北側外周排水路地区(C区)の調査を開始する。ユンボで表土除去作業。

2月10日　雨のため休み。

2月11日　遺構・遺物がみられないので地山まで掘さくすることにする。耕土下に褐色土・暗褐色土が約1m堆積している。

2月12日　排土作業。建物らしい柱列を検出する(建物5)。

2月13日　排土作業。

2月14日　排土作業。C区の東端付近の褐色土層(表土下約40cm)に土器群を検出する。C区の排土作業終了。

2月15日　東側外周排水路地区(D区)の排土作業開始。C区の東端部で不整形の土坑を検出する(土坑1)。

2月16日　排土作業。褐色土層から土師器破片が検出される。円形の井戸とみられる遺構を検出(井戸1)。

2月17日　排土作業。褐色土層から土師器皿、須恵器破片が検出される。土坑1

調査。

2月18日　排土作業。土坑1調査。

2月19日　排土作業。井戸1の南に柱穴群を検出。

2月20日　休み。

2月21日　排土作業。井戸1南の柱穴群調査。

2月22日　排土作業。井戸1の南約35mに井戸2を検出。

2月23日　排土作業。柱穴群の精査。D区の排土作業終了。航空測量の打ち合わせ。

2月24日　C区の建物1を調査するため周辺の排土作業。

2月25日　排水路内側の全面調査のため、仮設道路を敷設する作業がはじまる。

2月26日　排水路内側(E区)の排土作業を開始。D区柱穴群調査。

2月27日　休み。

2月28日　排土作業。

2月29日　排土作業。C区東端の土器群調査。

3月1日　排土作業。仮設道路完成。

3月2日　排土作業。C区遺構調査。

3月3日　C区の建物5東側に石組の井戸を検出する(3号)。排土作業。

3月4日　建物5の南側一帯に小柱穴群を検出する。排土作業。

3月5日　休み。

3月6日　排土作業。建物5南の小柱穴群の調査。

3月7日　排土作業。井戸1・2調査。

3月8日　排土作業。井戸1調査。

3月9日　排土作業。井戸1調査。

3月10日　排土作業。井戸2周辺調査。

3月11日　排土作業。D区遺構検出作業。

3月12日　排土作業。E区の南部に竪穴式住居(1)を検出する。

3月13日　排土作業。D区の実測割りつけ。竪穴式住居1の西に建物9を検出する。

3月14日　排土作業。C区実測割りつけ。井戸2付近調査。

3月15日　排土作業。C区遺構実測。竪穴住居1と重複する土坑墓（4）を検出。

3月16日　排土作業。E区中央部東西溝（4）の調査。

3月17日　排土作業。溝4の調査。

3月18日　排土作業。竪穴式住居1周辺調査。溝4調査。

3月19日　排土作業。溝4調査。

3月20日　排土作業。

3月21日　〃

3月22日　〃

3月23日　〃

3月24日　〃

3月25日　排土作業。溝1の西端で土師器・瓦器が多数検出される。

3月26日　雨のため休み。

3月27日　排土作業。溝1調査。C区東部の土器群調査。

3月28日　排土作業。井戸2の西側に2基の井戸を検出（5・6）。溝4調査。排土作業終了。

3月29日　溝4の南に井戸4を検出。

3月30日　井戸2・5・6周辺調査。
3月31日　〃
4月1日　〃
4月2日　井戸3調査。
4月3日　井戸3調査。D区写真撮影。
4月4日　井戸2調査。
4月5日　井戸2調査。井戸4調査。
4月6日　井戸2調査。
4月7日　雨のため休み。
4月8日　〃
4月9日　井戸2調査。
4月10日　井戸2・6調査。
4月11日　井戸2・9調査。
4月12日　井戸2・9調査。
4月13日　井戸6調査。
4月14日　全体の遺構検出作業。
4月15日　雨のため休み。
4月16日　排水作業。井戸9調査。
4月17日　井戸2・6写真撮影。
4月18日　井戸4・5調査。
4月19日　井戸5・7調査
4月20日　雨のため休み。
4月21日　排水作業。
4月22日　排水作業。全域清掃。
4月23日　井戸3・9実測。全域清掃。
4月24日　航空測量。各井戸写真撮影。
4月25日　略図作成。
4月26日　略図作成。本日で全ての作業終了。

第2章　遺　　構

第1節　遺構と層序

調査地区周辺では0.2～0.3mの耕土下に床土がみられず、すぐに褐色土が堆積している。褐色土はA・B区付近では0.2～0.3m、E区付近では0.4～0.5m堆積していた。この褐色土下には暗褐色土がありA・E区では0.2～0.3m、B区では部分的に約0.7m堆積する。褐色土・暗褐色土ともに近世の陶磁をはじめ、瓦器・土師器・須恵器・古式土師器が包含されている。

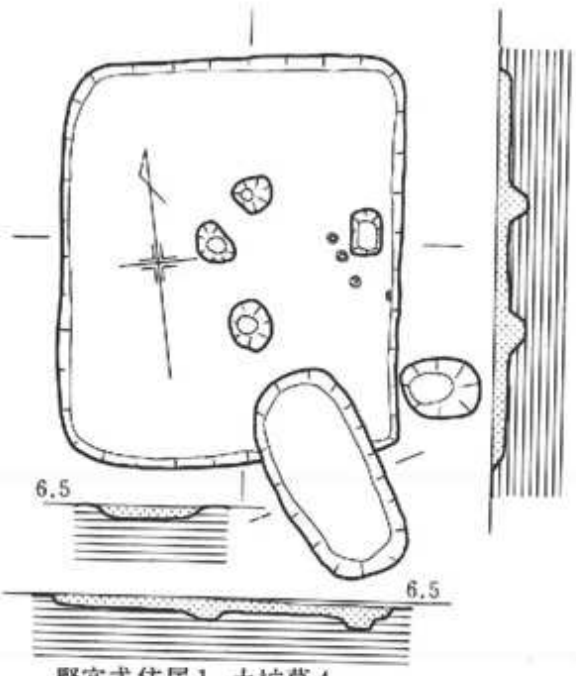
A区では暗褐色土の下が灰褐色土で、この面から柱穴群と土壙墓2基を検出した。土壙墓内からは供献された瓦器椀が出土している。B・C・D区では暗褐色土の下に青灰色粘土が0.3～0.4m堆積する。B区ではこの層の下が黄灰色砂質粘土となり、この面に遺構を認めた。黄灰色砂質粘土は約1mの厚さで堆積していて、徐々に東へ下降する。C・D・E区でも、B区とほぼ同様の状況を示し、同じ黄灰色砂質粘土上面に遺構を認める。

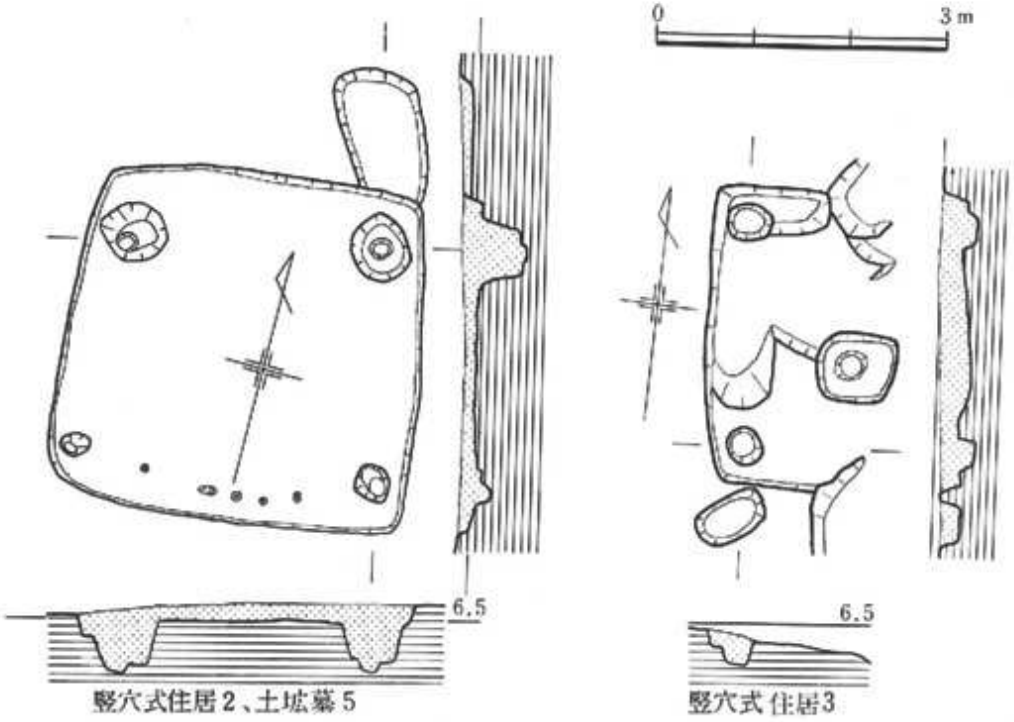
遺構を検出しうる黄灰色砂質粘土は、内ケ池のすぐ南を北から南にのびる舌状の微高地で、標高6mを測る。この微高地は西および南へ徐々に下降し、遺構は認められなくなる。検出した遺構は、弥生・古墳時代と、古代・中世とに大別することができるが、層序が整地層という性格上、層位的に区別することができない（挿図第4）。

第2節　弥生・古墳時代の遺構

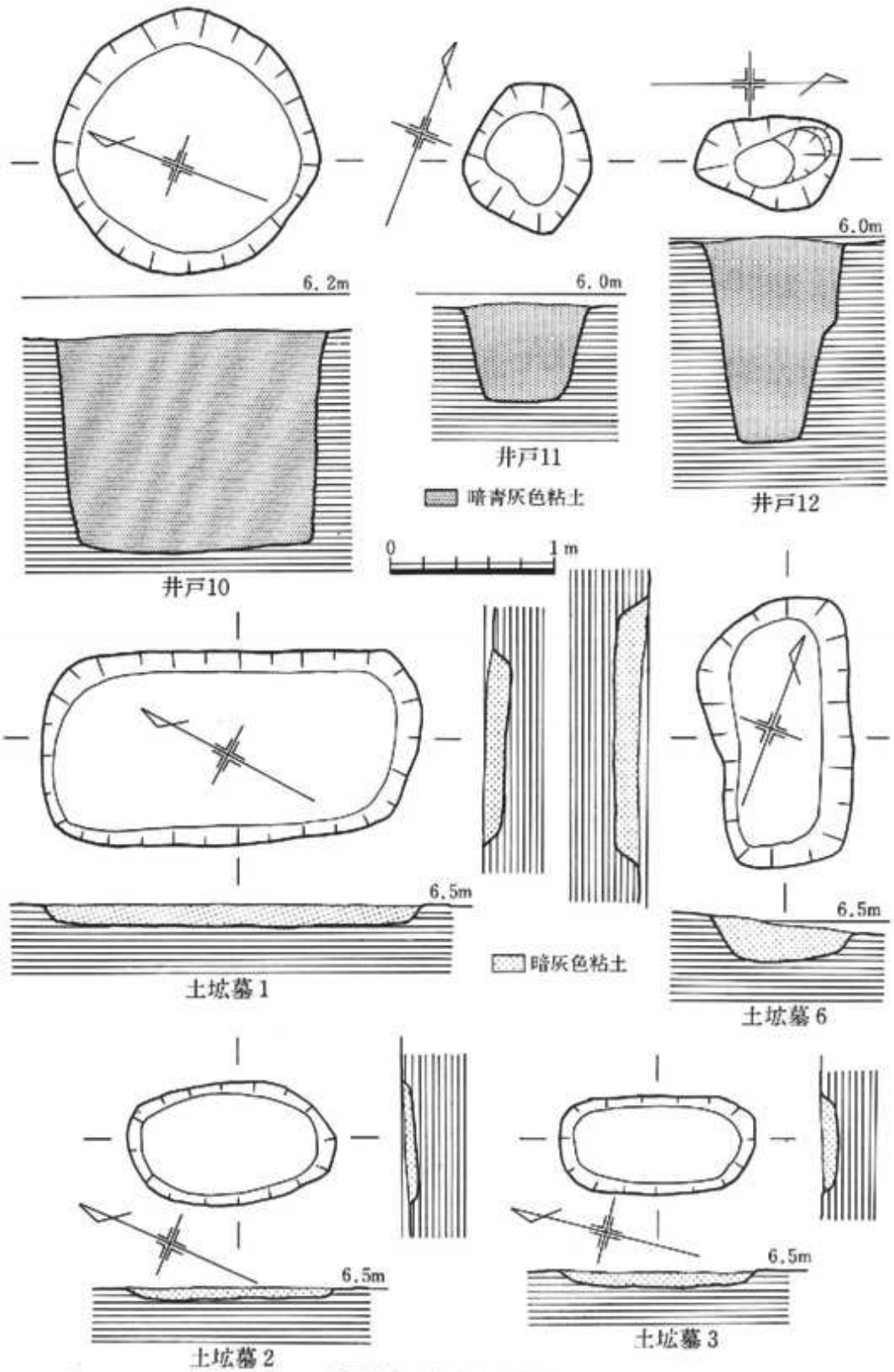
弥生・古墳時代の遺構（別図1）は、E区・B区の標高6.5mを測る等高線上に、3棟の竪穴式住居と6基の土壙墓を検出した。E区の南側で検出した竪穴式住居1は庄内式併行期に属する。B区で検出した竪穴式住居2・3は古墳時代に属し、約10mの間隔をおいて並んでいる。

竪穴式住居3の南側に古墳時代の井戸10があり、これら2棟の竪穴式住居と井戸1基でひとつのまとまりをみせている。この時期の井戸としては、C区で井戸11・12の2基を検出している。また、古墳時代に属する土壙墓を6基検出した。その中で1～4は竪穴式住居1付近に位置し、5・6はB区の西側に位置している。





挿図第5　竪穴式住居・土壙墓実測図



挿図第6　井戸・土坑墓実測図

1．竪穴式住居（挿図第5、図版第6・7）

竪穴式住居1　四隅が隅丸方形を呈しており、長辺4.2m、短辺3.5mを測る。床面は平坦で、中央部に直径約0.4m・深さ約0.2mの円形ピットと東側の周壁近くで長辺0.5m・短辺0.3m・深さ0.3mを測る長方形の落ち込みがみられる。この落ち込みには炭状のものが混入していた。周壁は約0.1mが残存していたが、周壁下の溝や柱穴は検出されなかった。遺物は床面に密着して弥生第5様式期の甕の破片や庄内式併行期の壺の破片が若干出土している。

竪穴式住居2　一辺がわずかに長い四辺で、一辺約3.5mを測る方形プランを呈している。床面は平坦で、四隅に柱穴を検出した。西南隅、東南隅の柱穴は直径0.3mで、床面を浅く掘りこんだものである。西北隅、東北隅の柱穴は深さ約0.5m・直径0.6～0.7mを測る。柱穴はいずれも柱の部分を一段掘り下げている。周壁は約0.1mを測り、周壁下の溝は検出されなかった。南側の周壁内側に直径0.1m程の小ピットが0.3～0.4mの間隔をもって数個認められた。住居内から小形丸底壺・高杯が出土している。

竪穴式住居3　一辺3m、周壁の残存高約0.2mを測り、方形プランを呈している。西壁より1mを残して、東側は溝7によって削除されている。西北隅、西南隅に直径0.3～0.4m・深さ0.15～0.2mを測る柱穴を検出した。遺物は土師器の小破片が出土しただけであるが、竪穴式住居2との位置関係からみて同時期のものであろう。

2．井戸（挿図第6、図版第7）

井戸10　竪穴式住居3の南側で、住居址の位置する地山面が下降したところにある。直径1.6m・深さ1.3mを測り、井戸底は灰色砂層に達しており、直径1.4mを測る。井戸内は主に暗青灰色粘土が堆積する。井戸底付近から土師器の甕・高杯・小形丸底壺が出土した。

井戸11　直径0.8m・深さ0.7mを測り、内部には暗青灰色粘土が堆積していた。井戸底から土師器の甕・高杯・小形丸底壺が出土した。なお、井戸の底は平坦で直径0.45mを測る。

井戸12　井戸11の東24mに位置する。直径約0.7m・深さ1.3mを測る。底部は平坦で直径約0.4mを測る。内部には暗青灰色粘土が堆積し、小形丸底壺が出土した。

3．土壙墓（挿図第5・6、図版第6）

土壙墓1　長さ2.3m・幅1.2m・深さ0.1mを測り、底部は平坦でわずかに東側に傾斜している。

土壙墓2　長さ1.3m・幅0.75m・深さ0.05mを測る。小判形を呈し、底部は平坦で西側に傾斜している。

土壙墓3　長さ1.2m・幅0.6m・深さ0.1mを測り、底部は平坦である。

土坑墓4　竪穴式住居1の上部から掘りこまれたもので、長さ1.1m・幅0.55m・深さ0.05mを測る。底部は平坦である。

土坑墓5　竪穴式住居2によって南端を削除されている。長さ0.7m以上・幅0.4m・深さ0.05mを測る。内部から土師器の高杯・甕が破壊された状態で出土した。

土坑墓6　長さ1.6m・幅0.8m・深さ0.35mを測り、底部は舟底状を呈する。

4．その他（図版第9）

C区の東隅で不定形の土坑を検出している。土師器の小破片しか出土していないため、時期の確定は困難であるが、一応古墳時代に属するものと考えられる。

土坑1　長径約4m・短径約3mを測り、深さは中央部で約0.3mである。竪穴式住居とも考えられるが、不定形で内部に柱穴らしきものも認められず性格は不明である。

第3節　古代・中世の遺構

古代・中世の遺構（別図1）は、標高6m以下の調査区西側半分を除いたほぼ全域で、掘立柱建物、井戸、溝、土坑墓を検出した。掘立柱建物はE区南からB区にかけて検出された1～4とそれ以外のものに区別できる。建物1～4は建物の方向を揃え、柱穴も一辺数10cmを測る方形のしっかりしたものである。それ以外の柱穴は直径0.3～0.5m程度の円形を呈するが、建物群としてのまとまりをもたない。建物1～4の柱穴内から時期の決め手となる遺物は得られなかったが、おおむね奈良・平安時代に属するものと考えられる。その他の建物は中世に属する。

掘立柱建物1の南側で建物と同一方向をとる柵列を2列検出した。掘立柱建物1～4と同時期とみられる。

井戸は9基検出されたが、奈良時代に属すものはなく、いずれも瓦器椀・土師器皿が出土する中世のものである。井戸枠が残存するものは井戸3・井戸9だけである。これらの井戸は掘立柱建物、あるいは柱穴群の近辺に位置している。

土坑墓はA区で2基検出した。この土坑墓内に供献された瓦器椀・土師器皿は中世土器編年上貴重な一括資料である。

溝は磁北とほぼ同一方向、およびこれに直交するように掘削されている。溝1は瓦器椀・土師器皿が多量に出土した中世のものであるが、他は地山上に堆積した青灰色粘土上面から掘削されており、掘立柱建物群や井戸群より後の時期である。

1．掘立柱建物（別図1、図版第8）

掘立柱建物1　規模は東西3間（5.4m）×南北3間（4.7m）で、東側に廂をもつ。主軸の方向はN－75°－Eである。柱穴は径0.4～0.6m・深さ0.2mで、北側の柱列の1個と西側の柱列2個、西北隅の柱穴は丁度遺構面が西側へ傾斜する地点にあたるため検出できなかった。東西の柱間は1.8mを測り、南北の柱間はそれぞれ1.6m、1.6m、1.5mを測る。

掘立柱建物2　B・E区の調査区境にあたるため、充分確認できなかったが、東西2間×南北1間以上の規模である。方向はN－75°－Eである。柱穴は直径0.4～0.5m・深さ0.1mである。柱間は東西2m、南北1.6mを測る。

掘立柱建物3　建物2のすぐ東に隣接し、遺構検出面が段をなして東側へ削られた様になった所に位置するため、東西・南北ともに1間のみを確認した。主軸の方向はN－75°－Eである。柱穴は方形で一辺0.5～0.6m・深さ0.2mである。柱間は東西2.1m・南北3mを測る。

掘立柱建物4　遺構検出面が南へ下降した所に位置し、東西6間（12m）×南北2間（5m）と最も規模が大きい。主軸の方向はN－75°－Eである。柱穴は方形で一辺0.6～0.7mを測る。一部の柱穴には直径0.2～0.3mの柱痕が遺存していた。南側の柱列のうち、東から2・3個目は土坑によって掘削されているが、柱根は東西の柱列で東から4間目までが1.8m、他は2.4mを測り、南北はそれぞれ2.5mを測る倉である。

掘立柱建物5　西北・西南の隅柱は確認できなかったが規模は東西3.9m×南北5.3m（3間）で、主軸の方向はN－10°－Eである。柱穴は方形で一辺0.5～0.7mを測り、深さは約0.05mを確認する。南北の柱間は、南から1.7、1.7、1.9mを測る。東西の柱間は不明であるが柱穴間は3.9mを測り、おそらく2間を有していたと思われる。

掘立柱建物6　建物5の西側に位置し、東西1間（2.1m）×南北1間（2.5m）で、主軸方向は磁北と同じである。柱穴は円形で直径0.3m・深さ約0.1mを測る。

掘立柱建物7　建物6の東に隣接する小規模なもので、東西1間（1.9m）×南北1間（1.9m）で、主軸方向はN－34°－Eである。柱穴は円形で直径0.2m程度、深さ0.1～0.15mを測る。

掘立柱建物8　建物7の東に隣接する。やはり小規模な建物である。東西1間（3m）×南北1間（2.8m）で、主軸方向はN－28°－Eである。柱穴は円形で、直径0.2～0.3m・深さ約0.1mを測る。

掘立柱建物9　井戸2の北側に位置し、建物6～8と同じく、小規模なものである。東西1間（2.1m）×南北1間（2.1m）で、主軸の方向はN－30.5°－Eである。柱穴は円形で、直径0.2～0.3m、深さ0.05～0.01mを測る。

掘立柱建物10　井戸6の西側に位置し、規模は東西3間（3.2m）×南北1間（1.8m）である。主軸の方向はN－41°－Eである。柱穴は直径0.2～0.4mの不定形を呈する。深さは約0.1

mを測る。東西の柱間は西から1.1、1.1、1.0mである。北西の隅柱は溝4によって一部削除されている。

掘立柱建物11　規模は東西1間（2.6m）×南北1間（2.1m）で、主軸の方向はN－13.5°－Wである。柱穴は南東の隅柱が直径0.5m・深さ0.2mを測る。他は直径0.2～0.3m・深さ約0.1m程である。

掘立柱建物12　規模は東西1間（2.9m）×南北3間（4.0m）で、主軸の方向はN－32°－Eである。柱穴は、北東の隅柱を除き直径0.2～0.3mの小さなもので、深さは約0.1mである。南北の柱間は1.35mである。

掘立柱建物13　掘立柱建物2～4に囲まれた位置にあり、東西2間（2.2m）×南北2間（2.6m）の建物で、東柱らしき柱穴が中央にみられるので小規模な倉であろうか。主軸の方向はN－28°－Wである。柱間は東西が1.1m、南北が1.3mを測る。柱穴内から瓦器の小破片が出土した。

2．柵

柵1　掘立柱建物1の4m南で同一方向に並ぶ5個の柱列を検出した。柱間はそれぞれ2.2mを測る。柱穴は円形を呈する。西端の柱穴が直径約0.6m・深さ0.2mを測る。他は直径0.4m・深さ0.1m程度のものである。

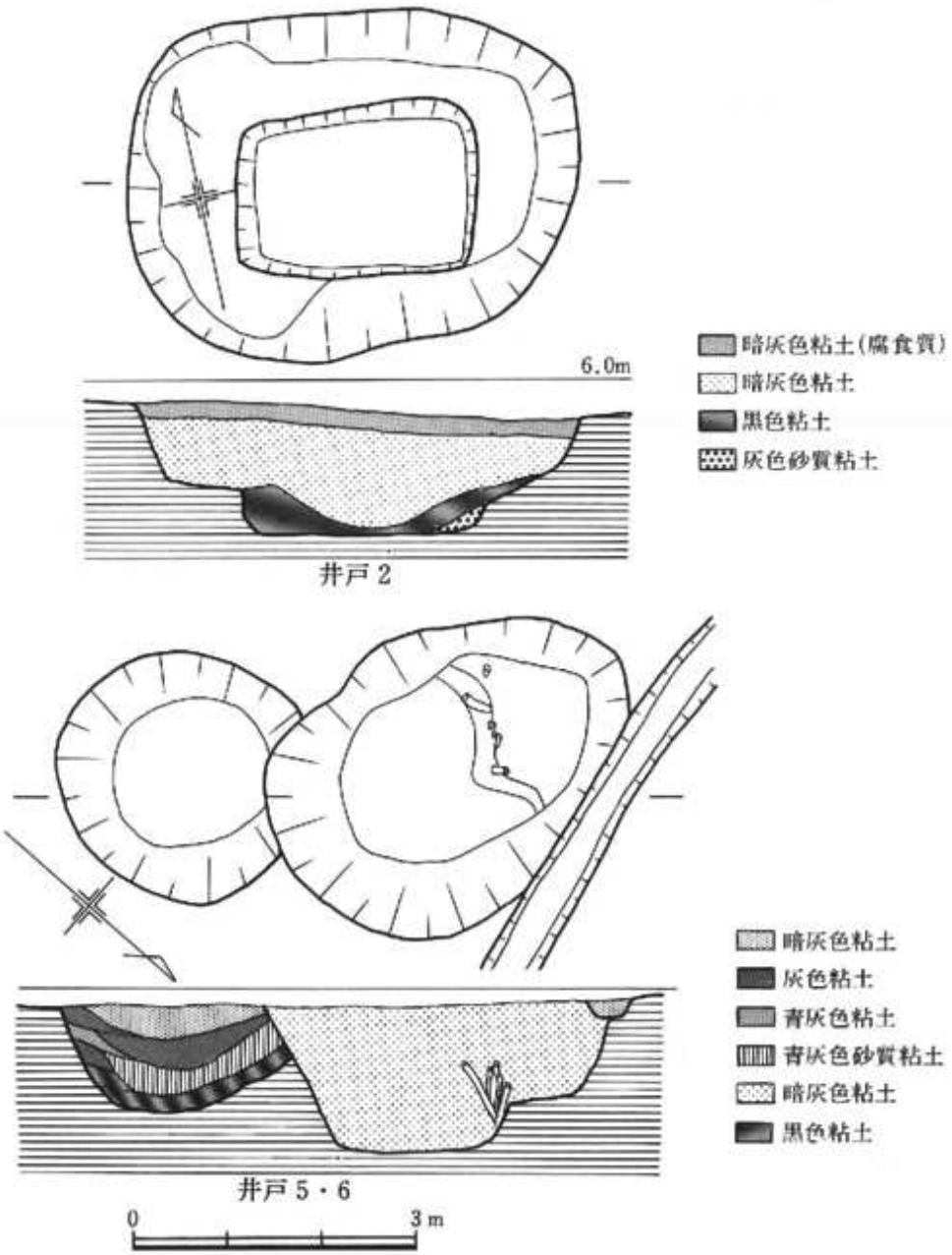
柵2　柵1の南8mに、やはり方向を同じにした6個の柱列を検出した。柱穴はいずれも円形で、西側の3個が直径0.5～0.6m・深さ0.4mを測る。東側の3個は直径0.3～0.4m・深さ0.2mを測る。柱間は西方から1.5、2.1、2.2、2.1、2.0mである。

3．井戸（挿図第7～10、図版第9～12）

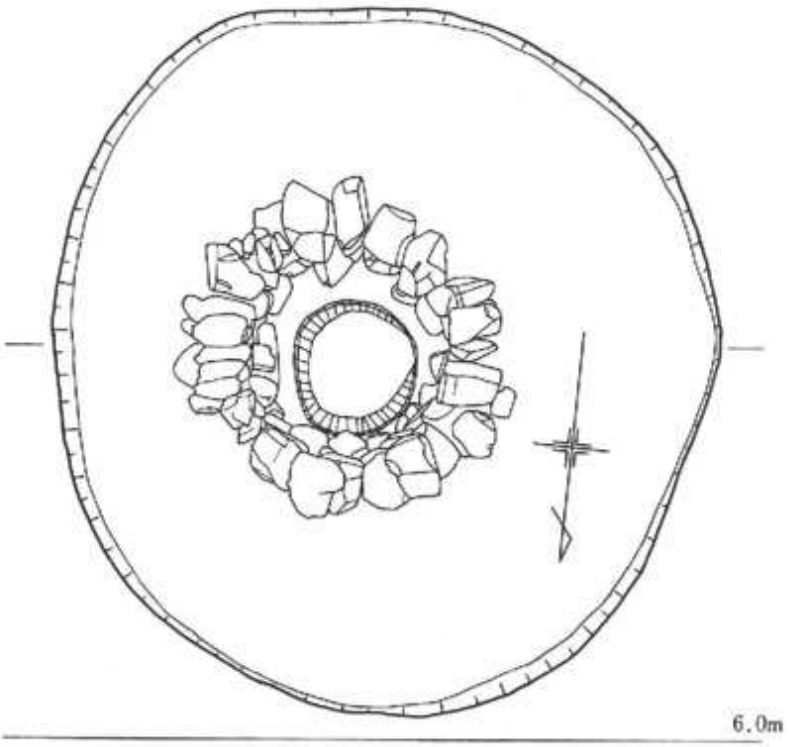
井戸には、底に曲物あるいは桶をすえ、上部が石組みとなるもの（1・2・3・8）、刳り抜きの枠材を使用するもの（9）と、枠組がまったく検出されなかったもの（4・6・7）がある。いずれも内部から瓦器・土師器等が出土している。

井戸1　上端で直径2.5m・深さ1.1m、底部の直径2.3mを測る円形の掘り方で、井戸底の中央が約0.1m低くなっており、直径40cm・高さ30cmの曲物を据えていた。曲物上部の石組みは残存しなかったが、調査途中で人頭大の石がいくつも検出されている。遺物は瓦器椀の破片などわずかしか出土していない。

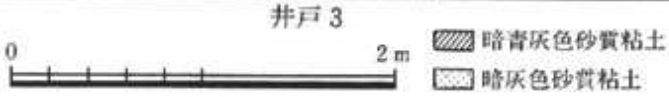
井戸2　上端で東西4.8m・南北3.5mを測る隅丸方形の掘り方で、底面の中央部が東西2.6m・南北1.8mの方形に一段掘り下げている。深さは中央部で上端から1.3mを測る。井戸1と同様底面に曲物を据え、上部を石組みとするものであろう。井戸内の堆積土は、暗灰色粘土と


6.0m
暗灰色粘土(腐食質)
暗灰色粘土
黒色粘土
灰色砂質粘土
井戸 2
暗灰色粘土
灰色粘土
青灰色粘土
青灰色砂質粘土
暗灰色粘土
黒色粘土
井戸 5・6
0
3 m

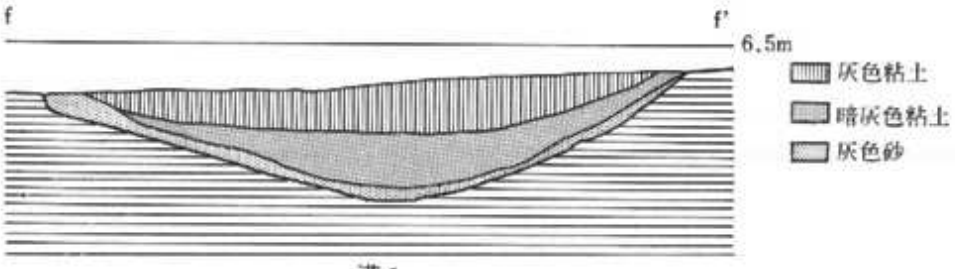
挿図第 7　井戸実測図



井戸3



暗青灰色砂質粘土
暗灰色砂質粘土



灰色粘土
暗灰色粘土
灰色砂

溝1

挿図第8　井戸実測図、溝断面図

泥炭化した暗灰色粘土の大きく上下二層に分けられる。各層からは瓦器・土師器・中国製磁器・木製品・須恵器など多量の遺物が出土した。井戸廃棄後のものである。

井戸3　上端で直径3.4m・底面で直径3.1m・深さ約1.5mを測る円形の掘り方で、井戸底の中央に直径60cm・高さ70cmの桶を据え、上部は石組みである。その上端は直径1.1mを測る。井戸内の上層に堆積する暗青灰色砂質粘土から土師器皿が数点と、石組み内から瓦器羽釜・白磁碗の破片が少量出土した。土師器皿は他の井戸で出土するものと異り、瓦器椀が一片も認められないことから、瓦器椀消滅後の井戸とみられる。

井戸4　長径1.2m・短径1.0m・深さ1.1m、底面で直径約0.7mを測るほぼ円形に近い掘り方である。枠組みは遺存しないが、形状からみて曲物を据えていたと考えられる。井戸内の堆積土からわずかではあるが、瓦器椀・土師器皿などが出土している。瓦器椀には和泉地方で生産されたものが混じる。

井戸5　上端で直径2.6m・深さ1.1mを測る円形の掘り方で、形状は擂鉢状を呈する。北側の掘り方を隣接する井戸6によって削除されており、井戸枠は遺存しない。内部から瓦器椀・土師器皿が出土しているが、井戸6より時期的に古いものである。

井戸6　上端で直径3.0m・深さ1.5m・底面の直径1.5mを測る円形の掘り方をもった井戸である。この井戸の使用中、西側壁が崩壊したため、その壁面に沿って数本の杭を打ち、杭の外側に拳大の石をつめてその崩壊を防ぎ、井戸を使用したらしい。枠は井戸5と同様遺存しない。内部から瓦器椀・土師器皿などが出土したが、井戸5より新しい傾向にある。

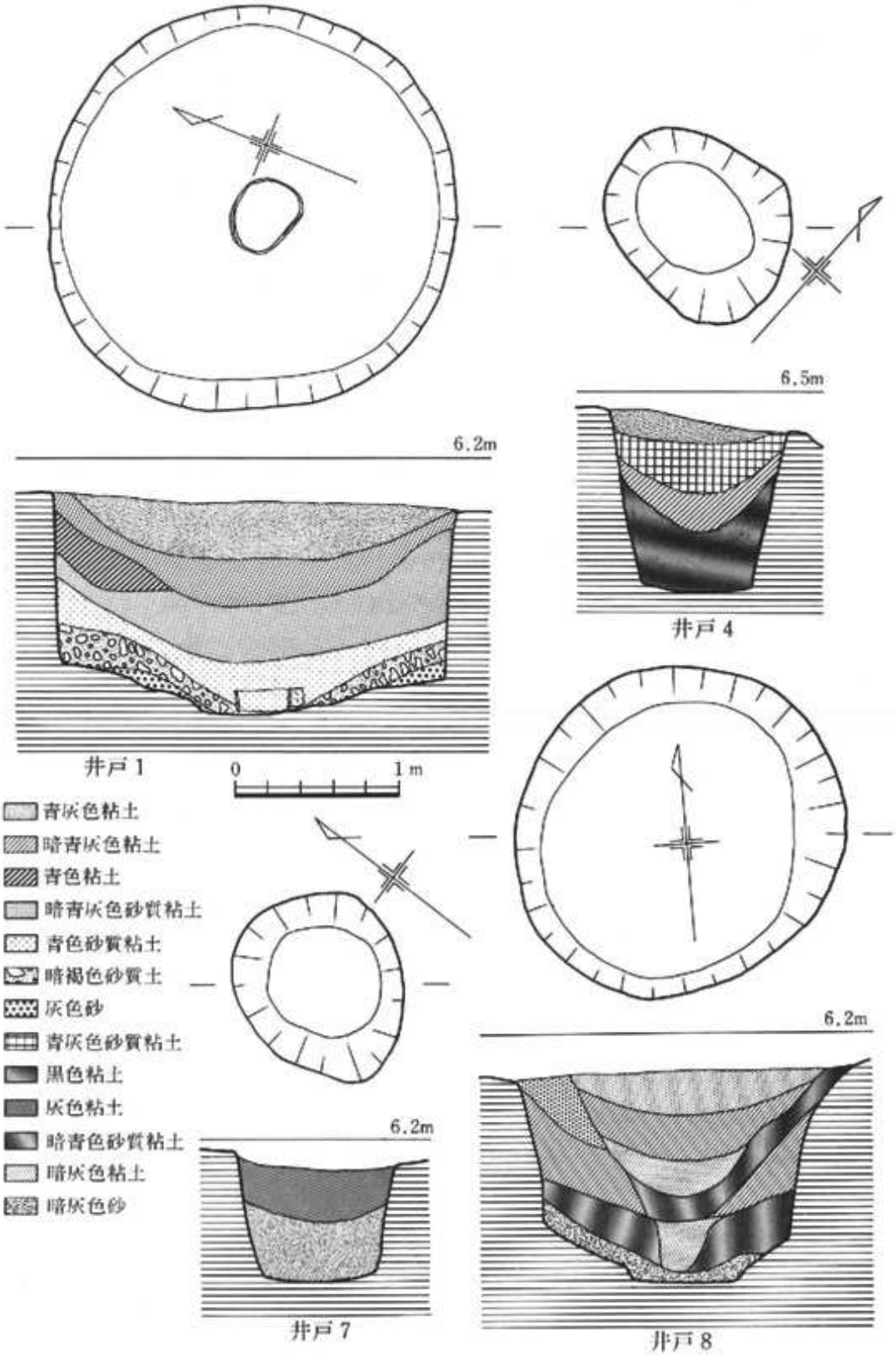
井戸7　上端で直径1.1m・深さ0.7m・底面の直径0.7mを測る円形の掘り方で、枠組みはまったく検出されず、遺物も瓦器椀・土師器皿が若干出土しただけである。

井戸8　上端で直径2.0m・深さ1.3m・底面の直径1.5mを測る円形の掘り方で、井戸1と同様底面中央が約0.1m低くなっており、曲物を据えたらしい。やはり調査途中で人頭大の石塊が埋土に混じって数個検出された。内部から瓦器椀・土師器皿・須恵器などが出土している。

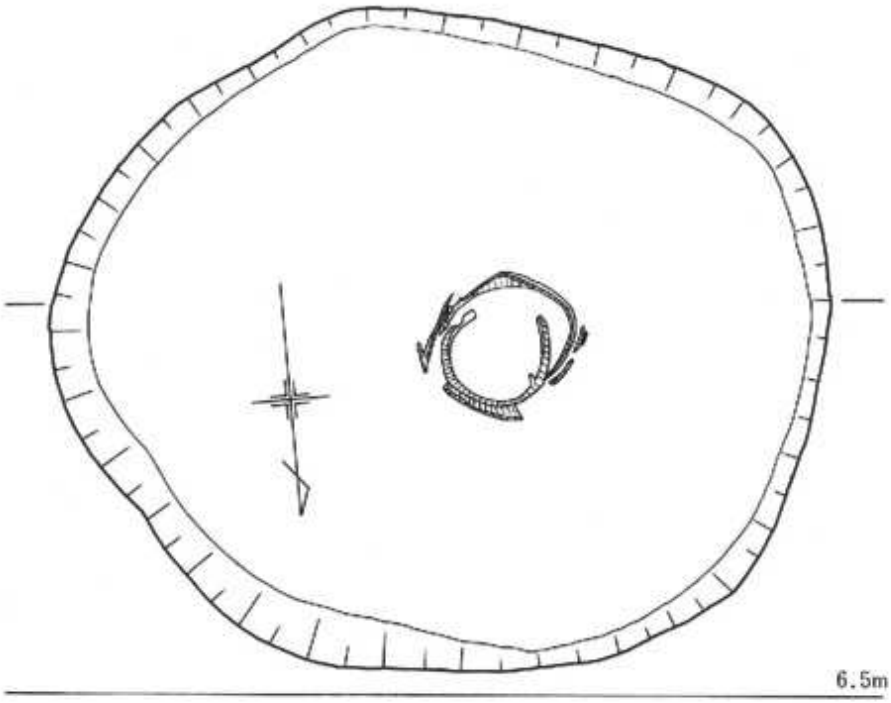
井戸9　掘り方は上端で長径4.0m・短径3.5mのやや楕円形を呈する。深さ1.8m、底面は直径約3.3mを測る。掘り方の中央からやや西よりに、木を刳り抜いた井戸枠を据えている。この井戸枠は、円弧の異る材を重ね合せる。外側の枠材の残存計測値は最大径0.6m・最小径0.5m・高さ約1.7mを測り、材は槙科とみられる。掘り方内の暗灰色粘土および井戸枠内から瓦器椀・土師器皿が出土しているが、枠内外の差異はほとんどみられない。

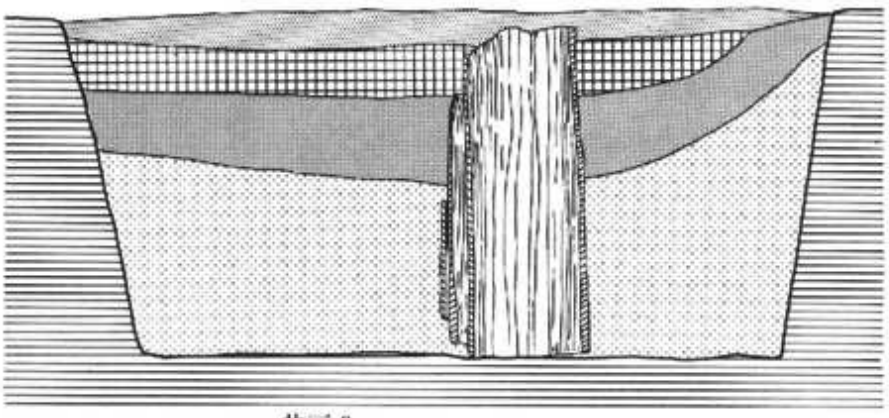
4．土壙墓（挿図第11・12、図版第13）

土壙墓1　墓壙は長方形で長さ2.2m・幅0.7m・深さ0.2mを測る。棺の痕跡は認められなかったが、墓壙底面の状態からみておそらく木棺墓と思われ、墓壙中央部よりやや南西よりで

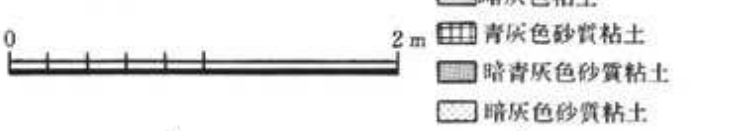

6.2m
6.5m
井戸1
井戸4
0
1m
青灰色粘土
暗青灰色粘土
青色粘土
暗青灰色砂質粘土
青色砂質粘土
暗褐色砂質土
灰色砂
青灰色砂質粘土
黒色粘土
灰色粘土
暗青色砂質粘土
暗灰色粘土
暗灰色砂
6.2m
6.2m
井戸7
井戸8

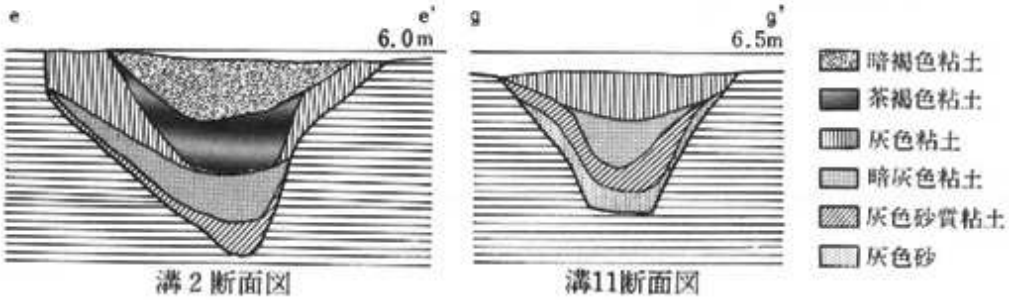
挿図第9　井戸実測図





井戸 9





溝 2 断面図　　溝11断面図

挿図第10　井戸実測図、溝断面図

瓦器椀・土師器皿が一括して出土した。いずれも、坑底から遊離して出土しているため、棺上あるいはそれに近い部分に供献されたものであろう。ちょうど被葬者の腰から足もとにあたる位置である。これらは、中世土器を編年する上で良好な一括資料である。

土坑墓2　土坑墓1の東1mにほぼ併行して検出した。墓坑は不定形で長さ2.45m・幅0.9m・深さ0.2mを測る。墓坑底面はほぼ水平を保つが、棺の痕跡は認められなかった。墓坑内から瓦器椀・土師器皿などが出土しているが土坑墓1のように、まとまりのある状態ではない。

5．溝（挿図第8・10）

溝1　井戸8付近から西側にむかってほぼ東西方向に掘削され、幅3.5m・深さ0.3～0.4mを測る。地山が下降する地点で深さ0.5mのレンズ状の溜りをつくり、上層には主に灰色粘土が、下層に暗灰色粘土、さらに溝底には薄い灰色砂が堆積する。この灰色粘土から瓦器椀・土師器皿が多数出土した。

溝2　調査以前は灌漑水路として使用されていた溝にあたる。東側で幅約3m・深さ約1m、中央部で幅1.8mを測る。西側にむけてV字状に掘削されており、やはり地山が下降する地点でおわっている。方向は東西方向より若干振ってN－82°－Wである。溝内には粘土が堆積するが、最上層は植物質の腐食した暗褐色粘土である。溝内から少量の土師器皿、備前焼の擂鉢等が出土している。

溝3　D区の北端に位置し、幅0.7～0.8m・深さ約0.1mを測る。方向はほぼ南北で約10mにわたって検出された。溝内から土師器皿が出土した。

溝4　井戸2・5・6付近から西方にむけて東西方向に掘削され、幅0.3～0.4m・深さ約0.1mを測る。地山が下降する付近で溝3と結合するように北方に弯曲している。井戸2付近では検出されなかったが、調査区の東端でわずかに検出することができた。溝内から遺物はまったく出土しなかった。

溝5　井戸2付近では不明確であるが、溝4と直交するように掘削されており、幅0.3～0.4m・深さ0.05m～0.1mを測る。やはり溝内から遺物はまったく出土しなかった。

溝6　地山が西側へ下降する井戸7付近にほぼ南北方向に掘削されており、幅0.5m・深さ約0.1mを測る。溝7と直交して約11m検出された。溝3と溝7を結ぶ線よりやや内側に掘削されている。溝内から遺物はまったく出土しなかった。

溝7　B区の西側で、溝6と同じように地山が西側へ下降するところにあり、南北方向に掘削され、幅約1.5m・深さ約0.5mを測る。竪穴式住居1付近から南側の地山傾斜地点まで約18m検出された。溝内から土師器皿が出土している。

溝8　E区中央部の竪穴式住居1付近から溝11と直交するまで南北約30mと、さらに竪穴

式住居3付近で約5mが検出されている。幅約1mで、南側へむかうにつれて深くなり、溝11付近で深さ約1mを測る。溝内には灰色粘土が堆積し、遺物はまったく出土していない。

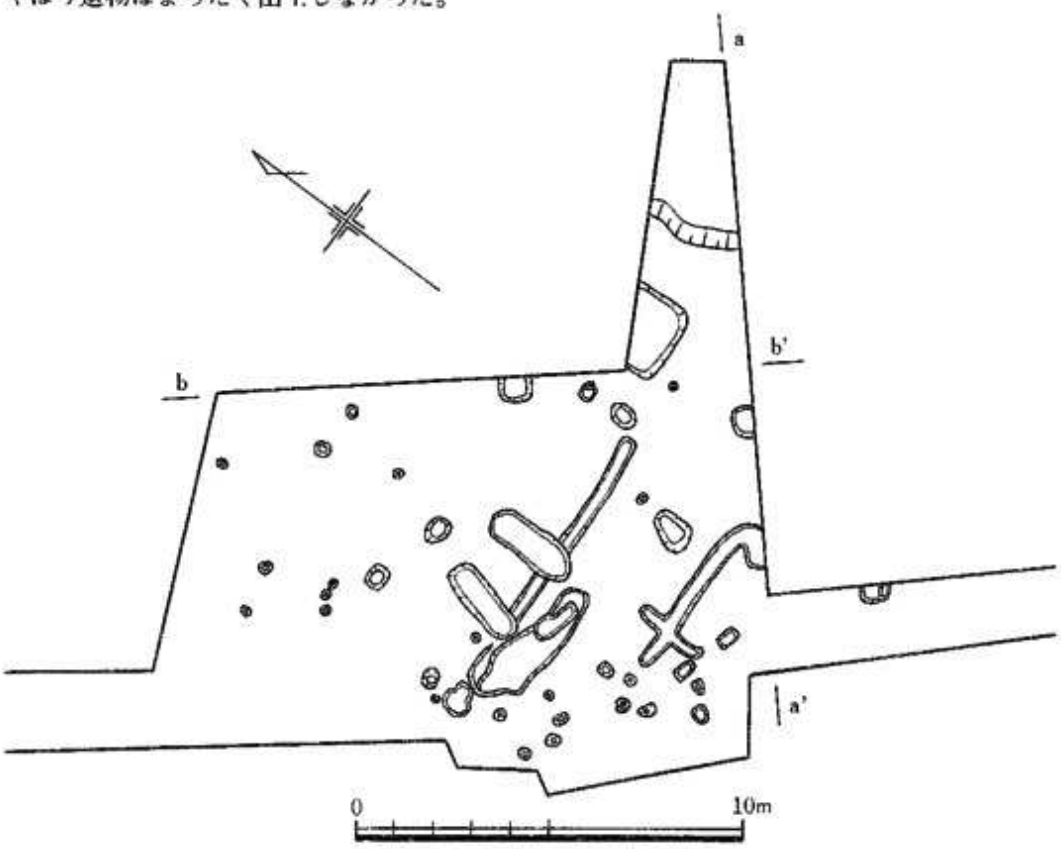
溝9　竪穴式住居3の東側で、南北約15mが検出され、幅約1m・深さ0.2mを測る。溝8に隣接しており、溝8の掘り替えとみられる。溝内にはやはり灰色粘土が堆積し、遺物はまったく出土しなかった。

溝10　B区の東端で南北方向に掘削された溝で幅0.6～0.9m・深さ約0.05mを測る。この溝は溝5の南への延長線上にあたり、約9mが検出された。溝内から瓦器の破片が若干出土している。

溝11　E区の南端で溝6・11と直交する東西溝で、やはり地山が南へ下降する地点まで掘削されており、幅1.5m・深さ約1mを測る。溝内には灰色粘土が堆積し、遺物はまったく出土しなかった。

溝12　B区の南端で、ほぼ東西方向に掘削され、溝9の延長線と直交する。幅0.6～0.7m・深さ0.3mを測り、東方へつづく。遺物はまったく出土しなかった。

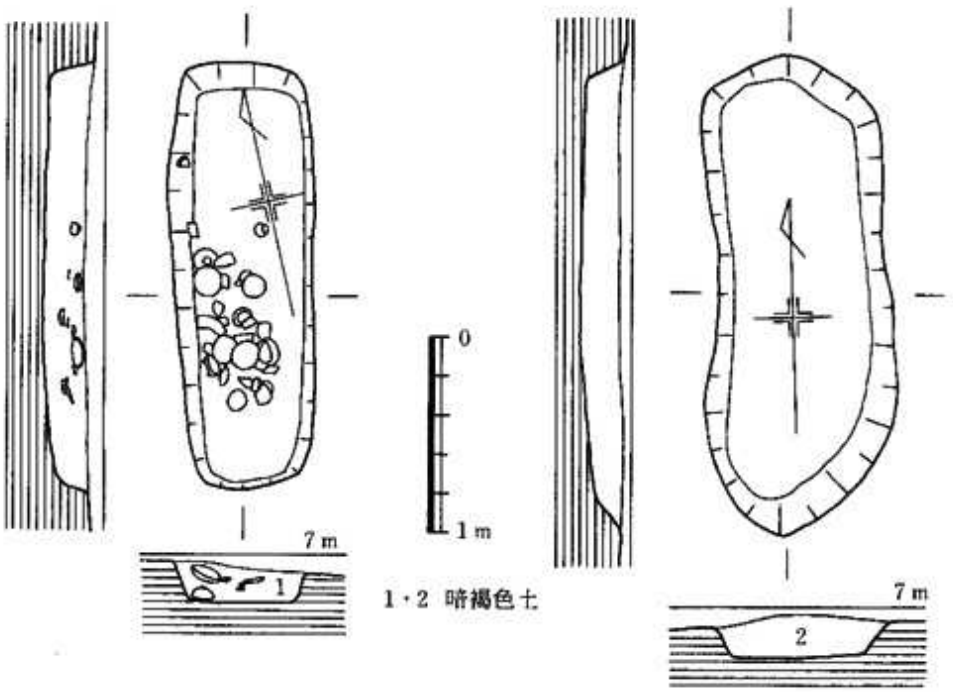
溝13　溝12に隣接し、溝9の延長上に掘削されて、南へつづく。幅1m・深さ0.3mを測る。やはり遺物はまったく出土しなかった。



挿図第11　A区実測図

6．その他

土坑２　掘立柱建物４の柱穴を切って掘削されており、長さ4.5m・幅１m・深さ0.5mを測る。形状は方形を呈し、主軸はほぼ東西方向に揃えている。坑内から土師器や須恵器鉢が出土しており、各溝と同時期であろう。



挿図第12　A区土坑墓実測図、土坑墓１（左）・土坑墓２（右）

第3章　遺物

第1節　弥生・古墳時代の遺物

この時期の遺物としては弥生第5様式土器・庄内・布留式併行期の土器や、須恵器があげられる。竪穴式住居1～3、井戸10～12、土壙墓5以外はいずれも包含層（褐色土、暗褐色土）から出土したものである。このうち、須恵器を除いて大半はC区の東部から出土している。いずれも器壁の風化が著しく、仕上げ調整に不明確さを欠いている。個々については観察表を参照されたい。

1．竪穴式住居1（第1図、表1）

床面から破片数点が出土したが、壺A（1）は広義の二重口縁を有するもので庄内式併行期のものとみられる。甕（2～4）はいずれも外面に左下がりの叩き目がみられ弥生第5様式に属するものである。（5）は台付鉢とみられ、やはり弥生第5様式であろう。

2．竪穴式住居2（第1図、図版第14、表1）

小形丸底壺（6・7）と高杯（8～12）が出土している。小形丸底壺は口縁の長短はあるが、口径が腹径より小さく、外面を刷毛目調整し、内面をかるく削りCに分類される。

高杯は杯部と脚部との接点から口縁部へなだらかに移行し口縁部を横なで調整するAと、杯底部と口縁部の境界が屈折し口縁部が直線的にのびるBに分けられる。前者は口縁部が直線的にのびるA_1（8）と外弯気味にのびるA_2（9・10）に分けられる。後者も屈折部に凸帯状の稜があり、口縁部が外反気味にのびるB_1（11）と屈折部の稜が目立たず、口縁部が直線的にのびるB_2（12）に分けられる。

3．井戸10（第2図、図版第15・16、表2）

井戸底近くから高杯（13～19）、鉢（20）、小形丸底壺（21）、甕（22～25）が出土した。高杯は精良な胎土で、ていねいにつくられ、内面に放射状の篦みがきを施すB_3（13）と杯部を横なで調整するA_2（14～16）があり14・15は杯部の底部外面をかるく削っている。高杯脚部の外面に赤色顔料の痕跡があるもの（18）、裾部内面に布目痕のあるもの（19）がある。小形丸底壺（21）は口径が腹径より小さく、外面を刷毛調整し内面をかるく削り、Cに分類される。

甕は球形の体部外面を刷毛調整し、内面を篦削りするもので口縁端部の肥厚から3つに分け

られる。A_1（22）は比較小さく丸く肥厚する。A_2（23）は端部上面に平坦な面をなして肥厚する。A_3（24）は内傾する面をなして肥厚する。

鉢A（20）は半球形で、内面を篦削りしている。

4．井戸11（第3図、図版第16・17、表2）

小形丸底壺（26～28）、高杯（29、30）甕（31、32）が出土している。

小形丸底壺はいずれもCに属するが、（26）は口縁内面を刷毛調整し、体部内面を粗く篦削りする。（27）も内面を篦削りするがていねいに仕上げている。（28）は厚手で他に比べ一まわり大きいので小形丸底壺と分類するには不適当かと思われるが、一応ここでは小形丸底壺としておく。高杯はA_2に属し、（30）は脚部外面をかるく面取りした後、刷毛調整をしている。甕はA_2（31）、A_3（32）が出土している。

5．井戸12（第3図、図版第17、表2）

小形丸底壺（33）が出土している。精良な胎土で、外面全面に赤色顔料を塗布している。壺内は赤色顔料を貯蔵していたと思われる痕跡が認められる。頸部はまっすぐにたちあがり、おそらく二重口縁を有するものとみられ、Dとする。

6．土壙墓5（第3図、図版第17・18、表3）

甕（34～36）と高杯（37・38）が出土している。甕はA_2（34・35）と口縁部の肥厚しないB（36）とがある。（36）は、風化が著しいため外面の調整は不明であるが、おそらく刷毛調整をしたものであろう。内面はAと同様に篦削りしている。高杯はA_2（37）と脚部（38）が出土している。

7．包含層

a．弥生式土器（第4図、図版第18、表4）

量的には少なく壺、甕、有孔鉢、高杯が出土している。壺（39）はゆるやかに外反する口頸部を有し、口縁端部は横なでをし、面をもたせている。甕（40）は体部上半を欠失しており、外面には粗い叩き目が施され、内面は比較的ていねいな刷毛調整が認められる。有孔鉢（42）も体部上半を欠いているが、体部下半は細く、底部中央に穿孔している。外面にはわずかに叩き目がみられ、内面はていねいに刷毛調整をしている。高杯（43・44）は大きく横方向にのびる杯底部から外反する口縁部がつづき、脚柱部は筒状の中空で、裾部が大きく開くものである。

b．庄内・布留式併行期の土器（第4～10図、図版第18～27、表4）

壺・甕・高杯・小形丸底壺・鉢・器台が出土しているが、遺構出土の遺物のところでも若干触れたようにそれぞれ形態によって分類することができる。

壺（第4～7図、図版第18～20・24）

口縁が直口のBと二重口縁となるCに大きく分類することができる。

壺BはB₁～B₅に分類できる。底が平底の比較的大型で、外面を粗い刷毛調整で仕上げたB₁（45）とていねいなつくりで口縁がラッパ状に外反し、球形の胴部に平底がつくB₂（46）、球形の胴部で底部は丸底のB₃（61・62）、B₃に脚台の付いたB₄（63）、やや平底風で外面は刷毛調整、内面を篦削りするB₅（64）に分類できる。B₁・B₂は庄内式併行期、B₃～B₅は布留式併行期とみられる。壺CはC₁～C₄に分類できる。C₁（49・50）は、短かい頸部に内湾気味の口縁部がつき、頸部と口縁部の境に段ができる。C₂（51）は、頸部から一旦横方向にのびて、外反気味に口縁部へつづく。C₃（52・53）は口縁部が直立するもので、内面の頸部以下を篦削りしている。（53）は口縁を欠失しているが、外面および頸部内面までに赤色顔料を塗布している。C₄（54～60）は、丸底あるいはやや尖底気味の丸底をもつ球形の体部に、上方に開く頸部がつき、一旦横方向にのびて、さらに斜上方へ口縁部がのびる。屈曲部の外側には凸帯状の段もしくは稜線が、内側には凹線状の窪みがつく。いずれも器壁の風化が著しく、調整は不明確であるが、大形のもの（55・60）には外面に刷毛調整のあとがわずかにみられる。小形のもの（54、56～59）は外面をていねいにヘラ磨きしたものと思われる。C₂・C₃は庄内式併行期とみられ、C₄は瀬戸内系の土器との関連が想定される。他は布留式併行期とみられる。この他にいわゆる受け口状口縁を呈し、頸部に太い凸帯をつけ、口縁部外面と凸帯とに篦で刻目を施す壺D（93）が出土しているが産地・時期等は不明である。

甕（第7図、図版第21）

甕は、前述のように口縁の肥厚するAと肥厚しないBが出土している。Aは口径15cm前後で、井戸10と同様にA₁～A₃に分けられる。A₁には内面頸部直下から器壁全体を薄く削るもの（65）がある。A₂には甕内面の頸部以下を篦削りするもの（66）があり、頸部は鋭い稜をなしている。A₃は内傾する面をもち内面の頸部下1～1.5cmから篦削りするもの（67・68）と、他に内面を篦削りせずになでて仕上げるもの（69）がある。

Bは口径15cmのもの（70）と口径約10cmの小形のもの（71）がある。（70）は器壁の風化が著しいが、（71）には外面に刷毛調整の痕が認められる。Aと同じ仕上げ調整を行なっており、A、Bは典型的な布留式併行期の甕である。量的には極めて少量であるが、庄内式併行期の甕C（47・48）がある。口縁部の破片で「く」の字形に屈折した口縁部の端部は上方につまみあげている。外面は面をなし、内面は頸部以下を篦削りを行う。頸部は鋭い稜をなし、器壁は、

薄い。（47）の外面にはわずかに刷毛目痕がのこっている。色調は淡褐色・淡黄褐色で、河内地方の雲母を含み茶褐色を呈するものとは異なっている。

高杯（第8図～第9図、図版第21～24）

竪穴式住居2と同様に大きくA・Bに分類することができる。

Aは、口縁が外反気味で杯部をなで調整するA₂（77・78、80～83）が多く、（81）の杯底部外面にはわずかに篦削りの痕跡がある。また、口縁が内弯するもの（84）もありA₃とした。さらに、A₂に類似するが、外面や裾部内面を刷毛調整し、裾部に穿孔するもの（79）がありA₄とした。

Bは杯部と口縁部の屈折部の凸帯状の稜が目立つB₁（73・74）とあまり目立たないB₂（76）がある。さらに杯部の底部が狭く、口縁部がまっすぐ上方にのびるもの（75）があり、これをB₃とした。（73）は大形で、脚部内外面に粗い刷毛調整を施している。脚部の破片には外面をかるく篦削りしたもの（85）や、やや中ぶくらみの脚柱部から屈折して裾部に四孔を穿つもの（86）や（79）と同様のものがある。

鉢（第9・10図、図版第26）

口径約40cmを測る大形のB（92）と、口径10～12cmを測る小形のC（106、107）がある。

Bは、「く」の字形に屈曲する口縁部で頸部外面を強く横なでしている。Cは、口縁部が二段に屈曲せずに、ゆるく外反するもの（106）と内傾するもの（107）がある。前者をC₁、後者をC₂とした。仕上げ調整は小形丸底壺に共通し、（106）は外面を刷毛調整、内面は体部を削りあげている。（107）は外面底部と体部内面を斜めに削っている。

小形丸底壺（第10図、図版第24～26）

口径の腹径に対する比率と調整手法から、A・B・Cに分類することができる。Aは半球形の体部に斜上方へ大きくのびる口縁がつき、外面を篦磨きし、内面をなでて仕上げる。胎土は比較的精良で焼成も良好なものである。口径が腹径の約1.5倍を測るA₁（94～96）と約1.3倍のA₂（97～99）に分けることができる。B（100～102）は最大腹径が体部の中位からやや下位にあり、腰の張った球形で、口径が腹径の約1.3倍を測る。体部の外面は刷毛調整を、内面はかるく篦削りをする。Aに比べやや厚手の器壁となる。C（103～105）は前述のように竪穴式住居2や井戸10・11から出土した小形丸底土器も含めているが、最大腹径が体部上位にあり、肩の張った球形で、口径が腹径より小さく約0.8倍である。体部外面は刷毛調整、内面は篦削りをする。

器台（第10図、図版第26）

A・Bに分けられる。A(108・109)は小さい皿型の受部に下方へ開く脚部がつき、脚部と受部は貫通しない。B（110～112）は上下に広く開き、中央でしまる、いわゆる鼓形器台である。

c．須恵器（第11図、図版第28・29）

蓋杯（113～124）、高杯（125～127）、直口壺（128・129）、甕（130）が出土している。いずれもⅠ期の4～5段階に相当するものである。

第2節　古代・中世の遺物

主に瓦器・土師器が出土しているが、須恵器・日本製陶器・中国製磁器などもある。井戸や土坑墓から一括して出土したものは編年を考えるうえで重要な資料と考える。なお、包含層から出土したものは、A区から出土したものと、他の地区から出土したものに区別した。

1．井戸1（第15図、図版第47b）

少量の瓦器・須恵器と木製品が出土している。

瓦器は後述の井戸2上層出土の椀（2）と同じ小破片と、羽釜の小破片である。須恵器は鉢の破片とみられ、灰色・軟質である。木製品は周囲を面取りした曲物の底とみられる直径15cm前後の桧材の破片（79～82）と下駄の未製品が腐朽したとみられるもの（83）がある。(83)は長さ24.0cm・幅 8.0cmを測る。

2．井戸2（第12図～第16図　図版第30・37～39a・46b・47a・48・49、表5）

上層と下層から瓦器・土師器・須恵器・日本製陶器・中国製磁器・木製品などが出土している。下層の方が出土量が多い。

瓦器には椀・小椀・皿・盤・壺がある。上層から出土した椀には外面の暗文が口縁部にわずかにのこるもの（2）とまったく施されないもの（1）がある。つくりは粗雑でゆがんでおり、（1）は炭素の吸着が不十分で見込みに刷毛目痕がみられる。また、上層から出土した椀には和泉地方で生産された数点の破片がみられた。下層から出土した椀は上層出土のものより厚手でていねいなつくりである。器高指数が小さく、刷毛調整を施したのち、見込みの暗文が連結輪状のもの（3）と器高指数が大きく、見込み・体部内外の暗文がていねいに施されるもの（4）とがある。下層から出土した椀の口径は15cmを測るものが最も多く、14.5～15.0cmを測るものでは80%以上を占めている。小椀（5）は下層から出土しており、椀と共通する手法でつくられている。皿（6・7）も下層から出土したもので、暗文は、外面には施されないが、内面はていねいに施されている。盤（43）は口径約50cmを測り、内面には椀と同様に幅の広い暗文を施している。底部外面には、全体に板目痕がみられる。これは焼成時に付着したものではなく、

成形時に底部の離れを良くするために離れ砂のかわりに籾殻を使用したものとみられる。底部の破片が他にも出土しており、やはり外面に籾殻痕があるものと、瘤状の足がつくもの（44）がある。壺状の底部（45）が出土しているが、平底で外面の叩き目痕をなでている。内面には粘土の輪積み痕が明瞭にのこっている。

土師器には皿・羽釜・甕がある。皿は口径10cm以上の大皿とそれ以下の小皿に分けられる。大皿をⅠ、小皿をⅡとする。

上層から出土した皿Ⅰ（16）は横なでが強く口縁部は外反気味で、法量は小さく、口径12.0cm・器高1.8cmを測る。下層から出土した皿Ⅰ（8～14）は底部外面を指でおさえ、平底とする。口径14～15cmを測るものが多く、口縁部は横なでし、斜上方へのび、端部が若干外反気味となる。器高は3cm以上を測るものが約30%を占めており、他はおおむね3cm弱である。口径13.0cm・器高2.1cmを測り、口縁と口縁下を二段に横なでするもの（15）も含まれる。皿Ⅱは口縁部の形態によってa・b・cに分けられる。aは屈曲するもの、bはまっすぐなもの、cは円盤の端を折り曲げて受け皿状にしたものである。Ⅱa（17・18）、Ⅱc（19・20）は下層から少量しか出土せず、大半はⅡb（21～41）が占めている。おおむね平坦な底部で口縁部を横なでし、短かい口縁部が斜上方へのびる。端部はわずかに外反し、皿Ⅰと共通するところがある。法量は口径9.5～10cm・器高1.5cm前後を測るものが多く、口径9cm以下で器高1.5cm以下のもの（40・41）も若干含まれる。上層出土の皿ⅡもⅡbである。土師器皿はⅠ・Ⅱとも黄灰色・明橙色を呈し、焼成は良好で堅緻なものが多い。（40・41）は他のものより胎土が粗く、焼成も悪く乳灰色を呈す。また1点のみであるが、底部を糸切りした皿の破片（367）が出土している。羽釜は口縁部の形態によってA・Bに分けられる。A（53）は外面に凹線状の段がつき、鍔が水平方向にのびる。B（54）は段がつかず、鍔が短かく下方にのびる。甕も口縁端を内側に折り反らすA（55）と、まっすぐなB（56）に分けられる。いずれも胎土に砂粒を含み、粗い。（53・56）は上層出土である。また、脚台（77・78）が出土している。

須恵器は鉢・甕が出土している。鉢は片口を有するもので、完形に復せたのは（50）だけである。口径約20cmを測り、底部糸切りで口縁部を直角に切っている。他（46～49）は底部の破片で、やはり糸切りである。（48・49）は上層から出土したもので（49）は焼成があまく、明石市魚住古窯産のものである。他は焼成が良好で神戸市神出古窯の製品に類似している。甕（51・52）は上層から出土したものである。口径約20cmの小形品で、口縁が横方向にのび、端部内側に凹線状の窪みがある。外面は左下がりの粗い叩き目を施し、肩部付近では叩き目を横なでで消している。頸部外面にもやや細かい叩き目がみられ、叩き目を全体に施した後に、口縁部を折り返したものであろう。いずれも焼成は良好で堅緻である。体部内面には押し型痕がみられる。この他に、甕とみられる破片が数点出土している。（325）は厚手で太目の平行条線を重ねてい

る。(326)は薄手で焼成があまく、瓦質化したもので細い綾杉状の叩きがのこる。

中国製磁器はすべて白磁で、下層から碗・皿の破片が30点出土している。碗は、口縁を玉縁状に折り返し、分厚い底部のAとまっすぐな口縁で、細く高い削り出し高台のB、見込みの釉を輪状にかきとるCがある。Aは玉縁の大きいA_1(57～68)と玉縁の小さいA_2(69)に分けられる。Bは口縁端が水平方向に折り返されたB_1(70・71)とまっすぐなB_2(72)、体部外面に蓮描きのあるB_3(74)に分けられる。皿は底部をあげ底状にしたもので、口縁の屈曲具合によってA_1(75)、A_2(76)に分けられる。これらは森出・横田氏の分類によると碗A_1はⅣ類に、A_2はⅡ類に、BはⅤ類に、CはⅤ類に、皿はⅣ類に相当する。碗は20点を数えるが、A_1が11点(55%)、A_2が1点(5%)、Bが5点(25%)、Cが3点(15%)含まれている。皿はA_1、A_2ともに1点ずつで、残りの8点は碗・皿の小破片である。

木製品は曲物の蓋と底・椀・柄杓・下駄・扇骨などがある。

曲物の蓋板は桧の柾目板を使用し、直径約10cmのもの(85)、と直径約15cmのもの(84)、直径24cmのもの(88)がある。周囲をていねいに削って面取りをし、内側に穿孔がある。

底板(86・87)はいずれも直径約15cmである。椀(89～93)は桧材のくり抜きで、内外面に黒漆を塗る。ほぼ完形の(93)は口径17.0cm・器高4.2cm・底径8.3cmを測る。

柄杓(94)は一木でできており、径7cm程の杓に彎曲する長さ約36cmの柄がつく。柄の外面はていねいに面取りをしている。下駄(95)は長さ17.0cm・幅9.0cmを測り、歯が削り出されている。扇骨(96)は長さ約31cm、幅は基部で約1cmを測る。骨が要にとりついたまま出土している。(97)は一方を二又にし、一方に柄をつけるために穴を設けており、鍬の一種であろう。長さは約23cmを測る。木槌(図版第48)は方形の頭に長さ約25cmの柄がつく。

また、板状の木材の一方を彎曲させ、内側に円形の穴を設けた用途不明のもの(98)も出土している。

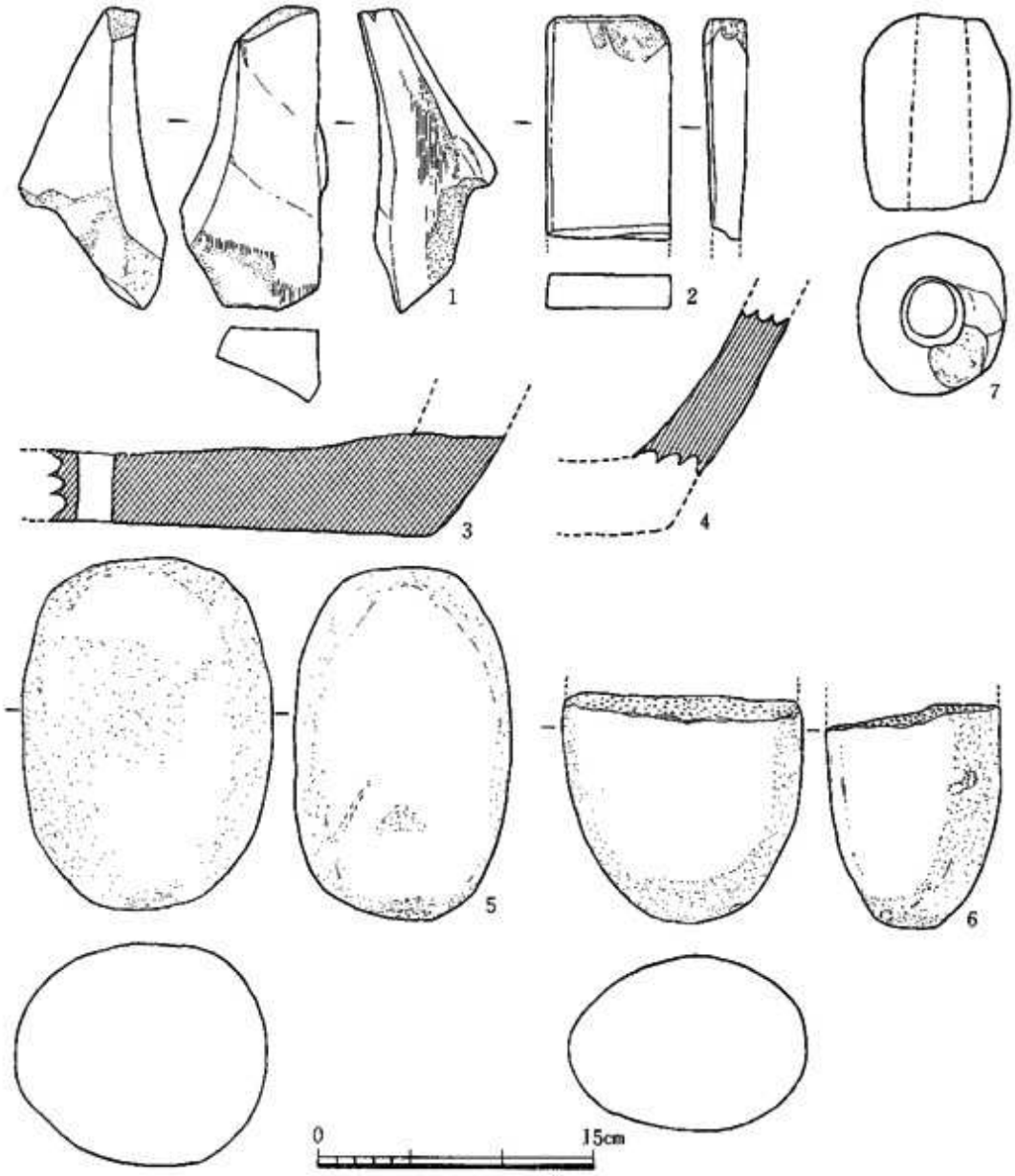
この他に、砥石と石鍋の破片が出土している。砥石は不整形の断面五角形で長さ8cm・幅約3cmを測り各面をすべて使用している(挿図第13－1)。

石鍋(挿図第13－3)は滑石製の底部破片で円形の穿孔がある。外面には煤が多量に付着している。

3．井戸3(第17・20図、図版第39b、表5)

土師器・中国製磁器・瓦器が少量出土している。

土師器は胎土中に雲母を含み、褐色あるいは灰褐色の皿である。口径7cm以下のⅡe(99・100)と口径13.5cmのⅢ(101)がある。Ⅲは井戸2出土の土師器皿Ⅰとは異なり、外反しながら大きくのびる口縁部で、底部は丸味をもっている。



第図第13　遺構、包含層出土の石器、土錘

中国製磁器は白磁（102）で薄い青白色の釉がかかり、断面方形の小さい高台が削り出されている。

瓦器は、口縁部が外反気味の羽釜A（199）である。土師器の甕B（200）は口縁部がくの字形に屈曲する。なお、瓦器椀はまったく出土していない。

4．井戸4（第17図、図版第31・39b、表5）

瓦器・土師器・緑釉陶器が少量出土している。

瓦器は、口縁端内側の沈線が無く、外面に指圧痕が顕著にのこり、暗文は太く無造作に施される椀（103・104）と井戸2や他の遺構から多量に出土するもの（105）とがある。前者はその特徴から和泉地方で生産されたものに類似している。

土師器皿（106）は口径9cm程度を測るⅡbのみである。緑釉陶器は椀の底部（107）が1点出土している。

5．井戸5（第17図、図版第39b、表5）

瓦器・土師器・中国製磁器・須恵器が出土している。

瓦器椀は、破片（108～110）ばかりである。外面に暗文が施され、内面の暗文も比較的ていねいに施す。見込みの暗文は平行線状に施され、(110)は見込みに刷毛目の調整痕がのこる。高台には安定感がある。瓦器皿（111）は口縁内側に暗文が施されている。土師器は皿Ⅰ（112～114）が皿Ⅱ（115～118）より多く出土している。器高が3cm前後で、体部あるいは口縁下に指圧痕が目立ち、端部が外反、あるいは肥厚気味である。皿Ⅱは口径9～10cmで口縁部は皿Ⅰに類似している。中国製磁器は白磁碗（119）でBに分類される。須恵器は壺とみられる底部（208）が1点出土している。

6．井戸6（第17図、図版第31・40a、表5）

瓦器・土師器・中国製磁器が出土している。

瓦器には碗・鍋・羽釜がある。椀には掘り方壁の崩壊部分から出土したもの（120・121）と、井戸内から出土したもの（122）がある。崩壊部分から出土したものは器高指数31.3を測り、暗文は外面に施されず、内面も省略化されている。井戸内から出土したものは安定した高台が付き、見込みには平行線状の暗文が施されている。

鍋（201）は蓋受状に口縁部が二段に屈曲する。羽釜には脚の付かないA，（202）と三脚の付くB（203）がある。（203）は脚が取れた後も使用されており、脚の取り付け部にも煤が付く。

土師器には皿・甕・羽釜がある。皿Ⅰも崩壊部分から出土したもの（124）と井戸内から出土

したもの（123・125）があり、器高3cm前後で比較的焼成も良好である。（123）は底部内面を刷毛調整後、なでて仕上げている。崩壊部分から出土した皿Ⅱ（130）はbに分類されるが、焼成があまく、法量も小さい。井戸内出土のものにはa・b・cがある。a（126）は薄手で口縁の屈曲が著しい。b（131）は口縁部を強く横なでしている。cはかるく円板の端を折り返している。

甕はB（204・205）の口縁部分が出土している。羽釜B（206）には煤が付着している。中国製磁器は白磁で、碗A_1に分類される（132）。

7．井戸8（第18・20・26図、図版第31・40b、表5）

瓦器・土師器・須恵器が出土している。

瓦器には椀・皿がある。椀（133・134）は口径が15cm以上を測り、高台は安定感のあるもので、内外面の暗文も密に施されている。瓦器皿（135）は器壁の風化が著しいが、椀とよく似た胎土、手法であろう。

土師器には皿・甕がある。皿はⅠ（136）で明橙色の焼成の良好なものが出土しており、器高3cm以上を測る。皿Ⅱは小破片が多いが、焼成は比較的良好なものである。土師器甕（207）はBに分類され、井戸6などから出土しているものより薄手である。

須恵器は甕とみられる破片が出土している。井戸2出土の破片と同じように薄手で焼成が悪く細い綾杉状の叩き目を施したもの（327）がある。他は比較的厚手で太目の右下がりの条線状の叩き目を施したもの（328）、横方向と縦方向の平行線状の叩き目を施して部分的に格子状にしたもの（329・330）がある。

8．井戸9（第18図、図版第31・41a、表5）

瓦器・土師器・須恵器・石鍋が出土している。

瓦器には椀・皿・盤がある。椀には掘り方から出土したもの（137）と井戸内から出土したもの（138・139）がある。掘り方から出土したものは口径13.2cmを測るが、井戸内から出土したものはひとまわり小さく口径12.4cmを測る。いずれも外面には暗文は無く、内面も暗文は細く、渦巻状に10条程度を数える。見込みは省略された螺旋状、同じ円状、連結輪状である。色調は銀黒色、胎土は灰白色で比較的精良である。皿（140）は比較的厚く、見込みに省略気味の鋸歯文状の暗文を施す。盤は口縁部が厚く、端部上面に面をもつもの（209）とやや内傾する面をもつもの（210）がある。内面はていねいになでて仕上げたあと、太い暗文を施す。外面は指押さえのままであるが、（209）の底部には籾殻痕がみられる。

土師器には皿・羽釜・盤がある。皿Ⅰは少破片が多いが、器高2.5cmを測るもの（141）と、

器高1.6cm（142）を測るものがあるが、土師器皿Ⅱbは口径8.8cmを測るもの（143）と口径8cm以下を測り、底部と口縁部の境に段を為すもの（144～146）が多い。色調は乳灰色を呈し、焼成のややあまいものが多いが、Ⅱbの8cm以下のものでは淡黄褐色で焼成は良好である。盤（211）が含まれるが、形態は瓦器のものと同じである。羽釜（212・213）は口縁が内傾気味にのび、横方向か、わずかに下方にのびる鍔が付きBに分類した。

須恵器は焼成が悪く瓦質化した甕の破片が出土している。(214)は肩部付近に左下がりの叩き目痕がわずかにみられる。口縁外面を横なでして叩き目痕は消されているが、口縁下にも同じ方向の叩き目痕がみられる。(215)は内外面をていねいになでて仕上げている。

石鍋（挿図第13－4）は体部下位の破片が出土している。滑石製で外面に煤が付着している。

9．溝1（第19図、図版第31～33・第41b、表5）

瓦器・土師器・中国製磁器が出土している。

瓦器には椀・皿・香炉蓋・羽釜・盤がある。椀は口径13.5～14cmを測るものが最も多く約63％を占める。また口縁端内側の沈線を施さないものは半数近い44.6％を占めている。形態手法からみると大きく三つに分けることができる。第一は口径15cm前後で、内外面の暗文の間隔は若干あくが、比較的ていねいに施されているもの(147・148・159)で、(148)は溝底から出土した。第二は最も量の多いもの（150～155、157～158）で口径は14cm程度で、外面には暗文は施されず、内面は渦巻状で間隔があく。見込みの暗文は省略された螺旋あるいは同心円状のものが約90％と大半を占める。第三（149・156）は、口径12cm程度の小形で暗文は内面のみあって、細く渦巻状に数条施されている。その他に高台の付かない杯状のもの（160・161）があり、口縁部に縦斑を入れて輪花状にしている。内面には細い暗文をていねいに施し、見込みには三ツ巴文や波文など描いている。胎土は薄く、精良で、口径約10cm・器高約3cmを測る。皿は土師器皿ⅡbとⅡcを瓦質化したもの（162～165）がある。香炉蓋（221）はあまり出土例を聞かないが、長辺33cm・短辺21.6cmを測り、口縁部内側を段状に削り取って内面のかえりとしている。天井部外面には籾殻痕が全面に付着し、中央部に宝珠つまみが付くものとみられる。つまみを中心にして四個の三ケ月状の透し孔があけられている。盤（225・226）は井戸2出土と同じもので、やはり底部に籾殻痕が付く。また、同じ形態の土師質の盤（227）もある。羽釜は口縁部がまっすぐなA1（222・223）と内傾するA2（224）がある。

土師器には皿・盤がある。皿Ⅰ（167～169）は口径13.5～14.0cmを測るものが最も多く約61％を占める。器高は3cm以下のものが約81％である。皿Ⅱでは、b（172～182）とc（170・171）がある。Ⅱbでは口径8.0～8.5cmを測るものが約61％を占める。つくりは薄く、ゆがみが目立つ。Ⅱcは円板の端を折り返し、かるくなでている。色調は主に乳灰色で、焼成はあまい。

中国製磁器は白磁で、碗の底部 A_1（184）、A_2（183）、B（185）が出土している。

10. 溝2（第21図、図版第42a、表5）

瓦器・土師器が出土している。また少量の須恵器、備前焼の鉢がある。

瓦器には羽釜・鍋がある。羽釜は幅の広い鍔が付き、まっすぐな口縁部外面に凹線状の段をいれるA_3（215）と内傾気味の口縁外面にやはり凹線状の段をいれるA_4（216）がある。瓦器鍋（217）は井戸6出土のもの（201）のように口縁は屈曲せず外方へのびている。

土師器には羽釜・鍋・皿がある。羽釜（218）は井戸2出土のもの（53）と同じAに分類される。鍋（219）は口縁端を内側へ折り返している。皿は口径10cm以上で、他の遺構出土のIとは胎土、器形が異る。口縁が大きく外反するもの（186）をIII、焼成が良くて斜上方へまっすぐ口縁部がのびるもの（185）をIVとした。

須恵器は底部糸切りの鉢（220）で、備前焼はIIIb期とみられる擂鉢の口縁部（214）が出土している。

11. 溝3（第19図、図版第35・表5）

土師器皿のみが出土している。

溝3と同じようにIII（188・189）とIV（190・191）が出土している。いずれも焼成が良好で硬く、（191）には雲母が含まれている。口径10cm以下のIIも出土しているが、口縁が外反気味にまっすぐのび、精良な胎土で黄灰色を呈するIId（192・193）と口径7cm以下で井戸3出土の（99、100）と類似するIIe（194・195）がある。

12. 土坑2（第19、21図、表5）

土師器・須恵器が出土している。

土師器は皿で、口径10cmをわずかにこえるI（196・197）と口径8.0cmのIIb（198）がある。

須恵器は鉢（228）で、口縁部の破片である。端部は重ね焼のため黒色化し、丸味をもって上下に拡張気味である。砂粒を含み、焼成があまく、明石市魚住古窯の製品とみられる。

13. A区土坑墓1（第22図、図版第34、表6）

瓦器・土師器が出土している。

瓦器には高台の付く通常の椀と高台の付かない片口椀、さらに小椀がある。通常の椀は断面三角形の安定した高台が付き、器壁は厚く、内外面の暗文はていねいに施されている。器高指数40を測るもの（230）と38.2を測るもの（231）があり、後者の方が丸味のある器形を呈して

いる。片口椀（232）は口径11.8cm・器高4.8cmを測る。丸底で口縁に小さな片口をつけている。外面の暗文は省略気味であるが内面はていねいに施されている。小椀は口縁端内側に沈線をいれ。ゆがみがあるが、安定した高台をつけている。（233・234）は外面をなでて調整しているが（235）はていねいに暗文を施している。瓦器はいずれも灰色または灰黒色で、器壁は厚く、胎土は粗さが目立つ。

土師器は皿のみである。皿Ⅰ（236～239）はいずれも口径15cm前後、器高3cm以上を測る。皿Ⅱは口縁端を屈曲させたaとまっすぐなbがあり、量的にはbが大半である。aでは器壁が比較的薄く屈曲の目立つもの（240・241）と器壁が厚く、口縁下を強く横なでして屈曲のくせをのこすもの（242～244）とがある。色調はⅠ・Ⅱとも明橙色で、胎土は精良で、焼成も良好である。

14. A区土壙墓2（第22図、図版第34・35、表6）

瓦器には椀・小椀・台付皿がある。椀（245）は器高指数41を測り、細いが安定感のある高台が付く。外面の暗文は風化のため不明であるが、内面にはていねいな暗文が施される。小椀（247）も安定した高台が付き、内外面にていねいな暗文が施されている。台付皿（246）も安定した高台が付き、見込みには鋸歯文状の暗文が施されている。

土師器は皿だけである。皿Ⅰは大振りで器高3.7cmを測るもの（248）と器高2.7cmを測るもの（249）がある。(248)は外反気味の口縁部で、底部は丸味をもち、外面に指おさえ痕がのこる。（249）は平底であるが、内面を指おさえし、外面には板目状の圧痕がわずかについている。皿Ⅱ（250）は口縁が二段に屈曲するaである。

15. A区柱穴（第22図、図版第35）

柱穴からも瓦器・土師器・中国製磁器が出土している。ほとんどが細片であるが、同一柱穴内から出土したもので復原できたものを記述する。

瓦器椀（251）は口径15.2cm・器高5.8cm・高台径5.4cm・器高指数38.2を測る。内外面の暗文は省略気味で、沈線は施されない。

土師器皿Ⅰ（252）は口径14.0cm・器高3.0cmを測る。中国製磁器（253）は皿A_1の底部である。

16. A区包含層（第23～27図、図版第35・36・42b～46a）

瓦器・土師器・中国製磁器・須恵器・日本製陶器などがある。

瓦器（第23図、図版第35、42b、44b）

瓦器では椀・小椀・皿・羽釜・鍋がある。椀には器高指数40前後で、土壙墓1から出土したものに類似するもの（263～266）と井戸2出土のもの（2）に類似し、器高指数35前後で、器壁が薄く、外面の暗文は口縁部にわずかに施されるもの（267）がある。さらに、外面に暗文はなく、内面も極めて省略された小振りのもの（268）の三つに分けることができる。仮にこれをA、B、CとするとAが最も多く64.7%、Bが29.1%、Cが6.2%を占める。口縁端部内側に沈線を施す割合はAでは76.4%、Bでは72.4%、Cでは26%となっている。口径はAでは15～15.5cmを測るものが78.4%で最も多く、Bでは14.5～15.0cmを測るものが76.4%、Cでは13.5～14.0cmを測るものが75%を占めている。見込みの暗文についてみると、Aでは(265)のような鋸歯文状か鋸歯文を重ねて格子状にしたものが95%を占め、他は（267）のような鋸歯文をくずして螺旋状にしたものである。Bでは(267)のように見込みの周囲に連結輪状のものを施したものが30.4%を占め、他は省略された鋸歯文状のものである。

椀には炭素が吸着せず、土師器皿のような明橙色あるいは淡黄褐色の色調を呈するものが数点出土している。外面にていねいな暗文が施されたもの（269・270）や外面に暗文が施されないもの（271・273）があり、炭素の吸着したA・Bに相当する時期のものである。小椀（259）は口径9.2cm・器高3.8cm・底径4.4cmを測り丸味をもった体部からまっすぐに口縁部がのびる。小皿（254～257）は、口径10cm前後で（254）の見込みには、ていねいな鋸歯文状の暗文が施されている。（255）は土師器皿Ⅱbに炭素を吸着させたものである。羽釜（333～335）は内傾する口縁部に幅1cm弱の鍔が付くA₂と三脚の付くB（337）がある。A₂は口径20cm弱で内面にていねいに刷毛調整をしている。Bは口径26.0cmを測り、内面はなでている。鍔は口縁端内側に肥厚する面をもつもの（336）と、口径30.6cmを測るまっすぐな口縁の内外に太目の暗文を施し、丸味をもつ底部に瘤状の脚がつき、見込みには螺旋状暗文の施されたもの（339）がある。鍋（338）は口径30.0cmを測り、溝1出土のもの（217）と同じで、内面はていねいに刷毛調整している。また（256）は口縁の屈曲が著しい皿で、（257）は薄く、口縁が外反する皿である。瓦器には他に皿状の器形に注口の付くもの（258）が1点出土している。

土師器（第23図、図版第36・46a）

土師器には皿・台付皿・羽釜・鍋などがある。皿Ⅰは、土壙墓1・2出土のものと類似し器高の推定できるもののなかで口径15cm前後・器高3cm以上を測るもの（285～288）と、他は器高3cm以下のものであるが、（289）のように2cm程度のものは少なく3cmをわずかに切るものが多い。器高3cm以上のものでは口径14.5～15.0cmを測るものが44.4%で最も多く、3cm以下のものでは、14.0～14.5cmを測るものが37.2%で最も多い。皿Ⅱでは口縁の屈曲するa(277～279)が29.4%、口縁のまっすぐなbが68.2%、受け皿状のcが2.4%を占めている。口径9.0～10.0

cmを測るものがⅡaでは81.6%、Ⅱbでは56.2%を占めている。Ⅱcも口径9～10cmを測る。皿には口径9.5cmで底部を糸切りしたもの（260）や 口径15.1cm、器高3.4cmを測り、舌状の三脚が付くⅤ（290）がある。脚台（292～294）は上部を欠いており、底径8～10cmを測るものが多く、端部外面を面取りしている。また、円板の端を折り返した口径10.8cmの上部に底径4.8cmの脚台が付く皿Ⅵ（291）や底径10.5cmを測る高台（295）が出土している。羽釜には瓦器羽釜A_1と同じ形態のもの（341）、A_2と同じ形態のもの（340）をはじめ、口縁外面に凹線状の段をいれるA（369・370）と段をいれず鍔が下方を向くB（342・343・368）がある。 Aは口径27～28cm、Bは口径24cm・33cmを測る。鍋（344・345）は瓦器鍋（338）と同じ形態を呈し、口径30・33cmを測る。鉢（371）とみられるものは口縁部が直立し、口径35.5cmを測る。土師器・甕（372）は口縁部が大きく開き、外面は刷毛調整を施し口径39.0cmを測る。

須恵器（第25・26図、図版第44・45）

須恵器は鉢（346～350）、甕（351・353～355）が出土しているが、いずれも小破片である。

鉢は灰青色でやや焼があまく、口縁がまっすぐにおわり、底部は糸切りのものと、重ね焼のため黒色の自然釉がつき、神戸市神出窯の製品とみられる（350）のような片口部分がある。甕は井戸9出土のもの（214）と同じ口縁部（351）が出土しており、外面には細かい叩き目がのこり、外面は黒色で瓦質に近い。体部の破片には、青灰色で厚手で外面に粗い叩きが施されたもの(353)、(351)と同じ色調・質で綾杉状の叩き目を施したもの（354）、外面に薄い自然釉がかかり格子状の叩き目を施したもの(355)が出土している。(355)の叩きは右下がりに施されたものかとも思われ、香川県綾南町十瓶山古窯群で生産されたものに類似する。

日本製陶器（第25・26図、図版第45b）

日本製陶器類も破片ではあるが出土している。産地の判るものは常滑・丹波である。常滑（362～365）は外面に押印がみられる大甕・大甕の破片である。丹波（366）は擂鉢の口縁が出土している。その他に産地不明の甕とみられる口縁部（352）が出土している。

中国製磁器（第24図、図版第43b）

中国製磁器はすべて白磁で、碗・皿の破片40点が出土している。碗にはA_1（296～299・300・301）、A_2、B_2（302）と、Bに分類されるが、高台内下位まで青白色の釉が施されたもの（304）があり、これをB_4とした。またCもわずかに含まれている。皿ではA_1（305）とA_2（306～308）があり、(306)は見込みに草花文風の刻線がみられる。(308)は底部に断面方形の高台を削り出し、見込みは釉を輪状にかき取っている。森田・横田氏の分類ではⅢ類に相当し、ここではBとし

た。碗は14点を数え、A_1が5点(36%)、A_2が3点(21%)、Bが5点(36%)、Cが1点(7%)である。皿は12点を数え、Aが10点(83%)、Bが2点(17%)である。残りの14点は碗・皿の小破片で器種は不明である。

その他、政和通宝(図版第46b－8)、粘板岩製の砥石(挿図第13－2)、叩き石(挿図第13－5)などが出土している。叩き石の両先端は磨滅して面をもっており、玄武岩製である。

17. B～E区包含層(第24・25図、図版第35・36)

B～E区包含層から、量は少ないが瓦器・土師器が出土している。

瓦器には椀・皿・小椀・羽釜・盤がある。椀には厚手で、外方に開く安定した高台が付くもの(309・310)がある。器壁は風化が著しいが内外面ともていねいな暗文が施され、元来漆黒色の色調とみられる。薄手で外面に暗文が施されるもの(314～316)もあり、内面を刷毛状工具で仕上げたのちに暗文を施している。皿にも厚手(312)と薄手(311)がある。小椀(313)には内外面の暗文は施されていない。羽釜は口径21.0cm・器高14.0cmを測る。A_2(376)と口径20.0cm前後のA_3(373～375)が出土している。瓦器盤(377)は口縁部の破片で上端に面をもっている。

土師器は主として皿である。皿Ⅰは口径15cm・器高3cm以上を測るもの(317)と口径13cm前後で器高3cm以下のもの(318・319)がある。また、溝5から出土しているⅣと同じもの(328・329)もある。土師器皿Ⅱにはa(322・323)、b(324・327)、c(320・321)、d(330)、e(331)がある。口径7.5cm、器高1.8cmを測るヘソ皿とよばれるもの(332)も出土しており、これをfとする。また、瓦器盤とまったく同じ形態のもの(378)も出土している。

その他に、石斧の破片(挿図第13－6)と土錘(挿図第13－7)、砥石(挿図第13－2)、が出土している。土師器の杯(131)は平城宮跡SD1900出土例と類似しており、8世紀初頭のものであろう。

第4章　まとめにかえて

第1節　遺物に関する問題点

上牧遺跡から出土した遺物には大きく分けて弥生・古墳時代の土器と古代・中世の土器が出土しているが、簡単にまとめておこう。

まず、弥生・古墳時代の土器はC区東部の包含層（以後包含層と記す）から出土したものと竪穴式住居などの遺構から出土したものがある。包含層出土のものには弥生第5様式に属す一群（39～44）と庄内・布留式併行期の一群（45～112）さらに須恵器（113～129）が混在しており、単純な形でセット関係を示すことはできない。

弥生第5様式に属す一群は図示したように数点を数えるだけで、これと須恵器を除くと大半が庄内・布留式併行期とみられる。

庄内式併行期の土器も弥生第5様式の土器と同様に10点程度しか数えることはできず、壺ではB₁（45）、B₂（46）、C₂（51）、C₃（52・53）があげられる。器台は奈良県布留遺跡山口池地点第Ⅲ層出土の器台Cに類似するもの（108・109）がある。甕ではC（47・48）があげられるが、いわゆる河内産の庄内式土器とは異なっている。

布留式併行期の土器には壺・甕・小形丸底壺・高杯・器台・鉢がある。布留式土器は須恵器出現前の土器として把えられるが、上牧遺跡出土の布留式併行期の土器はどうであろうか。まず、包含層出土の小形丸底壺を大きくA（94～99）・B（100～102）・C（103～105）の三つに分類したが、AをさらにA_1、A_2に分類した。両者はていねいなつくりで、外面を箆磨きする点などから、平城宮跡朝集殿下層溝あるいは坂田寺下層出土例に類似する。BはAに比べ厚手で粗質化し、内面を箆削り外面を刷毛調整することから、上の井手遺跡井戸下層出土例に類似する。さらにCは口径が腹径より小さく、肩が張る器形であり、上の井手遺跡の井戸上層あるいは船橋O－Ⅰ③に類似する。このように、小形丸底壺の分類では大きく三つの時期が想定されるが、他はどうであろうか。

壺C_4（55～60）は布留式の典型とされているもので、類例は船橋遺跡出土例にみられるが、平城宮跡朝集殿下層溝や上の井手遺跡井戸下層などからも出土しており、年代幅があるようである。またC₁（49・50）は他に類例をあまりみないが、強いて求めるなら上の井手遺跡井戸上層や船橋O－Ⅰに求めることができよう。壺Bはあまり出土例がないが、B_2（64）は体部内面を箆削りし、外面を細かい刷毛調整する点で甕と共通している。

甕は口縁のまっすぐなB（70・71）も含まれるが、量的には少く、図示したものだけである。

他は口縁端の肥厚するA（65～69）が占めている。口縁端の肥厚によってA₁～A₃に分類したが、A₁（65）は器壁が薄く、体部から底部にかけては尖底気味になる。これに類似するものが、安満遺跡東1地区の井戸7では庄内式併行期の甕と共伴しているから、庄内式と布留式の接点の土器と考えられる。A₂（66）・A₃（67～69）では体部内面を削って器壁を薄くしているが、A₁よりかなり厚く④仕上げられている。また、篦削りの位置もA₁では頸部内面が稜をなす位置のすぐ下から削っているのに対し、A₂では1～1.5cm下方から削っており、篦削りをしないもの（69）もみられる。

高杯は杯底部と口縁部との境に稜をもたないA₂が多いが、（79）や（87）のように外面や裾内面を刷毛調整するA₄が含まれている。A₂は杯底部外面に篦削り痕があり、杯部はなで調整を基本としており、上の井手遺跡井戸下層出土例にもっとも類似し、A₄は刷毛調整や裾部穿孔など船橋O－Ⅰに類似する。また、Bでは杯底部と口縁部の境に凸帯状の稜があり、脚部外面、裾内面を刷毛調整するB₁（73）は船橋O－Ⅰに、B₂（76）は上の井手遺跡溝に類似している。B₃は平城宮跡朝集殿下層溝に類例がある。

鉢は、胎土が精良で口縁を二段に屈曲させたものは出土しておらず、大形のB（92）と小形のC（106・107）が出土している。小形のCの外面は刷毛調整や篦削りが施され、内面にも篦削りが施されるなど小形丸底壺のつくりと共通している。器台Bはいわゆる鼓形器台であって、中央部が漏斗状を呈する布留式の特徴をそなえている。

このように包含層出土の布留式併行期の土器は、布留式の古い段階に位置づけられる坂出寺下層や平城宮跡朝集殿下層溝の時期から船橋O－1の時期までの幅をもっていることがわかる。

つぎに、遺構から出土したものはどうであろうか。竪穴式住居跡からは数点の破片しか出土していないが庄内式併行期とみられる甕A₁（1）が含まれている。竪穴式住居2では高杯、小形丸底壺が出土しているが、高杯Aには外面に刷毛目痕のあるA₁（8）や上の井手遺跡井戸下層に類例のあるA₂（9・10）がある。高杯Bでは船橋O－Ⅰに類例のあるB₁（11）と上の井手遺跡溝出土例に類例のあるB₂（12）がある。小形丸底壺は口径が腹径より小さく、外面を刷毛調整、内面を削っており、船橋O－Ⅰに類似している。

井戸10では、坂出寺下層や平城宮跡朝集殿下層溝に類例のある、内面を放射状に篦磨きした高杯B₂（13）がある。また、杯底部に篦削り痕のあるA₂（14～16）は竪穴式住居2と同様で、上の井手遺跡井戸下層に類例がある。小形丸底壺（21）はCに分類したが、船橋O－Ⅰよりむしろ上の井手遺跡井戸下層出土例に類似している。甕（22～25）は口縁端部が小さく肥厚するものから、内側に傾斜する面をもつものまでを含んでいる。

井戸11では、小形丸底壺（26～28）はCに分類したが、上の井手井戸遺跡井戸下層に近いかともおもわれる。高杯はA₂（29～30）であるが、外面と裾内面に刷毛目痕があり、上の井手

遺跡井戸下層より新しい傾向がうかがえる。甕では、口縁端部がわずかに肥厚するA₁はみられない。

井戸12からは小形丸底土器D（33）しか出土していないが、上の井手遺跡井戸上層に類例がある。

土壙墓5では高杯A₂の裾内面に刷毛目があり、甕では口縁端部が内側へ傾斜する面をもつA₃（34・35）と肥厚しないBが出土している。

このように、遺構出土の布留式併行期の土器をみると、坂田寺下層あるいは平城宮跡朝集殿下層溝出土例に類似するものも若干含まれるが、各遺構には小形精製土器三種のうちの器台・鉢を出土する遺構はなく、高杯・小形丸底壺も、上の井手遺跡井戸下層から船橋遺跡O－Iにかけての土器が主体的であることがわかる。このことから、竪穴式住居2や井戸10～12は、布留式でも小形精製土器三種のセット関係が崩壊した後の時期に相当し、竪穴式住居1は、出土遺物は少ないが、庄内式併行期と推定することができる。

表1　上牧遺跡出土の中世土器分類表　（　）は%

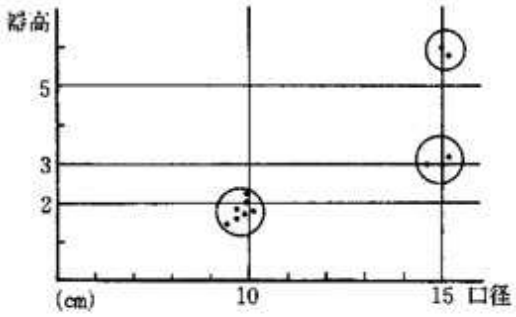
瓦　器	2,273（38.0）
土師器	3,398（56.6）
須恵器	181（3.0）
陶　器	37（0.6）
磁　器	84（1.4）
その他	26（0.4）
計	5,999（100.0）

つぎに、中世の土器類についてみることにする。表1は上牧遺跡から出土した土器・陶器の破片を分類したものである。器形別にみると、瓦器では椀・皿類が76.1%、羽釜・盤などは23.9%である。土師器では皿が98%、羽釜・盤などは2%である。須恵器では鉢が11%、甕・壺が89%である。日本製陶器は鉢が丹波・備前で5.4%、甕・大壺は常滑で94.6%を占める。中国製磁器はすべて白磁で、椀・皿類に限られている。これらを用途別に分類すると椀・皿などの供膳用器が92.3%、羽釜・鍋などの調理用器が4.0%、甕・壺などの貯蔵用器が3.3%、その他0.4%となる。

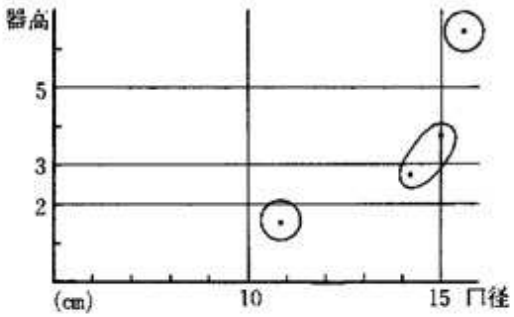
遺構から出土したものではA区土壙墓1・2出土のもの（第22図 230～250）があげられる。土壙墓1出土の土師器皿Ⅱaには口縁下を強く横なでをして屈曲のくせを残すものがあるものの、量的には口縁の屈曲しないⅡbが主である。このため、土壙墓1の瓦器椀にはわずかに丸味があるが、宮田遺跡や平安京左京四条一坊井戸ＳＥ8（以下、平安京井戸ＳＥ8と記す）より一時期新しいものと考えられる。[5] 土壙墓2出土の土師器皿Ⅰには、宮田遺跡出土の皿Ⅰのように器高3cm以上を測るものと、器高3cm以下のものがある。[6] 土師器皿Ⅱaが1点だけで、判断に苦しむが瓦器椀の法量は・器形とも宮田遺跡・平安京井戸ＳＥ8出土例にもっとも類似している。A区包含層出土の瓦器椀（263～266）も宮田・平安京井戸ＳＥ8出土例に類似するが、器形が丸味をもっている。

各遺構出土資料をさらに詳しくみてみよう。まず、瓦器椀・土師器皿では古い形態から新し

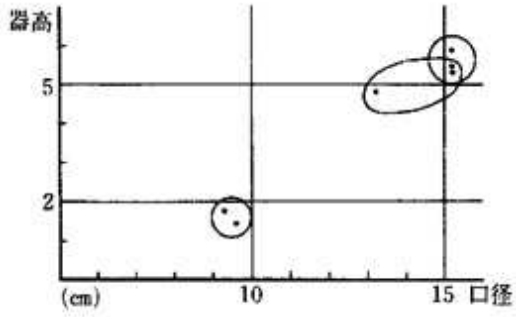
い形態への変化をグラフ上でみることができる。挿図第14～第22は、主な遺構・包含層から出土した瓦器椀・皿、土師器皿の口径と器高をグラフ化したものであり、挿図第23は宮田遺跡と



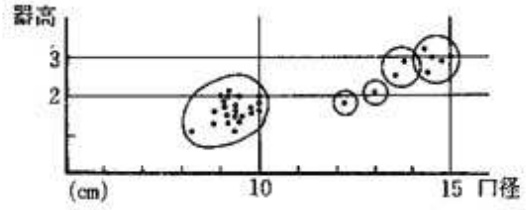
挿図第14　土坑墓1瓦器椀・土師器皿



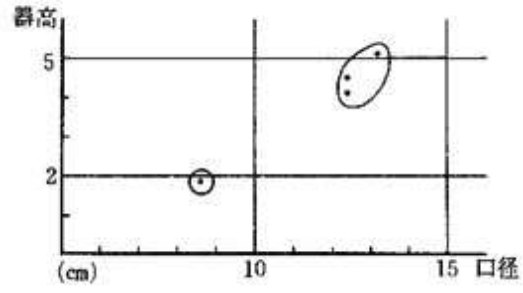
挿図第15　土坑墓2瓦器椀・土師器皿



挿図第16　井戸2瓦器椀・皿



挿図第17　井戸2土師器皿



挿図第18　井戸3瓦器椀・皿

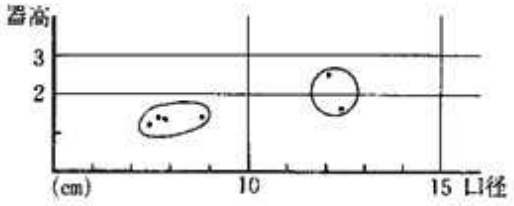
平安京の井戸ＳＥ８出土の瓦器椀・土師器皿をグラフ化したものである。宮田遺跡出土の瓦器椀は平安京井戸ＳＥ８出土の瓦器椀と最も類似しており、下限の目安を一応寛治５（1091）年としうることは前述のとおりである。この宮田遺跡・平安京井戸ＳＥ８出土の瓦器椀に最も類似するものとしては、包含層出土の(309・310)があげられる。

つぎに井戸２下層から出土した瓦器椀（３・４）も、法量では宮田・平安京井戸ＳＥ８に近いが、暗文の省略化がすすんでおり、土坑墓１より一時期新しいものとみられ、土師器皿Ⅱでは口径が10cm以下となっている。溝１（挿図第20）の瓦器椀では、外面に暗文が施されなくなり、内面の暗文も省略化されたものが最も多量である。法量が小さくなり、土師器皿Ⅱも口径が９cm以下になっている。井戸９では、さらに法量が小さくなり、暗文も省略化がすすむ。

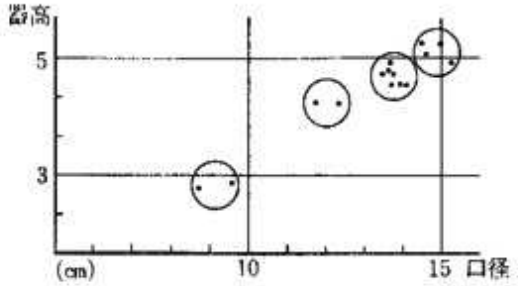
井戸２出土の瓦器椀と溝１で多量に出土する瓦器椀の中間的形態として、溝１出土の(147)、井戸２上層出土の（２）があげられる。これを整理すると、上牧遺跡では瓦器椀の変遷は包含層出土の(309・310)→土坑墓１→井戸２→溝１出土の(147)→井戸２出土の（２）→溝１→井戸９となり、井戸９以降の形態を示す資料は出土していない。

井戸９出土の瓦器椀の年代はおおむね13世紀後半と考えるが、詳しい時期については第５章で述べることにする。

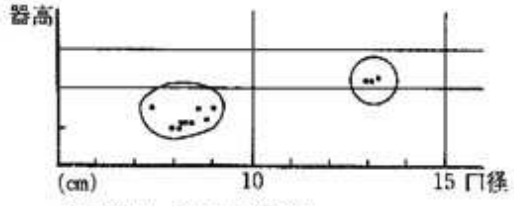
このように、ある程度、形態の変遷を追求できる瓦器椀が出土したが、破片のなかに炭素の吸着しない資料のあることは前述のとおりである。しかし、瓦器の焼成法をどうみるかで解釈は異なる。もし、二度焼きするとした場合、炭素未吸着のものは最初の焼成段階のままのもの



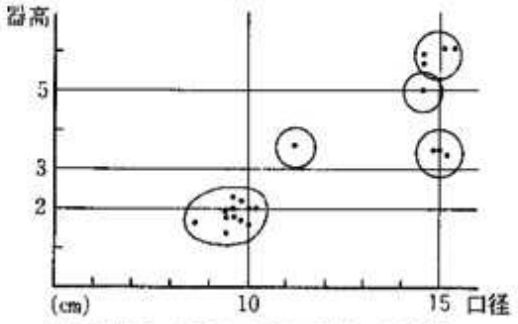
挿図第19　井戸９土師器皿



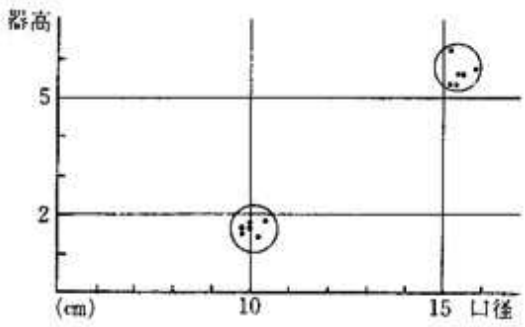
挿図第20　溝１瓦器椀・皿



挿図第21　溝１土師器皿



挿図第22　Ａ区包含層瓦器椀・土師器皿



挿図第23　宮田遺跡・平安京SE8瓦器椀・土師器皿

であることになる。それとも一度だけの焼成で炭素が吸着するのであれば、他に何らかの理由で炭素が吸着しなかったことになり、そのいずれかを判断することは容易ではない。ただ、宮田遺跡や安満遺跡などにも類例があり、瓦器の焼成、とくに黒色化の過程で生ずる現象であることは推定できる。しかし、その焼成法が明らかでない現在、この問題は今後の課題として残る。また内面には暗文を施すまえになで調整をするのが多いが、細かい刷毛調整をするものも[7]含まれている（図版第59－1・2）また、土師器皿Jの内面にも刷毛調整するもの（123）があり、製作手法と生産集団を考えるうえで重要である。

さて、その生産集団であるが、上牧遺跡から出土した瓦器椀は淀川の対岸にあたる枚方市楠葉東遺跡の出土資料に最も類似し、楠葉東遺跡では瓦器を焼成したとみられる窯が検出されており、[8]瓦器椀の類例は平安京を中心とする地域に分布している。また、上牧遺跡出土の瓦器椀には和泉地方で生産されたとみられるもの（103・104）も若干出土しており、瓦器椀の地域色と流通を考えるうえで興味ある問題を提起するが、このことも第5章でふれることにする。

瓦器には椀以外に羽釜や盤などがあるが、井戸2出土の盤（42～44）やA区包含層の盤（339）の内面には太い暗文が施されており、瓦器椀製作との共通点がある。また、井戸2出土の盤の外面や溝1出土の香炉蓋（221）の外面には全体に籾殻痕が付いている。籾殻は、製作時に底部が台から離れやすくするため、いわゆる離れ砂のかわりに使用されたものであろうか。

土師器の皿が瓦器椀とともに変遷することはグラフから知ることができるが、皿以外の羽釜、鍋などには、瓦器のそれと同じ形態のものがあり、瓦器生産と土師器生産の関連を考えるうえで重要な手がかりといえる。また、土師器皿には底部を糸切りしたもの（260・367）が出土しているが、これらは畿内周辺部あるいは瀬戸内地方から運ばれたものであろう。

須恵器には鉢と甕があるが、器形を知ることのできたものは井戸2出土の鉢（50）だけである。鉢には神戸市神出古窯址群、明石市魚住古窯址群の製品が含まれている。また、甕の破片にも東播地方産とみられるもの[9][10]（214・351・354～358）や、香川県綾南町十瓶山古窯址群の製品（355）があり、畿内周辺部との関係を知ることができる。

日本製陶器としては常滑（362～365）が多く出土しているが、瓦器椀が使用された頃の主な貯蔵用器を荷なっていたものとみられる。備前の擂鉢は南北朝、丹波は戦国末期のものであるが、これらによって中世の商品流通を知ることができる。

中国製磁器は白磁のみで、碗・皿類に限られている。それらは全体の1.4%を占めているが、

集落内の特定の者が所有したものであろう。出土したのは主として井戸2、A区包含層で、比較的古い時期の瓦器椀と共伴する。

このように、上牧遺跡から出土した中世土器、陶磁器類は編年や商品流通を考えるうえで重要な資料である。第5章で高槻市内の各遺跡から出土した資料を加えて、それらの問題点を追求することにしたい。

注① 置田雅昭「大和における古式土師器の実態」(『古代文化』第26巻2号　1974年)
② 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古代土師器」(『考古学雑誌』第60巻第2号　1974年)
③ 原口正三他『河内船橋遺跡出土遺物の研究』(大阪府教育委員会　1962年)
④ 森田克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書』(高槻市教育委員会　1977年)
⑤ 原口正三「宮田遺跡」(『高槻市史』第6巻　1973年)
⑥ 田辺昭三『平安京跡発掘調査報告』(平安京調査会　1975年)
⑦ 百瀬正恒氏の御教示によると平安京・長岡京周辺にも炭素の吸着しない資料があるとのことである。
⑧ 「楠葉東遺跡」(『枚方市における遺跡調査概況　1968～1976年』枚方市文化財研究調査会　1976年)
⑨ 真野修「神出古窯址群1」(『神戸古代史』第1巻第3号　1974年)
⑩ 真野修「魚住古窯址考Ⅰ」(『歴史と神戸』93号　1979年)
⑪ 森浩一他「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」(『古代生産遺跡の調査』同志社大学　1971年)

第2節　遺構からみた上牧遺跡の変遷

上牧遺跡は弥生時代後期から古代・中世にかけて営まれた集落であることが明らかになった。最後にその変遷と特色をまとめてみよう（挿図第24～27）。今回の調査では弥生時代後期の遺構は検出できなかったが、弥生時代後期の土器が少量出土した。遺跡の立地条件からみて、当時は自然堤防背後の湧水を利用した農耕を営む小規模な集落が築かれていたと考えられる。

上牧遺跡の周辺では萩之庄遺跡が高地性集落とよぶにふさわしい標高120m余りの尾根上に位置しているのみで、現在、桧尾川東部[①]に弥生時代の集落を見い出すことはできない。このように弥生時代後期までは上牧遺跡周辺はまったくの未開の地であったらしいが、その理由は周辺の地形を検討すれば容易に理解できる。すなわち、山崎狭隘部より下流では淀川の形成する自然堤防の発達が悪く、デルタ的な様相を呈している。上牧遺跡周辺には内ケ池、大野池のような淀川分流の河跡湖があり、後背湿地が拡がり、自然堤防は小規模な島状のものが点在するにすぎない。

上牧遺跡の西約1.5kmに位置する安満遺跡についてみても、弥生時代後期の集落は安満扇状地の縁辺に位置するが、洪水の危険性の高い氾濫平野には拡がっていない。安満遺跡は、これまでの調査によって、弥生時代後期には大きく東西二カ所に集落が分かれていたと推定されている。当時の桧尾川は成合盆地からまっすぐ南下して淀川に流れ込んでいたことが判明しており、安満遺跡の東部集落と上牧遺跡は旧桧尾川の東部地域に位置していたことになる。安満遺跡が弥生時代前期から、中心的な位置を占め、安満遺跡を核として周辺の各遺跡が存在することから、上牧遺跡もまた安満遺跡を母村とする一集落とみることができよう。そして、開発が困難であった旧桧尾川東部の淀川沿岸低地を開発しはじめたのは弥生時代後期からであったと推定される。

弥生時代後期の集落は、丘陵上や台地上に立地している場合が多く、安満遺跡の周辺でも、弥生時代中期から後期にかけては紅茸山・芝谷・慈願寺山遺跡などが注目されている。これら丘陵上に立地する集落は高地性集落と呼ばれ、倭国大乱との関連が論議されている。高槻市域で見る限り、弥生時代後期の集落は安満遺跡のように前期以来低地に営まれている一方、上牧遺跡のようにより低地に進出していることも指摘できる。また、最近の調査では芥川東岸の低地に営まれた大蔵司遺跡も発見されている。

次の庄内式併行期の土器が使用された段階では扇状地の縁辺部から氾濫平野の一部にかけて集落が進出したらしく、安満遺跡9地区の調査では井戸から多量の土器が出土している。また、安満遺跡西北部でも庄内式併行期の土器が埋没した数条の溝が検出されている[②]。

上牧遺跡でも庄内式併行期の土器は数点出土している。しかし、遺構からは[③]竪穴式住居1

から壺の破片が1点出土しているだけで、いまひとつ明確な遺構を検出していない。

しかし、次の布留式併行期になると、上牧遺跡では多量の土器が出土するようになり、遺構も竪穴式住居、井戸、土壙墓などがある。竪穴式住居は2棟しか検出されていないが、井戸は2棟の竪穴式住居の南に1基と調査区の北辺に2基検出されている。また、土壙墓も数基検出されており、この時期には継続的に集落が営まれていたことがわかる。上牧遺跡のすぐ北方に位置する梶原遺跡も、ほぼ同時期の集落とみられ、また、最近の調査で山麓の梶原寺下層からも布留式併行期の土器が出土している。[4] この時期に安満遺跡では前代の扇状地縁辺部から氾濫平野にかけて営まれた集落が、氾濫平野へ更に進出しており、桧尾川沿いの地域に布留式併行期の土器が埋没した井戸や土壙が多数検出されている。また、安満遺跡の西部集落に加え、北方には安満北遺跡も存在している。このように安満遺跡周辺には布留式併行期の土器が盛行する時期の集落が数多く営まれている。

上牧遺跡や安満遺跡東部のような氾濫平野に位置する集落に注目すると、前代の庄内式併行期ら集落を継続して営むようになったが、このためには自然堤防背後の湧水を利用した低い農業生産力から脱皮するために、灌漑用の溝が人為的に掘さくされ、生産力を高める努力がはらわれた。上牧遺跡では検出できなかったが、安満遺跡の場合、1966・1972年度の調査で相当規模の大きい溝が数本検出された。このような大規模な土木工事を行う場合、弥生時代後期から庄内式併行期にかけては低い生産力しかなかった上牧遺跡の力だけでは不可能であろうから、安満を中心とする周辺集落の援助があったものと考えられる。

この大規模な土木工事を行なう技術は前方後円墳築造技術との関連が想定されるが、桧尾川東部の前方後円墳は上牧遺跡背後の萩之庄の尾根上に位置する萩之庄1・2号墳がある。調査を実施した1号墳の出土遺物中に、稜に沈線を加えない車輪石があり、弁天山C1号墳より時期が一段階新しいとみられる。[5] 弁天山C1号墳出土の布留式土器が詳しくは小若江北遺跡出土のものと類似し、上牧遺跡の竪穴式住居、井戸から出土する布留式土器が小若江北遺跡出土のものより後出の小形精製土器三種を欠いたものであるから、今回検出された上牧の集落と萩之庄古墳はほぼ同時期とみられる。そして、萩之庄古墳に葬られた人物は安満遺跡を中心とする旧桧尾川東部の各集落の盟主であった可能性もある。

上牧遺跡は須恵器出現とともにその実態が不明確になる。調査区の東側水田から須恵器が何点か出土しているから集落の位置が移動したのかもしれない。調査区および東側水田から出土した須恵器は、中村浩氏の陶邑編年案によればいずれもI型式の4ないし5段階に相当するもので、[6] それ以後のIIないしIII型式の須恵器はまったく出土していない。

次の段階の遺物としては奈良時代初頭の土師器杯（131）があげられるが、どの遺構に伴うものか不明である。遺構では掘立柱建物群があげられるが、主軸を東西方向に揃え、掘り方の整

然とした柱穴の一群(建物1～4)と、方向に統一性がなく、掘り方の簡単な一群に分けることができる。方向を揃えた建物1～4は柱穴内に遺物をほとんど含まないため、年代を確定できないが、安満遺跡や郡家今城遺跡などの例からおおむね奈良、平安時代の建物群と想定される。建物1の南に同一方向の柵1・2があるため、建物1と建物2～4とは区別される位置にあることも考えられるが、検出された建物数が少ないため位置関係を充分明らかにできない。しかし、建物4は東柱を有するところから倉とみられるが、高槻市内の他の遺跡では類例をみない程規模の大きいものであり、奈良時代以後に相当の生産力を有した集落が存在したものと考えられる。

建物1～4の他の建物群も柱穴内にほとんど遺物を含まないため、年代の確定に不安が残るが、小規模な建物13などの柱穴内から瓦器が出土している。井戸1～9からは瓦器、土師器などが出土しており、方向性に統一が無い建物5～13と井戸1～9は、おおむね11世紀末から13世紀にかけての年代を想定することができる。なお、瓦器、土師器の年代観については第5章でふれることにする。

建物5～13と井戸1～9との組み合わせ関係は充分解明できないが、C区中央部・D区・E区東部に小柱穴群と井戸があり、居住区のあったことを示している。また、A区に土壙墓が検出されており、今回の調査区では東北部に位置する。宮田遺跡や京都市城之内遺跡でも集落の東北部に土壙墓が検出されており、この時期の宗教的習俗の一端を知ることが出来る。(7)

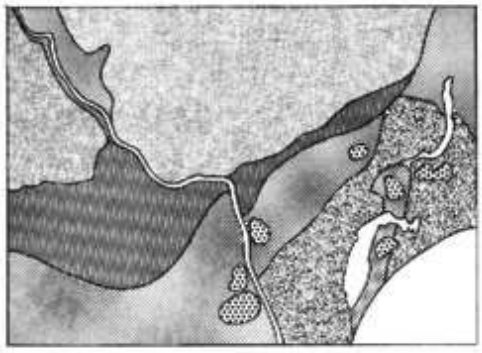
溝2～7は磁北とほぼ同一、あるいはこれに直交するように掘さくされている。溝2は調査直前まで使用されていた灌漑水路であり、ⅢB期の備前焼擂鉢が出土している。また、溝6・7は調査前の畦畔とほぼ同じ位置にあり、内部から瓦器椀は出土せず、溝7から土師器皿のみが出土している。この土師器皿は溝2出土のものに類似し同志社キャンパス内出土遺物を参考にするとⅣ期ないしⅤ期に相当し、おおむね15世紀代と考えられており、掘立柱建物群、井戸群が廃滅した後に掘さくされたものと想定される。ただ、井戸3のみ内部から瓦器椀が出土せず、土師器皿も溝3出土のものと類似している。

さて、これら奈良・平安時代から室町時代にかけての掘立柱建物群と井戸群などはどの様な性格をもつのであろうか。安満遺跡の最近の調査では、桧尾川右岸に、8世紀中葉の遺物を出土する井戸が検出されており、これまでの調査を総合すると、奈良時代には桧尾川沿いの地域に東西400m、南北200mにわたる集落が営まれていたと推定できる。安満遺跡と関係の深い上牧遺跡も奈良時代の集落が営まれており、それが建物1～4に相当するのではないかと考えるが、それは想像の域を出ない。

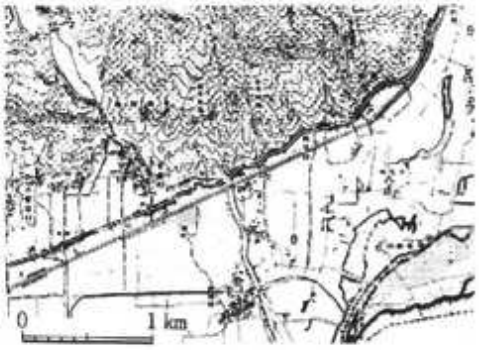
さて、古代の上牧遺跡周辺を考えるうえで参考とする資料に昌泰元(898)年十一月の格がある。それによると、淀川両岸の堤防近くに公私の牧があり、牧子たちが淀川を上下する舟荷の

略奪をしていたことを記している。上牧という地名はそのような古代の牧場の所在を示しているようで、河音能平氏は摂津国国飼牧を上牧に推定されている。[8] この国飼牧が、今回の調査地区に相当するのか、あるいは現在の上牧の集落が立地する自然堤防上に相当するのかを直接証明できない。今回検出した遺構にも直接、牧を示すものは検出されていない。しかし、律令制の衰退とともに牧は有名無実化したことは周知のとおりであり、紀貫之が土佐守の任を終えて都へもどるのに川底に船がつかえて河尻から山崎まで5日間かかったことを『土佐日記』に記しているように古い淀川往来記には、渇水期に川底があがるのは農民が田に水をひくので川の水が減ると記されている。このように、平安時代の淀川沿岸の牧は水田化が進んでいたらしいが、安満では天長9（832）年に223町歩の勅旨田が開墾され、この時期に桧尾川の流路変更が図られたとも考えられている。

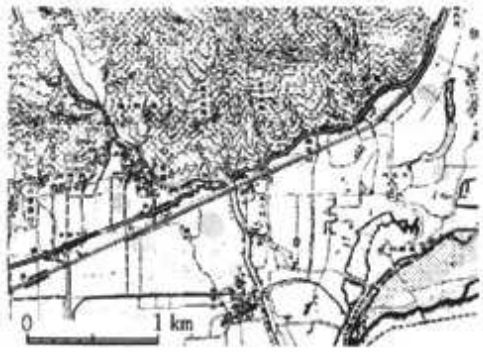
上牧遺跡では9世紀・10世紀代とみられる遺構・遺物は出土しておらず、包含層出土の瓦器椀（309）が平安京左京四条一坊の井戸ＳＥ8出土の瓦器椀によく類似しており、11世紀後半には集落が営まれていたものとみられる。記録では第1章でもふれたように治暦年間（1065～1068）に藤原兼家の遠裔滝口季秀と弟義秀が鵜殿・井内の二島を開き、井内に義秀が、鵜殿に季秀が居住し鵜殿氏と称したらしい。[9] この義秀の居住した井内は現在の井尻に相当するものと思われ



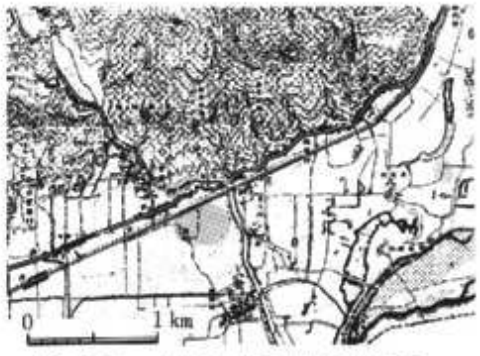
挿図第24　上牧遺跡周辺の地形



挿図第25　弥生時代末の上牧遺跡周辺



挿図第26　古墳時代の上牧遺跡周辺



挿図第27　古代・中世の上牧遺跡周辺

る。また、保元元（1156）年の記録では藤原家の上御厩は楠葉牧を管理し、下御厩が井尻牧を管理したとある。井尻牧が義秀の居住した井内（井尻）に相当するのか、枚方市域に相当するものかは不分明であるが、楠葉牧は交野郡の南北につらなる広大な規模で、仁平元（1151）年の『台所別記』では河北牧と河南牧に分かれている。淀川に現在のような大規模な堤防のなかった当時は上牧周辺は河北牧に含まれていたものとみられ、井尻牧は今回の調査で明らかになった上牧遺跡周辺を指すのではなかろうか。楠葉牧は藤原氏の氏長者が伝領し、馬牧の他に田地や土器作り集団を含む複雑な経済機構をもち、殿下渡領として政治的地位をもつが、8世紀以後荒廃化したとみられる上牧周辺を季秀・義秀らに開発させたものとみられ、律令制の崩壊から荘園制へ移行する姿をみることができる。そして上牧周辺は楠葉牧の経済機構にくみこまれていったものとみられ、その一例として遺物の項でもふれたが、出土する瓦器椀が明らかに楠葉で生産したものであることが指摘できる。

このように、摂関家の荘園機構に組みこまれた上牧遺跡は、南北朝期を境にして掘立柱建物群や井戸群が姿を消し、かわって区画化された溝が掘削され水田化されたものとみられ、荘園制の崩壊を遺構からみることができる。

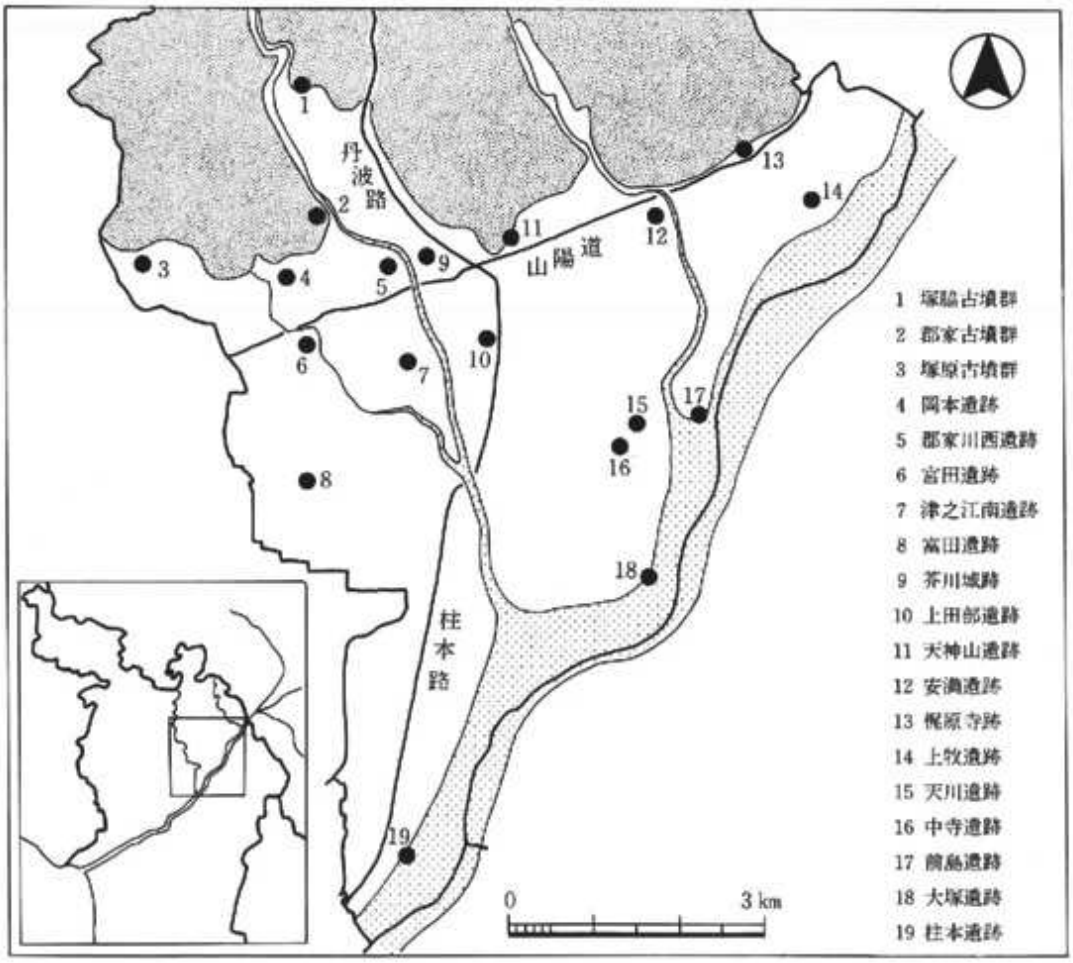
注① 原口正三「萩之庄遺跡」（『高槻市史』第6巻　1973年）
② 1978年に発見され、本市教育委員会が発掘調査を実施した。
③ 原口正三「安満遺跡」（『高槻市史』第6巻　1973年）
④ 1979年1月に本市教育委員会が発掘調査を実施した。
⑤ 原口正三・西谷正「弁天山C1号墳」（『弁天山古墳群の調査』大阪府教育委員会　1967年）
⑥ 中村浩『陶邑Ⅲ』（大阪府教育委員会　1978年）
⑦ 堀内明博・白瀬正恒・吉村正親「上久世城之内遺跡」（『仏教芸術115号』1977年）
⑧ 河音能平「中世社会への道」（『高槻市史』第1巻　1977年）
⑨ 天坊幸彦『高槻通史』（高槻市役所　1953年）

第５章　中世土器研究予察

第１節　高槻の中世遺跡と遺物

高槻市内に存在する中世遺跡および遺物散布地は現在19ケ所を数える(挿図第28)。遺跡分布図『高槻の遺跡』が作成された1970年段階では瓦器・土師器等の中世遺物の出土している遺跡として、安満遺跡など３ケ所しか知られていなかったのに比べ大幅な増加である。これはいうまでもなく、高槻市域の開発に伴う発掘調査の進展によって発見された遺跡が多数を占めているが、中世関係の遺物が未報告・未整理であったものも何か所か含まれている。調査の結果を細部まで公表せずに貴重な資料を死蔵していた文化財保護体制にその責任の一端があるにせよ、瓦器や土師器が充分考古学の研究対象とならなかったことが、その最大の原因であろう。

さて、60年代後半の経済の高度成長は高槻市域における宅地開発を押し進め、遺跡の発掘調



挿図第28　高槻市の中世遺跡分布図

査も大規模となり、従来のトレンチ調査やグリッド調査では検出不可能であった古代・中世の村落が検出されるようになった。

高槻市において歴史時代の遺跡が注目されるようになったのは1969年の郡家川西遺跡（嶋上郡衙跡）・上田部遺跡の発見以後である。郡家川西遺跡は関西地方で最初に郡衙跡と判明した遺跡であり、上田部遺跡は律令体制下の班田農民が耕作した水田址を明らかにした。翌70年には、郡家今城遺跡の調査が開始され、律令体制下の村落構造の一端を明らかにすることができた。

つづいて、71年には宮田遺跡の調査が開始され、高槻市内ではじめて中世遺物類が良好な状態で出土した。宮田遺跡のその後の調査では、これまでに例をみない中世村落を明らかにすることができ、考古学の立場から中世史の解明にせまる糸口をつかんだ。宮田遺跡の調査が開始された頃、淀川河床の浚渫工事に際して柱本・大塚の両遺跡から多量の遺物類が採集された。このなかには、瓦器や土師器皿などが含まれており、淀川水運が中世経済に果たした役割を考えるうえで重要な資料を提供した。さらに、71年から72年にかけて本報告書にまとめた上牧遺跡が、つづいて安満遺跡が調査された。

このように、高槻市では70年前後に相ついで古代・中世の遺跡の発掘調査が行なわれ、中世史研究にとって重要な資料を提供した。宮田遺跡や安満遺跡などは現在も調査が継続しており、断片的であるが新資料が増加している。

つぎに、これまでに調査を実施した中世遺跡の概要を紹介し、高槻市における特色をさぐることにする。なお、報告書が刊行されているものやすでに紹介されたものについては省略することにした。

1．塚脇古墳群　高槻市塚脇一丁目（挿図第29）

高槻市の中央部を流れる芥川の上流は摂津峡とよばれ、市民に親しまれている。この摂津峡の周囲は丹波山塊に連なる山々に囲まれ、東方の三好山には戦国時代末期の武将三好長慶が拠った城山城址があり、石崖や土塁が昔日をしのばせる。三好山の東に連なる帯仕山の南側中腹から麓にかけて、さらに東麓の谷筋に群集する後期古墳群が塚脇古墳群である。

宅地造成工事に先立って1963年から数次にわたって発掘調査が行われた結果[①]、10号墳・12号墳・C－2号墳の石室から瓦器椀・土師器皿等が出土している。10号墳・12号墳については報告書が刊行されているため、C－2号墳から出土した瓦器椀1点について紹介する。

口径13.6cm・器高4.2cm・高台径4.8cm・器高指数30.9を測る。断面三角形の簡単な高台の付く底部から内弯しながら体部がたちあがり、口縁部はまっすぐおわっている。外面は口縁部を横なでするだけで、暗文は施されず、体部に指圧痕がのこる。内面の暗文は見込み中央部に省略された螺旋状のものが、体部には間隔のあく渦巻状のものが施されている。色調は灰黒色で、

器壁は薄く、胎土は灰白色、精良である(1)。10号墳・12号墳から出土しているものも良く似た形態である。

塚脇古墳群の所在する地は嶋上郡服部郷に属すと考えられるが、現在のところ周辺の中世遺跡についてはまったく不明である。

2　郡家古墳群　　高槻市南平台（挿図第29）

嶋上郡衙跡の北方、旧奈佐原の丘陵地帯には前期の古墳群として著名な弁天山古墳群がある。弁天山古墳群は宅地造成に先立って1963年に発掘調査が行われたが、C－1号墳の南側尾根にも後期の横穴式石室墳が群在することがわかり調査が実施された。②

郡家古墳群は7基の小形横穴式石室墳で構成されている。

7号墳から瓦器椀が出土している。細い三角形の高台がつく底部から内弯しながら体部がたちあがり、口縁部はまっすぐにおわっている。外面の下半は指圧痕をていねいに消しているが、体部と口縁部には若干指圧痕がのこり、その付近に簡単な暗文が施されている。内面の暗文は、見込みでは省略化された鋸歯文状であり、体部上半部は密で、下半部はやや間隔があいている。色調は灰黒色、胎土は灰白色で精良である。口径15.2cm、器高7.2cm・高台径5.6cm・器高指数34.2を測る(2)。

3．塚原古墳群　　高槻市塚原（挿図第29、図版第50）

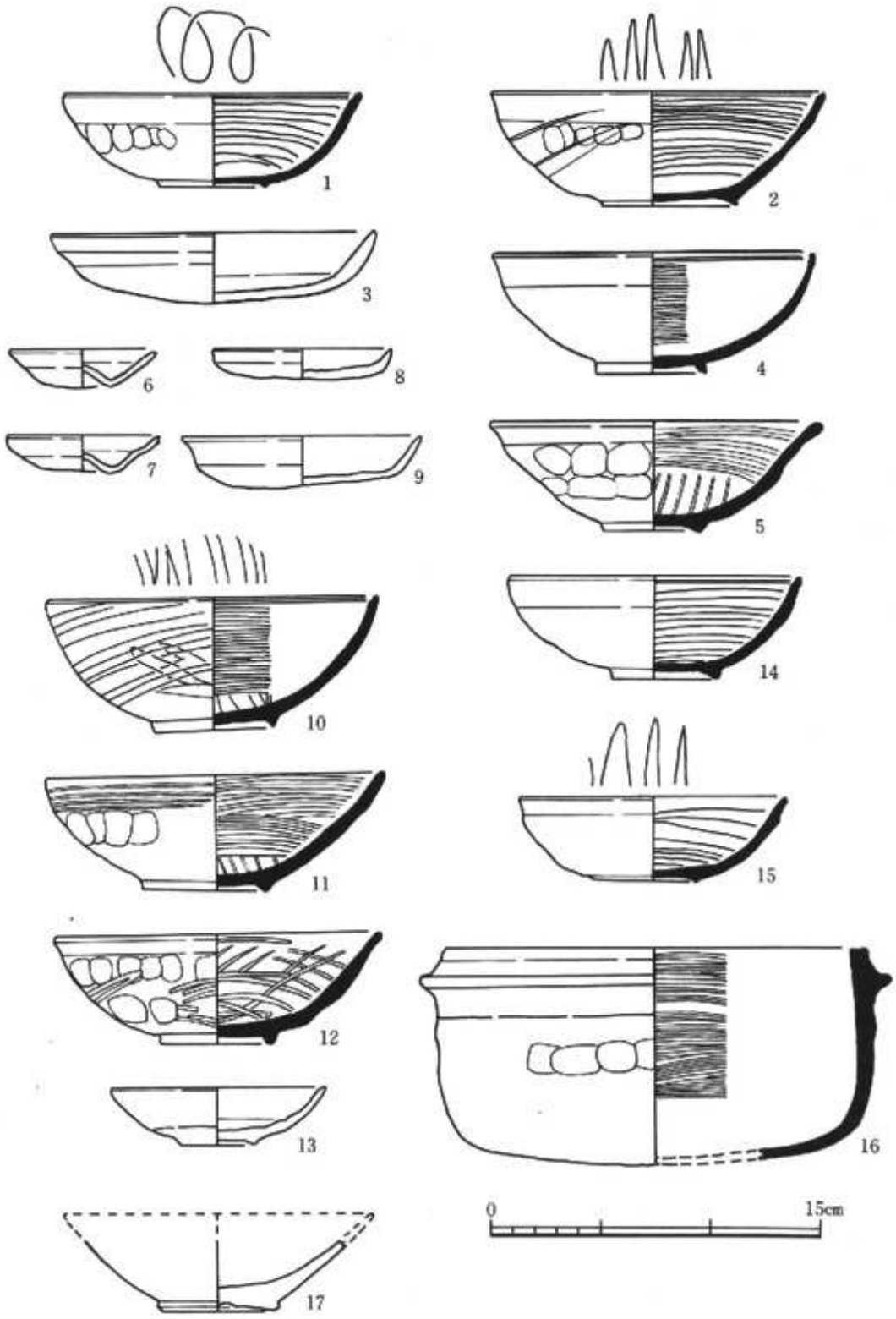
高槻市と茨木市を界する阿武山の南麓に形成された三島地方最大の後期古墳群である塚原古墳群が、英人ゴーランドによって調査されたことは著名である。さらに、古墳群の最も高い位置にある阿武山古墳は昭和9年に調査され、主体部から検出された男子の遺骸は藤原鎌足とする説があり、この古墳群をさらに有名にしている。

古墳群は、その分布状態から10数群に分かれ、総数114基が確認されている。1962年に調査されたB－33号墳は前年に調査された茨木市見付山古墳と石室プラン・墓坑プランが完全に一致する事実が明らかにされている。③このB－33号墳から和泉型の瓦器椀が出土している(5)。

三角形の比較的安定した高台の付く底部から、内弯気味に体部がのび、口縁部は強く横なでをし、外反気味におわる。口縁端内側の沈線は施されていない。外面には暗文は施されず、体部には指圧痕が顕著にみられる。内面は見込みから体部中位にまで達する太い平行線状の暗文を施し、体部上半も太い暗文が渦巻状に施される。器壁は、やや厚く、色調は灰黒色で、胎土は黄灰色でやや粗い。口径15.1cm・器高5.1cm・高台径4.5cm・器高指数34を測る。この椀は高石市 大園遺跡の第3段階に相当する。 高槻市では後述の宮田遺跡や柱本遺跡から多く出土している。

4．上氷室遺跡　　高槻市氷室町一丁目他（挿図第29）

真の継体天皇陵とみられる史跡今城塚古墳の西側一帯は氷室・土室という地名がのこる。こ



挿図第29　塚脇・郡家・塚原古墳群、上氷室・郡家川西遺跡出土遺物

の付近は12世紀頃には石清水八幡宮領の土室庄と考えられ、石清水八幡宮に野菜などを供給していたらしい。

女瀬川改修工事に関連して1975年に発掘調査を行なったところ、柱穴群や大溝を検出した。[5] 遺物の出土量は多くないが、今城塚南東に設定した調査坑から土師器皿Ⅰの完形品が出土している。[6] この他に、今城塚濠内から瓦器椀が出土している。

土師器皿Ⅰ(3)は、口径14.8cm・器高3.2cmを測り、底部は丸味をもち、内湾しながら口縁部につづいている。口縁部には、横なでを端部と口縁下部に二段施している。色調は明橙色で、胎土は精良である。口縁部に二段の横なでを施す土師器皿は平安京内で多く出土しており、京大付属病院内の資料で分類が試みられており、それを参考にすればA－3類に相当し、[7] 高槻市では宮田遺跡に出土例がある。

瓦器椀(4)は付近の民家で所有しているもので、比較的安定した高台の付く底部から、内湾して体部がたちあがり、そのまま口縁部へとつづく。横なでによって口縁部がわずかに外反するが、全体に丸味をもち、器壁は薄く、ていねいなつくりである。器壁表面の風化が著しいため、内外面の暗文は明瞭でない。しかし、体部内面は細い暗文をていねいにつけ外面にもある程度ていねいに施していたらしい。見込みには螺旋状の暗文が施されている。

色調は風化のため灰色を呈し、胎土は灰白色で精良である。口径14.8cm・器高5.5cm・高台径5.1cm・器高指数37.2を測る。

5．郡家川西遺跡（嶋上郡衙跡）　高槻市川西町・清福寺町他（挿図第29、図版第50）

芥川の西岸一帯は、高槻市内でも最も密に遺跡がある地域で、三島地方の古代・中世史を解明するうえで重要な地域である。

この地域には郡家や高津という地名がのこり、摂津国嶋上郡衙の所在を暗示していた。

1965年3月に松下電子工業株式会社の社宅が増築される際に須恵器・土師器・弥生式土器が検出されたので、府立島上高校地歴部が発掘調査したところ溝状遺構と柱穴が検出された。その後、1969年5月に川西小学校北側で北国銀行家族寮の建設に際して奈良時代の掘立柱建物群と木枠組みの井戸が検出された。翌年10月に北国銀行家族寮の南側一帯の宅地造成工事に先立つ調査でも奈良時代の掘立柱建物群・石組井戸等が検出された。特に、井戸底から「上郡」と墨書のある土師器甕が出土し、この地域が嶋上郡衙跡であることが明らかになった。郡衙中心部と推定される約98,000㎡が史跡指定されたが、史跡指定後は指定地の周辺地域造成工事に先立つ調査がつづけられている。[8]

中世関係の遺構としては、指定地東北側の清福之内と字名ののこる18－E地区から住居跡様の小竪穴が7ケ所・掘立柱建物跡と土壙墓らしきもの・井戸が検出された。

指定地の北側の阿久刀神社周辺の遺物包含層から瓦器や青・白磁、備前焼が出土し、郡家本

町付近には中垣内や外垣内など中世的な字名がのこり、中世にはこの地域にも集落があり、郡家古墳群から出土した瓦器椀もこの地域と関係があるものとみられる。

遺物としては瓦器・土師器皿をはじめ中国製磁器・日本製陶器類が出土している。

中国製磁器には、越州窯青磁が含まれている。73年度の調査で7－B地区の遺物包含層から出土したもの(17)で、底部が幅広に削り出された、いわゆる蛇目高台で、高台外面を面取りし、中央部は凹状となる。外底畳付には白色砂が付着している。体部は斜上方に直線的にのび、ていねいに仕上げられている。釉は朽葉色で、薄く内外全面に施され、細かい貫入がみられる。胎土は灰色・精良である。亀井明徳氏の分類では碗A 1類に相当するものであろう。[9]

越州窯青磁は、その分布と出土数から、限られた需要層を想像することができる。近畿地方では平城京・平安京を中心に10か所余りで出土しているが、鳴上郡衙のような地方官衙での出土例は知られていない。1969年の調査で出土した二彩陶片とともに当該遺跡が鳴上郡衙の所在地に当ることを遺物の上からも示唆している。

青磁には龍泉窯系の鎬蓮弁のある碗や香炉などの破片が出土しているが、いずれも細片である。白磁類も細片が多いが、横田・森田氏の分類による碗Ⅳ類の玉縁状口縁が多く出土している。18－J地区の井戸2から出土した皿はⅣ類の1に分類されるもので[10]底部があげ底気味で、内弯気味に体部がたちあがり、口縁部はまっすぐおわっている。体部内面下位には沈線状の段があり、体部下半まで灰白色の釉がかかり、胎土は乳灰色である（13）。

瓦器椀については、概報である程度報告されているので、ここでは目についたものだけを紹介する。18－J地区の井戸2から楠葉型の椀と和泉型の椀が出土している。楠葉型の椀はゆがみのあるもの(10)と整った形態のもの(11)がある。内面にはいずれも、ていねいに暗文が施され、見込みも省略気味の鋸歯文状の暗文が施される。外面には、前者が口縁から体部にかけて細い暗文が施されるのに対し、後者は口縁部のみにやや太目の暗文が施されている。法量は前者が口径15.2cm・器高6.1cm・高台径5.5cm・器高指数40.1を測る。ゆがんでいるため、本来の器高指数は36程度であろう。後者は口径15.4cm・器高5.4cm・高台径5.7cm・器高指数35.7を測る。色調はいずれも黒灰色で、胎土は灰白色精良である。

和泉型の椀(12)は、断面方形の安定した高台が付き、体部は内弯気味にたちあがる。口縁部はまっすぐにおわり、口縁端内側の沈線は施されていない。体部外面には指圧痕が顕著にのこり、部分的に太目の暗文が施される。内面も太目の暗文が無造作に渦巻状に施されている。色調は黒灰色、器壁は楠葉型のものに比べて厚手で、胎土は灰色、やや粗土である。法量は口径15cm・器高5.0cm・高台径5.2cm・器高指数33.3を測る。

18－J地区の南東の28地区から出土している瓦器椀は外面に暗文が無く、終末期に近いものである(14・15)。(14)は口径13.5cm・器高4.7cm・高台径4.9cm・器高指数35.1を測る。(15)は口径12.2

cm・器高3.8cm・高台径5.0cm・器高指数31.1を測り、(14)よりひとまわり小形である。この瓦器椀と同一遺構面から出土している土師器皿は口径11.0cm・器高2.2cmを測り、薄手で口縁が外反気味の皿Ⅰ(9)と口径8.2cm・器高1.3cmの皿Ⅱ(8)がある。

土師器皿にはいわゆるヘソ皿と呼ばれる底部中央部が内側に突出するものがある。18－E地区の井戸から出土しており、口径約7cm・器高1.6～1.7cmを測る（6・7)。

18－J地区からは瓦器の羽釜(16)が出土している。復元口径約19cm・器高11cmで、幅約1cmの鍔が付き、口縁は短かくまっすぐにたちあがる。外面には指圧痕がのこり、全面に煤が付着する。内面は細かい刷毛目を施して仕上げている。

6．宮田遺跡　高槻市宮田町（挿図第30～32　図版第51・52・54・55)

宮田遺跡は今城塚古墳の南にあり、女瀬川が急に南へ流れを変える屈曲点の西側一帯の微高地上にある。女瀬川を挟んで東側一帯には奈良時代から平安時代前期にかけての集落である郡家今城遺跡がある。

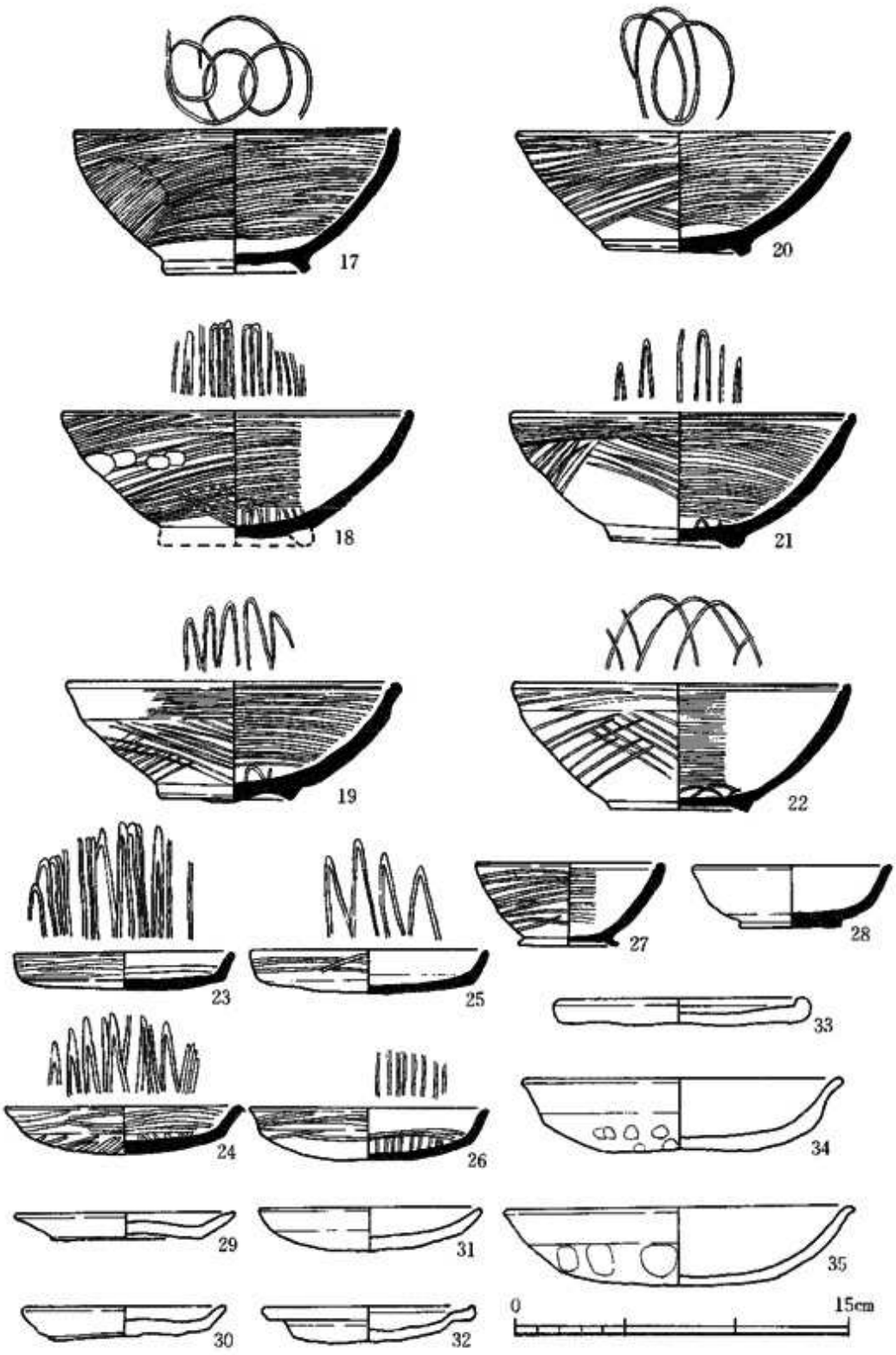
1971年6月から数次にわたる調査の結果、東西南北に走る溝等によって区画された建物群とそれに付属する井戸や墓が検出された。[11]

建物群はA・B・Cの三区画に分けられる。A区は敷地の三方を溝によって区画され、北は女瀬川の支流によって画されていて約120坪である。B・C区はそれぞれ柵で両分され60坪前後である。いずれも2回以上の建替がみられる。A区では、はじめ母屋と2棟の付属建物と井戸1基があり、のち廂を付けた母屋と4棟の建物、柵外の一棟と井戸の掘替がおこなわれた。他の地区でも同様の建替や掘替がみられる。各区画ごとに井戸はあるが、倉はC区のみに1棟あるだけである。この区画された建物群の西側、すなわち春日神社の南側調査地区では幅広の溝状遺構が検出されている。この神社南地区の溝状遺構内からは瓦器椀・皿の初源形態を示す資料とそれに共伴する土師器皿が出土している。

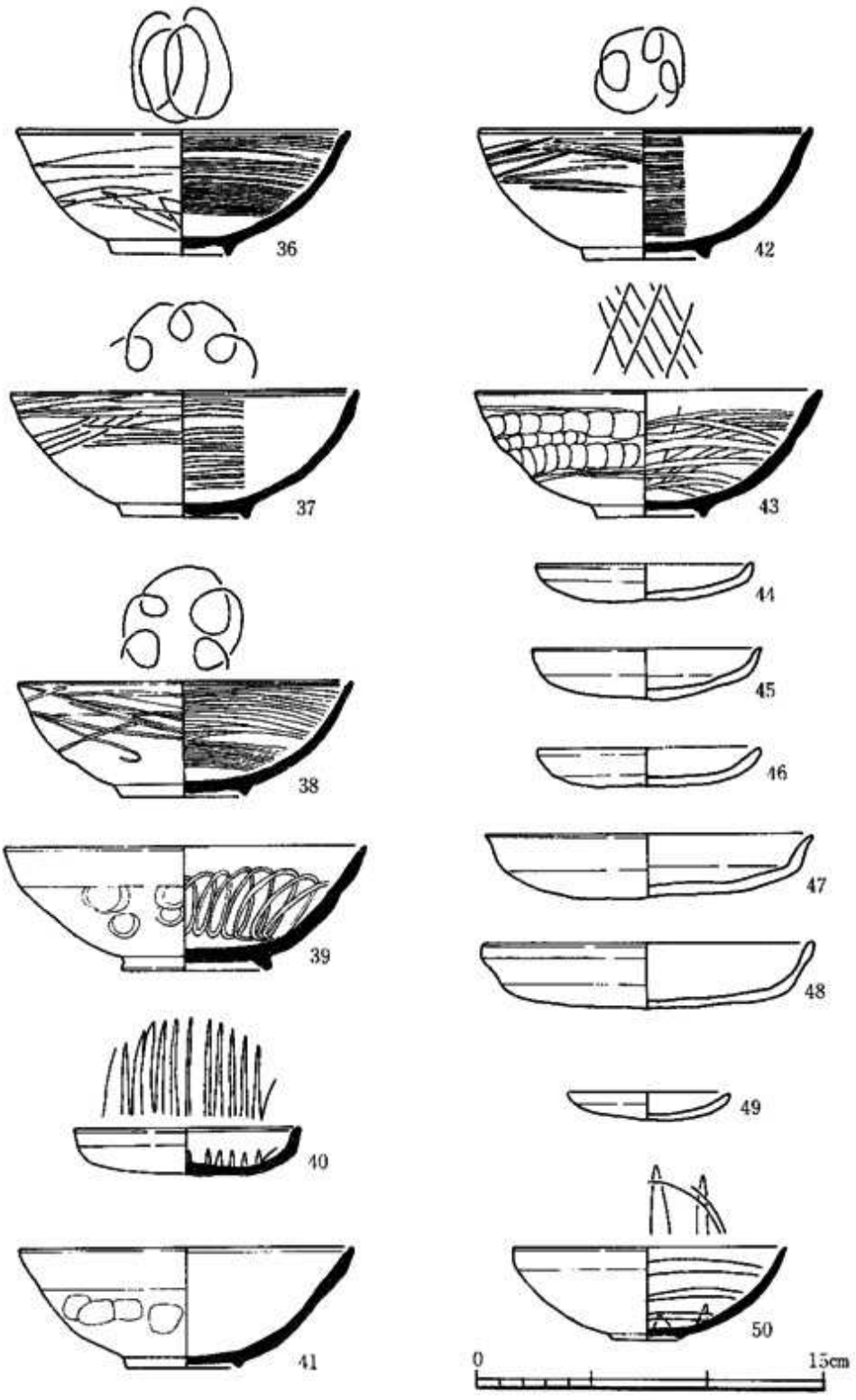
瓦器椀(19～22)は口径15～16cm・器高5.3～5.8cm・高台径6cm以上・器高指数34～37を測る。いずれも、分厚い断面方形の高台が付く。底部から内弯気味に体部がのび、口縁部はほぼまっすぐにおわっている。外面は口縁端を横なでし、太目の暗文が口縁部から体部下半にまで施されている。暗文の間隔が若干あくものと、密なものがある。内面は見込みの暗文では鋸歯状のものと螺旋状のものがある。側面は密にレコード圏線状に暗文が施される。色調は漆黒色あるいは黒灰色を呈し、器壁は厚く、胎土は灰白色でやや粗さが認められる。この神社南地区の溝状遺構から出土した瓦器椀では、口縁端内側に沈線を施したものは全体の90.3%である。[12]

瓦器の小椀が出土しているが、暗文等の手法は椀と同様で口径8.4cm・器高3.6cm・高台径4.5cm・器高指数42.9を測る(27)。

瓦器皿には二つの形態がある。底部が平坦で、口縁が斜上方にまっすぐのびるもの(25)と



挿図第30　宮尻遺跡出土遺物(1)



挿図第37　宮田遺跡出土遺物(2)

底部が丸味をもち、口縁が外反気味のもの(26)がある。いずれも口縁外面に太目の暗文を施し、内面にも鋸歯状の暗文が施されている。この瓦器皿と同じ形態で、胎土が黒色である黒色土器の皿が神社南地区の溝状遺構から出土している。底部が平坦なもの(23)と底部が丸味のあるもの(24)があり、瓦器皿よりていねいに暗文が施されている。瓦器皿・黒色土器ともに法量は口径10cm以上・器高2cm前後である。

土師器皿は口径10cm前後の皿Ⅱと口径15cm前後の皿Ⅰがある。皿Ⅱにはやや丸味のある底部からまっすぐ口縁部がのびるb(31)と口縁が屈曲肥厚するa(32)がある。底部が糸切りのもの(29)とヘラ切りのもの(30)も含まれている。この他に受け皿状のc(33)が含まれている。それぞれの割合はaが68.48％、bが25.15％、底部がヘラ切りのもの6.11％、底部が糸切りのもの0.21％、受け皿状のcは0.05％である。

皿Ⅰは底部が丸味をもち、内弯気味に体部がのび[13]、口縁部が若干外反気味である(34・35)。いずれも器高が3cm以上を測り、体部に指圧痕がのこる。土師器皿はいずれも明橙色あるいはやや黄灰色気味の明橙色で、胎土は精良で、焼成は良好である。

瓦器・土師器とともに須恵器の小椀(28)が出土している。口径9.0cm・器高2.8cmを測り、底部は糸切りである。口縁端には重ね焼の痕跡がのこり、黒色化している。神戸市神出古窯で生産されたものである。

神社南地区の溝状遺構[14]内からは中国製磁器も出土している。総数40点足らずであるが、すべて白磁である。碗ではⅡ類が56％、Ⅳ類が41％、Ⅴ類が3％となっている。

神社南地区出土の瓦器椀より古い形態を示す資料(17)が東区の建物群付近から出土しているので紹介する。外方に張り出す断面方形の安定した高台の付く底部から内弯気味に体部がのび、口縁部は直立気味となっている。外面は口縁から底部まで密な暗文が施され、指圧痕や口縁部の横なではほとんどわからない。内面にも密な暗文が施され、見込は螺旋状の暗文が施される。暗文の幅は太く2mm程度を測る。口径14.8cm・器高6.4cm・高台径6.8cm・器高指数43.2を測る。形態は稲垣氏のいう第3期黒色土器に類似している。もう一点、古い形態を示すもの(18)は、(17)より暗文の施し方が若干雑になっている。神社南地区出土のものに比べると暗文の施し方はていねいである。いずれも色調は漆黒色で、器壁は厚く、胎土は黄灰色気味でやや粗さが目立つ。土師器皿等の共伴関係は明確でない。[15]

建物群の北を画する溝内からは、神社南地区から出土している瓦器椀と同じものが出土し、同時に器壁がやや薄く、内外面の暗文が細くなる傾向の瓦器椀(36～38)が出土している。断面三角形で細目の高台が付き、体部は丸味をもって口縁部へつづく。外面の暗文は口縁部から体部中位にかけて施され、内面はやや間隔のあく暗文が施される。見込みは、中央部に螺旋状のものと、見込み周囲に連結輪状のものが施される。口径は14.5～15cm・器高約5cm・高台径

5～5.5cm・器高指数は35～37程度である。色調は黒灰色、あるいは銀黒色である。この建物群北の溝内からは和泉型の瓦器椀が出土している。(39)は一例であるが、口縁端内側の沈線は無く、口径が大きく、体部外面には暗文が施されず、指圧痕が目立つ。内側の体部には螺旋状の暗文が施されている。器壁は厚く、色調は灰色で胎土は粗い。この他に暗文が無造作に施され、口縁端内側の沈線がなく、外面に指圧痕が目立つものがある。和泉型はこの溝の瓦器椀全体の42%を占めている。[36]

瓦器皿は口径10.0cm・器高2.0cmで見込みにていねいな鋸歯状の暗文が施される（40)。

建物群北の溝内の一区画（D区）から出土した中国製磁器は、白磁が88.8%を占め、青磁は11.2%である。白磁では碗Ⅱ類が少なく、Ⅳ類（52）が最も多く、ついでⅤ・Ⅷ類とつづく。青磁では同安窯系碗Ⅰ類・同皿Ⅰ類、龍泉窯系碗Ⅰ類である。

建物群西の方形土坑からは楠葉型の瓦器椀と和泉型の瓦器椀、土師器皿、中国製磁器の一括資料を得ている。

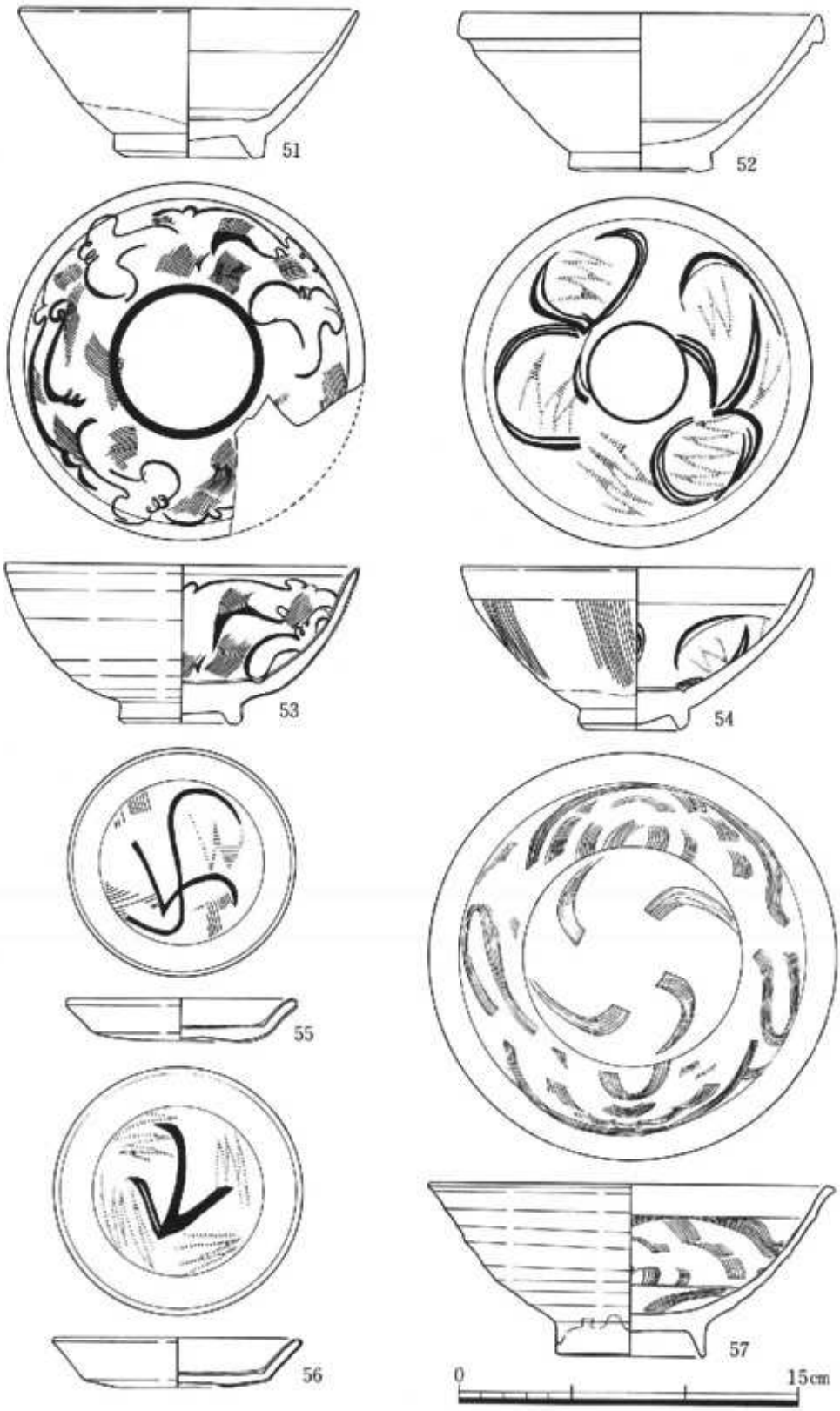
瓦器椀は建物群北の溝内から出土しているものと同じであるが、和泉型のものは見込みに細い格子暗文を施し、側面には太い暗文を無雑作に渦巻状に施し、外面には指圧痕が多くのこる。土師器皿は、皿Ⅱ（44～46）では口径9.5～10cm・器高1.5～2cm程度で、口縁部はまっすぐおわる。皿Ⅰ(47・48)では、ほぼ同じ法量であるが、口縁が外反気味にまっすぐおわるものと、口縁端とその下位を二段になでているものがある。後者は平安京内で出土するものであり、上氷室遺跡でも出土している。中国製磁器(51)は白磁碗Ⅷ類で、分厚い削り出し高台からまっすぐ斜上方に体部・口縁部がのび、口縁部は薄く、まっすぐおわっている。見込みは釉を輪状にかき取っている。釉は青味がかった灰白色で体部下半まで施されている。胎土は白色で、やや粗さがある。法量は口径15.0cm・器高6.6cm・高台径6.7cmである。

終末期の瓦器椀と土師器の一括資料が、井戸から出土している。瓦器椀（50）は簡単な高台の付く底部から内弯気味に体部がのび、口縁部はまっすぐおわる。口縁端内側の沈線は施されず、内面の暗文は渦巻状に数条が、見込みには簡単な鋸歯状の暗文が施される。しかし、外面には暗文が施されない。器壁は薄く、胎土は灰白色・精良である。法量は口径11.8cm・器高3.9cm・高台径3.2cm・器高指数33を測る。土師器皿Ⅱ(49)は口径7.0cm・器高1.2cmである。

次に、77年度の調査で、中国製青磁と瓦器椀が一括して出土した資料を紹介する。建物群の西南方を調査したところ、一定の区画のある建物群や井戸などが検出されたが、整地層の除去作業中に検出したものである。[37]

遺構としては明確に確かめられなかったが、土壙墓に副葬されていた可能性もある。

検出されたものは龍泉窯系青磁碗と同安窯系青磁碗が一個ずつと同安窯系青磁皿が2個、それに瓦器椀が1個である。



挿図第32　宮田遺跡・富田遺跡出土中国製青磁・白磁

龍泉窯系青磁碗(53)は厚い底部から内弯気味に体部がたちあがり、口縁部はやや外反気味におわる。高台は断面方形で高台部畳付およびその内部は露胎である。内面はヘラの片彫による花文を3個、その周囲に櫛描文を配置している。釉は青灰色をおびた緑色で、全体に薄く施されている。胎土は灰色で精良である。口径は15.7cm・器高7.0cm・高台径5.5cmを測る。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類－3に分類される。口縁端部の一部が欠失しているが、ほぼ完形品であり、関西地方では報告例がない。同安窯系青磁(54)は、外面中央部が削り残された底部から内弯気味に体部がたちあがり、口縁部はやや内側に屈曲する。体部外面には縦方向の櫛描文を施し、内面にはヘラの片彫と櫛描によるジグザグ文が施されている。また、口縁下約1.5cmに細い沈線を一条施している。釉は黄緑のガラス質で体部下半まで施され、全面に貫入がみられる。胎土は灰白色で、精良である。口径15.6cm・器高7.2cm・高台径4.9cmを測る。同安窯系青磁碗Ⅰ類－1－bに分類される。

同安窯系青磁皿(55・56)はいずれもヘラの片彫と櫛によるジグザグ文を内面に施している。底部はあげ底気味で、体部と底部の境に段がある。口縁は外反気味にまっすぐおわっている。釉調・胎土は碗と同様で、底部外面には施されない。(55)は口径11.0cm・器高2.2cm、(56)は口径10.2cm・器高1.9cmを測る。同安窯系青磁皿Ⅰ類－1－bに分類される。

瓦器椀(41)は口径14.5cm・器高5.1cm・高台径5.0cm・器高指数35.2を測る。内外面とも磨耗が著しく、暗文の状態は不明である。器壁は薄く、高台も断面三角形で、粘土ひもをまきつけたことがよくわかり、粗雑感がある。口縁部と体部と境には指圧痕がのこり、ややゆがんだ形態となる。

7．津之江南遺跡　　高槻市津之江北町（挿図第33、図版第50）

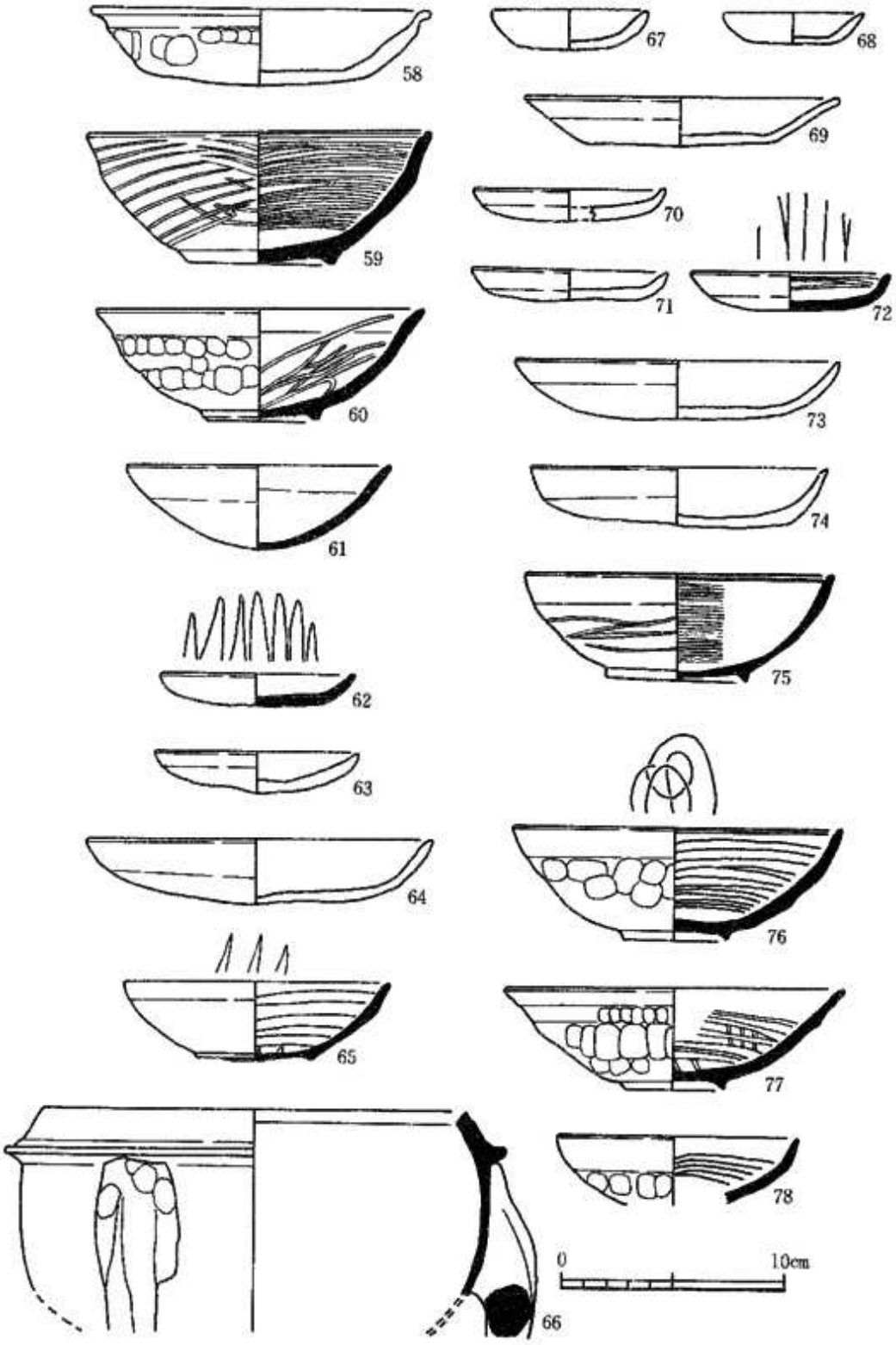
津之江南遺跡は嶋上郡衙跡の南約1kmにあり、北を国鉄東海道線と南を阪急京都線に接し、芥川と女瀬川にはさまれた低位段丘上に位置する。遺跡は1972年に発掘調査が実施され、国府型のナイフ形石器が出土して注目された。遺構・遺物は旧石器時代から鎌倉時代にわたっている。

宮田遺跡神社南地区から出土した瓦器椀・土師器皿と同じものが土壙墓から出土している。瓦器椀(59)は、断面方形の安定した高台のつく底部から、内弯気味に体部がのび、口縁部は横なでによって直立気味である。体部内外面は太目の暗文がていねいに施され、見込みはやや雑な鋸歯状である。法量は口径15.6cm・器高5.9cm・高台径6.6cm・器高指数37.8を測る。

土師器皿(58)は口径15.2cm・器高3.2cmを測り、丸味のある底部から直線的に体部がのび、口縁部は外面を強く横なでし、端部は外反気味である。口縁部の下位から体部にかけて指圧痕が顕著である。器壁は厚く、色調は明褐色で胎土は精良である。

津之江南遺跡付近は15世紀中頃には妙法院領であり、12世紀中頃に後白河院領として立庄さ

れた荘園であったらしく、出土している遺物とこれらの史実の関連が今後の課題である。



挿図第33　津之江南・高田・天神山・天川・前島遺跡・芥川城跡出土遺物

8．富田遺跡　富田町4丁目他（挿図第32～33、図版第50・54）

富田遺跡は高槻市の西部、富田台地上にある。この付近は、中・近世には商業が盛んであり、古寺・旧蹟等が多くのこっている。普門寺もその一つであるが、旧境内の富田小学校跡地に公営住宅の建設が予定されたため、遺構確認調査を実施したところ、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を確認した。このため、1976年に発掘調査を実施したところ、全域から鎌倉時代の建物群が検出された。建物群はそれぞれ東西南北に走る溝によって区画された敷地内に存在する。建物群は3群に大別され、中央部に倉庫群が存在する。[19]

出土遺物は比較的少量であるが、中国製磁器・瓦器・土師器が出土している。

中国製磁器には、白磁碗の完形品がある(57)。細く、高い削り出し高台から若干内弯気味に体部がたちあがり、口縁部を外反させ、端部は水平にしている。胎土は精白色で、器壁は薄く、水ひき痕がのこる。釉は灰白色で薄く、高台付近まで施される。内面は口縁下と見込みに浅く沈線をめぐらし、櫛で花文を描いている。口径17.8cm・器高7.6cm・高台径6.6cmを測る。白磁碗Ⅴ類－4－bに分類される。

瓦器碗は和泉型(60)と終末期の楠葉型(61)がある。前者は口径14.8cm・器高5.0cm・高台径5.4cm・器高指数33.8を測る。断面方形の比較的安定した高台のつく底部から、内弯気味にたちあがる体部の外面には、指圧痕がのこり、とくに体部と口縁部の境には細かい指圧痕がのこる。内面は太い暗文が無造作に施されている。口縁部は強く横なでされ、外反する。色調は灰黒色で、胎土は灰色で粗い。後者は底部が尖底状で高台は付かない。器壁は薄く、胎土も精良であるが、炭素の吸着は口縁部にわずかにみられるにすぎず、暗文は内外ともまったく施されていない。口径12.0cm・器高3.8cm・器高指数31.7を測る。

瓦器皿(62)は口径8.8cm・器高1.8cmを測り、見込みに鋸歯状の暗文がていねいに施されている。

土師器皿Ⅰ(64)は瓦器椀(60)とともに出土するもので、口径15.8cm・器高3cmを測り、若干丸味のある底部から斜上方に口縁部がのびている。皿Ⅱ(65)は口径9.2cm・器高1.9cmを測る。内面は指圧痕をなでて、ていねいに消している。

この他に、中国製磁器では明代の碗の破片や口縁端が口秀になった白磁皿（Ⅸ－1）の破片などがある。

富田は史料では応和元（961）年、藤原師輔から天台宗門跡妙香院に処分されているのをはじめ、南北朝期には大炊寮領富田御稲田として記録にのこる。15世紀には、一部が烏丸家領として、また禁裡御服料所となっており、中世には中央官衙領としての性格が見受けられる。[20]検出された建物群や遺物とこれらの記録についての検討が今後の課題である。

9．伝芥川城跡　高槻市殿町（挿図第33）

旧西国街道芥川宿の北側にある専売公社高槻工場の東で、西国街道が大きく南に曲がっている。これは、この地域に正平年中（1346～1349）に芥川氏が初めて築いた芥川城の城郭に影響されたためと考えられている。この芥川城は応仁の乱以後の戦乱にまきこまれ、この地域が戦略上重要な地であることから幾度となく戦国武将によって争奪がくり返された。織田信長が政権をほぼ手中にした元亀元（1570）年7月に高槻を支配していた和田惟政が白井河原の戦に敗れて以後、芥川城についての記録は無くなる。

専売公社のすぐ西隣を1977年に調査したところ、柱穴や土壙が検出された。遺物は中・近世陶磁器をまじえて瓦器、土師器が出土している。

瓦器椀は完形に復せるものは少量であるが図示したもの(165)が上である。断面三角形の細い高台が付き、体部下位から見込みにかけて細い暗文がうず巻状に施されている。器壁は薄く、胎土は灰白色で精良である。口径12.0cm・器高3.6cm・高台径5.0cm・器高指数30を測る。羽釜(66)は瓦質の三脚の付く足釜である。短かい口縁が内傾し、1cm弱の鍔がつく。口径は19.6cmを測り、比較的小形である。

中国製磁器は明代のものを含む白磁・青磁が出土している。また、備前Ⅵa、Ⅵb期の擂鉢や第4段階の瀬戸灰釉平碗などがみられる。

10. 上田部遺跡　　高槻市桃園町

高槻市役所新庁舎建設に先立って、予定地内に遺構確認の試掘坑を設けたところ、奈良時代の土器と水路様の溝を検出した。このため、1969年5月に発掘調査を実施したところ奈良時代と推定される水田址とその北側に掘立柱建物、井戸を検出した。水田址から奈良時代の土器をはじめ各種の木製品、奈良時代の班田資料の欠を補う木簡等が検出された。

この調査時に庁舎建設予定地の西北部に設けた試掘坑から、性格不明の石敷にまじって瓦器片を検出したが、1970年の島上高校の火災で焼失してしまった。なお、瓦器片は楕葉型のものである。

11. 天神山遺跡　　高槻市天神町（挿図第33、図版第50）

北摂の山塊から高槻市の中央部に突出する天神山丘陵上には、戦後関西ではじめて弥生時代の集落址として調査された天神山遺跡があり、銅鐸の出土地としても有名である。遺跡の調査は1955年と1957年に実施された。その結果、7基の竪穴式住居跡や方形周溝墓が検出された。この調査で出土した遺物の中に楠葉型の瓦器椀破片が含まれている。

天神山丘陵の南東麓にある景神車塚古墳の調査を1977年に実施したところ、土師器皿や備前・丹波焼が出土した。大皿(69)は平坦な底部から直線的に口縁部がたちあがり、口縁部は軽く横なでし、若干外反気味である。体部内面はていねいになでて仕上げ、見込み周縁に圏線を生じる。口径は14.4cm・器高2.2cmを測る。色調は明褐色で、胎土は精良である。小皿(67・68)

は手捏ねの小形品で、口径6～7cm・器高2cm弱、やや粗い胎土である。大皿は京都に多くの出土例があり、山科寺内町遺跡の例から16世紀前半の年代が考えられている。小皿は江戸時代後期と考えられている。

12. 安満遺跡　高槻市高垣町他（挿図第34～35、図版第50）

高槻市の北部の山中に源を発する桧尾川が成合の谷間を抜けて安満山の麓で流れを東方に大きく変える地域の西方に安満遺跡がある。昭和3年、京都大学農学部付属摂津農場の開設に際して発見され、弥生文化研究上記念すべき遺跡として知られている。[24]

弥生時代の遺構は桧尾川が形成した小扇状地上に立地しており、1968年の調査では弥生時代前期の集落を囲むと推定される2条の溝が検出されている。桧尾川のすぐ右岸にあたる高垣町一帯は桧尾川の氾濫原であるが、この地域からは弥生時代の方形周溝墓群をはじめ、古代・中世の集落跡の存在が確認されている。とくに、1972年に調査を実施した地域からは多数の掘立柱建物跡と27基の井戸が検出されている。高垣町周辺では小規模な宅地開発が継続しており、そのたび毎に調査を実施しているが、これまでの調査を総合すると古代・中世関係の遺構は、桧尾川右岸の東西400m・南北200mの範囲から検出され、建物群は数ブロックに分かれる。[25]

遺物は瓦器、土師器皿が主であるが、中国製陶磁器類、日本製陶器類も出土している。1972年に調査を実施した地区については報告書を刊行しているので、その後の資料を中心にして紹介したい。瓦器椀は古い段階から終末段階のものまで出土している。古い段階のものは、宮出遺跡神社南地区溝内から出土しているものと同一のもの(93)が12号井戸から出土している。口径は15.0cm・器高6.1cm・高台径6.8cm・器高指数40.7を測る。23号井戸からはやや時期が新しくなるもの(95)も出土している。器高が低く、外面の暗文が省略気味で、見込みは螺旋状となっている。口径15.4cm・器高5.5cm・高台径6.0cm・器高指数35.7を測る。1号井戸からはやや器高指数が大きいが、(95)とほぼ同時期とみられるもの(94)が出土している。口径14.9cm器高5.5cm・高台径5.1cm・器高指数37.2を測る。(95)より高台が小さくなっているが、内外面の暗文の施し方・色調も同じである。

外面に暗文が施されなくなり、内面の暗文も細く省略されたものになった段階のもの（98～100)が、10号・11号・16号井戸から出土している。高台径がいずれも5cm以下で断面三角形の細いもの(99・100)や扁平なもの(98)がある。いずれも口縁端内側の沈線は施されず、見込みの暗文は鋸歯状、螺旋状のものが省略されたものである。器壁は薄く、胎土は灰白色・精良である。(98)の法量は口径12.6cm・器高4.0cm・高台径4.7cm・器高指数31.7、(99)は口径14.4cm・器高4.5cm・高台径4.3cm・器高指数31.3、(100)は口径13.2cm・器高4.2cm・高台径4.8cm・器高指数31.8を測る。終末段階の瓦器椀は11号・12号井戸から出土している（96・97)。法量はいずれも口径12.0cm・器高4.0cm、器高指数33.3を測り、高台は付けられず、底部には薄い粘土紐

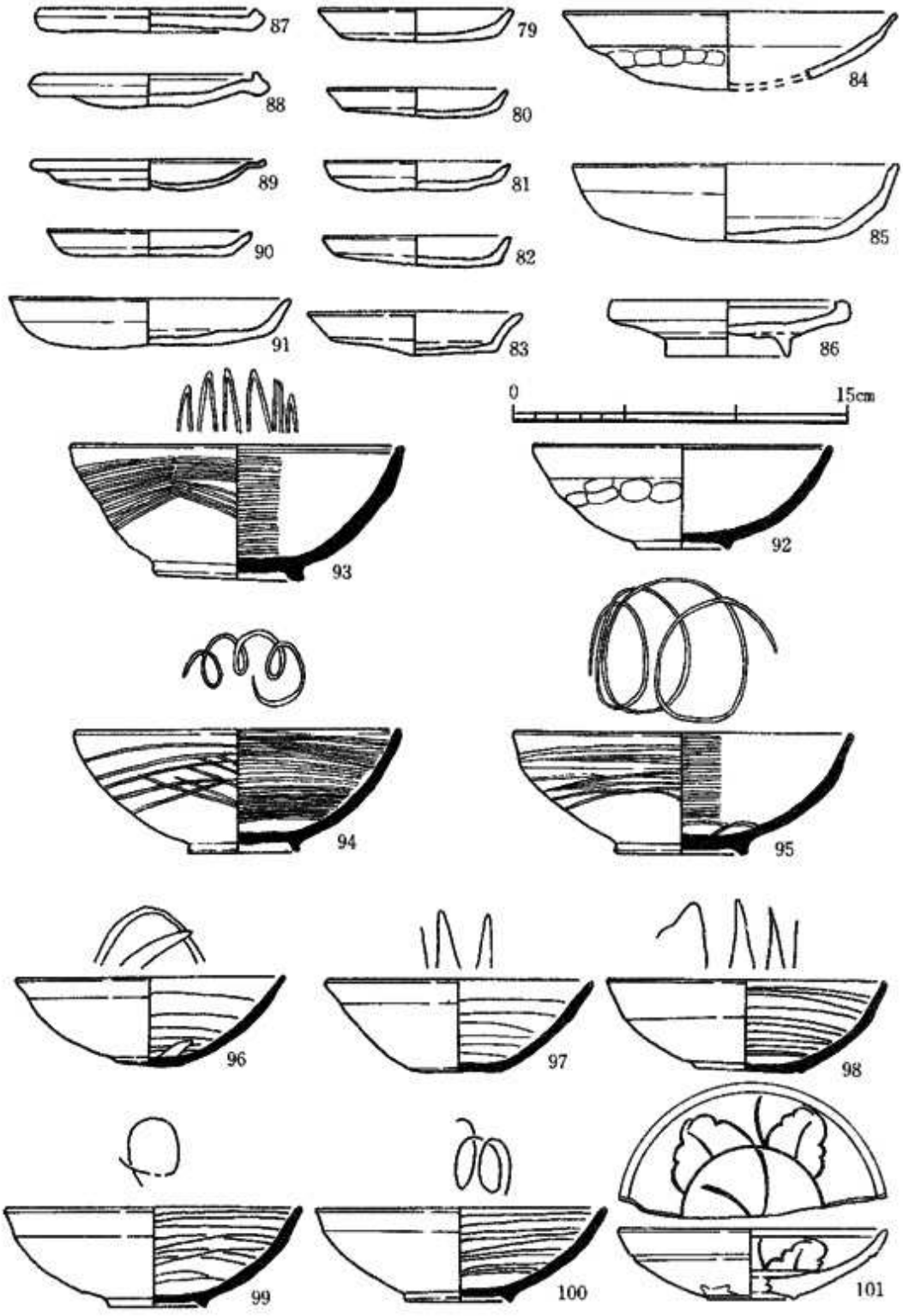
をとり付けている。底部がやや尖底気味のものと平底となっているものがある。暗文は内面のみで、体部に数条の渦巻状のものが、見込みには簡単な鋸歯状のものが施される。いずれも炭素の吸着が不十分で、灰色の素地が露出している。胎土は精良・灰色で器壁は薄い。

土師器皿は皿Ⅰが12号・23号井戸から、皿Ⅱが11・12・16号井戸から出土しており、瓦器椀との関係がつかめる。ただ、12号井戸については瓦器椀が古い段階のものと新しい段階のものが混じっている。もっとも混入の無いものとみられる16号井戸では、皿Ⅱは口径8.2～8.8cm・器高1.2～1.4cmを測り、器壁は薄く、口縁は斜上方にまっすぐにおわっている（79・80）。11号井戸から出土したものも、ほぼ同様である。12号井戸出土の皿Ⅱ(83)は口径9.6cm・器高1.9cmで、口縁が大きく外反している。皿Ⅰでは、12号井戸出土のもの(84)は丸味のある底部からゆるく内弯した体部がのび、口縁は若干外反気味となり、宮田遺跡神社南地区溝出土の皿Ⅰとよく似た特徴をもつ。23号井戸出土のもの(85)は口径14.7cm・器高3.5cmを測る。器壁は厚く平坦な底部から体部が斜上方にのび、口縁部は上方にのびる。(86～89)は77年度調査分のものである。(86)は受け皿状の上部に細い高台が付くもので、口径11.0cm・器高2.5cmを測る。(87～89)は同一の柱穴から出土したもので、受け皿状のもの(87)と口縁が大きく屈曲するもの(88)、口縁は屈曲するが器壁が全体に薄いもの(89)がある。白磁皿(101)は(86)と同じ柱穴から出土しているもので、底部に削り出しの簡単な高台が付き、体部は若干内弯気味で、内面には花文が描かれている。白磁皿Ⅷ－1－bに分類される。

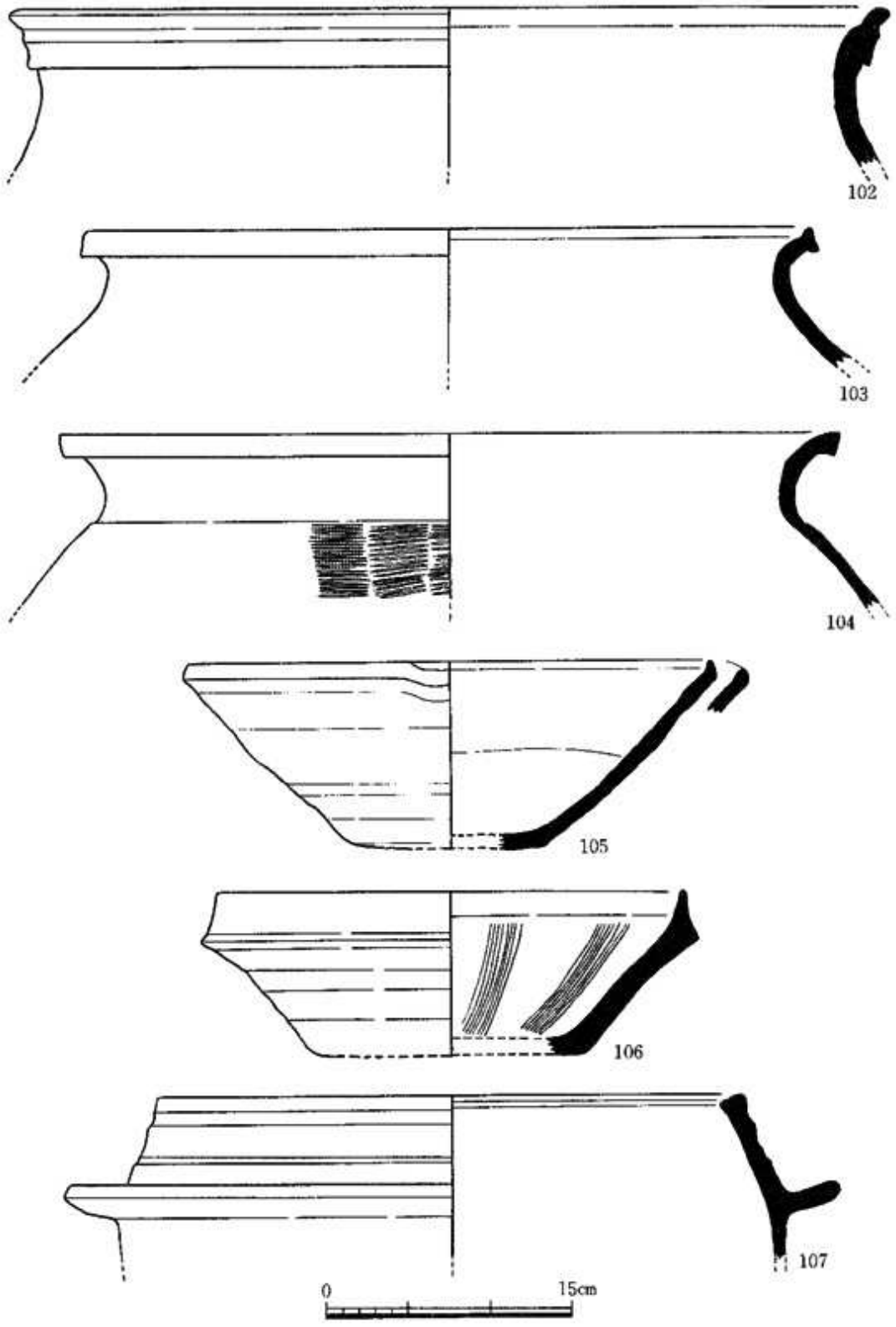
日本製陶器としては4号井戸から常滑焼第Ⅳ期の大甕口縁部(102)が出土している。口縁部をいわゆるN字状に折り返したもので、口径54.0cmを測る。11号井戸からは常滑焼第Ⅲ期の大甕口縁部と須恵器の甕・鉢が出土している。常滑焼大甕(103)は口縁々帯が幅広で上方につまみあげた様になっている。(102)・(103)とも色調は赤褐色で、焼成は堅緻である。(103)は口径45.0cmを測る。須恵器の甕(104)は口縁がゆるく「く」の字形に外反し、口縁部をやや幅広にしている。肩部以下は横方向の細かいタタキ目が施されている。焼成はあまく、灰白色で瓦質に近い。鉢(105)は口縁部がやや肥厚し、上方にわずかにのびている。焼成はあまく灰色である。内面の下半は使用痕が顕著である。底部には糸切り痕がのこる。口径32.0cm・器高11.5cmを測る。兵庫県明石市魚住古窯の製品である。[20]

13. 梶原寺跡　　高槻市梶原一丁目（挿図第34～35）

梶原寺は天平勝宝9(757)年の正倉院文書に、四天王寺とともに東大寺大仏殿歩廊用の屋瓦を提供したことが記録としてのこっている。位置は国鉄高槻駅から西国街道を東へ約2kmのところで、西国街道筋の北側にある畑山神社周辺がその跡であると推定されてきた。神社本殿裏の竹藪には瓦窯があり、周辺からは百済様式の飛鳥時代の軒丸瓦の破片をはじめ奈良時代の瓦類が採集されている。



挿図第34　興福寺跡・安満遺跡出土遺物



挿図第35　安満・大川遺跡・尾原寺跡出土遺物

伽藍配置等を知る手がかりがまったく無く、これまで実態については不明であったが、1977年に畑山神社東側に私立保育所が建設されることになったため発掘調査を実施したところ、奈良時代の梶原寺と関連するらしい遺構として2間×7間以上の建物が検出された。この奈良時代の上層から1間×8間以上の礎石を有する建物1棟と1間×2間の掘立柱建物2棟、石積みの井戸2基と、それに関連する土坑、土坑墓14基が検出された。また、部分的であるが基壇状の高まりの周囲に石を配列した状態のものも検出されている。記録によると、梶原寺は室町末期には無かったことが知られているため、梶原寺廃滅後の遺構とみられる。

出土遺物の大半は瓦類で占められていたが、柱穴内から土師器皿、瓦器椀が若干出土している。土師器皿は口径12.8cm・器高2.1cmを測る皿Ⅰ(91)と口径9.2cm・器高1.1cmを測る皿Ⅱ(90)がある。いずれも明るい乳褐色で、胎土は精良である。

瓦器椀（92）は口径13.4cm・器高4.6cm・高台径4.2cm・器高指数34.3を測る。内弯気味の体部から口縁部となり、口縁は軽く横なでしている。内外面の暗文は器壁の風化が著しいため不明であるが、見込みは同心円状、内面体部は間隔のあく渦巻状であろう。

土坑から備前のⅣa期の擂鉢(106）が出土している。口縁部を上下に幅広くつくったもので、内面の斜面には櫛描条線が放射状につけられている。内面は青灰色気味であるが、外面は青紫色で硬く焼き締められている。よく使用されており、内面の中位から下は条線も磨滅している。この他に龍泉窯系の青磁破片も若干出土している。

14. 上牧遺跡　　高槻市上牧五丁目他　　本報告書に掲載

15. 天川遺跡　　高槻市須賀町（挿図第33・35）

松尾川が淀川と合流する前島の西方約0.5kmに位置する遺跡である。従来は高槻市南部特有の水田地帯であったが、この地域も1965年頃から宅地開発が活発となった。1974年の12月に北大冠水路の西岸に自転車道が設置されることになり、擁壁部分を掘さくしたところ瓦器や土師器が検出された。このため、緊急に発掘調査を実施した。

調査は幅2.5m・長さ80mの擁壁部分の断面観察を中心に行った。断面観察では耕土(0.25m)・黄灰色土（0.4m）・灰褐色土（0.1m）・褐色土層（0.6m）・青灰色粘土と堆積しており、いずれの層からも遺構は検出されなかった。遺物は排土中から採集したものが主であるが、褐色土層から出土したらしく瓦器、土師器、白磁等が出土している。

土師器は口径9cm前後、器高1.5cm前後の皿Ⅱ（70・71）と口径14cm前後、器高2.6cmの皿Ⅰ（73・74）がある。

瓦器皿（72）は土師器小皿とほぼ同じ法量であるが、やや丸味をもつ。

瓦器椀には丸味があり、体部にわずかに暗文が施されているもの（75）と口径がやや大きく外面に暗文の施されないもの（76）がある。

内面の暗文は(75)では密であり、(76)では間隔があいている。法量は(75)が口径14.0cm・器高4.8cm・高台径6.2cm・器高指数34.3を測る。(76)は口径15.0cm・器高5.0cm・高台径4.7cm・器高指数33.3を測る。瓦器の羽釜(107)は口径36.0cmを測り、幅約4cmの鍔が付く。内傾気味の口縁外面には、凹線状の段がつき、内面はていねいになでて仕上げている。

出土遺物の数量処理をしたところ、土師器小皿では口径9.0～9.5cmを測るものが82.3%を占める。瓦器椀では口径14.0～14.5cmを測るものが70%を占めた。見込みの暗文は76の同心円状のものが64.7%、見込みの周囲に螺旋状・鋸歯状の暗文を施すものがそれぞれ17.65%である。また、口縁端内側に沈線を施すものは69%である。白磁は水注の破片が一点出土している。

16. 中寺遺跡　　高槻市辻子一丁目

1929年1月に辻子と中小路間の道路拡張用の土砂を採集するため、大字辻子中寺で水田を掘さく中、地下約1.5mから瓦器椀・土師器皿が数十個出土したことが、1月24日付の朝日新聞に写真入りで報道されている。写真によると、瓦器椀の内面暗文は、体部では比較的間隔があき、見込みは螺旋状である。

天川遺跡の遺物と良く類似し、遺物出土地が天川遺跡の南約200mに位置するので、天川遺跡と一体であるかもしれない。

17. 前島遺跡　　高槻市前島3丁目地先（挿図第33）

桧尾川が淀川に合流する前島地先の淀川河床の浚渫工事の土砂採集中に若干の遺物が採集されている。1977年末に採集された遺物中に和泉型と楠葉型の瓦器椀がある。

和泉型の椀(77)は底部から斜上方に直線的に体部がのび、口縁部は外反している。外面は口縁下を幅狭く横になでるが、横なでの下には細かい指先の圧痕が横一段、さらに、その下部には大きな指圧痕がみられ、器壁には凹凸が著しい。高台は断面三角形で比較的安定している。見込みには口縁近くにまで達する太い平行線状の暗文が施され、体部は渦巻状となっている。胎土は灰色で砂粒が目立つ。色調は銀黒色である。口径15.4cm・器高4.5cm・高台径4.5cm・器高指数29.2を測る。

楠葉型の椀(78)は口径11.0cmの終末期のもので、高台部を欠いている。外面に暗文はみられず、内面に細い暗文が簡単に渦巻状に施されている。

18. 大塚遺跡　　高槻市大塚町3丁目地先（挿図第36・40）

高槻と枚方を結ぶ枚方大橋の上流約0.4kmの大塚町3丁目地先の淀川河床の浚渫工事に伴なう土砂採集によって、各時期の遺物が採集されている。とくに、弥生時代の銅戈は特筆すべきものである。

瓦器椀には楠葉型と和泉型があり、楠葉型が全体の76%、和泉型が24%を占めている。

楠葉型の椀には古い段階の特徴をもつもの(119)と口径が13～14cmで内外の暗文が省略・簡

単になったもの(120・121)がある。小皿(122)は口径9.6cm・器高2.2cmで、底部から体部にかけて丸味のあるもので、見込みには太目の暗文が施される。

和泉型の椀には、外方に張り出す安定した高台が付き外面に暗文が若干施されるもの(123)と高台径が小さく、外面に暗文が施されないもの(124～127)、さらに高台が付かず、皿状のもの(128)がある。内面は体部に太目の暗文が間隔をあけて渦巻状に施され、(124・125・127)の見込みでは体部上位にまで達するように平行線状の暗文が施される。いずれも口縁が外反気味で、外面には指圧痕が顕著にのこる。色調は銀黒色で、胎土は黄灰色で粗い。

器高指数は(123)が33.3、(124～127)は29～26、(128)は25.2である。

土師器には硬質で小形の手づくねの皿(112)をはじめ、各遺跡から出土している皿類(108～110・113・114)が出土している。

時期・生産地がいまひとつ不明なものをあげると、ヘラ切りをした比較的厚い底部に板目状圧痕が付き、斜上方に口縁部がのびる小皿(115)や底部を糸切りした杯(111・116)がある。(111)では底部から内弯気味に体部・口縁部がのび、内外面には水ひき痕が明瞭にのこる。(116)はやや小型で底部からまっすぐ斜上方に口縁部がのびる。色調はいずれも黄褐色あるいは黄灰色で、胎土は粗い。このほか、土師器の椀の底部(117・118)が出土しているが、いずれも乳灰色で胎土は精良である。高台径が7.0～7.5cmで外方に張り出している。内面には太い暗文状のヘラ磨きがみられる。

羽釜は瓦質のものもあるが、土師質の特徴的なものをあげると、口縁が内傾し、胴部は丸く外面にタタキ目を施し、内面はていねいな刷毛目で仕上げられている(197)。

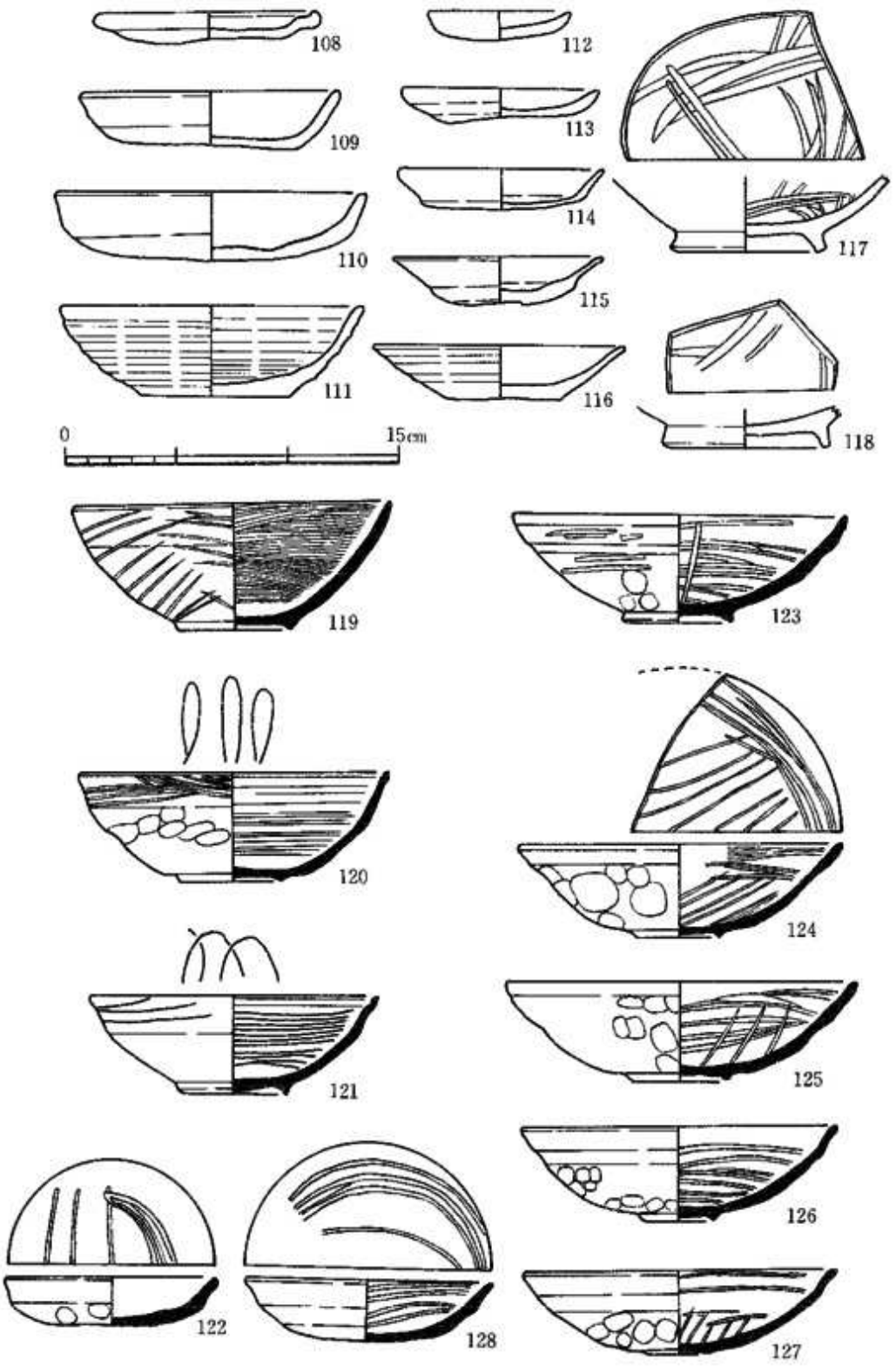
中国製青・白磁も出土している。細片が多く図示できないが、青磁では同安窯系・龍泉窯系のものが、白磁ではⅣ類がみられる。

日本製陶器類では常滑(200・201)、備前(202・203)がみられる。常滑では口縁端部が上外方につまみ出された甕の口縁、同じく甕の口縁で縁帯の幅が広くなりN字状をなすものがみられる。備前では口縁の折り返しを幅広くした甕の口縁と、擂鉢の口縁が直立し幅が広いものがみられる。

19. 柱本遺跡　高槻市柱本地先(挿図第37～40、図版第52・53)

高槻市の南端、柱本地先の淀川河床から大塚遺跡と同様に、昭和46年の浚渫工事にともなって多量の遺物が検出された。この地域の淀川堤防内には条里制の痕跡がみられるから、古くから開発がすすめられていたらしい。また、「太平記」には正慶元年、楠正成が天王寺に陣をとった時、六波羅方は柱本に陣をとったと伝えられ、遊女に関する記録もみられることから、柱本は軍事上・経済上重要な位置を占めていたことがわかる。[36]

出土した遺物は縄文式土器からプラスチック容器まで各時期多種類にわたっているが、中世



挿図第36　大塚遺跡出土遺物

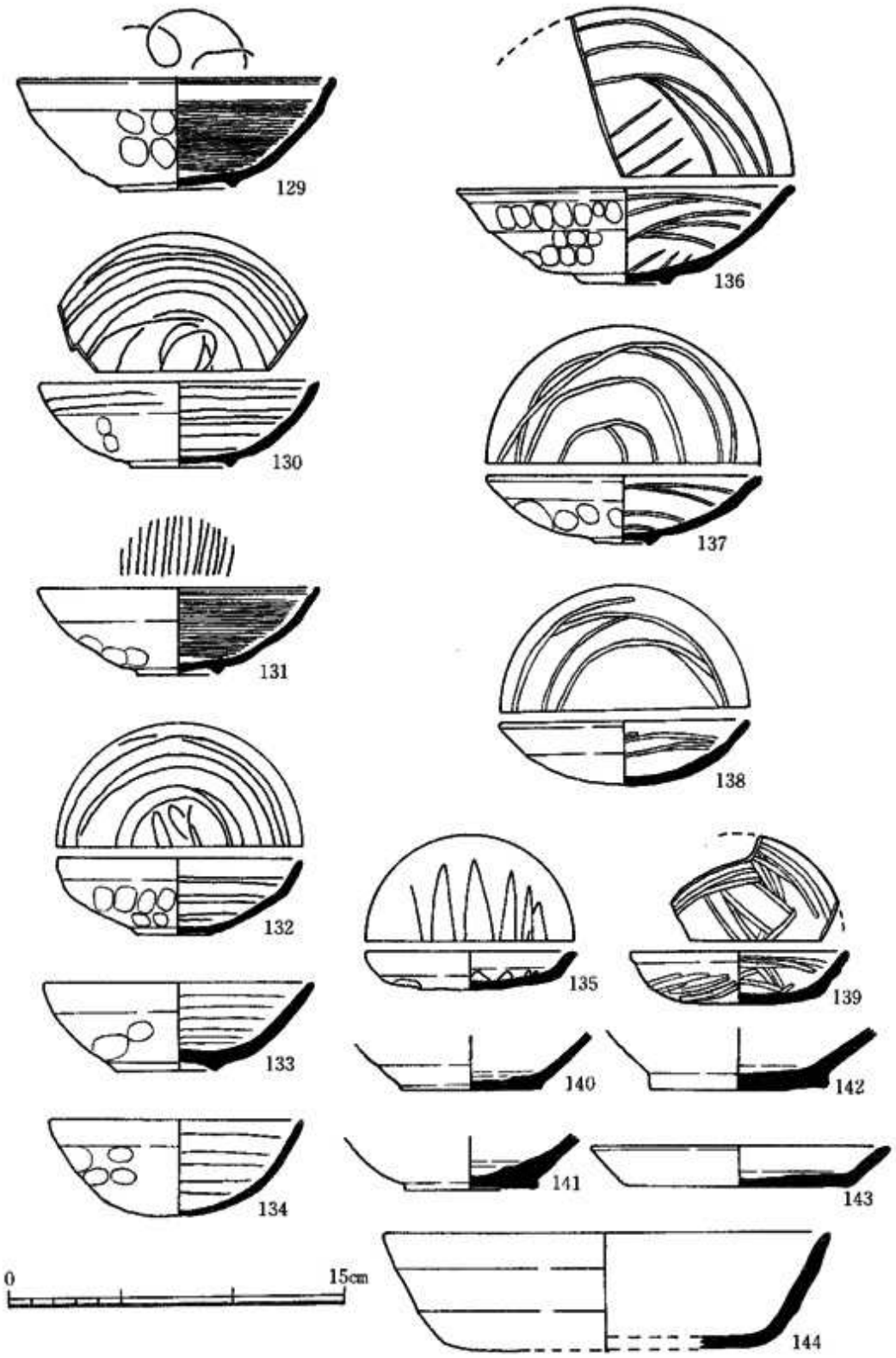
遺物は他の遺跡同様瓦器椀と土師器皿が中心である。瓦器椀では大塚遺跡と同様に楠葉型と和泉型がみられ、前者が69%、後者が31%を占め大塚遺跡より和泉型が幾分多くなっている。楠葉型の椀では外面に暗文が施されない段階のものが多く、約90%を占める。やや古い段階のものは口径14.2cm・器高5.0cm・高台径5.1cm・器高指数35を測るもの(129)と、口径14.5cm・器高4.9cm・高台径5.7cm・器高指数33を測るもの(130)とがある。(129)では内面の暗文は比較的ていねいで、(130)では口縁部にわずかに暗文が施されている。量的に多いものは(131～133)に図示した口径12cm前後、器高4cm以下で器高指数が31～33を測るものである。

底部には4cm程度の簡単な高台が付き、暗文は見込みでは省略された同心円状、体部は渦巻状に数条施されている。(131)のように見込み、体部の暗文が比較的ていねいに施されているものは、ごく少数である。(134)は高台の省略されたもので、底部にはわずかに粘土紐をすり付けた様な状態になっている。瓦器小皿(135)は見込みに暗文が施され、口径9.5cm・器高1.8cmを測る。いずれも色調は銀黒色で、胎土は灰白色・精良である。

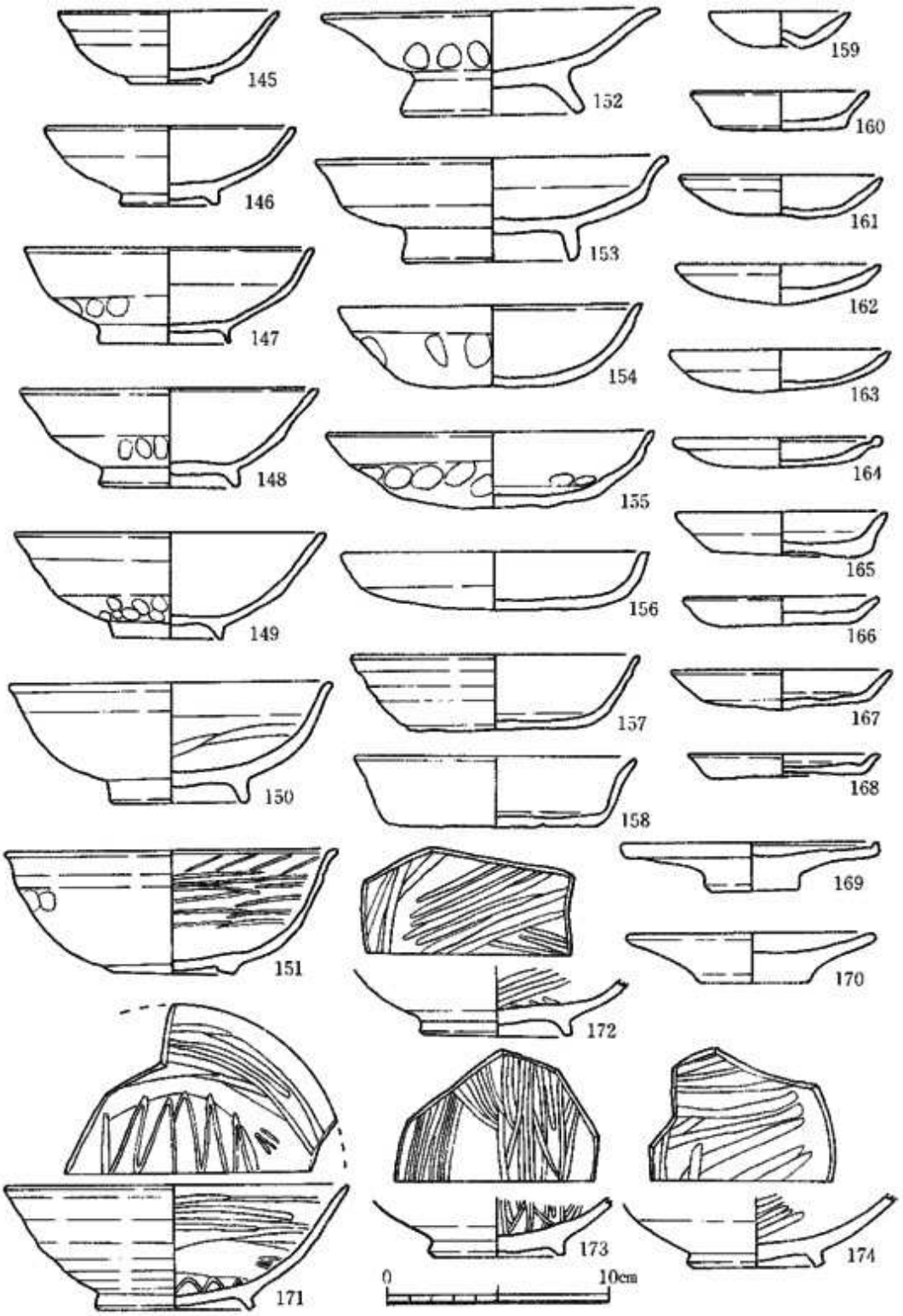
和泉型のものは高台が断面方形で、やや大振りのもの(136)や高台が極端に小さいもの(137)、皿状のもの(138)がある。いずれも、内面には太目の渦巻状の暗文が施されている。(136)では、見込には平行線状の暗文がみられる。色調はいずれも銀黒色であるが、重ね焼の痕跡が明瞭である。法量は(136)が口径15.1cm・器高4.3cm・高台径4.1cm・器高指数28を、(137)は口径12.4cm・器高3.0cm・高台径2.4cm・器高指数27を測る。瓦器小皿(139)は口径9.8cm・器高2.4cmを測り、内外面に太目の暗文が施され、底部から体部にかけて丸味をもっている。和泉型の瓦器の胎土は黄灰色気味で、やや粗い。

瓦質で底部をヘラ切り、糸切りした椀の破片が出土している(140・141)。いずれも灰白色を呈し、胎土は精良で比較的薄い。内外面をていねいになでて平滑にしている。底径は6～8cmを測り、141のみが糸切りである。同じく瓦質で底部をヘラ切りした皿がある(143)。口径13.4cm・器高1.9cmを測り、平坦な底部から斜上方にまっすぐ口縁部がのびている。大形の杯(144)も出土している。口径20.0cm・器高5.2cmを測り、底部は糸切りである。

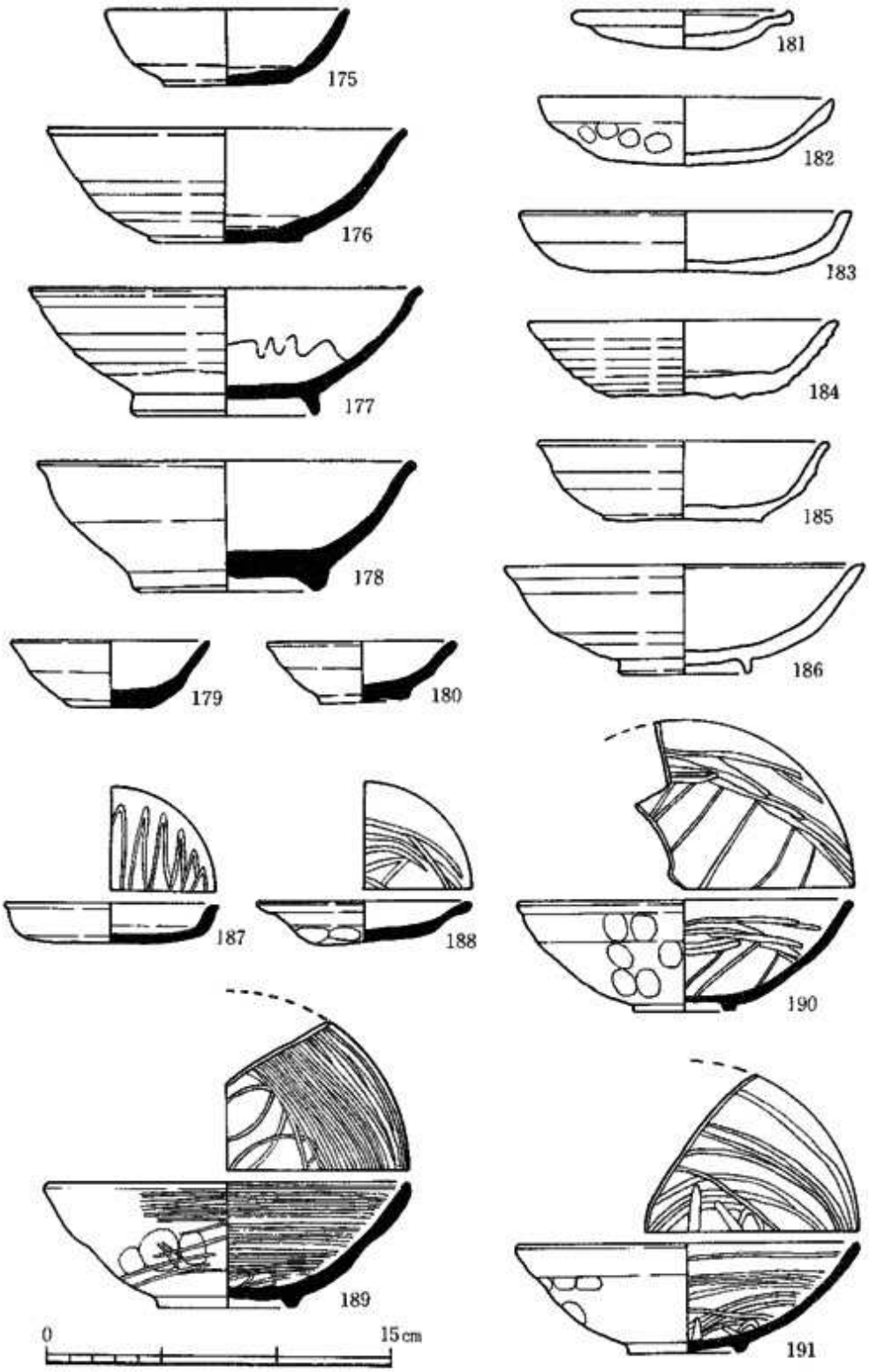
土師器では皿が圧倒的に多いが、椀・脚付杯などがみられる。土師器椀はいずれも黄灰色あるいは黄白色の色調で精良な胎土である。口径が10cm程度のもの(145・146)と口径が13～14cm程度のもの(147～150)と口径15cm程度のもの(151)がある。いずれも内外面をていねいになでて仕上げており、口縁部に横なでを施している。(145・146)では口縁部はほぼまっすぐにおわっているが、(147・148)では体部中位で若干内側に屈曲気味である。(150)では内面の中位以下をヘラでみがいて仕上げている。(151)は口縁を幅狭く二段になでて口縁端部は外反気味となり、内面は体部を横方向に、口縁部は斜目方向に暗文状のヘラ磨きが施されている。高台は比較的安定したもので、(151)のみが粗雑なものである。土師器椀は地域色が強く、瀬



挿図第37　柱本遺跡出土遺物



挿図第38　柱本遺跡出土遺物



第図第39　柱本・仁和寺遺跡出土遺物

戸内地域に分布するが、(147～149)はいわゆる早島式土器に類似する。

脚の付く杯では底部から外反気味に口縁部がのびるもの(152)と、中位で屈曲するもの(153)とがある。いずれも口径16cm前後・器高4.8cm・脚の径は8cm前後である。大皿では他の遺跡と同様であるが、底部が丸味をもつもの(154・155)と平坦なもの(156)とがある。

小皿も他の遺跡と同様であるが、時期的に新しいものを図示した。底部が上げ底となるもの(159)と底部が平坦で口縁部が短かく斜上方にのびるもの(160)とがある。(161・162)は口径9cm程度・器高2cm程度のもので、口縁をまっすぐおさめており、黄褐色で硬質のものである。(163～164)は他の中世遺跡でも出土するものである。底部を糸切りした土師器小皿(165)があるが、口径9.5cm・器高1.9cmを測り、短かく斜上方に口縁部がのびる。底部をヘラ切りしたもの(166～168)は口径9cm前後である。(168)は器高が低く、底部はヘラ切り痕の上に板目痕がみられ、底部内面に指圧痕がみられる。(165)は雲母が含まれ胎土は粗い。厚い底部を糸切りし、受部が水平気味になった皿(169・170)も出土している。口径11cm・器高2cm程度で、胎土は粗く、黄灰色気味である。口径13cm・器高3cm程度の杯も出土している(157・158)。(157)は口縁部外面に水ひき痕がのこり、底部には粘土板を貼り付けている。(158)は、外面はていねいになでて、底部には同心円状のヘラ切り痕がのこる。いずれも黄灰色である。

内面を黒色にいぶした土師質の椀が出土している。畿内でみられる黒色土器より厚手で、6～7cmの安定した高台が付く(171～174)。内面は暗文状の太いヘラ磨きがみられる。外面はいずれも黄白色で、底部外面をヘラ切りしている。器形のわかる(171)では口径15.5cm・器高5.7cm・高台径5.7cmを測る。口縁は外反気味で外面には水ひき痕がのこる。見込みには鋸歯状のヘラ磨きがみられ、体部は横方向のヘラ磨きを施す。他は外面をなでて仕上げている。

須恵器の杯(175・176)が出土している。いずれも底部を糸切りしており、口径10cm前後のもの(175)と口径15cm前後のもの(176)とがある。いずれも色調は灰色で、口縁部が帯状に黒くなっている。重ね焼をしたためであろう。(176)は兵庫県三木市久留美古窯で生産したものであろう。

灰釉陶器もわずかであるが出土している。　椀(177)は口径17cm・器高5.6cm・高台径8.1cmを測り、軟調な焼成で胎土は灰白色を呈し、釉は漬け掛けで内外とも底部には及ばない。黒笹90号の時期に相当するものであろう。

山茶椀・山皿も若干出土している。椀(178)では口径16.4cm・器高5.7cm・高台径8.3cmを測る。分厚い高台の付く底部から内弯気味に体部がたちあがり、口縁部はやや外反気味で端部はまっすぐおわっている。色調は灰白色で胎土は粗い。体部は丸味をもっており、第1型式に相当するものであろうか。山皿(179・180)では、胎土・色調は碗と同様で口径8～9cm・器高約3cm・底径約4cm、底部は糸切りである。いずれも、高台が省略されており、底部が心もち

下方へつきだして厚くつくられている。(179)の内面には灰釉がかかっており、山皿に分類するより、灰釉陶器とした方がいいかもしれない。

瓦器の鍋（192・193）では口径20～30cm程度のものがあり、口縁部が一度水平になり、端部がたちあがるものである。羽釜では、口縁が直立するもの(194)と口縁が内傾するもの(195)とがある。

土師質の羽釜(196)は口縁直下に鍔のつくもので、外面には縦方向の刷毛目が施されている。

20. 仁和寺遺跡　寝屋川市仁和寺地先（挿図第39）

寝屋川市仁和寺は古来茨田郡九個荘村に属し、平安時代から皇室関係の荘園であり、仁和寺北方の川中島が、平安時代の御料牧場跡の馬島である。宇多天皇は川向いの鳥飼村に鳥養院という離宮を営んだことはよく知られている。京都御室仁和寺を造営するときに同寺の御室営料所として寄進されている。鎌倉時代には後堀河天皇の皇女室町院覲子内親王の御領となり、その後、男山八幡宮社領となり、室町末期には幕府領所となっている。

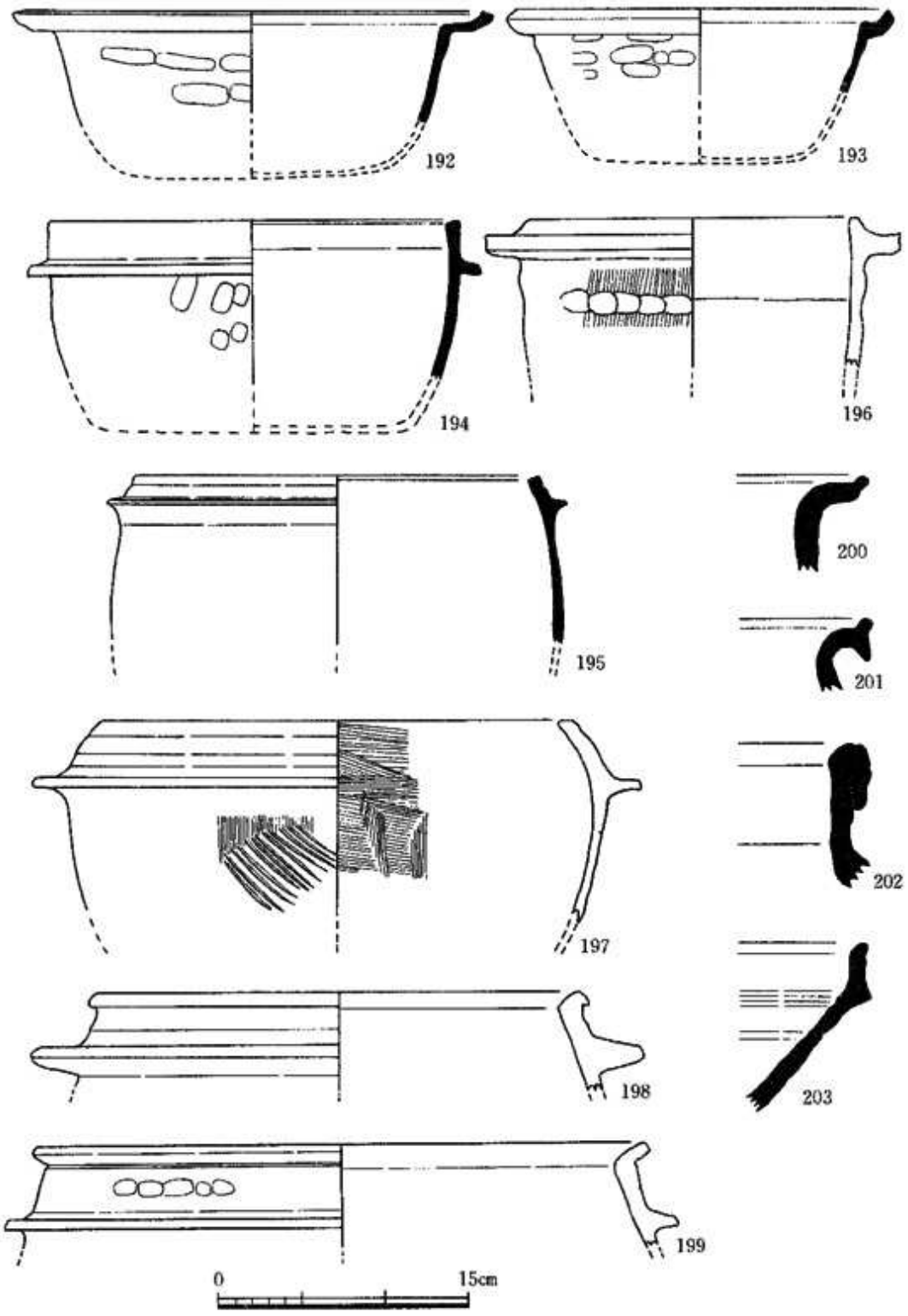
この仁和寺地先からも浚渫工事にともなって多量の遺物が採集されているようであるが、現在保管されているのはコンテナ約10箱分である。中世の遺物としては他の遺跡同様土師器皿・瓦器椀が主であるが、大塚・柱木遺跡で出土しているような底部をヘラ切りした土師器もみられる。

瓦器椀では楠葉型が66.8%、和泉型が33.2%となっている。小破片が多いが、図示したものは楠葉型の古い段階にあたる(189)。和泉型では口径14cm・器高約5cm・高台径4～5cmで内面の暗文は太く、無造作に施されている(190・191)。瓦器小皿では両型とも口径9.4～9.5、器高1.8cmであるが、楠葉型(187)は平坦な底部からゆるく内弯して口縁部がのびるが、和泉型(188)は口縁部が外反している。

土師器皿では他の遺跡で通常みられるもの(181～183)の他に底部をヘラ切りした杯状のもの(184・185)がみられる。(184)は口径13.6cm・器高3.2cmで外面には水ひき痕が明瞭にのこり、内面はていねいになでている。底部から直線的に口縁部がのびている。胎土は黄灰色で粗い。(185)は口径12.7cm・器高3.4cmである。(184)とほぼ同じであるが、外面には水ひき痕はみられない。

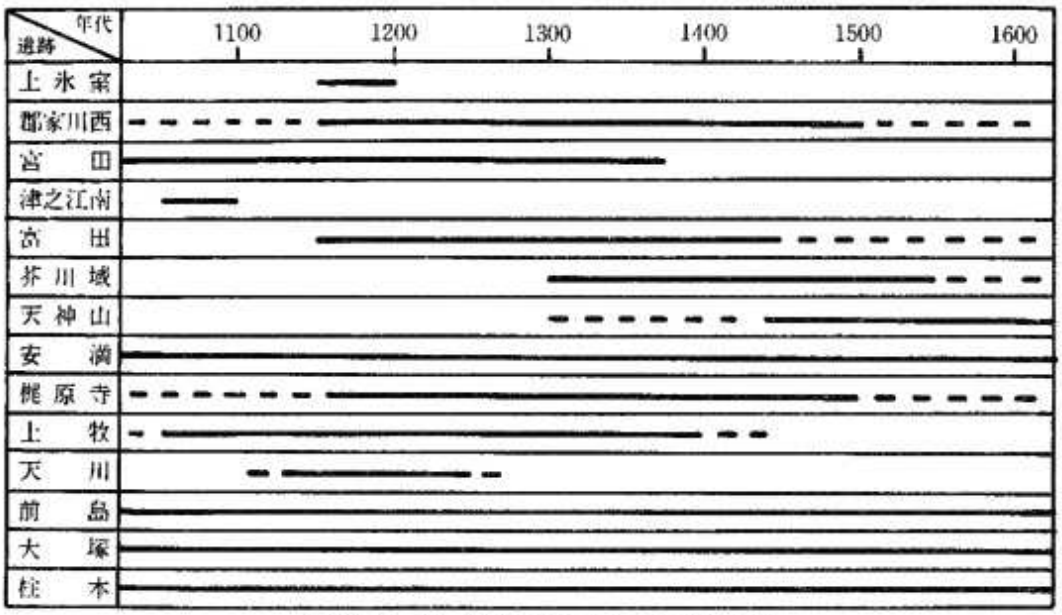
土師器の椀(186)は口径15.8cm・器高4.8cm・高台径5.8cmを測り、底部から内弯気味に体部がのび、口縁部は大きく開いている。内外面ともていねいになでて仕上げている。胎土は黄灰白色で精良である。

以上、各遺跡から出土した中世土器・陶磁器類を紹介してきたが、遺物からみた中世遺跡の変遷を対比すると概略は挿図第41のようになる。これをみると、中世遺跡には大きく四つの特色を見い出すことができる。①は、古代から中世の全期間営まれ、さらに現在までつづくもの



挿図第40　大塚・柱本遺跡出土遺物

で、郡家川西・安満遺跡があげられる。郡家川西遺跡は高槻市の西部地域、安満遺跡は東部地域の母村的性格を有している。②は、おおむね11世紀から12世紀にかけての院政期に成立する。上氷室・宮田・津之江南・上牧・天川遺跡などがあげられるが、①の郡家川西・安満遺跡との関連が強い。皇室領・摂関家領・官司領の多くがこの時期に成立するのと軌を一にしている。また、これらの遺跡は南北朝期を境にしてその様子が不明確になり、荘園制の成立と衰退を表現しているようである。③は南北朝期以後に、その様子が明確になる。芥川城・天神山遺跡などがあげられる。いずれも西国街道（山陽道）に面しており、交通の要衝でもある。④は淀川河床の柱本・大塚遺跡のように古代から現代までの遺物が出土し、そのなかには東海・瀬戸内地域から運ばれてきたものが含まれており、淀川水運の重要な中継地とみられる。



第41図　出土遺物からみた中世遺跡の変遷

注① 西谷正『塚脇古墳群』(高槻市教育委員会　1965年)
② 村川行弘「大阪府高槻市大蔵司古墳群」(『日本考古学年報16』1968年)
③ 西谷正「大阪府高槻市塚原古墳群」(『日本考古学年報15』1967年)
④ 神谷正弘他『大園遺跡発掘調査概報』2（大園遺跡調査会　1976年)
⑤ 富井康夫「いにしえがたり・中世の高槻」(『庁内報たかつきNo.48』1973年)
⑥ 宮成哲也「女瀬川改修関連遺跡の調査」(『昭和50年度高槻市文化財年報』1976年)
⑦ 宇野隆夫「京大病院遺跡出土の土器 -古代末から中世一」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1978年)
⑧ 田代克己他『嶋上郡衙跡発掘調査概要Ⅰ～Ⅴ』(大阪府教育委員会　1971～1975年)
宮成哲也『嶋上郡衙跡発掘調査概要1～3』(高槻市教育委員会　1977～1979年)
⑨ 亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」(『九州歴史資料館研究論集』1975年)

⑩ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集4』1978年) 中国製陶磁器に関する以下の記述は両氏の分類に従うことにした。
⑪ 原口正三「宮田遺跡」(『高槻市史』第6巻　1973年)
⑫ 口縁部の破片959個について検討したところ、沈線のあるもの866個 (90.3%)、沈線のないもの93個 (9.7%) であった。
⑬ 土師器皿Ⅱの破片1948個について検討した。底部糸切りの例は安満遺跡にもある。
⑭ 真野修氏の御教示による。
⑮ 稲垣晋也「瓦器椀の成立と展開」(『日本歴史考古学論叢2』1968年)
⑯ 瓦器椀1301個について検討したところ楠葉型が754個 (58%)、和泉型が547個(42%) であった。なお、和泉型としたなかには和泉地方以外で生産されたものも含まれているかもしれないが、第3節でも触れるように現段階では詳細に分類できない。
⑰ 大船孝弘「富田遺跡」(『昭和51・52年度高槻市文化財年報』1978年)
⑱ 大船孝弘『津之江南遺跡発掘調査報告書』(高槻市教育委員会　1976年)
⑲ 大船孝弘「富田遺跡」(『昭和51・52年度高槻市文化財年報』1978年)
⑳ 三浦圭一「中世の高槻」(『高槻市史』第1巻1977年)
㉑ 大船孝弘「芥川城跡」(『昭和51・52年度高槻市文化財年報』1978年)
㉒ 原口正三「上田部遺跡」(『高槻市史』第6巻　1973年)
㉓ 藤沢長治「高槻市天神山弥生時代遺跡発掘報告」(『郷土高槻叢書8』1955年)
㉔ 小林行雄「安満B類土器考」(『考古学』第3巻第4号　1932年)
㉕ 橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書—中世集落の調査—」(高槻市教育委員会　1974年)
橋本久和「安満遺跡」(『昭和51・52年度高槻市文化財年報』1978年)
㉖ 大村敬通氏の御教示による。
㉗ 島谷稔「高槻上代寺院跡の研究1」(『大阪文化誌』第1巻第1号　1974年)
森田克行「梶原寺跡」(『昭和51・52年度高槻市文化財年報』1978年)
㉘ 橋本久和「天川遺跡」(『昭和49年度高槻市文化財年報』1975年)
㉙ 橋本久和採集。
㉚ 辻路佇驢子「高槻市大塚町地先の淀川床遺跡出土銅戈」(『大阪文化誌』第3巻第1号　1977年)
㉛ 河音能平「中世社会への道」(『高槻市史』第1巻　1977年)
原口正三「柱本遺跡」(『高槻市史』第6巻 1973年)
㉜ 類似する資料が香川県綾南町西村遺跡で出土している。沢井静芳氏から資料を拝見した。
㉝ 香川県下で類似資料が出土している。松本敏三氏の御教示による。
㉞ 大村敬通氏の御教示による。
㉟ これら、中世の政治・経済に関わる点は後日を期したい。

第2節　高槻における中世土器の編年

さきに、「中世日常雑器類の分析」と題して高槻市内から出土した中世土器を紹介し、その中で瓦器椀を中心にした編年を試みた。①

その後、前節のとおり高槻市内や近隣各地域において中世関係の遺跡の発掘調査が進み、さきの編年案では不明確であった点を補い、基礎的な誤りなどを修正する資料を得ることができたので、改めて高槻市内から出土した中世土器について編年を試みた。

さきの編年案では、瓦器椀をAからHまでの8タイプに分類し、大きく三つの段階に区分し、各タイプ毎に共伴する中世陶器や中国製磁器を参考にして実年代を推定した。しかし、三つの段階に区分した根拠については、他の中世土器類等とのおおまかな共伴関係等について述べたにとどまり、曖昧さがのこった。さらに、さきの編年案で大きな誤りであったのは、生産地の異なる瓦器椀を含めて編年を試みたことである。具体的には、D・Eタイプとしたものは第3節でくわしくのべる和泉型であって、高槻における編年を考えるうえでは不適当な資料であった。

このような反省点をふまえて、本稿では前節で紹介した各遺跡から出土した資料の中で、枚方市楠葉付近で生産されたと考えられる瓦器椀のみで編年を行った。

編年作業は、まず瓦器椀を12のタイプに分類し、これに共伴する土師器皿との関係に重点をおいてすすめた。瓦器椀は外面に暗文のある段階と無い段階の大きく二時期に分けられるが、さらに、それぞれの時期を形態・製作手法から二時期に分けることができる。共伴する土師器皿のうち大皿(Ⅰ)では口径が各時期ほ瓦器椀の口径にほぼ等しく、小皿(Ⅱ)も各時期ごとに形態・法量に変化が認められる。これらをもとにして、瓦器椀を大きくⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの四時期に分け、各時期をさらに細かく三つの小期に分けた。以下、瓦器椀を中心にした各時期の概要を記してみよう②(別図2)。

第Ⅰ期

この時期の資料としては、宮田遺跡神社南地区の溝内出土のものや上牧遺跡の土壙墓出土のものなどがあげられる。黒色土器の破片が少量ながら共伴し、土師器皿Ⅱには黒色土器が盛行する時期のc類がみられるなど、瓦器以前の色彩が残っている。

瓦器椀の初源形態を示しているものと考えられ、断面方形で安定感のある分厚い高台が付き、深手で、口径15～16cm、器高指数40以上を測るものが多い。内外面には幅2～3mmの太い暗文がていねいに施され、器壁は厚く5mm以上を測る。色調は漆黒色を呈し、胎土は砂粒を含み、黄灰色で粗い。

土師器皿Ⅰでは底部が丸味をもち、器高3cm以上を測るものが多く、皿Ⅱでは口縁が屈曲肥

厚するものが多い。いずれも、焼成は堅緻で、明橙色を呈している。中国製磁器では第2小期から白磁碗が共伴する（図版第56）。

Ⅰ－1

資料としてあげられる瓦器椀は、宮田遺跡から出土した一点のみであるが、稲垣氏のいう第3期黒色土器椀に類似している。口径14.8cm・器高6.5cm・高台径6.8cm・器高指数43.7を測る。高台は外側に強く張り出し、体部はわずかに内弯するが、口縁部は直立している。内外面には太い暗文がていねいに施され、見込みは螺旋状となっている。横なでや指圧痕は暗文におおわれてほとんど認められない。口縁端内側には沈線が施されている。土師器皿等の共伴関係は不明である。

Ⅰ－2

宮田遺跡神社南地区から多量に出土した資料が良好な一括資料としてあげられる。瓦器椀は口径15～16cm、器高5～6cm・高台径約6cmで、器形が一定せず、口縁部の横なでが強調されるものやされないもの、あるいは、体部や口縁部が直線的なものや内弯するものなどがある。このため、器高指数は34～40とかなりの幅がある。暗文は太く、内面はていねいに施され、外面はⅠ－1より雑になり、底部近くは省略される傾向がある。外面を三分割するものと四分割するものがあるが、量的には前者が多い。見込みは螺旋状や鋸歯状など一定していない。外面の暗文が省略されるために、指圧痕が目立ち、とくに体部と口縁部の境に凹凸の目立つものがある。口縁端内側の沈線は、宮田神社南地区では約90%に施されている。

共伴する瓦器小椀にも、椀と同様の暗文が施されている。瓦器小皿は口径10cm程度で、これも椀と同様の暗文が施されている。

土師器皿Ⅰは口径15～16cmを測り、底部が丸味をもち、内弯しながら体部・口縁部へとつづいている。口縁部は外反気味におわり、端部も外側へ屈曲させるものがある。この時期では底部や口縁部の境に指圧痕の凹凸が目立つものや、器高3cm以上を測るものが多い。皿Ⅱは口径10cm程度で、口縁を屈曲肥厚させたもの（a）と、口縁がまっすぐにおわるもの（b）があり、量的には前者が多い。また、わずかではあるが受け皿状（c）のものもある。

中国製磁器では白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類があるが、Ⅱ類がもっとも多い。

Ⅰ－3

上牧遺跡A区1号土壙墓出土の一括資料があげられるが、瓦器椀・土師器皿ともⅡ期への過渡的なものである。

瓦器椀では口径15～15.5cm、器高5～6cm、高台径5～6cm、器高指数40前後である。

器形は口縁部が横なでによって直立気味となるが、体部は内弯し、丸味をもつようになる。内面の暗文はていねいに施されているが、外面は前段階よりも省略され、暗文の間隔もあいて

いる。見込みは大雑把な鋸歯状のものが多く、螺旋状のものもある。

小椀は暗文が不明確であるが、椀と同様であろう。瓦器小皿は共伴するものを明確に把握していない。

土師器皿Ⅰは、口径15cm、器高3cm程度のものが多く、口縁部と体部の境には指圧痕がのこる。底部はほぼ平坦となり、底部から体部への移行部は丸味をもち、口縁は外反気味である。皿Ⅱは、口径9.5～10cmを測るものが多く、前段階にみられた口縁部を屈曲肥厚させたもの(a)は少なくなり、口縁下の横なでによってそのくせを残すものが多い。

第Ⅱ期

瓦器椀として完成した時期で、出土量も多くなる。明らかに規格化されたもので、器形・法量にはまとまりがある。高台は断面三角形となるが安定している。口径14.5～15cm・器高指数34～38程度を測る。暗文は2mm以下の細いもので、内面はていねいに施し、外面は三分割して施し、徐々に粗さが目立つようになり、最後には口縁部のみに施されるようになる。器壁は薄くなり、3～4mmを測る。器形のゆがみが目立つのは量産化に伴って、技術の省略化がおこったことを示している。色調は漆黒色または灰黒色で、胎土は良質になり灰色である。

土師器皿にも変化がみられ、皿Ⅰでは口径14～15cm・器高3cm以下を測るものが、皿Ⅱでは口径9.0～9.5cmを測るものが多く、口縁の屈曲するもの(a)はほとんど出土しなくなる。焼成は比較的堅緻であるが、徐々に軟質化し、色調も明橙色から乳灰色となる。中国製磁器は当初白磁のみであるが、第2小期以後には青磁が共伴するようになる(図版第56)。

Ⅱ－1

この段階の資料としては上牧遺跡井戸2下層出土のものがあげられる。

瓦器椀はⅠ－3と器形的に類似しているが、体部はより内湾している。口径15cmを測るものが多く、図示したものは口径15.2cm・器高5.9cm・高台径6cm・器高指数38.8を測る。内面の暗文はていねいに施されているが、外面は省略化がすすみ、体部下半にはあまり施されず、見込みは間隔の密な螺旋状である。器壁はまだ厚味があり、色調も漆黒色である。小椀も椀と同じく丸味をもつ器形で、暗文は省略する傾向にある。瓦器小皿は口径9.4cm・器高1.5cmを測り、見込みと口縁内側には椀と共通する暗文が施されるが、外面には施されない。

土師器皿の焼成は堅緻で、硬質である。皿Ⅰでは口径14.5～15cmを測るものが多く、皿Ⅱでは口径9～9.5cmを測るものが多く、口縁の屈曲するもの（a）はほとんどみられず、まっすぐのもの（b）が主である。

中国製磁器では口磁碗Ⅱ類もあるが量的にはⅣ類が多くなる。

Ⅱ－2

安満遺跡1号井戸や宮田遺跡方形ピットなどから出土した資料があげられるが、瓦器椀は器形としてもっとも整ったものである。口径14.5～15cm・器高5.5cm・高台径5.5cm程度で器高指数36～37を測るものが多く、底部から内湾気味に体部・口縁部へとつづく。高台は断面方形の分厚いものから断面三角形の薄いものに変化している。暗文は、外面では体部上位から口縁部にかけて施され、間隔はあいている。内面は間隔が若干あくようになり、見込では中央部に省略気味の螺旋状、鋸歯状、連結輪状のものがみられる。この段階から器壁が3～4mmと薄くなり、色調も光沢のある銀黒色を呈すものが混じるようになる。

土師器皿では前段階と大差ないが、宮田遺跡方形ピットからは、平安京内で出土例の多い二段ナデの皿Ⅰや楠葉以外で生産された瓦器椀が多く出土している。

中国製磁器では従来の白磁椀に加えて、口磁碗Ⅸ－2が出土し、同安窯系・龍泉窯系青磁も出土するようになるが、明確な共伴関係を把握していない。

Ⅱ－3

この段階の良好な一括資料はないが、瓦器椀では内外面の暗文の省略化がすすみ、外面は口縁部のみに施されている。見込みでは中央部に螺旋状文の省略されているもの、同心円状のもの、連結輪状のものが施されている。図示したものは口径14.5cm・器高5cm・高台径6.2cm・器高指数34.5を測る。器高指数は34～35のものが多く、器壁は薄く約3mmである。高台は断面三角形で薄いが、この段階で高台径が6cm程度のものが多い。瓦器小皿は口径約9cmで、省略された暗文が施されている。

土師器皿では焼成があまく、乳灰色を呈すものが多く、皿Ⅰでは大きな変化を認めない。皿Ⅱでは口径9cm程で、口縁部はまっすぐである。この時期には同安窯系・龍泉窯系青磁は確実に共伴する。④

第Ⅲ期

各遺跡で出土し、量的にも最も多い時期である。瓦器椀では、高台が断面三角形で細く、直径5cm以下である。口径13.5～14.5cm・器高5cm以下・器高指数32～33を測る。暗文は細く、外面にはほとんど施されなくなり、口縁部の横なでが目立つ。器壁は第Ⅱ期より更に薄く、器形のゆがみも多い。加えて、口縁端内側の沈線が施される割合も減少していることなどから、一層量産化が計られ、省略化もすすんだものであろう。色調は灰黒色が主であるが、銀黒色を呈し、光沢のあるものも目につく。胎土は精良で灰白色である。

土師器皿Ⅰでは口径13～14cm・器高3cm以下のものが大半を占める。皿Ⅱでは口径8～8.5cm程度である。皿Ⅱは口縁部が短かく、まっすぐにのびるものに限られる。いずれも色調は乳灰色で軟質である。中国製磁器では同安窯系・龍泉窯系青磁が多く出土する(図版第57)。

Ⅲ－1

郡家古墳群や天川遺跡などから出土した瓦器椀では、口径14～15cm・器高5cm・器高指数33程度である。口縁部にわずかに暗文がのこるものもあるが、外面の暗文はほとんど施されていない。内面も間隔があくようになり、見込みは中央部に同心円状のものが多く、螺旋状のものもあるが省略化されている。

土師器皿Ⅰでは口径13.5～14cmを測るものが多く、皿Ⅱでは口径8.5cm前後である。

Ⅲ－2

上牧遺跡溝1から出土した資料があげられるが、瓦器椀では口径13.5～14cmを測るものが多く、器高指数は33程度である。器形は底部から口縁部にかけて丸味をもってつづき、口縁部の横なでが目立つが、大きく外反するようなことはない。暗文は外面にはまったく施されず、内面も省略化がすすみ渦巻状となっている。見込みは、中央部に同心円状あるいは螺旋状の省略されたものが主として施されている。口縁内側に沈線を施すものは、上牧遺跡溝1では55%となっている。色調は銀黒色を呈すものが目につく。瓦器小皿は土師器皿Ⅱとまったく同じ器形で、省略された暗文が見込に施されている。

土師器皿Ⅰでは口径13.5～14cmを測るものが多く、皿Ⅱでは口径8～8.5cm程度である。瓦器椀、土師器皿ともに器形のゆがみが目立っている。

Ⅲ－3

安満遺跡B溝出土の資料があげられるが、瓦器椀では口径13.5cmを測るものが最も多い。器形は前段階のものと大差ないが、高台がより簡単になり、粘土ひもをすりつけたようなものもみられる。暗文は、見込では螺旋文の省略されたものがほとんどで、口縁端内側の沈線を施すものは34%となり、前段階よりさらに減少している。色調は銀黒色・灰黒色であるが、器壁に炭素が十分吸着せず、そのため灰白色あるいは乳灰色の素地の目立つものが多い。

土師器皿Ⅰ・Ⅱは前段階と大差ないが、器壁が薄くなっている。

第Ⅳ期

瓦器椀の終末期である。まとまった資料は少ないが、口径が13cm以下で、器高指数32～33を測る。高台は細い糸状のものからすりつけ状のものとなり、やがて消滅する。暗文は、内面では数条の渦巻状となり、見込みには極めて省略された鋸歯文状のものがみられるが、最終末には暗文はまったく施されない。器壁は薄く、胎土には灰白色で精良であるが、炭素の吸着が不十分で素地がそのまま露呈するものが多い。

土師器皿の共伴関係はあまり明確でないが、皿Ⅰでは口径が12cm以下・器高2cm程度で器壁が薄く、ゆがみが目立つ。皿Ⅱでは口径8cm以下となっている。色調は乳灰色を呈し、軟質で

ある（図版第57）。

Ⅳ－1

柱本遺跡、富田遺跡井戸1などの資料があげられるが、口径12cm、器高約4cm、器高指数は33程度である。高台は直径3cm程度で断面三角形のごく簡単なものになっている。内面の暗文は渦巻状に数条をめぐらし、見込みはごく簡単な鋸歯状となっている。

土師器皿Ⅰは口径11cm・器高2cm程度を測り、器壁は薄く、ゆがんだ器形となっている。皿Ⅱは口径7cm・器高1cm程度で底部から短かい口縁部へとまっすぐにつづいている。

Ⅳ－2

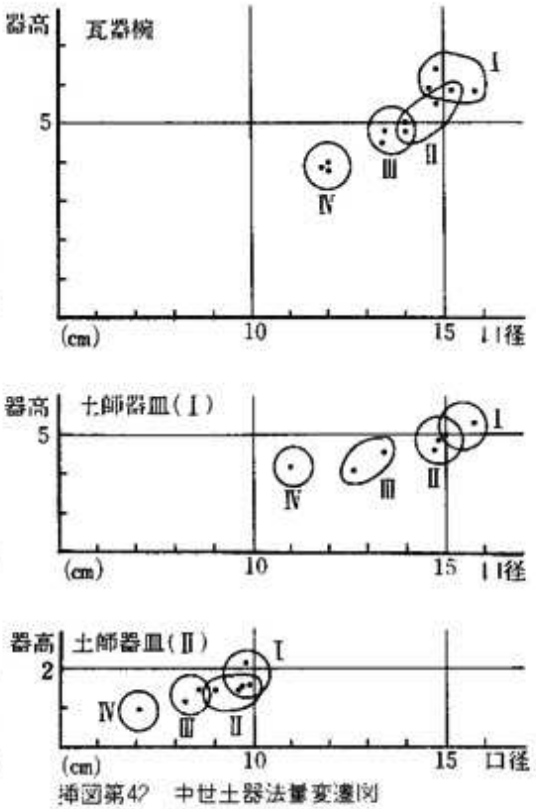
安満遺跡12号井戸出土の資料があげられるが、口径12.0cm、器高4.0cm、器高指数33.3を測る。底部が尖底状のものと、平底状のものとがあり、前段階までの貼付高台はみられず、底部にごく薄い粘土紐をすりつけている。内面の暗文はわずかに渦巻状に施されているにすぎず、見込みも極めて簡単な鋸歯状となっている。炭素の吸着が悪く素地がそのまま露呈している。

土師器皿の共伴関係は明確でないが、従来の形態とは異なるものが出現するようである。

Ⅳ－3

富田遺跡出土の資料しかないが、法量は前段階と大差ない。高台はまったく認められず、底部は尖底状となっている。暗文は内面にもまったく施されていない。胎土は粗く、黄灰色を呈し、器壁も炭素がほとんど吸着されていないので、黄灰色の素地のままである。

土師器皿の共伴関係は明らかでない。



挿図第42　中世土器法量変遷図

大雑把に瓦器椀と土師器皿の編年を紹介したが、挿図第42は瓦器椀、土師器皿の法量の変遷をまとめたものである。次にこれらの実年代について考えてみることにする。

実年代を決定する際に基準となる資料は、平安京周辺では平安京左京四条一坊の井戸ＳＥ８から出土した寛治5(1091)年と墨書された須恵器鉢とこれに共伴する瓦器椀・土師器皿等が唯一のものである。この井戸ＳＥ８出土資料は、井戸枠内と掘り方から出土したものに分けられるが、双方から出土している土師器皿には差異がほとんど認められず、寛

治5年を下限として把えることができる。この井戸ＳＥ８から出土した瓦器椀・土師器皿Ⅱは、本稿で第Ⅰ期第２小期とした宮田遺跡神社南地区の溝内出土資料と最もよく類似している。井戸ＳＥ８から出土した瓦器椀も楠葉で生産されたとみられる特徴を有するから、第Ⅰ期第２小期の下限の目安も寛治５年とすることができる。井戸ＳＥ８出土の土師器皿Ⅰは平安京周辺の特徴を示すもので、宮田遺跡出土のものとは差異がみられる。

他の時期では紀年銘を有するような資料は目下のところまったく知られていない。

つぎに、他の共伴遺物はどうであろうか。いささか本末顛倒の感はあるが、大宰府を中心とした出土資料のうち、その年代が明らかにされている中国製磁器との関係を検討してみよう。

第Ⅰ期第２小期には白磁碗Ⅱ類が多く出土し、第Ⅱ期第１小期には白磁碗Ⅳ類が多く出土する。ついで、第Ⅱ期第２小期には白磁碗Ⅷ類－２が共伴するようになり、第Ⅱ期第３小期には龍泉窯系・同安窯系青磁が確実に共伴するようになる。白磁碗Ⅱ・Ⅳ類は平安京井戸ＳＥ８からも出土していて、その年代は11世紀初頭から12世紀と考えられており、青磁碗は出土しない。青磁碗が出土するようになるのは12世紀中頃からで、白磁碗Ⅷ類－２も、この時期に出現するらしい。

また、記録にのこる寺院等の遺構から出土した資料も年代決定の参考になるが、第Ⅱ期第１小期のものは上限を1102年とする尊勝寺出土例にみられ、次の第Ⅱ期第２小期のものも上限を1154年とする鳥羽田中殿出土例にみられる。いずれも遺構の上限を示す記録からの推定であるが、中国製磁器等のくみあわせから第Ⅱ期第１・第２小期をおおよそ12世紀前半～中期とすることができるであろう。

日本製陶器類は、前節で紹介したように各遺跡から出土しているが、遺構から一括して出土することが少なく、その使用年代にもかなりの幅をもつが、ある程度年代決定の目安にはなるであろう。安満遺跡11号井戸から須恵器甕・鉢・瓦器椀が出土しているが、瓦器椀は第Ⅲ期第３小期のものと第Ⅳ期第２小期のものがあり、これらに共伴する常滑焼大甕は第Ⅲ期に属し、13世紀後半と考えられている。下限を示すもうひとつの資料としては、富田遺跡から出土している第Ⅳ期第３小期の瓦器椀がある。それは明徳元（1390）年に創建された富田善門寺の下層の遺構から出土している。さらに加えれば、安満遺跡４号井戸出土の常滑焼は15世紀前半（第Ⅳ期）に属すものであり、瓦器椀は共伴しない。

上限については、黒色土器との関連性が充分に判っていないため今後の課題とせざるをえない。以上のことをまとめてみると、大雑把に第Ⅰ期を11世紀代に、第Ⅱ期を12世紀代に、第Ⅲ期を13世紀代に、第Ⅳ期を14世紀代に推定し、瓦器椀の下限を14世紀末としたい。

注① 橋本久和「中世日常雑器類の分析」(『大阪文化誌』第2巻第3号 1977年)
② 資料の関係で前節と重複するところが若干あることを断わっておく。
③ 前節⑬を参照。
④ 前節で紹介した宮田遺跡の他に、長岡京市神足遺跡でも良好な資料がある。
⑤ 口縁部の破片258個について検討したところ、沈線のあるもの143個 (55.4%)、沈線のないもの115個 (44.6%) であった。
⑥ 口縁部の破片147個について検討したところ、沈線のあるもの50個 (34%)、沈線のないもの97個 (66%) であった。
⑦ この時期の瓦器椀の資料としては宇治市八雲北遺跡出土資料が良好である。
⑧ 鳴上郡衙跡の79年度の調査で、この時期の良好な資料が出土している。
⑨ 田辺昭三他「平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—」(平安京調査会 1975年)

第3節　瓦器椀の地域色と分布

瓦器の分布範囲は近畿地方とその周辺に限られ、地域色がみられる。このことに関しては、白石氏が早くから指摘されている。氏が第Ⅱ段階とする畿内周辺諸国の瓦器にははっきりした地域色の認められるものがあり、一国を一単位とする程度の生産単位が存在し、第Ⅲ段階にはこの傾向は更にはっきりすると考えられた。①

白石氏がこのような先駆的な考えを明らかにしたにもかかわらず、その後の研究では地域色に対する配慮が払われず、畿内全体をひとつの型式編年で把握しようとする傾向がつづき、そのため瓦器の研究は著しく混乱したといっても過言ではなかろう。その後、橋本が地域差を考慮に入れた中世土器研究に対する見解を示し、白石氏も第Ⅲ段階の型式編年については各地域ごとに再検討する必要があると考えられるようになった。②しかし、橋本は全時期について再検討の必要があると考え、前節のとおり高槻市における編年③を明らかにした次第である。

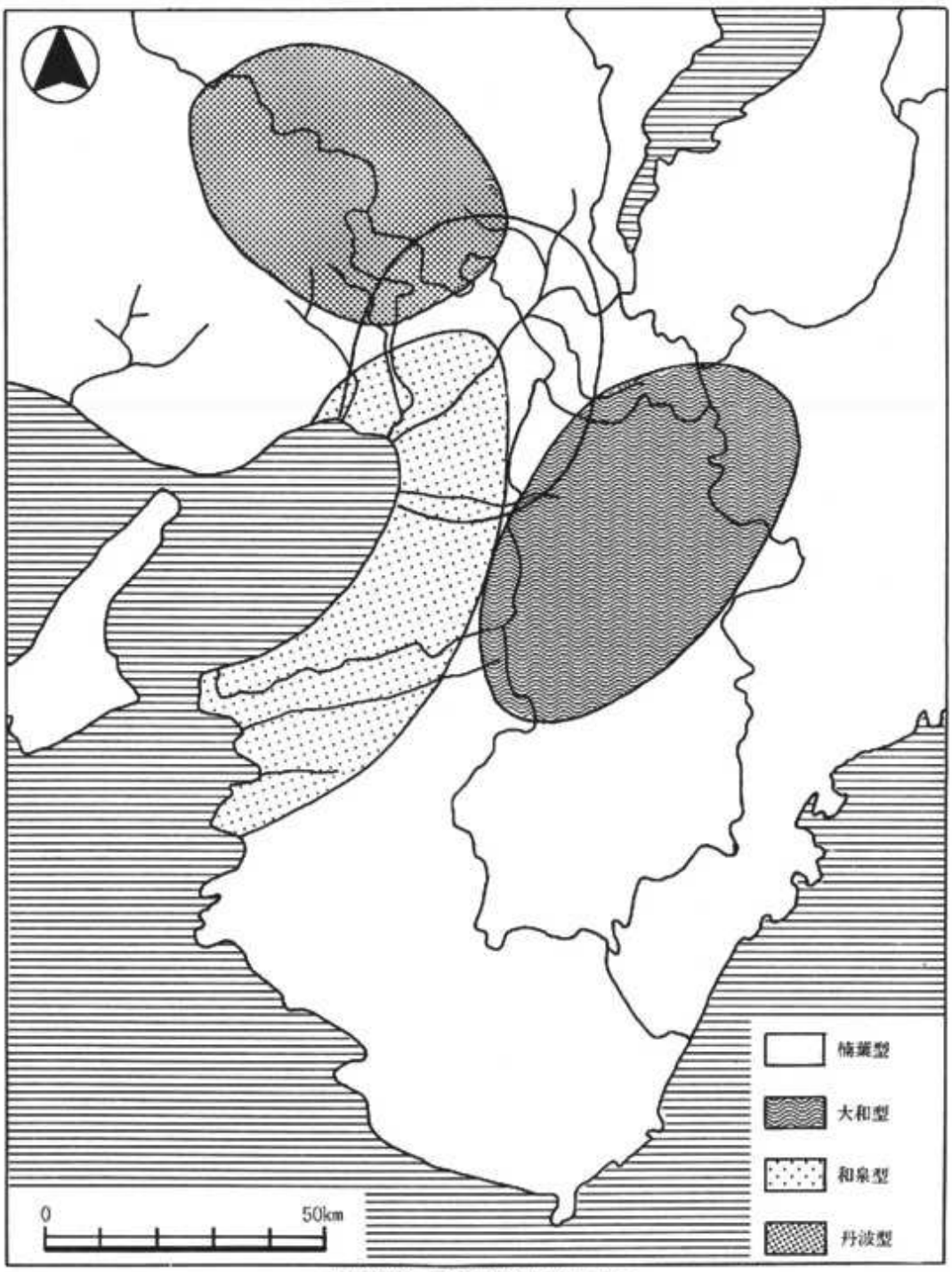
では、具体的に瓦器椀にはどのような地域色が認められるのであろうか。管見では、大きく分けて、楠葉・和泉・大和・紀伊・丹波の五つの型がある。その主な分布範囲は挿図第43のとおりであるが、分布図は橋本が実際に遺物を見たもの、および報告書等で各地域の特色が良くわかるものを選んで作成したため完全なものではない。分布図(挿図第43・44)でもわかるように、楠葉型と和泉型のように、たがいに重なりあって分布する地域がある。楠葉型と和泉型については淀川河床の各遺跡から採集した資料から分類を試み、主にどの型がどの地域に分布するかを想定しているが、大和型と楠葉型、楠葉型と丹波型、和泉型と紀伊型の関係については充分検討していない。以下、その特徴的なことを記していこう。

楠葉型　他地域のものには旧国名を付けたのに対して、これのみ地名を付けたのはその生産地が明らかなためである。すなわち、『梁塵秘抄』にでてくる「楠葉の御牧の土器つくり……」の歌によって枚方市楠葉周辺には中世土器の生産地があったと想像されていたが、1974年から発掘調査された楠葉東遺跡から中世の各種遺構とともに窯跡と推定される遺構が検出された。④

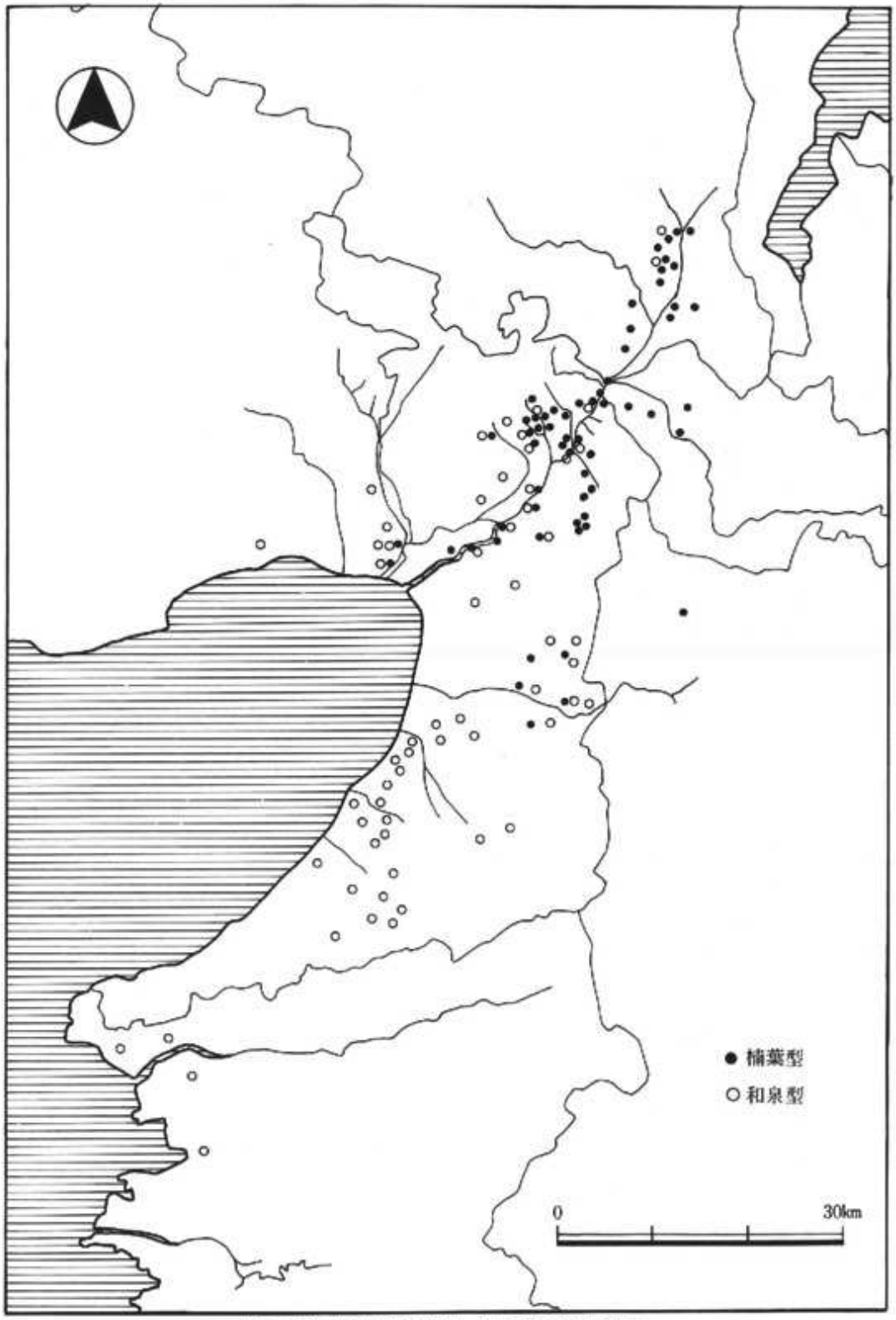
楠葉東遺跡は京都府と大阪府の府境付近にあり、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵の西麓と淀川左岸の沖積低地に立地している。楠葉は古くは「久須波」として古事記・日本書紀に現われ、付近には伝継体天皇楠葉宮跡もある。また、平城京造営のための物資を運ぶために駅が新設された時には楠葉もその一つにあげられていて、淀川を利用した古代交通上重要な位置を占めていたことが知られる。この地には、藤原継縄の別荘があったらしく、早くから藤原氏との関係があり、古代末・中世には摂関家領楠葉牧として栄えたことは有名である。この楠葉牧は交野郡の南北につらなる広大な地域で、牧馬の他に田地や土器つくり集団を含む複雑な構造と

なっていたらしい。また、藤原氏の氏長者のみが伝領する殿下渡領としての政治的・経済的地位を占めていた。

楠葉の土器つくりに関する記録としては『梁塵秘抄』の他に、天平5(733)年に興福寺西金



挿図第43　瓦器椀の地域色と分布

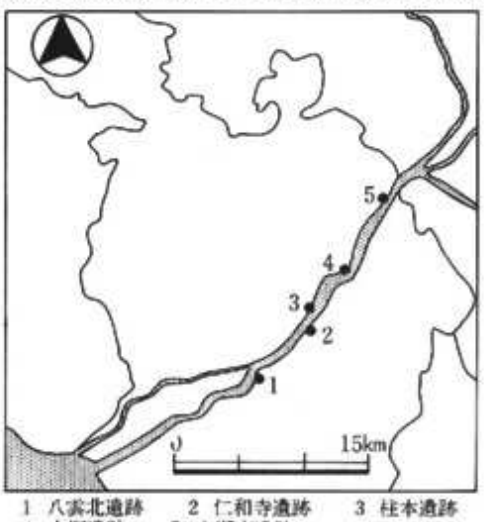


挿図第44　楠葉型瓦器椀と和泉型瓦器椀の分布

堂造営の際、交野郡の土が法要に使う土器の材料として平城京に運ばれているのをはじめ、大同3(808)年には交野郡雄徳山の土をかってに掘ってはならないという禁令が出ている。また、『堤中納言物語』には楠葉牧は河内鍋の生産地として有名であったことが記されている。

このように、楠葉を含む交野郡が土器つくりに適す良質の土を長期にわたって産していたことを記録の上で知ることができる。楠葉の住民が宮中や摂関家に属する特殊な身分であり、「座」につながる採土・製作・販売の独占団体を結成していたことが想像される。『類聚雑要抄』によれば楠葉の土器生産者は「楠葉国作手」と称して内膳司に所属している。さて、『梁塵秘抄』の記事のみでは、土器づくりの生産していたものが瓦器か土師器かは区別できないが、藤原忠実家年中行事を示す『執政所抄』において「黒器」の奉納を楠葉牧に下知している記事があり、瓦器をさすものとみられる。楠葉東遺跡から出土した瓦器椀は、上牧遺跡をはじめ高槻市内の各中世遺跡から出土している。その特徴は前節の編年で紹介したとおりである。安満遺跡から出土した瓦器椀(図版第59－4)・黒色土器椀(図版第59－3)には特異なものがみられる。楠葉で生産されたことを示す一例として紹介すると、見込みに数条の暗文を十文字に施した破片がある。これと、同じ暗文を施した黒色土器椀が楠葉東遺跡から出土しており、また四條畷市中野、守口市八雲北遺跡出土の瓦器椀・小皿にも同じ暗文が施されている。黒色土器と瓦器の関連について述べるのは本節の主要な目的ではないが、楠葉牧で瓦器が生産[5]されたことには疑いはなかろう。このような点にも留意しながら楠葉型の分布についてもう少し検討すると、生産地である楠葉を中心にして北河内一帯、三島地方の東部、平安京およびその周辺に密に分布している。さらに東は木津川流域の各遺跡から、平城京周辺においても一部出土している。西は淀川下流域の各遺跡から出土しており、確認できる範囲では兵庫県尼崎市辰巳橋遺跡がほぼ西限である。なお、微量ではあるが岡山県山陽町、福岡県大宰府でも出土している。北は大阪府豊能郡[6]能勢町から出土している。南は中河内地方の各遺跡から、また大和川を越[7]えて羽曳野市狭山遺跡から出土しているが、いずれも量的には少量である。淀川河床から出土する瓦器椀には後述の和泉型が混入するが、5遺跡(挿図第45)についてその比率を出したものが表2である。平安京に近い遺跡ほど楠葉型が多くなり、楠葉型は平安京周辺を主たる消費地とする瓦器椀であるといえる。

つぎに『堤中納言物語』に記された河内鍋が瓦器か土師器かを文献で知ることができないが、楠葉型の瓦器椀の分布する範囲には三



1 八雲北遺跡　2 仁和寺遺跡　3 柱本遺跡
4 大塚遺跡　5 広瀬南遺跡

挿図第45　淀川河床の遺跡

足の付く羽釜（足釜）が出土し、この羽釜は中河内以南や、西摂では少量である。この羽釜の出現年代は不明確であり、河内鍋がこの羽釜に相当するかどうかは非常に疑問である。しかし、この羽釜もその分布に楠葉型の瓦器椀と共通する特徴があることを付け加えておく。

表2　淀川河床遺跡出土の瓦器分類表　（）は%

型＼遺跡	八雲北	仁和寺	杜本	大塚	広瀬南
楠葉	163 (33.3)	139 (66.8)	786 (69.0)	113 (76.4)	161 (80.5)
和泉	327 (66.7)	69 (33.2)	353 (31.0)	35 (23.6)	39 (19.5)
計	490 (100)	208 (100)	1139 (100)	148 (100)	200 (100)

大和型　大和地方の瓦器は法隆寺出土資料を中心にして、稲垣晋也氏によって編年され、畿内における中世土器研究の基準とされてきた。ついで白石太一郎氏によって3期編年案が明らかにされたが[8]、稲垣案とは若干の差異が認められる。両氏の編年案は、地域差を考慮すれば似た形になるとも考えられるが[9]、その年代観は現在も結着がついていない。ともかく、両氏の業績は中世土器研究の先駆的なものであった。両氏の編年案が公表された時期には不明であったものが、近年の発掘調査で明らかになってきており、大和地方の編年を再検討する段階にきている。記録によると、15世紀には興福寺所属の土器座が法隆寺所属の土器座を圧倒して大和一円を独占下においたらしく、それ以前には大和の各地に土器生産地があったらしい。しかし、現段階では詳細な差異は指摘できない。天理市布留遺跡出土のものに若干差異がみとめられるが[10]、現段階ではその区別は不可能である。

大和における最近の資料として桜井市纒向遺跡から出土した瓦器椀があげられる[11]。溝や井戸から出土したものが主で、一括性に疑問の残る点もあるが、大和における瓦器椀の成立と展開を知る上で重要である。この遺跡では黒色土器と瓦器の使用期間が重複しており、もっとも古い段階の瓦器の一群には規格性が認められず、高槻における宮田遺跡神社南地区と同じ傾向を示し、共伴する土師器皿にもまた共通性がみられる。報告者はこの古い一群を分類して編年的に並べることを試みているが、基準としている白石氏のI期という時期の瓦器がいまひとつ不明確であるため、分類にも曖昧さがみられる。

纒向遺跡や平城京周辺出土のもっとも古い段階の瓦器椀は楠葉型との区別が困難で、ただひとつ暗文が細くて、ていねいであることが指摘される[12]。外面の暗文が省略気味となる次の段階には、器形が丸味をもち差異がはっきりする。外面の暗文が無くなる時期には器高が低くなり、器高指数30以下のものもみられる。また、横なでが強調されて口縁部が屈曲して直立気味となるものもある。また、この時期まで、口縁端内側の沈線はほとんどに施されるらしい。見込みの暗文は楠葉型が同一時期でも多様であるのに対し、古い段階がジグザグの平行線状(鋸歯状)か格子状、次が連結輪状、次が同心円状と比較的単純に変化している。終末期には口径10cm以下の小椀や皿状のものが出土するようになり、地域色が顕著となる。

これら大和型の瓦器椀は、他地域の瓦器椀に比べ、もっともていねいに生産されていることが特徴で、器壁が薄く、胎土も精良である。

大和型に最も近いものとして楠葉型があげられるが、どちらが先に瓦器を生産したか、相互間の技術伝達等を知る術は無い。しかし薬師寺西小子房・十字廊地区から出土した黒色土器の小椀に高台が二重になったものがみられる。同一のものが枚方市楠葉東遺跡で出土しており、[13]楠葉と大和に共通の製作技術があったか、それとも楠葉の製品が大和に運ばれたことを示している。

さて、瓦器椀が焼成されたかとみられる瓦窯が興福寺旧境内の奈良市登大路で検出されており、白石氏のいう第Ⅱ期の瓦器椀が出土している。大和型の瓦器がすべてこの瓦窯で焼成されたとは考えられないが、これによって生産地のひとつが大和盆地の北部にあったことを推定させる。

この大和型の瓦器椀は大和盆地の全域に分布しているが、分布の一端は峯生地域から名張を通り、伊賀盆地におよんでいる。伊賀における瓦器椀の出土例としては上野市猪田田中・同才良遺跡が早くから知られているが、最近の調査では上野市北堀池・同馬場西遺跡・伊賀町的場遺跡で[14]大和型の瓦器椀が出土している。他では生駒山地を越えた河内地方でも大和型と報告されている[15]例があるが、楠葉型との混同があるかもしれない。また、少量であるが紀ノ川下流域や高野山奥の院でも出土している。[16]

このように、大和型の瓦器椀は大和盆地を主な分布範囲とし、伊賀盆地にも運ばれている。伊賀には黒田庄をはじめ東大寺領が多く、大和で生産された瓦器椀が東大寺領へむかう輸送品の一品を占めていたことは確実であろう。

和泉型　高槻市宮山遺跡出土の瓦器椀を宮田タイプとして報告したことがあるが、それが和泉型にあたるもので第1節のとおり高槻市の西部から多数出土している。

和泉地方の瓦器椀としては高石市伽羅橋遺跡出土の資料が著名であったが、その資料は瓦器椀の終末段階にあたるものである。最近の各遺跡での発掘調査によって、より古い段階の瓦器椀が出土している。樋口吉文氏は法量の統計処理から編年を試みている。[17]また、高石市大園遺跡では出土資料をⅠ～Ⅴ類と編年的に分類している。[18]これらの成果をもとに、その特徴をみると、各時期に共通しているのは大和・楠葉型に比べ[19]質・製作手法ともに粗雑であることが特徴である。口縁端内側には沈線が施されず、内外面の暗文は太く、体部外面には指圧痕が明瞭にのこる。詳細に、その特徴をみると、樋口氏の指摘する古い時期の泉大津市豊中遺跡1・5号井戸出土の資料では、深味があり、断面方形の外方に踏んばる安定した高台が付く。外面に暗文が施されなくなる大園遺跡Ⅲ類の時期には、器壁が薄くなり、高台は省略された断面三角形のものも加わるが、先端を押さえて断面方形としたものが主である。また、この時期頃には口

縁部の横なでが強調され、口縁部と体部の境は段状を呈している。次の大園遺跡Ⅳ類の時期は横なでが強く施され口縁部が大きく外反するようになり、高台は極めて簡略化されて直径4cm以下となる。終末期には、皿状の器形となり高台は消失する。大園Ⅳ類あるいは終末段階の大園Ⅴ類の時期には炭素の吸着が不十分で色調が灰白色を呈すものが多くなる。

内面の暗文は古い時期には方向の確認も困難な程無造作に施されているが、徐々に横方向に施されていることがわかるようになる。斜格子・平行線状などが見込みにみられるが、ヘラ先で刻まれたように細いものと、幅の太いものがある。また、大園遺跡Ⅲ類頃からは連結輪状暗文も見られるようになり、終末段階には数条の渦巻状暗文のみとなる。法量は古い時期には、まとまりを欠いているが、徐々に規格性が認められる。しかし、概して楠葉・大和型に比べ器高が低く、大園遺跡Ⅳ類頃には器高指数30以下となっている。

このような特徴をもった和泉型の瓦器椀は和泉地方の全域に分布しているのをはじめ、隣接する中・南河内地方、南では和歌山県下に認められる。紀伊地方の瓦器椀は巽三郎氏の報告では精・粗二種があることが指摘されており、粗製品が和泉型に相当するものとみられ、和歌山市西之庄遺跡[20]をはじめ海南市付近まで分布しているようである。西へは、大阪湾に沿って分布し、尼崎市辰巳橋・同金楽寺遺跡[21]などの西摂にみられ、阪神地方での西限は芦屋市芦屋廃寺[22]で確認される。さらに、西では、岡山市百間川遺跡の井戸から早島式土器と共伴しているのをはじめ、四国の香川県観音寺市鑵子塚古墳[23]でも出土している。淀川流域では、楠葉型とともに多く出土し、平安京内の左兵衛町跡・同内膳司町跡出土資料[24]などに和泉型の特徴がうかがえる。和泉型の分布は表2でポしたとおり、楠葉型とは対照的に西で多量に出土することを示している。[25]以前に宮田タイプとして紹介したものが和泉型に相当することは前述したが、三島地方では茨木市中河原西・同東奈良遺跡[26]・吹田市青志部遺跡[27]からも出土している。

さて、和泉に隣接する中・南河内地方でも瓦器椀の出土例が増加しているが、前述のように、この地方には和泉型の特徴をもつ瓦器椀が多量に出土している。これに対して、大阪市長原遺跡から出土した資料から中河内在来の土師器・黒色土器が他地域の瓦器製作者の影響をうけて中河内で瓦器製作を開始したとの報告がある。[28]中河内の瓦器は大和と和泉の中間的様相を示すと考えられているが、和泉市和気遺跡出土資料[29]には長原遺跡SK022出土とまったく同じ資料がある。また大園遺跡出土の黒色土器には体部内面に大きな螺旋状暗文を、あたかも菊花状を呈するように施す椀があるが、類似する暗文を施す瓦器椀が和気遺跡でも出土する。さらに、同様のものが長原遺跡や近隣の久宝寺遺跡からも出土している。[30]仮に、瓦器椀成立当初のものが中河内で製作されていたとしても、それ以後のものに和泉型との相違を見い出すことは困難である。椀以外でも、高台付の瓦器片口鉢や羽釜などに共通性が認められ、中・南河内の瓦器は和泉型の強い影響下で生産され、また、和泉型が多量に流入していることが想定される。

南河内の藤井寺市狭山遺跡やその周辺出土の瓦器椀をもとに尾上実氏は瓦器椀を10期に編年し、共伴する羽釜などを明らかにしているが、さきの樋口氏の試みなどとともに今後の研究に期待がよせられる。[30]

これら和泉型の瓦器椀を焼成した窯跡は泉北古窯址群中の野々井遺跡から検出されている。[32]また、黒色土器の窯跡も堺市四ツ池遺跡から検出されている。泉北古窯址群は古墳時代以来、須恵器の大生産地であったが、平安時代にはその地位を尾張釜器にとってかわられ、[33]平安末期にはほとんど生産活動は行われていないらしい。須恵器の窯跡に混じって泉北古窯址群の一画に瓦器の窯跡が検出され、その瓦器椀が他地域で生産された瓦器椀より広範囲に分布していることは、朝廷に支配され、須恵器をつくりつづけた部民の後裔たちが天皇支配権との直結を利用して瓦器椀の販路を拡げたとみられる。保延5（1139）年直後の和泉国に検出される大膳職陶寄人は「座」的なものを形成していたらしいが、須恵器生産よりも瓦器の生産に関係していたのではなかろうか。

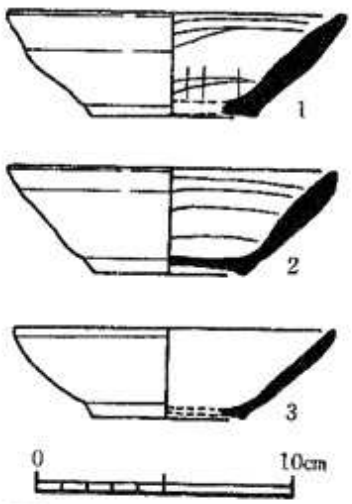
なお、第1節の宮田・郡家川西遺跡で紹介したように、和泉型と楠葉型が共伴する資料があり、横の関係を知るうえで重要である。また、長原遺跡や中河原遺跡でも同じことがみられる。

丹波型　丹波地方の瓦器については、これまでほとんど知られていなかったが、篠山盆地を中心にした最近の発掘調査で、その実態が明らかにされつつあり、山本三郎氏によって、その一部が報告されている。氏の報告された多紀郡丹南町堀ノ内遺跡や、最近の調査で出土した同郡篠山町寺内・黒岡遺跡等の資料[34]を参考にその特徴をみてみよう。瓦器椀は、いずれも、外面に暗文が施されない時期の資料[35]であるが、見込には細い鋸歯文状、あるいはその省略された暗文が、体部内面には間隔のあく渦巻状の暗文が施される点では楠葉型に類似する。器形は若干異なり、口径に比して大きい高台が付く。体部は内湾気味にたちあがり、口縁部は肥厚し、外面を強く横なでしている。口縁端内側の沈線は施されない。色調は灰黒色が主で、胎土は比較的精良で灰白色である。瓦器小皿にも椀と同様の暗文が施されるが、器形は土師器の小皿と類似している。その土師器小皿には、底部手づくねのものと、底部糸切りのものがある。これまでに出土している瓦器椀の多くは外面に暗文が施されない時期のものであるが、丹南町野中遺跡からは外面に暗文が施された資料が出土していてやはり地域色がみられる。

つぎに、丹波地方の特徴をのこした資料が大阪府豊能郡豊能町から出土しているので紹介しよう。

猪名川に注ぐ余野川沿いの川尻遺跡を、府道建設に先立って大阪府教育委員会が発掘調査を実施したところ、中世の遺物類が出土し、そのなかに瓦器椀破片が含まれていた。瓦器椀は体部が厚いものと（挿図第46）、薄いものとがある。前者は口径約13cm・器高約4cm[36]・高台径約6cmを測り、薄い底部から体部が直線的にのび、口縁部はまっすぐにおわるが、外面を強く横な

でしている。体部の厚さは中位からやや上方で7～9㎜を測る。底部には、断面三角形の高台が付くが、粘土紐を無雑作に貼りつけたものである。内面はていねいになでたあと、細い暗文が渦巻状に、見込には平行線状に施される。後者もほぼ同様であるが器壁が薄く、口縁端外面を面取りしている。



第図第46　川尻遺跡出土の瓦器椀

このような特徴をもつ瓦器椀の分布は篠山盆地を中心に東は亀岡市御上人林廃寺から、[37]西・北は氷上郡市島町三ツ塚遺跡や同郡柏原町東奥第1号墳から出土している。また、京都府綾部市高谷古墳群から出土した瓦器椀も[38]同じ特徴をもったものであろう。さらに豊能町川尻遺跡のように北摂の一部にも分布している。[39]

丹波型の瓦器椀は楠葉型と異なる器形を呈しているが、細くて、比較的ていねいな暗文を施す点は楠葉型との共通性が指摘できる。豊能地方では楠葉型も出土しているが、この地方は平安時代には能勢採銅所をはじめ、皇室・公家・寺社領が存在し、特に石清水八幡宮領が多い。石清水八幡宮は現在でもこの地方の信仰の対象であり、豊能地方と丹波地方は隣接しており、同一地域といっても過言でない。このような地理的・経済的背景がみられるので、丹波地方の瓦器椀は、豊能地方を媒介として楠葉型の影響を受けて生産が開始されたものとみてよかろう。

丹波地方西部には、強い地方色を示すもうひとつの瓦器椀が分布している。底部を糸切りした厚手のもので、柏原町東奥第1号墳や市島町三ツ塚遺跡出土のものが知られている。[40]

この器形の瓦器椀は篠山盆地ではまったく出土せず、但馬・丹後地方の黒色土器・瓦器椀に類例がみられる。

紀伊型　和歌山県下の瓦器については巽三郎氏がその特徴をまとめられている。[41]氏の報告は紀伊地方の瓦器研究の出発点であり、今日でも有意義な指摘が多く認められる。[42]和泉型のところでもふれたが、氏は報告のなかで瓦器椀には精・粗に二大別することができ、粗製品には高石市伽羅橋遺跡の瓦器椀と同様式のものが出土していると指摘されているように、粗製品は和泉型に相当するもので、管見では和歌山市太田黒田・同雨が谷・同西之庄遺跡にも出土例がある。

もうひとつの精製品が紀伊地方の特色をもつものであるが、管見の和歌山市周辺の瓦器椀を[43]参考にその特色を記してみると、概して古い時期では、器形・法量とも楠葉・大和型に類似しているが、新しい時期には器高が低くなり和泉型に類似する。器形は底部から体部への移行点

は内弯するが、体部から口縁部にかけては直線的にのび、横なでが強く、口縁部は外反気味で、端部内側に沈線は施されない。外面の指圧痕はあまり目立たないが、古い時期に属するものも、外面に暗文は施されていない。内面は楠葉・大和型に共通する暗文が施されているが、若干太目で雑である。見込みは古い時期には平行線状の暗文もあるが、螺旋状のものも多々あり、やや新しくなると連結輪状のものが目立つ。胎土は比較的精良であるが、楠葉・大和型のように銀黒色の色調を呈すものは少なく、概して炭素の吸着が不十分で、灰色あるいは灰黒色である。器壁は各時期ともやや厚手である。

土師器では底部手づくねの皿と底部糸切りの皿がある。羽釜は大和に類例の多い、口縁部がくの字形に屈曲し、端部が内側に折り返されたものがみられる。

和歌山市周辺出土の瓦器椀をみると、和泉型に共通する製作手法もみられるが、大和に類例の多い羽釜が出土していることや、紀の川流域には大和型の瓦器椀が出土していることなどから[44]、基本的には大和型の製作手法の影響を受けているものと考えられる。

和歌山県下では串本や新宮にまで瓦器椀が分布しており、それらがすべて和歌山市周辺の特徴をもつものかどうかは実見していないので不明である。最近、和歌山県下では中世関係の調査がさかんであるが、出土遺物のまとまった報告は明らかにされておらず、今後に期待がよせられる。なお、紀伊型の瓦器椀の分布については充分把握していないため分布範囲は省略した。

その他　以上五つの地域の瓦器椀についてその特色と分布範囲を検討したが、楠葉型や和泉型のように広範囲に分布する瓦器椀以外に、より限定された小地域に分布する瓦器椀の存在が想定される。例えば、平安京出土のもので、どの地域の特色をもつのか不明のものや、兵庫県洲本市武山遺跡では淡路型とでも称すべき瓦器椀が出土しており[45]、楠葉・大和型等と比べて瓦器椀の生産と流通にもうひとつの側面を見い出すことができる。

さらに、四国東部の香川県や徳島県において、瓦器椀や鍋の報告例があるが、和泉型のところでもふれたように、瀬戸内海沿岸には少量であるが和泉型が分布しており、また在地で生産されたものとみられる瓦器椀が香川県綾南町西村遺跡[46]や徳島県三好町昼間遺跡[47]から出土しており、その差異をまだ確かめていない。

さて、近江・丹後地方では畿内の瓦器と併行するものと考えられる黒色土器が報告されている。近江では大橋信弥氏がまとめられているのでそれを参照すると、器形は畿内の黒色土器や瓦器椀と比較すると、むしろ瓦器に近く[48]、炭素は口縁部外辺と内面に漆黒状に付着し、瓦器よりも黒色土器に近いものである。器種には椀と皿があるが、椀が量的に多いという。

丹後では高橋美久二氏が網野町林遺跡の黒色土器椀A類の胎土は瓦器と同じ灰白色を呈し、畿内で黒色土器から瓦器への技術革新をした段階と同列におくことができるとされている[49]。そして、丹後の黒色土器の特色は、内面のみを黒色化し、高台は付されず、底に糸切痕を残す

ことにある。

この林遺跡出土の黒色土器椀は丹後地方一円に分布し、類例は豊岡市など但馬地方にもあり、丹波型でふれた柏原町東奥一号墳や市島三ツ塚遺跡との関連が想定される。

このように、畿内外辺部分では瓦器の影響を受けながら、地域色の強い黒色土器の生産をつづけたらしいが、その分布と編年は今後の大きな課題である。

注① 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」(『古代学研究』54 1969年)
② 前掲①と同じ
③ 白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器」(『古代学研究』85 1977年)
④ 「楠葉東遺跡」(『枚方市における遺跡調査概況1968～1976年』 枚方市文化財研究調査会 1976年)
⑤ 楠葉東遺跡出土遺物については平川清式・宇治田和生氏から、八雲北遺跡出土資料については人見薫氏から拝見した。野島稔『中野遺跡発掘調査概要・I』(四條畷市教育委員会1978年)
⑥ 岡田務氏から資料を拝見した。
⑦ 松本和夫氏、森田勉氏から資料を拝見した。
⑧ 稲垣晋也「法隆寺出土の瓦器椀」(『大和文化研究』第6巻第4号 1961年)
⑨ 前掲①と同じ
⑩ 置田雅昭氏から資料を拝見した。
⑪ 石野博信他『纒向』(桜井市教育委員会 1976年)
⑫ 吉田恵二氏から資料を拝見した。
⑬ 『昭和52年度・平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(奈良国立文化財研究所 1978年)
⑭ 沖島卯之「三重県田中遺跡出土の瓦器と緑釉土器片」(『古代学研究』15・16 1956年)
⑮ 駒田利治『的場遺跡発掘調査報告』(伊賀町教育委員会 1978年) 報告者は的場遺跡出土の瓦器椀は地域色の強いものとしてその特徴を述べているが、それは大和型の特徴である。
⑯ 『紀の川用水建設事業に伴なう発掘調査報告書』(和歌山県教育委員会 1978年)
⑰ 森浩一他「大阪府高石町伽羅橋遺跡調査報告」(『古代学研究』15・16 1956年)
⑱ 樋口吉文『新金岡町所在遺跡発掘調査抄報』(堺市教育委員会 1978年)
⑲ 神谷正弘他『大園遺跡発掘調査概報』2 (大園遺跡調査会 1976年)
⑳ 巽三郎「紀州の瓦器について」(『古代学研究』15・16 1956年)
㉑ 久貝健氏から資料を拝見した。
㉒ 岡田務他『尼崎市金楽寺貝塚I』(尼崎市教育委員会 1976年) 岡田氏から資料を拝見した。
㉓ 村川行弘他『芦屋廃寺址』(芦屋市教育委員会 1975年) 森岡秀人氏から資料を拝見した。
㉔ 松本和夫氏から資料を拝見した。
㉕ 松本敏三氏から資料を拝見した。
㉖ 甲元真之「平安京左兵衛町跡の発掘調査」(『古代文化』第28巻第7号 1976年) 平安京内膳司町跡でも出土しており、奥村清一氏から資料を拝見した。
㉗ 奥井哲秀、宮脇薫氏から資料を拝見した。
㉘ 鍋島敏也他「大阪府吉志部遺跡の遺物」(『古代学研究』54 1969年)
㉙ 井藤徹他『長原』(大阪文化財センター 1979年)
㉚ 和泉地方の資料については神谷正弘・灰掛薫・阪口昌夫・井藤暁子氏から拝見した。
㉛ 尾上実『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』(大阪府教育委員会 1978年)
㉜ 中村浩『陶邑II』(大阪府教育委員会 1977年)
㉝ 『四ツ池遺跡第3回現地説明会要旨』(四ツ池遺跡調査会 1978年)
㉞ 山本三郎「丹波出土の瓦器について(1)」(『兵庫考古』第4号 1976年)

㉟ 池田正男・渡辺昇氏から資料を拝見した。
㊱ 堀江門也氏から資料を提供された。
㊲『御上人林廃寺第3次発掘調査報告』（亀岡市教育委員会　1978年）また、北桑田郡京北町の各遺跡から出土した資料も丹波型の特徴が見受けられる。平良泰久「周山瓦窯跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1979年）
㊳ 喜谷美宣他『柏原町東奥第1号墳・誉田古墳発掘調査報告書』（兵庫県教育委員会　1973年）
㊴ 山下潔己他『高谷古墳発掘調査概要』（綾部市教育委員会　1973年）
㊵ 橋本久『丹波三ツ塚遺跡Ⅱ』（市島町　1975年）
㊶ 高橋美久二他『林遺跡発掘調査報告書』（網野町教育委員会　1977年）
㊷ 前掲⑳と同じ
㊸ 大野左千夫氏から資料を拝見した。
㊹『紀の川用水建設事業に伴なう発掘調査報告書』（和歌山県教育委員会　1978年）
㊺『武山遺跡発掘調査報告』（洲本市教育委員会　1975年）
㊻ 沢井静芳氏から資料を拝見した。黒色土器とした方がいいかもしれない。
㊼「昼間遺跡発掘調査概報（『徳島県文化財調査概報1976年度』徳島県教育委員会1978年）
㊽ 大橋信弥『久野部遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会　1977年）
㊾ 高橋美久二他『林遺跡発掘調査報告書』（網野町教育委員会　1977年）最近、杉原和雄氏が丹後地方の黒色土器についてまとめられている。杉原和雄他『中上司遺跡発掘調査報告書』（加悦町教育委員会　1979年）
㊿ 前掲㊵と同じ

第4節　陶磁器の出土状況

瓦器椀の地域色と分布に注目をして検討を加えてきたが、他の中世陶磁器についてみてみよう。表3は高槻市内の主要な中世遺跡から出土した器種を分類したものである。おおむね11世紀後半から15世紀までの年代幅をもつが、遺物全体に占める陶磁器の傾向を知ることができよう。前節までのまとめと若干の補足をしておこう（挿図第47・48　図版第58・59）

表3　高槻市における中世土器・陶磁器分類表（　）は%

遺跡 / 器種	上　牧	安　満	宮田1	宮田2	芥川城
瓦　器	2,273(38.0)	761(54.3)	959(32.5)	2,303(54.7)	997(48.6)
土師器	3,398(56.6)	426(30.4)	1,948(66.2)	1,459(34.6)	779(38.0)
須恵器	181(3.0)	123(8.8)		379(9.0)	89(4.3)
陶　器	37(0.6)	41(2.9)		33(0.8)	71(3.5)
磁　器	84(1.4)	25(1.8)	38(1.3)	40(0.9)	51(2.5)
その他	26(0.4)	25(1.8)			64(3.1)
計	5,999(100.0)	1,401(100.0)	2,945(100.0)	4,214(100.0)	2,051(100.0)

（宮田1は神社南地区、宮田2は77年度調査）

須恵器　古代以来の無釉還元焔焼成の技術をうけつぐ須恵器は、各遺跡において平均約6.3%を占めているが、生産地が明確なものは兵庫県神戸市神出・同明石市魚住・同三木市久留美古窯など東播地方のものと香川県綾南町十瓶山古窯のものがあり、主として片口を有する捏鉢と小形の甕が出土している。大形器種の破片も出土しているが、生産地は明確さを欠いている。安満・宮田遺跡から出土している瓦質に近い甕の破片には、魚住古窯出土例と類似するものがあり、やはり東播地方との関連が想定できる。

神出古窯の製品は杯（28）が11世紀後半ないし末期とみられるが、多くは宮田遺跡出土例（210）のように第Ⅱ期の瓦器椀と共伴する捏鉢である。魚住古窯の捏鉢は第Ⅱ期の瓦器椀との共伴は認められず、安満遺跡で第Ⅲ期後半の瓦器椀と共伴するものがあり、芥川城跡ではⅣa期の備前擂鉢と出土している。神出窯と魚住窯では13世紀のある時期に生産が神出古窯から魚住古窯に移るようであるが、高槻市から出土している例からもその傾向がうかがえる。久留美古窯の製品は杯が1点柱本遺跡から出土しているが、他の器種はまったくみられない。

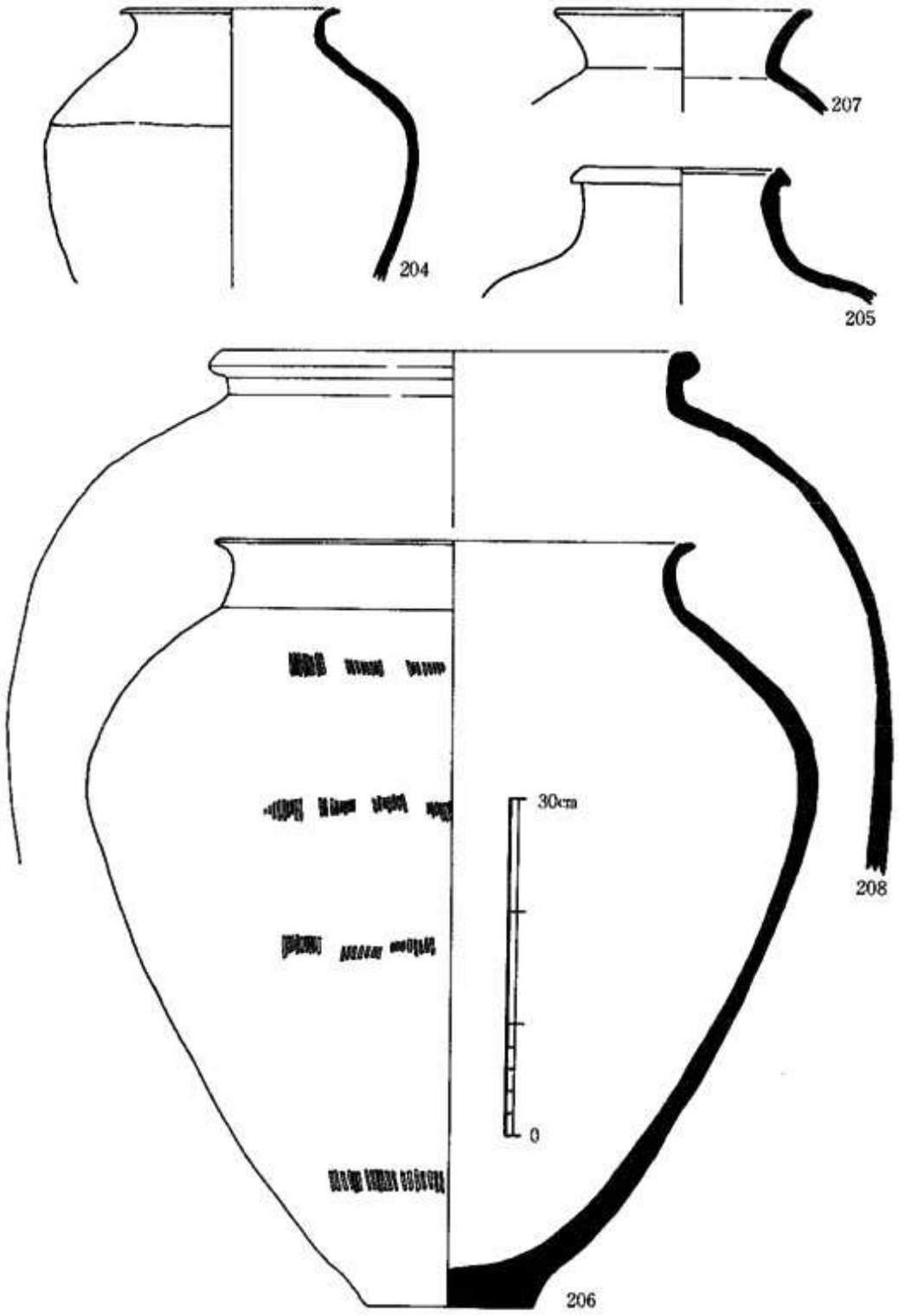
十瓶山古窯で生産された小形の甕（209）が宮田遺跡から出土している。口径15.5cm・器高29.0cm・最大腹径23.0cmを測り、底部は平底である。外面には条痕状の細かい叩き目が施され、その

叩き目を消すように磨いている。この甕は第Ⅲ期の瓦器椀と共伴する。また、上牧遺跡では、格子状の叩き目を施した甕の破片（355）が出土している。これらの須恵器は、その出土状態からおおむね12世紀から15世紀にかけて使用されたものであるが、この時期の大型器種としては、常滑の大甕・大壺があり、小形器種は畿内周辺部から供給されたという分業体制がみられ、備前の擂鉢が出現するまでは神出・魚住の捏鉢が盛んに使用されている。これら東播地方の窯はいずれも平安京の六勝寺や鳥羽離宮造営に際し、瓦類を納めている。東播地方には院の荘園があり、この地方の受領層と院との強い関係のあったことも想像される。①柱本・大塚遺跡・守口市八雲北遺跡でも神出・魚住古窯の捏鉢が出土しており、淀川を通って平安京や畿内各地に運ばれたらしく、大和・和泉地方でも出土している。

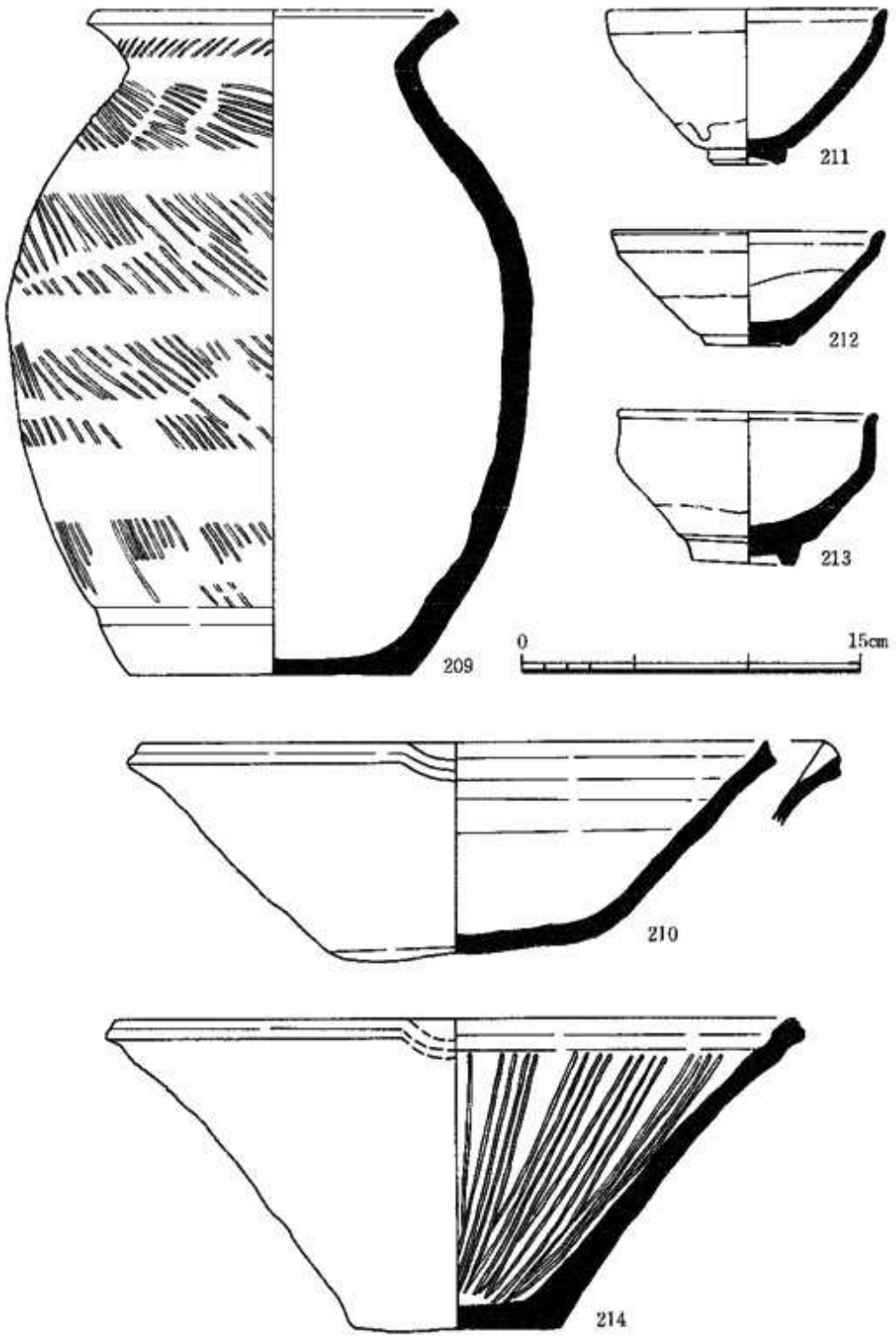
『延喜式』で須恵器調貢国に指定された讃岐国に所在する十瓶山古窯址群は、特定の供給対象はないが、平安京へ供給した瓦類も焼成しており、東播地方との共通点も見い出せる。十瓶山古窯で生産された製品は平安京周辺にしか出土例がないが、今後各地でその出土例が増加するであろう。

陶器　いわゆる「中世の六古窯」で生産された常滑・備前・瀬戸・丹波・信楽が各遺跡から出土しているが、平均で1.8%しか占めていない。おおむね14世紀以後の芥川城跡では3.5%と高率であるが、時期的なものか遺構の性格によるものかは他地域の例と比較検討を要する。また、常滑は梶原寺跡から出土した口径43.4cm・器高68.0cm・肩部最大径66.0cmを測る大壺(206)のように第Ⅱ段階のものから、安満遺跡4号井戸から出土した大甕（102）のような第Ⅳ段階のものまでが認められる。宮田遺跡では中形の壺（204・205）もみられるが、主として大壺・大甕が使用されたらしい。これらの大形器種は種籾や糞尿の貯蔵などに使用され、農業生産力の向上に貢献したものと考えられている。高槻市では、常滑が使用された12世紀後半から15世紀前半にかけては須恵器の大形器種はほとんど判明しておらず、後述するように南北朝期に備前大甕が出現するまでは常滑の大形器種の占める割合が大きかったとみられる。なお、常滑の鉢はまったく出土しない。これまで、常滑の製品は主として経塚の外容器や、あるいは貴族・有力寺院という上層階級に使用される価値の高いものとして把えられてきたが、高槻市内の主な中世遺跡からはすべて出土しており、中世の農民生活に溶けこんでいたことがわかる。

備前には成立当初の形態を示す甕（207）が安満遺跡から出土しているが、この時期の備前は商品として各地へ運ばれることはほとんどないため、あるいは備前以外の地方窯の製品とも考えられる。これを除くと、備前の最も古いものは郡家川西遺跡出土の大甕(208)と上牧遺跡溝2出土の擂鉢（214）があげられる。いずれも、香川県水の子岩海底から出土したものと類似し、②おおむね南北朝期のⅢb期からⅣa期にかけてのものと考えられる。Ⅲb期の資料は限られているが、次のⅣa期になると安満・梶原寺跡・天神山など各遺跡から出土するようになる。出土



挿図第47　高槻市出土の常滑・備前焼



挿図第48　高槻市出土の瀬戸・丹波焼と十瓶山・神出古窯の須恵器

するものは主として擂鉢と大甕で、小形の壺はまだ一点も認められない。

備前流入後は徐々に常滑は姿を消し、Ⅳb期にはまったく姿を消している。擂鉢はその堅牢さから、須恵器の捏鉢を駆逐し、Ⅳb期には市場をほぼ独占したようである。

瀬戸はおろし目皿・天目茶碗・灰釉平碗などが出土しているが、灰釉の四耳壺③や瓶子などはまだ認められない。おろし目皿は郡家川西遺跡で出土している。それは第Ⅱ・Ⅲ段階のものであろうが細片であり、明確な時期はおさえられない。天目茶碗は郡家川西遺跡・梶原寺跡・高槻城跡・芥川城跡で出土するが、その遺跡の性格は中世村落とは異なっている。

郡家川西遺跡から出土したものは底部外面を内ぞりに削る第4段階（15世紀）のもの（211）である。また、同時期の鉢（212）も出土している。梶原寺跡出土の天目茶碗は断面方形の分厚い高台を削り出し、高台脇を鋭く削り、口縁が大きく屈曲する16世紀後半期のもの（213）である。高槻城跡出土のものはこれらの中間的な時期にあたるものである。灰釉平碗は芥川城跡から出土しているが、底部外面に糸切り痕をのこし、郡家川西遺跡出土の天目茶碗と同時期のものであろう。しかし、小破片であり、いまひとつ明確さを欠いている。

丹波・信楽焼④は共に限られた遺跡しか出土しない。室町時代以後遺跡の調査体制が不十分であるため、時期のわかる良好な資料はほとんど無い。このうち、丹波の擂鉢で比較的良好なものがある。それは、天神山遺跡から出土したもの(214)で、口径31.0 cm・器高13.5cmを測り、口縁内側に凹線状の窪みがめぐり、内面には4本単位の櫛歯が施されている。15世紀から16世紀にわたる室町時代末期のものである。この他に、小破片であるが芥川城跡や上牧遺跡から、室町時代初期の櫛歯を用いず一本ずつ中心から放射状に目を引くものがある。信楽・唐津は安満遺跡などで小破片が認められるだけであるが、今後、中・近世関係の調査が進展すれば、その出土量も増加するであろう。

中国製磁器　大宰府をはじめとする北九州地方の遺跡と比較すれば、量的には少ないが、中世遺跡であればどの遺跡からも出土するといっても過言ではない。各遺跡で出土遺物に占める割合は平均約1.6%となり、この種の分析を試みた高石市大園遺跡の約1%を上まわっている。このような比率の差が遺跡の性格によるものか、あるいは地理的なものによるものかは今後の検討課題である。

さて、中国製磁器は横田・森田氏等が碗・皿類を中心にして分類された器種・器形をほぼ揃えている。その変遷をまとめると、瓦器椀の第Ⅰ期には白磁碗Ⅱ類が主で、第Ⅱ期には白磁碗Ⅳ類となる。第Ⅱ期でも後半には白磁碗Ⅷ類や龍泉窯系・同安窯系青磁が加わる。第Ⅲ期には白磁碗もあるが、龍泉窯系・同安窯系青磁が主となる。第Ⅳ期には良好な資料を得ていないが、概して高槻市内から出土する中国製磁器の出土状況は、大宰府のそれと大差ないものとみられ

る。なお、最近の郡家川西遺跡の調査で、備前のⅣ期の擂鉢と共伴して青磁類が出土しており、室町期の様子を知る手がかりを得ている。

① 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究』13・14　1978年)
② 葛原克人他『海底の古備前』(山陽新聞社　1978年)
③ 大村敬通氏は魚住窯に於ける須恵器生産の消滅時期は室町中頃と考えている。『魚住古窯ニュース』2 (魚住古窯址調査事務所　1979年)
④ 瀬戸の製品については宮石宗弘氏から御教示を得た。

第5節　まとめ

高槻市内の各遺跡から出土した中世遺物を中心に検討を加えたが、そのなかにいくつかの特徴的なことが見いだせたので、その要約を記してまとめにかえたい。

記録によれば、12世紀末には宋銭の流入によって銭貨の流通が盛んになり、商品流通も活発におこなわれたことが知られる。宮田遺跡では、楠葉型瓦器椀にまじって多量の和泉型瓦器椀が出土するなど、高槻市でみられる12世紀中頃の様相は、盛んに商品流通の行なわれたことを物語っている。この時期の瓦器椀は量産化と規格化が進行し、瓦器では椀以外に羽釜・鍋・盤などの器形が加わる。また、土師器・常滑・中国製磁器など畿内や周辺の各地で生産されたものが、この時期以後各遺跡で多量に出土する。権門社寺はこの時期、北九州沿岸に荘園をもち、中国との私貿易を活発に行ない、平氏は瀬戸内海航路の整備を図った。海運を利用した物資輸送が盛んになり、常滑のような大形器種も運ばれ、中国製磁器には従来の白磁類に加えて、江南の同安・龍泉窯系青磁が加わる。地方の物資が流入するだけでなく、瓦器椀では楠葉・和泉型のように、物資輸送ルートを逆にたどって瀬戸内地方へ運ばれるものがあり、平安京周辺の商人が地方へむけて盛んに営業活動を展開していたことが想定される。この商品流通の展開は、自然経済の崩壊期にあたった地方での市場の成立が主要な条件のひとつであっただろう。

つぎに、瓦器と須恵器には共通した点が見い出せる。すなわち、楠葉型の瓦器生産者は宮中や摂関家につながる身分を有していたことは前述のとおりであり、その主要な供給地は平安京とその周辺である。大和型は奈良で生産されたものが地方に拡がっている。和泉型は古墳時代以来の中央との関係や大勝戦との関連から、広大な商圏を確保したことが想定される。さらに、丹波・紀伊型はその分布範囲は限られるが、楠葉・大和型の影響をうけている。東播地方で生産された須恵器には院と荘園・受領層との関係が想定される。十瓶山古窯の須恵器にも類似したことが想定される。このように、いづれも荘園関係や宮中・摂関家・有力社寺を媒介とする

流通が認められ、活発な商業活動を展開しはじめているが、大きな意味での荘園経済の機構に組みこまれた分業体制下にあるとみられる。

瓦器椀が姿を消す14世紀後半から15世紀にかけて、従来、大形器種を提供してきた常滑にかわって備前が出現する。この頃には東播地方の須恵器もみられるが、15世紀後半にはその姿を消し、越前を除く「中世の六古窯」が揃うようになり、前代の荘園経済から脱却した新しい社会的分業体制が確立していくのを想定することができる。

このように、さまざまな地域や時期に生産された土器・陶磁器が出土することについて、高槻市の地理的な要因も考慮に入れる必要がある。すなわち、市域の中央部を山陽道が通過し、芥川で山陽道と交差する丹波路は亀岡方面へ、柱本路は鳥飼・大阪へ至ることができる。市域の南を限る淀川流域には『土佐日記』にみえる鵜殿をはじめ、柱本・大塚などの物資の集積地がある。近世には、淀川沿いの住民は京・大阪間の物資輸送に従事する者がいたが、12世紀の記録では石清水八幡宮別当からの指揮で、淀川沿岸の荘園から淀川水運を上下する王朝貴族のために「酒肴」を供給する一種の組織ができあがっていたらしい。以上のように高槻は平安京に近く位置するため早い時期から商業活動に巻きこまれていたことが指摘できる。

土 器 観 察 表

備考

器種	図版	法量
小形壺A	1 − 16	器高 8.4 胴径 9.4 底径 4.3
	図面番号　図版番号	単位はcm
形式記号	1 土器番号	

表1　　竪穴式住居出土の土器観察表

竪穴式住居1

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
壺A	1 1	口径 14.0	・低く直線的に外方へ開き，粘土帯を垂下させる ○櫛描波状文を施す			○淡赤褐色
甕	1 2	口径 13.6	・短く外反し，端部はまっすぐにおさめる			○淡褐色
	1 3	腹径 18.0		・胴の張った球形 ○外面はタタキ目○内面はなでる		○淡褐色
	1 4	底径 3.0		・形態不明 ○外面タタキ整形		○黄褐色
台付鉢	1 5	底径 5.6			○ハの字形に開く脚台が付く	○淡赤褐色 ○砂粒多く含む

竪穴式住居2

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
小形丸底壺C	1－14 6	口径 7.6 器高 9.8 腹径 9.5 体高 6.7	・基部から直線的に斜上方にのび，中位でやや内湾気味となり，端部はまっすぐにおさめる	・最大腹径が中位にあり腰の張った偏球形である ○外面肩部に縦方向の細かい刷毛目がのこる ○内面をかるく箆削り	・やや尖底気味	○灰褐色 ○砂粒多く含む
	1－14 7	口径 7.2 器高 9.8 腹径 9.6 体高 7.2	・短く「く」の字形に外反し，端部はわずかに内傾気味となる	○最大腹径が中位にあり球形○外面の中位以下に細い刷毛目がのこる。 ○内面の上半をかるく削り，下半は指なで調整	・丸底	○灰褐色 ○砂粒多く含む

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯A_1	1－14 8	口径 16.9	・底部からわずかに内湾して口縁部につづき，端部はまっすぐにおさめる　○脚部との接合部に刷毛目がのこる		○赤褐色 ○砂粒多く含む
高杯A_2	1－14 9	口径 18.7 器高 16.9 底径 8.3	・横方向にのびる底部から，斜上方に直線的に口縁部へつづき，口縁部は外反し，端部はまっすぐにおさめる	・脚柱部は中空で，ゆるやかに開いて裾部へとつづく。内面にしぼり目がのこる	○黄褐色 ○砂粒多く含む
	1－14 10	口径 17.4	・横方向にのびる底部は内湾気味で，底部から口縁部への移行部は丸味をもっている。口縁部は外反し，端部はまっすぐにおさめる		○淡黄褐色 ○砂粒多く含む

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯 B_1	1－14 11	口径 23.1 器高 13.5 底径 13.7	・横方向にのびて，広い面をもつ底部から直線的に口縁部へつづく ・底部から口縁部への移行部は大きく屈折し，凸帯状の段をもつ ・口縁部はわずかに外反し，端部は面取りをする	・脚柱部は裾部にむけて拡がる ・裾部は大きく拡がり，端部内傾をつまみ出している ○脚柱部内面にはしぼり目がのこり裾部内面には粗い刷毛目が施される	○黄灰色 ○砂粒多く含む ○細部図版27
高杯 B_2	1－14 12	底径 10.4	・底部から外反せずに口縁部へつづく　・小さな凸帯状の段がつく	・脚柱部は裾部にむけて拡がり，裾部との境目の内側に稜がみられる ・端部はまっすぐにおさめる	○黄灰色 ○砂粒多く含む

表2　井戸出土の土器観察表

井戸10

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯 B_3	2－15 13	口径 13.0	・横方向にのびた底部から斜上方にまっすぐ口縁部につづく ・底部から口縁部への移行点には小さな凸帯状の段がある ○内面は放射状の磨みがき，外面は細かい刷毛を施した後，横方向になでる		○淡黄褐色 ○胎土精良
高杯 A_2	2－15 14	口径 16.0	・底部から内湾気味に口縁部へとつづき，口縁部は外反する ○底部外面をかるく篦削りする		○淡黄灰色
	2－15 15	口径 15.2	・内湾気味に口縁部へつづく ○底部外面をかるく篦削りする		○灰褐色 ○風化著しい
	2－15 16	口径 16.0	・同上		○赤褐色 ○砂粒多く含む
高杯	2－15 17	底径 9.7		・脚柱部は中空で，脚柱部と裾部の境は屈折気味である ・端部はまっすぐにおわる	○淡赤褐色
脚部	2－15 18	底径 9.7		・同上 ○しぼり目がのこる ○外面に赤色顔料の痕跡がある	○黄灰色 ○砂粒多く含む
	2－15 19	底径 12.1		・脚柱部は裾部でわずかに拡がる ・裾部は大きく拡がり，脚柱部との境は屈折し，端部を面取りする ○外面は脚柱部を篦でかるく面取りする ○内面は脚柱部，裾部上半部を篦削りする ○裾部は内面下半部，外面をなで，内部下半には布目が部分的にのこる	○黄灰色 ○細部図版27

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
鉢A	2-15 20	口径 11.8 器高 4.5	・斜上方にのび，端部は薄く，まっすぐにおさめる○ていねいな横なで	・わずかに内湾して口縁部へつづく	・丸底 ○内面を篦削りする	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む
小形丸底壺C	2-15 21	口径 7.7 器高 8.5 胴径 8.5 体高 6.4	・斜上方にわづかに内湾気味にのびる。端部はまっすぐにおさめる ○口縁部は横なで，体部との接合点外面を強く横なでする	・やや腰の張った扁球形 ○肩部を横なで，中位以下は細い刷毛調整○内面の中位は篦削り	・丸底 ○内面を指でおさえる ○円盤をおいたものとみられる	○黄灰色 ○胎土精良 ○体部中位から口縁部にかけて黒斑あり **○細部図版27**
甕A_1	2-16 22	口径 11.5 胴径 19.0	・斜上方に内湾気味にのび，端部は小さく丸味をもって肥厚する ○口縁部を横なで，頸部を強く横なでする	・やや長手の球形 ○外面上半部は横方向の刷毛調整○内面は頸部下約2cmから篦削り○上半部は横方向（左→右）下半部は縦方向（下→上）		○淡黄褐色 ○頸部より下位に煤付着
甕A_2	2-16 23	口径 10.2 胴径 15.5	・斜上方に内湾気味にのび，端部は内傾する小さな肥厚面をもつ ○口縁部を横なで，頸部を強く横なでする	・球形に近い ○細かい刷毛で外面上半部は縦方向に調整した後肩部を横方向に調整する頸部より約1cm下位から横方向の篦削り（左→右）		○淡黄褐色 ○胎土精良
甕A_3	2-16 24	口径 15.2 胴径 23.4	・斜上方に「く」の字形にのび，端部は内傾する肥厚面をもつ ○頸部から口縁部下位にかけて強い横なで	・やや長手の球形で最大胴径は中位よりわずかに下にある ○外面は縦方向の刷毛を施した後，肩部を横方向の刷毛で調整する○肩部に篦描波状文がある ○内面は頸部下約1cmからていねいな横方向（左→右）の篦削り	・丸底とみられる	○褐色 ○外面全体に煤付着 ○内面にこげ物がつく
甕	2-16 25	胴径 21.5		・球形で最大胴径は中位よりやや上にある ○外面は縦方向の刷毛調整の後，肩部付近は横方向の刷毛調整○頸部下約2cmから篦削り	・丸底	○暗褐色 ○砂粒多く含む

井戸11

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
小形丸底壺C	3-15 26	口径 8.4 胴径 9.0	・短く「く」の字形に外反する ○横なでのあと，内面を刷毛で調整	・球形 ○外面はなで，内面は粗い横方向（左→右）の篦削り		○黄褐色 ○砂粒多く含む

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
小形丸底壺C	3-16 27	口径 7.6 器高 8.5 腹径 8.7 体高 6.5	・短く「く」の字形に外反し，まっすぐにおさめる ○外面横なで	・最大腹径がやや上位にあり，肩の張った扁球形 ○粗い刷毛調整のあとなでて仕上げる	・尖底気味 ○内面箆削り ○円盤をおいたものとみられる	○黄灰色 ○肩部から口縁部にかけて黒斑 ○細部図版27
	3-17 28	口径 10.3 器高 10.0 腹径 10.3 体高 8.0	・やや内弯気味に外反し端部はまっすぐおさめる ○内外とも横なで	・球形で凹凸がある ○外面はなで，内面中位をかるく箆削り	・不安定な平底 ○内面は指おさえ外面はかるく箆削り	○淡黄褐色 ○底部から口縁部にかけて黒斑

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯A₂	3-17 29	口径 16.2	・わずかに張った底面からゆるやかに外反しながら口縁部へつづき端部はまっすぐにおさめる ○内外面とも横なで		○淡黄褐色 ○細砂多く含む
	3-17 30	口径 13.6 器高 10.8 底径 19.5	・わずかに張った底面から内弯気味に口縁部へつづき，口縁部は大きく外反し，端部はまっすぐにおさめる ○脚部との接合部に刷毛目，口縁部内外はていねいななで	・脚柱部はゆるやかに開きながら裾部へつづき，端部はまっすぐ ○脚柱部外面は箆でかるく面取りした後刷毛を加える ○内面はかるく面取り ○裾部内面は刷毛調整	○淡黄褐色 ○細砂多く含む

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
甕A₂	3-17 31	口径 13.2	・斜上方にまっすぐにのび，端部は肥厚して水平の平坦面をつくる ○内外とも横なで ○頸部を幅広く横なで	・やや縦長の球形とみられる ○肩部に横方向の刷毛目を施した後縦方向の刷毛調整 ○内面は頸部下約 1.5cm から横方向（左→右）の箆削り		○淡黄褐色 ○細砂を多く含む
甕A₂	3-17 32	口径 14.3 腹径 23.0	・わづかに内傾しながら斜上方にのび，端部は内傾する面をもつ ○内外とも横なで ○頸部を強く横なで	・やや肩の張る球形とみられる ○肩部に横方向の刷毛を施した後横なでをする ○内面は頸部下 0.5cm から横方向（左→右）の箆削り		○黄灰色 ○細砂多く含む

井戸12

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
小形丸底壺D	3-17 33	腹径 10.0		・やや扁平な球形 ○外面をていねいに箆みがきする ○内面の中位をかるく横方向に箆削りする	・尖底気味の中央部を指で押さえて不安定な平底とする ○内面は指先でなでる	○黄灰色 ○胎土精良 ○全面に赤色顔料を塗る

表3　土坑墓5出土の土器観察表

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
甕 A_3	3 34	口径 14.5	・わずかに内傾しながら斜上方にのび，端部は内傾する肥厚面をなす	・球形 ○内面は頸部下約2cmから箆削り		○黄灰色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	3－17 35	口径 15.4 胴径 23.8	・同上，肥厚面はない ○内外とも横なで，頸部を強く横なで	・やや肩の張る縦長の球形であろう ○外面は細い刷毛調整で肩部は横方向に施した後に横なでする ○内面は頸部下約2cmから横方向（左→右）に箆削り		○黄灰色 ○砂粒を含むが，胎土は精良
甕 B	3－17 36	口径 12.6 器高 23.0 胴径 22.9	・短く「く」の字形に外反し，端部はまっすぐにおさめる ○頸部を横なで	・球形 ○内面は頸部下約1cmから箆削り	・丸底とみられる	○灰褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯 A_2	3－18 37	口径 16.4 器高 11.3 底径 10.3	・わずかに張った底面からゆるやかに内湾しながら口縁部へとつづき，口縁部は外反する	・脚柱部はゆるやかに開いて裾部へとつづき，端部はまっすぐにおわる ○脚柱部内面にしぼり目のこる	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
高杯脚部	3－18 38	底径 10.5		・脚柱部は裾部でわずかに開き，裾端部はまっすぐ ○脚柱部内面にしぼり目 ○裾部内面は刷毛調整	○黄灰色

表4　包含層出土の土器観察表

弥生式土器

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
壺	4 39	口径 14.5	・頸部から外湾して開き端部は面をもつ	・肩の張った球形と思われる		○赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
甕	4 40	底径 4.6		・形態不明 ○外面は叩き調整，内面は刷毛調整	・中央部がわずかに突出した平底	○淡黄褐色
	4 41	底径 4.3			・平底 ○内面は刷毛調整	○淡黄褐色
有孔鉢	4 42	底径 4.2		・底部からわずかに外湾して斜上方にのびる ○外面に叩き目痕あり ○内面は横方向(右→左)の刷毛調整	・平底 ・中央に直径8mmの孔をあける	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯	4 -18 43	口径 27.6	・底面は内弯気味に斜上方へのび口縁部との境は稜をなす ・口縁部は内弯しながらたちあがり，口縁部で大きく外反する ・端部は面をもつ		○赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	4 -18 44	口径 23.4 器高 15.1 底径 15.3	・同上 ・底面中央部がくぼむ ・端部はまっすぐにおさめる	・脚柱部は外開きに下方へのび，裾部近くで大きく外反する ・脚柱部下位に3孔を穿つ	

庄内・布留式併行期の土器

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
壺 B_1	4 -19 45	口径 12.9 腹径 28.0 底径 6.5	・上方にまっすぐにのび端部もまっすぐにおさめる ○外面は縦，内面は横方向の刷毛調整	・最大腹径が中位より下にある縦長の球形 ○外面は縦方向の粗い刷毛調整 ○内面は指なでをするが粘土の継目が残る ○底部近くに横方向の刷毛目がわずかにのこる	・平底 ○内面指なで	○黄灰色 ○体部中位を欠失
壺 B_2	4 -18 46	口径 14.8 器高 21.5 腹径 18.7 底径 5.0 ○外面は箆磨き	・斜上方にラッパ状にまっすぐのび，端部もまっすぐにおさえる	・最大腹径が中位にある均整のとれた扁球形 ○外面は箆磨き	・わずかにあげ底気味の平底	○黄灰色
甕 C	4 -18 47	口径 16.4 腹径 19.3	・短く「く」の字形に屈曲し，内面に稜をもつ ・端部は上方につまみ出されて，外側に面をもつ	・球形とみられる ○外面には右下がりの細かい刷毛目がみられる ○内面は頸部以下を箆削り		○淡褐色 ○肩部に黒斑あり ○風化著しい
	4 48	口径 17.0	・同上			○淡黄褐色 ○風化著しい
壺 C_1	5 49	口径 22.8	・外反する頸部は外側に稜をつくり，内傾気味の口縁部へつづく ・端部はまっすぐにおさめる			○淡赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	5 50	口径 26.5	・大きく外反する頸部に内傾する口縁部がつづき端部はまっすぐにおさめる			○黄灰色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
壺 C_2	5 51	口径 19.2	・大きく水平方向に外反して擬口縁をつくり，上方へ外反する口縁部をつくる ・端部はまっすぐにおさめる			○黄褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
壺 C_3	5 52	口径 8.3	・頸部から水平近く屈折して擬口縁をつくり，上方にのびる口縁部をつくる・端部はまっすぐにおさめる	・頸部下約2cmから横方向の箆削り		○黄灰色
	5 53	口径 13.0	・ゆるやかに外弯した頸部の端で短い擬口縁をつくり，上方にのびる口縁部へつづく ・端部欠失			○黄灰色 ○胎土精良 ○内外面（内面は頸部まで）に赤色顔料を塗る
壺 C_4	5－19 54	口径 16.0	・頸部から斜上方へのびた擬口縁に大きく外反する口縁部がつづく ○端部はまっすぐにおさめる			○黄灰色 ○胎土精良
	5－19 55	口径 30.2 器高 37.0 腹径 35.0	・上方が開く頸部から水平方向に擬口縁がのび，斜上方にまっすぐ口縁部がのびる・端部はまっすぐにおさめる ・屈折部の外側に凸帯状の段をなす ○口縁部横なで	・最大腹径がほぼ中位にあり，均整のとれた扁球形	・丸底とみられる ○外面に刷毛目痕あり	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	6－19 56	口径 15.2 器高 17.5 腹径 14.3	・上方が開く頸部から水平方向に短く擬口縁がのび，外反する口縁部がつづく・端部はまっすぐにおさめる	・最大腹径が上位にあり肩の張った扁球形	・やや尖底気味の丸底	○淡赤褐色 ○風化著しい ○体部下位から底部にかけて黒斑
	6－19 57	口径 14.7 器高 16.5 腹径 13.2	・同上	・最大腹径が中位よりやや下方にあり腹の張った扁球形 ○外面は荒みがき	・同上	○赤褐色 ○胎土精良 ○風化著しい ○体部下位から底部にかけて黒斑
	6－20 58	口径 14.4 器高 13.4 腹径 12.0	・口縁部はわずかに内弯する	・同上 ○内面は指なで	・丸底	○黄灰色 ○赤褐色の化粧土を塗るが，大部分ははげている ○胎土精良
	6－20 59	腹径 12.3		・最大腹径は中位にあるが腰の張った球形	・丸底	○赤褐色 ○胎土精良
	6 60	口径 25.0	・上方で開く頸部から斜上方に擬口縁がのび，外反する口縁部へつづく ・端部はまっすぐにおさめるものと思われる ○頸部外面に粗い縦方向の刷毛が施される			○赤褐色 ○胎土精良 砂粒含む

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
壺 B_3	6－20 61	腹径 11.6		・最大腹径が中位にある球形 ○内面上半をかるく篦削り	・丸底	○黄褐色 ○風化著しい
	6 62	口径 15.5 器高 25.3 腹径 25.6	・斜上方に大きく開く口縁部の先端は外反気味で端部は面をなす	・最大腹径が中位にある扁球形 ○粘土紐ぎ目痕のこる	・丸底 ・内外面に刷毛調整のあとがわずかにのこる	○淡赤褐色 ○風化著しい
壺 B_4	7－20 63	口径 12.3 器高 19.9 腹径 13.5 底径 10.0	・斜上方にまっすぐに開く口縁部で，端部はまっすぐにおさめる ○内外を篦削り	・最大腹径が中位にある球形 ○内面篦削り	・丸底，大きく開く脚台が付き，脚端はまっすぐにおさめる	○淡黄褐色 ○石粒多く含む ○風化著しい
壺 B_5	7－20 64	口径 12.3 器高 20.0 腹径 18.3	・斜上方に外弯気味に開き，端部はまっすぐにおさめる	・最大腹径が中位よりやや下方にある縦長の球形 ○外面に縦方向の刷毛目痕がある ○内面は頸部下約 1.5cm から篦削り	・不安定な平底	○黄灰色 ○砂粒多く含む
甕 A_1	7－21 65	口径 14.3 器高 23.0 腹径 20.8	・斜上方へ内弯気味にたちあがり，端部は小さく肥厚する ○頸部を横なで	・最大腹径が上位にあり縦長の球形 ○外面は肩部付近に細かい刷毛目痕がわずかにみられる ○内面は横方向(左→右)の篦削りを頸部下約 5 mm から施す	・丸底 ○内面指なで	○茶褐色
甕 A_2	7 66	口径 14.8	・「く」の字形に屈曲する口縁部の上端は平坦な面をなす○口縁部外面はなで ○口縁部内面，頸部以下は篦削りで頸部内側は鋭い稜をなす			○黄灰色 ○砂粒多く含む
甕 A_3	7 67	口径 15.0	・「く」の字形に屈曲する口縁部は端部に内傾する面をもつ ○頸部外面を強く横なでする	○内面は頸部下約 1 cm から横方向（左→右）に器壁を分厚く削り取る		○黄灰色
	7－21 68	口径 14.6	・「く」の字形に内弯気味しながらのびる口縁部の端部は内傾する面をもつ○頸部外面を強く横なでする	・やや縦長の球形とみられる○肩部付近に横方向の細い刷毛目痕あり ○頸部下約 1 cm から横方向（左→右）の篦削り		○黄灰色 ○砂粒多く含む
	7 69	口径 16.5	・内弯してのびる口縁部で，端部は内傾する幅広の面をもつ ○頸部外面を強く横なで	・やや縦長の球形とみられる ○外面は肩部以下に右下がりの刷毛調整 ○内面はなで調整		○淡褐色

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
甕B	7-21 70	口径 15.0 器高 20.0	・「く」の字形に屈曲し端部はまっすぐにおさめる	・縦長の球形 ○内面は頸部下5mmから箆削り		○黄褐色 ○風化著しい ○外面全体に煤付着
	7-21 71	口径 10.3 器高 13.2	・わずかに内湾しながら短い口縁部がのび，先端はまっすぐにおさめる	・球形 ○外面は肩部に横方向，右下がりの刷毛目痕 ○内面は頸部下5mmから箆削り		○淡赤褐色 ○胎土良
甕底部	7-21 72	底径 15.0			・丸底 ○外面は一定方向の刷毛調整 ○内面は指なで	○淡褐色 ○砂粒多く含む ○煤付着

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯B_1	8-21 73	口径 25.3 器高 17.8 底径 18.5	・大きく横方向にのびる底面から直線的に口縁部がのびる ・端部はまっすぐにおさめる ・底面と口縁部の境に凸帯状の段をなす ○口縁部を横なで	・脚柱部は裾部にむかって広がり裾部は大きく開く ・端部を面取りする ○脚柱部内面にしぼり目，裾部内面に横方向（左→右）の刷毛調整 ○外面は脚柱部から裾部にかけて縦方向の刷毛調整，裾部に横方向の刷毛目がわずかにのこる	○黄褐色 ○胎土精良 ○杯部の風化著しい
	8-21 74	口径 20.8 器高 13.4 底径 14.4	・横方向にのびる底面から大きく外反する口縁部へつづく・端部はまっすぐにおさめる・底面と口縁部の境に凸帯状の段をなす	・脚柱部は裾部付近でわずかに開く・裾部は大きく開き，端部はまっすぐにおさめる	○淡黄褐色 ○風化著しい
高杯B_3	8-22 75	口径 16.4 器高 15.4 底径 12.1	・横方向にのびる底面は狭く，口縁部は斜上方にまっすぐのび，端部は薄くまっすぐにおさめる・底面と口縁部の境にわずかに稜をなす	・脚柱部は裾部でわずかに開き，屈折して裾部が広がる ・端部はまっすぐにおさめる	○黄灰色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
高杯B_2	8-22 76	口径 14.4 器高 12.2 底径 11.2	・横方向にのびる底面はわずかに傾斜し，口縁部は斜上方にまっすぐのびる ・端部はまっすぐにおさめる	・脚柱部は裾部付近でわずかに開き，裾部は途中で屈折気味である ・端部はかるく面取りをする ○脚柱部内面を横方向にかるく削る	○赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
高杯A_2	8-22 77	口径 17.3 器高 12.1 底径 11.6	・底面は弯曲し，内弯しながら口縁部へつづき，先端はかるく外反する ・端部をかるく面取りする ○内面なで仕上げ	・脚柱部は丸味をもって裾部へつづき，端部を面取りする	○黄灰色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	8-22 78	口径 16.0 器高 12.5 底径 10.6	・底面は平坦な面をなし，内弯気味に口縁部がつづき，先端はかるく外反する・端部はまっすぐにおさめる	・同上	○黄灰色 ○風化著しい
高杯A_4	8-22 79	口径 17.1 器高 12.3 底径 11.3	・底面は横方向にのび，内弯気味に口縁部がつづき，先端はかるく外反する・端部をかるく面取りする ○口縁部内外なで仕上げ ○底部外面に荒い刷毛調整	・脚柱部は大きく開く裾部へとつづき，端部は面どり・脚柱部と裾部の境に3孔を穿つ○脚柱部外面に粗い刷毛目，内面にしぼり目 ○裾部内面を横方向に刷毛調整	○黄灰色 ○石粒含む

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯 A_2	8－22 80	口径 15.3	・底面は内弯気味に横にのび，わずかに外返する口縁部へつづく ・端部はまっすぐにおさめる		○淡赤褐色 ○風化著しい
	8－22 81	口径 16.7	・底面は狭く，内弯気味の口縁部がつづき先端はかるく外反する ・端部はまっすぐにおさめる ○口縁部横なで，底部外面を荒削り		○淡赤褐色 ○風化著しい
	9－23 82	口径 19.0	・底面は狭く，大きく内弯しながら口縁部がつづき，先端はわずかに外反する・端部はまっすぐにおさめる ○口縁内外面なで仕上げ		○黄灰色
	9－23 83	口径 15.0	・底面は狭く，斜上方に口縁部がつづき，先端は外反する・端部はまっすぐにおさめる		○淡赤褐色 ○風化著しい
高杯 A_3	9 84	口径 16.0	・内弯しながら底部，口縁部へとつづき，先端は内傾する ○口縁部内外を横なでする		○黄褐色 ○砂粒多く含む
高杯脚部	9－23 85	底径 10.2		・脚柱部は下方でわずかに開き，屈曲して裾部へつづき，端部はまっすぐにおさめる ○脚柱部外面をかるく縦方向（上→下）に荒削り，内面もかるく横方向に荒削りをしているらしい ○裾部外面はなで仕上げ，内面は荒削りとみられる	○淡黄褐色
	9－23 86	底径 13.8		・わずかに中ふくらみとなる脚柱部で屈折して裾部へつづき，端部はまっすぐにおさめる・裾部に4孔を穿つ ○脚柱部外面を荒磨き，内面にしぼり目○裾部内面に横方向の刷毛調整	○淡黄灰色
	9－23 87	底径 10.7		・下方でわずかに開く脚柱部と裾部の境に3孔を穿つ・端部はまっすぐにおさめる ○裾部内面を横方向の刷毛調整	○赤褐色 ○79と同じ
	9－24 88	底径 10.4		・下方で大きく開いて裾部につづく脚柱部で，端部はまっすぐにおさめる	○灰褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	9－23 89	底径 12.3		・裾部付近で開く脚柱部から裾部につづき，端部はまっすぐにおさめる ○脚柱部外面にわずかに刷毛目痕内面に細かいしぼり目	○赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	9－24 90	底径 10.6		・裾部付近で開く脚柱部から裾部につづき端部はまっすぐおさめる	○赤褐色 ○砂粒多く含む

器種	図版	法量	杯部	脚部	備考
高杯脚部	9 91	底径 8.5		・下方でわずかに開く脚柱部から裾部につづき，端部はまっすぐにおさめる	○赤褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
鉢B	9 92	口径 39.2	・「く」の字形に屈曲し短く斜上方にのびる口縁部で端部はまっすぐにおさめる ○頸部外面を強く横なでする ○外面施磨き			○淡赤褐色 ○胎土精良
壺D	9－24 93	口径 18.8	・口縁部は短い頸部から一度斜上方にのびた後，直立する・端部は内弯する面をもつ ・口縁部外面と頸部下位の凸帯に刻み目を施す			○淡黄灰色 ○砂粒多く含む
小形丸底壺A1	10－24 94	口径 14.1 器高 6.5 胴径 9.4 体高 3.4	・わずかに内弯気味の口縁部が斜上方に大きくのびる ・端部はまっすぐにおさめる ○横なでの後施磨きを加える	・最大径が頸部にあり，扁球形 ○外面施磨き，内面なで仕上げ	・丸底と思われる	○淡灰褐色 ○胎土精良 ○焼成良好
	10－24 95	口径 12.3 器高 6.8 胴径 8.3 体高 3.5	・わずかに内弯気味の口縁部が斜上方に大きくのび，端部はまっすぐにおわる。 ○横なでの後，施磨き	・最大径が頸部にあり，卵形で小さい ○外面施磨き，内面なで仕上げ	・尖底	○淡黄褐色 ○胎土精良 ○焼成良好 ○風化著しい
	10－24 96	口径 15.0 器高 6.5 胴径 9.7 体高 4.1	・斜上方にまっすぐ口縁部がのびる	・最大径が頸部にあり，扁球形	・平底気味となる	○淡黄灰色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
小形丸底壺A2	10－24 97	口径 10.8 器高 5.0 胴径 8.9 体高 3.3	・内弯気味に斜上方へ短かく口縁部がのびる ・端部はまっすぐにおさめる	・最大径が頸部にあり，扁球形	・丸底	○灰褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	10－25 98	口径 11.1 器高 6.5 胴径 8.8 体高 4.7	・短い口縁部が斜上方にまっすぐのびる	・最大径が頸部にあり，卵形	・尖底気味の丸底	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
	10－25 99	口径 12.2 器高 7.2 胴径 9.5 体高 4.6	・斜上方にまっすぐのびる ○口縁部内外面を横なでした後施磨きを加える	・最大径が頸部よりわずかに下位にあり，球形 ○内面なで仕上げ	・丸底	○黄褐色 ○胎土精良 ○焼成良好

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
小形丸底壺B	10－25 100	口径 10.5 器高 7.2 腹径 8.0 体高 4.2	・斜上方へ内弯してのび端部はまっすぐにおさめる ○頸部外面を横なで	・最大径が中位にある球形 ○内面上位をかるく篦削り	・わずかに尖底気味の丸底	○明橙色 ○胎土精良 ○底部に黒斑あり
	10－25 101	口径 11.3 器高 8.5 腹径 8.4 体高 6.0	・斜上方へ内弯してのび端部はまっすぐにおさめる ○頸部外面を横なで	・最大径が中位にある球形 ○内面上位をかるく篦削り	・丸底	○明橙色 ○胎土精良 ○体部に黒斑あり
	10－25 102	口径 11.5 器高 7.9 腹径 9.1 体高 5.4	・斜上方へ内弯してのび端部はやや内傾 ○外面は横なで	・最大径がやや上位にある球形○外面刷毛調整，内面は下位から上方へ篦削り	・丸底	○黄灰色 ○砂粒多く含む ○口縁部から体部にかけて黒斑あり ○厚手
小形丸底壺C	10－26 103	口径 7.3 器高 8.9 腹径 8.1 体高 6.6	・斜上方へまっすぐにのび，端部もまっすぐにおさめる。 ○頸部外面横なで	・最大径が中位にある球形	・丸底	○乳灰色 ○風化著しい
	10－25 104	口径 8.4 器高 9.7 腹径 10.1 体高 7.3	・斜上方へ短い口縁部がのび，端部はまっすぐにおさめる ○内外面横なで	・最大径が上位にあり，やや肩の張った球形 ○外面は上部に縦方向，下部に乱方向の刷毛調整	・丸底	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○厚手
	10－25 105	口径 9.3 器高 8.1 腹径 7.8 体高 6.5	・短い口縁部が斜上方へのび，端部はまっすぐにおさめる ○内外面横なで	・最大径が上位にあり，肩の張った球形 ○外面は刷毛調整とみられ，内面上位を篦削り（左→右）	・やや尖底状になる	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○厚手 ○風化著しい
鉢C_1	10－26 106	口径 10.6 器高 7.1 腹径 9.0 体高 5.3	・短い口縁部がゆるやかに外反し，端部はまっすぐにおさめる ○外面刷毛調整	・半球形 ○外面は縦方向の刷毛調整○内面は下部から口縁にかけて篦削り	・やや尖底状の丸底	○黄褐色 ○砂粒多く含む
鉢C_2	10－26 107	口径 12.2 器高 7.5 腹径 11.5 体高 5.6	・短い口縁部が内弯して上方へのび，端部はまっすぐにおさめる ○内面篦削り（左→右）	・半球形 ○外面なで，内面は篦削り（右下→左上）	・丸底 ○外面は篦削り（下→上）	○淡黄褐色 ○風化著しい

器種	図版	法量	受部	脚部	備考
器台A	10 108	口径 8.6	○ゆるやかに内弯して横方向にのびる受部で，先端がわずかにたちあがり，外側に面をもつ	○まっすぐに斜下方に開くものと思われる	○黄灰色 ○風化著しい
	10－26 109	口径 7.8	○斜上方へまっすぐにのびる受部で先端がわずかにたちあがり，外面に面をもつ	○まっすぐに斜下方に開く	○淡黄褐色 ○砂粒多く含む ○風化著しい
器台B	10－26 110	口径 13.3 器高 7.6 底径 12.6	・斜上方へわずかに内弯してのび，端部は外反するものと思われる ・中空部との境に凸帯状の段をなす ○内外面なで仕上げ	・斜下方へ大きく外反し，端部はまっすぐにおさめる ・中空部との境に凸帯状の段をなす	○淡赤褐色 ○石粒を含む ○焼成良好

器種	図版	法量	受部	脚部	備考
器台B	10-26 111	口径 9.8 器高 5.0 底径 8.4	・斜上方へわずかに内弯してのび，端部は外反して面をなす ・中空部との境に段をなす	・斜上方へまっすぐに外反し，端部はまっすぐにおさめる	○淡赤褐色 ○石粒を含む ○風化著しい
	10 112	底径 9.0		・斜下方へまっすぐに外反し，端部はやや外弯気味におさめる	○淡黄褐色 ○石粒を含む ○風化著しい

須恵器

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
蓋	11-28 113 〜 120	口径 12.1 〜 13.0 器高 4.3 〜 5.0	・垂直に近く，高いが外反するもの(115)とやや内曲するもの(120)がある・端部は内傾する面をなすが，凹線をいれるもの(117)もある ○なで仕上げ	・わずかに丸味をもち，口縁部との境界の稜線は鋭く，稜線下に凹線をいれるもの(118・120)がある ○ていねいななで仕上げ	・丸味をもちながら平坦に近い上面となる ○ていねいな篦削りで仕上げる	○灰色(113・115・116・120) ○灰青色(114・117・118・119) ○(118・119・121)は1961年採集

器種	図版	法量	受部	脚部	備考
高杯	11-29 125	口径 13.8	・大きく外反する口縁部で，端部はまっすぐにおわる ○口縁部と底部の境は稜線をなし，下に櫛描波状文をいれる		○青灰色 ○1961年採集
	11-29 126	底径 9.8		・下方にまっすぐ開き，端部は内傾する ・三方に方形透穴を穿つ	○青灰色
	11-29 127	底径 8.8		・下方で大きく開き，端部外面を面取りする ・四方に円形の孔を穿つ	○青灰色

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
壺	11-29 128	口径 9.1 器高 12.8 腹径 14.9	・わずかに外反する口縁部で端部はまっすぐにおわる ○なで仕上げ	・最大腹径が上位にあり肩の張る球形 ○ていねいななで仕上げ	・丸底 ○外面に叩き目	○青灰色
	11-29 129	腹径 13.3		・同上 ・肩部下に一条の凹線と櫛描文を施す	・尖底状となる ○外面に叩き目	○青灰色
甕	11-29 130	口径 20.4	・大きく外反する口縁部で端部は折り反して面をなす	・頸部以下に叩き目		
杯	11-29 131	口径 12.0 器高 3.6	・内弯しながら外上方へのびる ○横なで	・丸味をもって口縁部へつづく	・平底 ○なで仕上げ	○黄灰色

表5　井戸・溝・土坑出土の中世土器観察表

井戸2

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	12－30 1	口径 13.2 器高 4.8 底径 4.6	・斜上方へまっすぐにのびる・端部内面に細い沈線 ○横なで	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面は細い暗文を比較的密に施す	・断面三角形の高台 ○内面を刷毛調整後，同心円状の暗文を施す	○上層 ○灰白色○胎土良 ○炭素未吸着部分多し ○器高指数36.3
	12－30 2	口径 15.2 器高 5.3 底径 6.2	・外反気味におわる・上端部に沈線を施す ○横なでの後暗文を施す	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面の暗文は間隔があく	・断面三角形の細い高台 ○内面は螺旋状暗文	○上層 ○銀黒色 ○胎土灰白色・精良 ○器高指数34.2
	12－30 3	口径 15.1 器高 5.4 底径 6.0	・端部は外反気味にまっすぐおわり，内面の沈線はない ○外面横なでのあと比較的ていねいな暗文を施す	・内弯気味に口縁部へつづく ○暗文は外面上位に施され，内面は間隔があき雑になる	・断面三角形の安定した高台 ○内面を刷毛調整で平滑にしてから連結輪状の暗文を施す	○漆黒色 ○胎土灰色・粗い ○器高指数35.8 ○厚手
	12－30 4	口径 15.2 器高 5.9 底径 5.8	・端部は内傾気味におわり，内面の沈線は太目 ○外面の横なで痕は目立たず，暗文は間隔があく	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面はていねいな暗文外面は三分割でやや間隔のあく暗文	・先端が若干面をもつ三角形の安定した高台 ○内面はていねいな螺旋状暗文	○漆黒色 ○胎土灰色・粗い ○器高指数38.8 ○厚手
小椀	12－30 5	口径 8.0 器高 3.5 底径 3.8	・端部は外反し，内面の沈線は施されない ○横なで痕は目立たず	・内弯して口縁部へつづく ○内外面とも間隔のあく暗文	・外方へ張り出す断面三角形の高台 ○簡単な鋸歯状暗文	○漆黒色 ○胎土灰色・粗い
皿	12－30 6	口径 9.3 器高 1.8	・端部はわずかに外反気味 ○横なで	・丸味をもつ ○内面ていねいな暗文	・ゆがみがあり，丸味をもつ　○内面は細い鋸歯状暗文	○銀黒色
	12－30 7	口径 9.6 器高 1.5	・端部は直立する ○横なで	○内面ていねいな暗文	・平坦な面をなす ○外面は指紋が多く，内面はていねいな鋸歯状暗文	○銀黒色 ○胎土灰色
皿Ⅰ	12－30 8 ～ 16	口径 12.2 ～ 14.8 器高 3.2 ～ 1.8	・斜上方へまっすぐにのび，端部はわずかに外反する・直立気味(15)，外反気味(16) ○横なで	・丸味をもって口縁部へつづく	○わずかに丸味をもった面となる ・内面は指おさえ外面はていねいになでて仕上げる	○明橙色（8・11・12・15） ○黄灰色（9・10・13・14） ○焼成良好○胎土良○(16)は上層出土
皿Ⅱa	12 17 ・ 18	口径 9.3 ・ 9.4 器高 1.1 ～ (1.4)	・屈曲するが，(17)はわずかに肥厚し，(18)は肥厚しない ○横なで	・丸味をもって口縁部へつづく	○平坦な面となる ・外面指おさえ，内面はていねいになでる	○明橙色 ○胎土良 ○焼成良好

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
皿 IIb	12－30 21 ～ 41	口径 10.0 ～ 8.2 器高 2.0 ～ 1.1	・斜上方へまっすぐにのび，端部はわずかに外反気味となる ○横なで	・丸味をもって口縁部へつづく	・平坦な面となるが，丸味をもつもの（26・27・30・33・34・37）もある ○外面指おさえ，内面ていねいななで	○明橙色，胎土良（21・24・27） ○黄灰色，胎土粗（22・25・26・28・30～34・36・37） ○乳灰色，胎土粗（23・29・38～41）
皿 IIc	12 19 ・ 20	口径 10.0 器高 1.0	・折り返す ○外面横なで		・平坦で，ややあげ底気味のもの(19)もある ○内面なで，外面指おさえ	○淡橙色 ○胎土精良
盤	13－30 42	口径 49.2	・わずかに外反し，上端は面をもち，内側に浅い窪みをつくる ○外面を二段になでる ○内面は太い暗文	・内湾して口縁部へつづく ○内面はなでた後，櫛で太い暗文を密に施す ○外面は施削りする ○下半から脚がら付着	・丸味をもった面とみられる ○内面はなでた後平行線状の暗文を施し，外面には脚がら痕がある	○黒灰色 ○胎土粗・灰色
	13－39a 43				・平坦 ○内面は太い格子状暗文外面は脚がら痕	○黒灰色 ○胎土粗・灰色
	13－39a 44				・輪状の足がつく ○内面は平行線状暗文，外面は脚がら痕	○黒灰色 ○胎土粗・灰色
鉢	13－37b 46 ～ 48	底径 8.0 ～ 10.0		・斜上方へまっすぐにのびる ○外面ていねいななで仕上げ○内面指なでの輪がよくのこる	・平底 ○外面糸切り ○内面使用著しい	○灰色（47・48） ○青灰色（49） ○石粒含む ○焼成良
	13－37b 49	底径 7.5		・斜上方へまっすぐにのびる ○下半使用著しい	・平底 ○外面糸切り ○内面使用著しい	○灰色 ○砂粒含む ○焼成あまい
	13 50	口径 20.4 器高 6.6 底径 9.0	・端部を直角に切ったあとをなでる ・小さな片口をつくる ○横なで○端部に黒色の自然釉がわずかにかかる	・斜上方へまっすぐにのびる ○外面横なで ○内面使用痕著しい	・平底 ○外面糸切り ○内面使用著しい	○灰白色 ○石粒含む ○焼成あまい
甕	13－37a 51	口径 23.4	・短い頸部から横方向に口縁部がのび，外面に細い叩き目痕あり ○端部内側に回線状の窪みをいれる	・肩の張る球形とみられる ○肩部以下は左下がりの粗い叩き目を施し，肩部では部分的に横なでで消す○内面に押し型痕		○暗青灰色 ○砂粒含む ○焼成良好・硬い
	13－37a 52	口径 21.2	・短い頸部から横方向に口縁部がのび，外面にも叩き目痕，端部内側に回線状の窪みをいれる	・縦長の球形とみられる ○外面左下がりの粗い叩き目を施し，肩部で横なでをする○内面押し型痕		○暗青灰色 ○砂粒含む ○焼成良好・硬い

器種	図版	法量	口頸部	体部	底部	備考
羽釜A	13-39a 53	口径 23.6	・上方にまっすぐのびる ・端部上面に凹線，外面に凹線状の段 ○内面は横方向の刷毛調整，外面は横なで	・横方向にのびる幅約3cmの鍔がつく		○上層から出土 ○茶褐色 ○砂粒多く含む ○鍔より下に煤付着
羽釜B	13-39a 54	口径 24.0	・上方にまっすぐのびる口縁部で，上端は面をもつ ○内外横なで	・下方にのびる短かい（1cm）鍔がつく ・まっすぐ底部までつづくと思われる		○淡褐色 ○砂粒多く含む ○煤付着せず
甕A	13-39a 55	口径 25.0	・ゆるく「く」の字形に屈曲し，端部は内側に折りこまれる ○内外横なで			○茶褐色 ○砂粒多く含む ○外面煤付着
甕B	13-39a 56	口径 29.0	・「く」の字形に屈曲し内面に鋭い稜ができる ・端部外面に面をなす ○内外面横なで			○茶褐色 ○砂粒多く含む ○上層
碗A_1	14-38a 57 〜 68	口径 15.8 〜 17.0 底径 6.4 〜 7.0	・端部を折り返して分厚い玉縁状口縁とする ・玉縁のやや小さいもの（60・61・64）もある	・斜上方へわずかに内湾してのびる ・体部と底部の境に沈線状の段をつける（65〜69） ○外面は中位から底部近くまで釉をかける	・外面を浅く削り方形の分厚い高台とする	○灰白色の釉 ○胎土白色
碗A_2	14-38b 69	口径 15.6	・端部を折り返して小さい玉縁状口縁とする	・内側を削りとって器壁を薄くする ○釉は外面上半部まで		○黄白色の釉 ○胎土白色
碗B_1	14-38b 70 ・ 71	口径 17.0 底径 6.0	・端部は水平方向にわずかにのびる ・下位に細い沈線をいれる	・内湾気味に口縁部へつづく ・内面に櫛描文 ○外面は高台付近まで釉をかける	・細く，高く削り出された高台 ○左まわりのロクロ使用 ○内面に櫛描文	○灰白色の釉 ○胎土白色 ○同一個体とみられる
碗B_2	14-38b 72	口径 15.0	・まっすぐにのび，端部はわずかに外反する	○内湾して口縁部へつづく		○灰白色の釉 ○胎土白色
碗B	14-38b 73	底径 6.6			・細く，高く削り出された高台	○灰白色の釉 ○胎土白色
碗B_3	14-38b 74	口径 13.4	・外反して，まっすぐにのびる口縁部 ・内面は下位に沈線を施す	・まっすぐに口縁部へつづく ・外面は口縁から体部にかけて篦で刻目をいれる		○灰白色の釉 ○胎土白色
皿A_1	14-38b 75	口径 9.8 器高 2.1 底径 3.7	・器壁は薄く斜上方にまっすぐにのびる	・内湾気味に口縁部につづく ○体部中位に浅い段がつく	・あげ底状 ○外面無釉	○灰白色の釉 ○胎土白色

器種	図版	法量	口頭部	体部	底部	備考
皿 A_2	14-38b 76	底径 3.6		・上位で屈曲して口縁部へつづき，屈曲部内面に段ができる ○釉は外面の底部付近までかける	・あげ底状	○黄白色の釉 ○胎土白色・やや粗い
脚台	14-39a 77 ・ 78	底径 5.6 〜 7.4			・下方でわずかに開くようにのび78はまっすぐ，79は外面を面取りする ○ていねいななで	○淡褐色 ○砂粒多く含む ○雲母含む
底部	26-39a 367	底径 4.0			○外面糸切り	○淡黄褐色 ○胎土精良
底部	13 45	底径 15.0		・底部からまっすぐ上方へつづく ○外面の叩き目をなでて消す	・平底	○銀黒色 ○胎土灰白色でやや粗い

井戸3

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿 II	17-39b 99	口径 6.8 器高 1.2	・まっすぐ斜上方へ短かくのびる ○横なで		・平底	○灰褐色 ○胎土粗い ○雲母含
	17-39b 100	口径 7.0 器高 1.5	・まっすぐ斜上方へ短かくのびる ○横なで	・丸味をもつ	・丸味をもつ平底	○灰褐色 ○胎土粗い ○雲母含
皿 III	17-39b 101	口径 13.5 器高 12.7	・斜上方へ外反気味にまっすぐのびる ○横なで	・わずかに内弯して口縁部へとつづく	・丸味をもつ平底	○褐色 ○雲母含む
碗 C	17-39b 102	底径 4.6			・横方向へのびる面をもち，体部へとつづく・断面方形の削り出し高台で，高台内・畳付は施釉せず	○淡青白色の釉 ○胎土白色・精良 ○全体に貫入あり ○底部外面に赤漆の痕跡あり
羽釜 A	20-39b 199	口径 27.5	・やや外側へ開き気味に上方へのび，端部外面を押さえて，窪みをつける ○外面横なで ○内面は粗い刷毛調整を施したらしい	・まっすぐにのびるものとみられる ・横方向にのびる幅 1.5 cmの鍔がつく		○灰黒色 ○鍔より下方に煤が付着
甕 B	20-39b 200	口径 29.5	・「く」の字形に屈曲し内面に稜をもつ ・端部外面を面取り ○内面はなで調整	・わずかに中ぶくらみとなるらしい ○外面に指圧痕のこる		○褐色 ○砂粒多く含む

井戸4

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	17-31 103	口径 15.4 器高 5.3 底径 5.0	・まっすぐ，斜上方へのびる ○横なで，わずかに暗文を施す	・わずかに内弯して口縁部へつづく ○外面に指先の圧痕が多数のこり，暗文をわずかに施す○内面は太い暗文を無造作に施す	・やや外側に開く断面方形の高台がつく ○内面は格子状の太い暗文	○銀黒色 ○胎土粗い・灰色 ○器高指数33.1
	17 104	口径 15.0 器高 5.0 底径 (5.0)	・口縁端が外側へ大きく開く ○強い横なで	・内弯して口縁部へつづく ○外面に指圧痕がのこり太い暗文をわずかに施す ○内面は太い暗文を無造作に施す	・外側に開く，高台がつく	○銀黒色 ○胎土粗い・灰色
	17 105	底径 6.7			・断面三角形の細い高台が付く ○内面に省略された螺旋状の暗文	○灰黒色 ○胎土良・灰白色
皿IIb	17 106	口径 9.6 器高 1.6	・まっすぐ斜上方へのびる		・平底風 ○内面指圧のためわずかに凹凸あり ○内面なで	○明橙色 ○胎土・焼成良
椀	17-39b 107	底径 7.0			・高台内外を面取りした削り出し高台	○緑灰色の薄い釉 ○胎土黄灰色

井戸5

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	17 108 \ 110	口径 15.0 底径 5.7 \ 5.9	・上方にまっすぐのびる ・端部内面に沈線 ○外面は横なでと簡単な暗文	・内弯して口縁部へつづく ○内面は密な暗文，外面の暗文は粗い	・断面三角形の安定した高台がつく ○内面を刷毛調整(110) ○暗文は平行線状	○銀黒色
皿	17 111	口径 9.0 器高 1.4	・短く斜上方へのびる ○横なで	・わずかに丸味をもつ ○内面に簡単な暗文を施す	・平底	
皿I	17 112	口径 14.9 器高 3.3	・斜上方へまっすぐにのび，端部はわずかに外反気味におわる○横なで	・内弯して口縁部へつづく ○外面に指圧痕が目立つ	・平底	○明橙色 ○焼成良
	17 113 ・ 114	口径 13.5 \ 15.0 器高 2.7 \ 2.9	・斜上方へまっすぐにのび，(114) は端部は肥厚気味 ○横なで	・内弯して口縁部へつづく ○外面に指圧痕が目立つ (114) は二段に押さえる	・平底	○黄灰色 ○胎土粗い

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿 IIb	17 115 〜 118	口径 9.5 〜 10.8 器高 1.5 〜 2.0	・斜上方へまっすぐにのび，端部がわずかに肥厚するもの（117），外反気味のもの（119）がある		・平底もしくは丸味をもつ	○黄灰色(116) ○乳灰色(117) ○明橙色(115・118)
碗 B	17-39b 119	底径 6.1			・高く削り出された細い高台である	○灰白色の釉 ○灰白色の胎土
壺	20 208			・まっすぐ上方にのびる ○内外面ていねいななで ○輪づみ痕のこる	・平底 ○内面の体部との接合面をていねいになでる○外面へラおこし痕	○灰色 ○砂粒多く含む

井戸6

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	17-31 120 〜 122	口径 13.4 器高 4.2 底径 4.7 〜 5.1	・内弯気味にまっすぐのびる ・端部内面の沈線なし ○横なで	・内弯して口縁部へつづく ○内面細い暗文が渦巻状に施される○外面の指圧痕目立たない	・断面三角形の細い高台がつき，見込みの暗文は鋸歯状 ・(122)は分厚い高台で，平行線状の暗文	○灰色 ○胎土精良・灰白色 ○器高指数31.3(121・122)
皿 I	17-31 123 〜 125	口径 14.4 〜 15.2 器高 2.8 〜 3.4	・ほぼ上方へまっすぐにのびる ・横なで	・内弯して口縁部へつづく ○指圧痕が目立つ	・わずかに丸味をもつ平底 ・(124)は見込みを刷毛調整，他は内面なで仕上げ	○明橙色(123・124) ○黄灰色(125)
皿 IIa	17 126	口径 9.6 器高 1.8	・屈曲して横方向へのびる ○なで	・内弯する	・丸味をもっている	○薄手
皿 IIb	17 130 ・ 131	口径 8.3 〜 10.7 器高 1.5 〜 2.2	・斜上方へ短かくのびる(132)は外反気味 ○横なで		・丸味をもつ平底	○黄灰色(131) ○乳灰色(132)
皿 IIc	17 127 〜 129	口径 10.0 〜 11.0 器高 1.2 〜 1.4	・端部を内側へ折りこむ		・わずかに丸味をもつ平底 ○外面指圧痕のこる ○内面なで仕上げ	○黄灰色 ○細砂含む
碗 A_3	17 132	口径 15.6	・分厚い玉縁状口縁をつくる ○玉縁下を横なで	・まっすぐ口縁部へつづく		○灰白色の釉 ○胎土白色

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
鍋	20-40a 201	口径 26.2	・二段に屈曲し，端部内側に面をもつ			○灰黒色 ○胎土黄灰色 ○砂粒多く含む
羽釜A,	20-40a 202	口径 22.8	・上方へまっすぐにのびる ・幅約1cmの鍔が横方向につく ○端部付近を強く横なで	・まっすぐに底部へつづく ○内面にわずかに刷毛目痕のこる		○灰黒色 ○胎土灰色 ○鍔以下に煤付着
羽釜B	20-40a 203	口径 17.2	・大きく内傾する口縁部で，端部はまっすぐ ・斜上方をむく，幅約1cmの鍔がつく ○横なで	・丸味をもって底部につづく ・鍔の下に三脚を付ける ○内面に細かい刷毛目痕がみられる		○灰黒色 ○胎土灰色 ○外面全面に煤付着
甕B	20-40a 204	口径 32.0	・内弯気味の口縁で，上端をかるく面取りする ○外面は指おさえ ○内面はていねいななで	・下方で開くようにつづく ○内面ていねいななで ○外面は指おさえ		○褐色 ○石粒多く含む
	20-40a 205	口径 32.2	・「く」の字形に屈曲し内面に鋭い稜をもつ ・端部外面を面取り ○内面をていねいな刷毛目○外面にもわずかに刷毛目痕あり	・下方で開くように丸味をもってつづく ・外面指おさえ ○内面はていねいななで		○黄褐色 ○石粒多く含む
羽釜A	20-40a 206	口径 23.6	・わずかに内傾気味の口縁部で，上端に面をもつ ・斜下に幅約2cmの鍔が付く ○内外面横なで			○黄褐色 ○砂粒多く含む ○外面および口縁部部内面上部に煤付着

井戸8

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	18-31 133	口径 16.0 器高 5.9 底径 6.6	・わずかに外反する口縁部で，端部内側の沈線はなし ○横なでは内外とも暗文で目立たない	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面は密な暗文，外面は間隔があくが比較的ていねいな暗文を施す	・外側に張り出す断面方形の安定した高台 ○見込みは平行線状（櫛描状）の暗文	○漆黒色 ○胎土灰色・粗い
	18 134	口径 15.4	・内弯しておわる口縁部で，端部内面に沈線あり ○内外面に密な暗文を施す	・内弯して口縁部へつづく ○内面は密な暗文，外面上位も密な暗文を施す		○漆黒色 ○胎土灰色・粗い
皿	18 135	口径 9.9 器高 1.9	・外反気味にまっすぐにのびる ○横なで		・わずかに丸味をもつ平底	○漆黒色 ○風化著しい ○暗文不明

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿 I	18 136	口径 14.8 器高 3.4	・斜上方へ内弯して開き端部は外反する ○横なで	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面なで調整	・丸底風 ○外面指圧のため凹凸が目立つ	○明橙色
壺 B	20-40b 207	口径 32.0	・「く」の字形に屈曲して，短かく斜上方にのびる口縁部 ○端部外面に凹線をいれる ○内面刷毛調整			○淡褐色

井戸9

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	18-31 137 〜 139	口径 12.4 〜 13.2 器高 4.15 〜 5.1 底径 4.5 〜 5.4	・わずかに内弯して，斜上方へのびる ・端部内側に沈線のあるもの（138・140）とないもの（139）がある ○外面を横なで	・ゆるやかに内弯して口縁部へつづく ○なで仕上げをしたのち渦巻状の細い暗文を施す ○暗文の間隔はあき，10条程度を数える ○外面の指圧はほとんど目立たない	・断面三角形の簡単な高台が付く ○内面の暗文はいずれも省略されており同心円状(138)螺旋状(139)，連結輪状(140)である	○黒色 ○胎土灰白色・精良 ・器高指数36.3(128)，33.5(139)，38.6(140) ○(138) は掘り方から出土
皿	18-31 140	口径 8.6 器高 1.9	・斜上方へ短かくのび，先端はまっすぐにおわる		・わずかに丸味をもつ平底○内面に鋸歯状暗文	○灰黒色 ○胎土灰色，やや粗い
皿 I	18 141	口径 12.2 器高 2.2	・外反気味に斜上方へのびる ○強い横なで		・丸味をもつ平底	○乳灰色
	18 142	口径 12.4 器高 1.6	・斜上方へまっすぐにのびる ○横なで		・平底	○乳灰色
皿 IIb	18 143	口径 8.8 器高 1.4	・斜上方へ短かくのびる ○横なで		・わずかに丸味をもつ平底	○乳灰色
	18-31 144 〜 146	口径 7.5 〜 7.8 器高 1.2 〜 1.4	・斜上方へ，外反気味にまっすぐのびる ○強い横なで	・口縁部と底部との境に段をもつ	・丸味をもつ平底	○淡黄褐色 ○胎土精良
盤	20-41a 209	口径 32.8	・分厚く，上端に面をもち，内側につまみ出す	・斜上方へまっすぐにのびる○外面に指圧痕，内面は太い暗文	・平底とみられる ○体部下位から籾殻痕が外面につく	○灰黒色 ○外面に煤付着
	20-41a 210	口径 31.8	・分厚く，内傾する面をもつ○外面をなで仕上げ内面は部分的に暗文			○灰色

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
盤	20-41a 211	口径 38.4	・分厚く，上端は面をもつ ○外面横なで，内面には凹線をいれる	・まっすぐ口縁部につづく ○内面ていねいななで，外面指圧		○淡黄褐色 ○雲母を含む
羽釜B	20-41a 212 213	口径 19.6 〜 24.0	・内傾気味にのび，先端はまっすぐにおわる ・幅約2cmの鍔がやや下向きに付く			○淡褐色 ○石粒を含む ○鍔以下に煤付着
甕	20-41a 379	口径 ?	・短い頸部からゆるやかに外反して口縁部がのび端部外面に面をもつ ○内面はていねいななで仕上げ，外面は刷き目のあとを横なでする			○黒灰色 ○胎土は黄褐色 ○石粒を含むが比較的精良
	20-41a 380	口径 ?	・短く斜上方へのびる口縁部で，端部外面を面取りする ○内外ともていねいな横なで			○灰黒色 ○胎土灰色，砂粒を含む

溝1

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	18-31 147	口径 14.5 器高 5.4 底径 5.0	・わずかに内弯して，斜上方へのびる ○内外面比較的密な暗文を施す○横なで目立たず ○端部内面の沈線は細い	・わずかに内弯して口縁部へつづく ○内面は密な暗文，外面は間隔があくが，比較的ていねいな暗文を施す	・断面三角形の高台の先端を押さえて，安定感がある ○内面に連結輪状の太目の暗文を施す	○灰黒色 ○胎土灰白色・精良 ○器高指数37.2 ○外面の暗文は4分割
	18-31 148	口径 15.0 器高 5.4 底径 5.7	・わずかに内弯して，斜上方へのびる ○内外面間隔のあく暗文 ○横なで目立たず	・わずかに内弯して口縁部へつづく ○内外面とも，太目で間隔があく暗文	・断面三角形の細い高台が付く○内面は太目で鋸歯状の暗文を施す	○銀黒色 ○胎土灰白色 ○器高指数36
	18-31 149 ・ 19-32 156	口径 11.7 〜 12.4 器高 3.9 底径 4.6	・まっすぐに斜上方へのびる ○端部内側に沈線 ○横なで	・わずかに内弯して口縁部へつづく ○外面暗文なし，内面はなでた後数条の渦巻状暗文を施す	・断面三角形の細い高台が付く ○内面は太目で省略気味の螺旋状暗文	○銀黒色 ○胎土灰白色・精良 ○器指数33.3(150)・31.5(157)
	18-31 151 〜 155 ・ 19-32 157 ・ 158	口径 14.1 〜 13.5 器高 4.3 〜 4.9 底径 4.3 〜 5.4	・わずかに内弯して，斜上方へのびる ○端部内側に沈線 ○ていねいな横なで	・丸味をもって口縁部へつづく ○外面暗文なし，指押え顕目立たない ○内面はていねいになでたあと細い暗文を渦巻状に10条ないし10数条施す	・断面三角形の細い高台が付く ○内面は省略された細い螺旋状の暗文	○漆黒色(152・154)銀黒色(153・155・156) 灰色(158・159) ○胎土はいずれも灰白色で精良，(158)のみ黄灰色気味

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	18 150	口径 14.6 器高 5.1 底径 4.6	・内弯気味に斜上方へのびる ○端部内面に沈線 ○外面横なで目立つ	・内弯して体部へつづく ○外面指おさえ痕目立たない○内面はていねいになでたあと，太目の暗文を10条程施す	・断面三角形の細い高台がつく ○内面は省略気味の鋸歯状暗文	○銀黒色 ○胎土灰白色・精良 ○器高指数34.9
	19－32 159	口径 15.3 器高 4.9 底径 5.8	・わずかに外反して斜上方へのびる ○先端部内側に沈線 ○横なでのあと外面は横方向の太目の暗文を施す	・内弯して口縁部へつづく ○内面は上位と下位に分けて暗文を施す ○外面は上位に簡単な暗文を施す	・断面三角形の高台の先端を押さえ安定感がある ○内面の暗文不明	○灰色 ○胎土灰白色・精良 ○器高指数32.0 ○風化著しい
輪花椀	19－32 160	口径 10.5 器高 3.4 底径 6.0	・わずかに内弯して，斜上方へまっすぐにのび，8個所に縦篦を入れる ○かるく横なで	・まっすぐに口縁部へつづく ○内面はていねいになでたあと，細い暗文を比較的ていねいに施す	・わずかなゆがみのある平底 ○内面の中央部に篦先で三ツ巴文を描く○三ツ巴文を中心に篦先で波文を4個描く	○黒灰色 ○胎土灰白色・精良 ○器壁薄い
	19－32 161	口径 10.0 器高 3.3 底径 6.0	・わずかに内弯して，斜上方へのびる ○かるく横なでをしたのち，横方向に簡単な暗文を施す	・まっすぐに口縁部へつづく ○内面はていねいになでたあと，細い暗文をていねいに施す ○外面に6個所に縦篦を入れる	・わずかに丸味をもつ平底 ○内面に数個の波文を描く	○黒灰色 ○胎土灰白色・精良 ○器種薄い
皿	19 162	口径 9.6 器高 1.8	・わずかに内弯して，斜上方へ短かくのびる ○外面横なで		・平底 ○内面は時計まわりになでたあと，鋸歯文を重ねて格子状暗文とする	○銀黒色 ○胎土灰色，やや粗い
	19－32 163	口径 8.7 器高 1.7	・わずかに内弯して，斜上方へ短かくのびる ○外面横なで		・丸味をもつ平底 ○内面は時計まわりになでたあと，省略気味の鋸歯状暗文を施す	○銀黒色 ○胎土灰白色・精良
	19 164 ・ 165	口径 8.0 〜 8.2 器高 0.8	・短かく上方へ折り返され，かるくなでた面をもつ		・平底とみられる	・銀黒色 ○胎土灰白色・精良
小羽釜	19－32 166	口径 7.3 体高 5.8 胴径 10.3	・短く内傾し，上端は面をもつ ・幅約3mmの小さい鍔が斜上方をむいて付く ○横なで	・丸味をもって口縁部へつづく ・鍔の直下から二脚を付けている ○外面は指おさえ ○内面はていねいななで調整	・平底風となる	○黒灰色 ○胎土灰色 ○外面炭化物付着

器種	図版	法量	口縁部	天井部	備考
香炉蓋	21－33 221	長辺 33.0 短辺 21.6	・天井部から下方にのびる口縁部の端部内側を段状に削りとっている ○ていねいななで仕上げ	・平坦な面で，中央部に宝珠ツマミがつくものとみられる ・ツマミを中心に四個の三ケ月状の透し穴を穿っている ○外面には全体に輪積痕がのこる ○内面はていねいなで仕上げをし，部分的に篦でなでている	○灰黒色 ○胎土は粗く，砂粒粒を多く含む

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
羽釜 A_1	21－41b 222 ・ 223	口径 15.6 ～ 17.6	・まっすぐ上方へのび，(223) は端部がわずかに内側へ屈折する ・幅約1cmの鍔が横方向につく ○ていねいな横なで	・まっすぐ底部までつづくものとみられる ○(223) は内面刷毛調整		○黒灰色 ○胎土灰色，砂粒を多く含む
羽釜 A_2	21－41b 224	口径 20.0	・内傾し，上端は面をもつ ・幅約1cmの鍔が斜上方をむいて付く ○ていねいなで調整	・丸味をもって底部につづく ○内面ていねいなで調整		○灰黒色 ○胎土灰色，砂粒を含む
鍋	21－41b 225 ～ 226	口径 31.0 ～ 41.4	・分厚く，上端に広い面をもつ ○内外ともていねいなで調整	・斜上方へのび口縁部へつづく ○外面指おさえのあとていねいになでて仕上げる ○内面はていねいななで調整	・平底とみられる ○輪積痕がつく (225)	○灰黒色 ○胎土灰黒色，砂粒を含む
皿 I	19 167 ～ 169	口径 13.0 ～ 13.2 器高 2.2 ・ 2.3	・斜上方へまっすぐにのびる ○横なで調整	・丸味をもって口縁部へつづく ○内面はていねいななで調整	・平底	○乳灰色 ○焼成あまい
皿 IIb	19－32 172 ～ 182	口径 7.4 ～ 9.0 器高 1.0 ～ 1.5	・斜上方へ短かくのびる ○横なで調整		・平底が主であるが丸味をもったものもある	○乳灰色 ○焼成あまい
皿 IIc	19 170 ・ 171	口径 8.3 ～ 9.8 器高 0.7 ～ 1.2	・かるく上方へ折り曲げている ○側面と上端をかるくなで調整する		・平底	○乳灰色 ○焼成あまい
鍋	20－41b 227	口径 37.5	・分厚く，まっすぐに斜上方へ開く ・上端は平坦な面をなす ○内外面をていねいになでて仕上げる	・まっすぐに口縁部へつづく		○黄灰色 ○砂粒・雲母を含む

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
碗 A_2	19 183	底径 6.0		・内弯気味に口縁部へつづく ○内面を削り，器壁を薄くする ○外面下半まで施釉	・高台内を左まわりのロクロで斜めに削る	○灰白色の釉 ○胎土は灰白色
碗 A_1	19 184	底径 7.0		・内弯して口縁部へつづく ・内面の底部との境に沈線状の段をいれる ○外面は底部まで施釉	・分厚く，低い高台を削り出す	○灰緑色の釉 ○胎土は灰白色
碗 B	19 185	底径 6.0		・内面の底部との境に沈線状の段をいれる ○外面は高台付近まで施釉	・高台を細く，高く削りだす	○灰白色の釉 ○胎土は灰白色

溝2

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
羽釜 A_3	21-42a 215	口径 24.0	・やや内側にまっすぐのび，上端面取りする ・外面に凹線状の段を2つつける ・斜上方をむく幅約3cmの鍔がつく ○内外面ともていねいななで調整			○銀黒色 ○胎土灰色・砂粒多く含む ○鍔状下に煤付着
羽釜 A_4	21 216	口径 19.0	・内傾し，端部下位に凹線をいれる ・斜上方をむく幅約1.5cmの鍔がつく ○外面なで調整，内面は細かい刷毛調整	・丸味をもって底部につづいている		○銀黒色 ○胎土灰色・砂粒多く含む
鍋	21-42a 217	口径 25.0	・わずかに斜上方をむいて，断面方形の口縁部をつける ○上面と外面をていねいになでる	・斜方向にまっすぐのびている ○外面はていねいな指おさえ ○内面は細かい横方向の刷毛調整		○外面黒灰色・内面は炭素吸着せずに淡灰褐色 ○胎土も淡灰褐色・砂粒多く含む ○口縁下に煤付着
羽釜 A	21-42a 218	口径 23.4	・まっすぐ上方にのび，端部がわずかに内傾する ・外面二つの段をつくる ○外面をなで調整 ○内面刷毛調整のあと，端部上面と内面上位を横なでする			○黄灰色
鍋	21-42a 219	口径 21.0	・端部を内側へ折り返す ○内外面なで調整			○淡褐色 ○胎土は比較的精良 ○磨滅著しい

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿 Ⅲ	19-42a 186	口径 16.0 器高 2.0	・大きく外反してのびる ○内外面ていねいななで調整		・平底	○淡褐色 ○胎土精良
皿 Ⅳ	19-42a 187	口径 12.4 器高 2.4	・斜上方へまっすぐのびる ○内外面ていねいななで調整	・まっすぐ口縁部へつづくが口縁部との境でわずかに屈曲している ○外面指おさえ，内面なで調整	・平底	○淡褐色 ○焼成良・硬い
鉢	21-42a 220	底径 9.6		・まっすぐ斜上方へのび口縁部へつづく ○外面の横なで痕よくのこる ○内面もなで調整	・平底（糸切り）	○灰色 ○砂粒を含む ○焼成あまい
擂鉢	21-42a 214	口径 25.0	・厚味があり，端部は斜めに切られ，わずかに上方へ拡張している ○内外面なで調整	・まっすぐ斜上方へのび口縁部へつづく ○内面に櫛描きの擂目が施される		○淡赤褐色

溝3

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿 Ⅲ	19 188	口径 14.5 器高 2.6	・斜め上方へまっすぐにのび，端部をかるく面取りする ○内外面横なで	・まっすぐ口縁部へつづく ○外面の指おさえ目立たない ○内面はていねいななで	・平底	○乳灰色 ○胎土精良 ○硬い
	19-35 189	口径 14.4 器高 2.3	・大きく外反して開く ○内外面をていねいになで調整		・平底	○黄灰色 ○雲母含む
皿 Ⅳ	19-35 190 ・ 191	口径 9.9 ＼ 10.4 器高 2.2	・大きく外反気味に開く ○内外面ていねいななで調整	・外反気味に口縁部へつづく ○内面を時計まわりの方向になで調整	・平底 ○外面には体部下位にかけて指おさえ痕がのこる	○黄褐色 ○雲母を含む ○硬質
皿 Ⅱd	19 192 ・ 193	口径 9.7 器高 1.7 ＼ 2.1	・外反気味に斜上方へまっすぐにのびる ○内外面をていねいになで調整		・わずかに丸味をもつ平底	○黄灰色 ○胎土精良 ○焼成あまい
皿 Ⅱe	19 194	口径 7.6 器高 1.4	・まっすぐ斜上方へのびる ○内外面を時計まわりになで調整		・平底 ○外面に指紋多い	○黄灰色 ○胎土精良
	19-35 195	口径 7.0 器高 1.2	・内弯気味に斜上方へのびる ○内外面なで調整		・丸味をもつ	○黄灰色 ○胎土精良

土壙2

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿Ⅰ	19 196 ・ 197	口径 10.3 ～ 10.7 器高 2.1 ～ 2.2	・内弯気味に斜上方へまっすぐにのびる ○横なで調整		・わずかに丸味をもつ平底	○乳灰色 ○胎土精良 ○焼成あまい
皿Ⅱ	19 198	口径 8.0 器高 1.2	・短かく斜上方へのびる ○内外面なで調整		・平底	○乳灰色

表6　A区土壙墓出土の土器

土壙墓1

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	22－34 230	口径 15.0 器高 6.0 底径 5.8	・わずかに内弯するが，まっすぐ斜上方にのびる ・端部内側に沈線 ○外面横なで，体部との境付近に凹凸あり ○内面密な暗文を施す	・わずかに内弯して口縁部へつづいている ○外面の暗文わからず ○内面は暗文を密に施す	・断面三角形の分厚い高台が付く ○鋸歯状の暗文を内面に施す	○灰黒色 ○胎土灰色，やや粗い ○外面の風化著しい ○器高指数40.0
	22－34 231	口径 15.2 器高 5.8 底径 5.5	・大きく内弯し，端部は上方をむく ・端部内側に沈線 ○内面に密な暗文を施す ○外面は省略された暗文を施すが，横なでは目立たない	・大きく内弯して口縁部へつづく ○外面は中位から下位にかけて，密な暗文を施す ○指おさえ痕は目立たず ○内面も密な暗文を施す	・断面三角形の分厚い高台が付く ○内面はていねいな鋸歯状の暗文	○灰黒色 ○胎土灰色，やや粗い ○器高指数38.2
片口椀	22－34 232	口径 11.8 器高 4.8	・内弯気味に上方へのびる ・約5㎜外へ出る小さな片口をつける ○内面は密な暗文を施す ○外面は横なで	・内弯して口縁部へつづく ○内面は密な暗文を施す ○外面は部分的に簡単な暗文を施す	・丸底 ○内面は鋸歯状の暗文	○灰黒色 ○胎土灰色，やや粗い
小椀	22－34 233	口径 9.1 器高 3.3 底径 4.9	・上方へたちあがる ・端部内側に沈線 ○横なで	・内弯して口縁部へつづく ○内外面なで調整	・外方へ開く高台がつく ○内面なで調整	○灰色 ○胎土灰白色・粗い
	22－34 234	口径 8.1 器高 4.0 底径 3.8	・体部との境に稜をなして上方へたちあがる・端部内側に沈線○横なで	・まっすぐ口縁部へつづく ○内外面なで調整	・小さいが安定した高台がつく ○内面なで調整	○灰色 ○胎土灰白色・粗い
	22－34 235	口径 9.4 器高 3.4 底径 5.0	・内弯して上方へたちあがる・端部内側に沈線 ○外面にていねいな暗文を施す	・内弯して口縁部へつづく ○内面は暗文をていねいに施す	・細いが，大きな安定した高台がつく ○内面なで調整	○灰色 ○胎土灰白色・粗い

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
皿I	22－34 236 ・ 237	口径 14.6 ～ 15.2 器高 3.0 ～ 3.2	・上方へまっすぐのびる ○時計まわりの横なで調整	・丸味をもって口縁部へつづく	・平底 ○外面に指おさえ痕 ○内面はなで調整 ○(236)の内面は指おさえ痕があり，外面は板目痕がある	○明橙色 ○胎土精良 ○焼成良好・硬い
	22－ 238 ・ 239	口径 15.0 器高 3.0	・斜め上方へまっすぐにのび，端部はわずかに外反する ○時計まわりの横なで調整	・丸味をもって口縁部へつづく	・わずかに丸味のある平底 ○内面なで調整，外面に指おさえ痕あり	○明橙色 ○胎土精良 ○焼成良好・硬い
皿IIa	22－34 240 ～ 244	口径 9.7 ～ 10.5 器高 1.4 ～ 2.2	・端部が屈曲するが，(243・244)では外面を強くなでてそのくせをのこすにとどまる		・丸味をもった平底 ○内面はなで調整，外面は指おさえが基本であるが，(241)は内面を指おさえし外面に板目痕がある	○明橙色 ○胎土精良 ○焼成良好・硬い

土壙墓2

器種	図版	法量	口縁部	体部	底部	備考
椀	22－34 245	口径 15.6 器高 6.4 底径 6.3	・体部との境は肥厚気味で，まっすぐに上方へのびる・端部の沈線はなし ○外面は強い横なで ○内面は密な暗文を施す ○外面は風化のため明確な暗文は不明であるが，元来ていねいな暗文が施されていたものとみられる	・内弯気味に口縁部へつづく ○内面は密な暗文を施す ○外面は風化しており暗文は不明	・断面二角形で細いが，安定感のある高台がつく ○内面は鋸歯状の暗文をていねいに施す	○灰色 ○胎土は灰白色，やや粗さがある ○外面が風化している ○器高指数41.0
台付皿	22－34 246	口径 9.6 器高 2.8 底径 4.8	・斜上方へまっすぐにのびる ○外面かるく横なでを施す		・断面三角形の安定した高台がつく ○内面はていねいな鋸歯状暗文を施す	○灰色 ○胎土は灰白色，やや粗さがある
小椀	22－34 247	口径 10.3 器高 3.8 底径 5.3	・内弯気味に斜上方へのびる○外面は比較的密な暗文が施される	・内弯して口縁部へつづく○内面はていねいな暗文を施す	・外方に張り出す断面三角形の安定した高台がつく	○灰色 ○胎土は灰白色，やや粗さがある
鉢I	22－35 248	口径 15.0 器高 3.7	・斜上方へまっすぐにのびる ○内外面横なで	・内弯して口縁部へつづく○内面はなで調整 ○外面に指圧痕のこる	・丸味をもった平底 ○内面はなで調整 ○外面は指おさえ	○胎土やや粗い
	22－35 249	口径 14.2 器高 2.7	・斜上方へ内弯気味にのび，端部はわずかに屈曲する○内外面横なで		・平底 ○内面を指おさえ外面に板目痕あり	○明橙色 ○胎土精良・焼成良好
皿IIa	22－35 250	口径 10.8 器高 1.5	・二段に屈曲する ○内面は時計まわりのなで調整			○明橙色 ○胎土精良・焼成良好

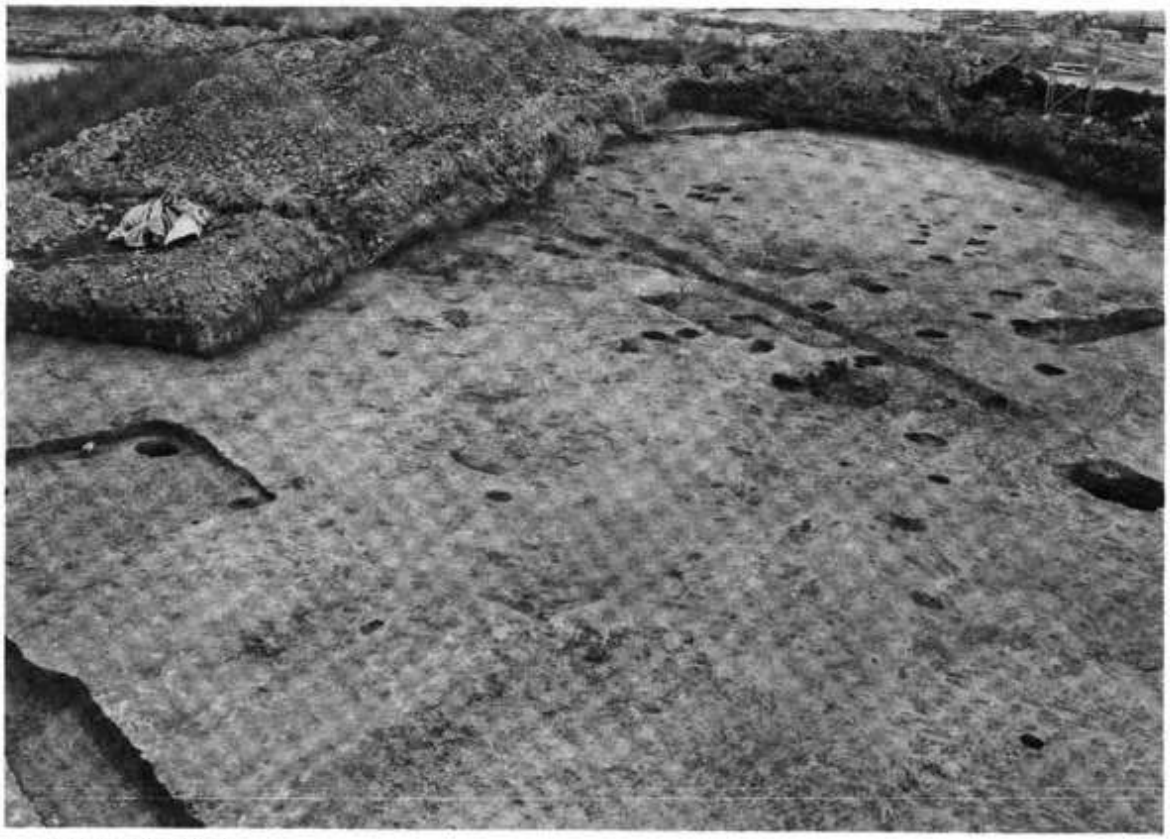
図　版　・　図　面

遺跡周辺航空写真

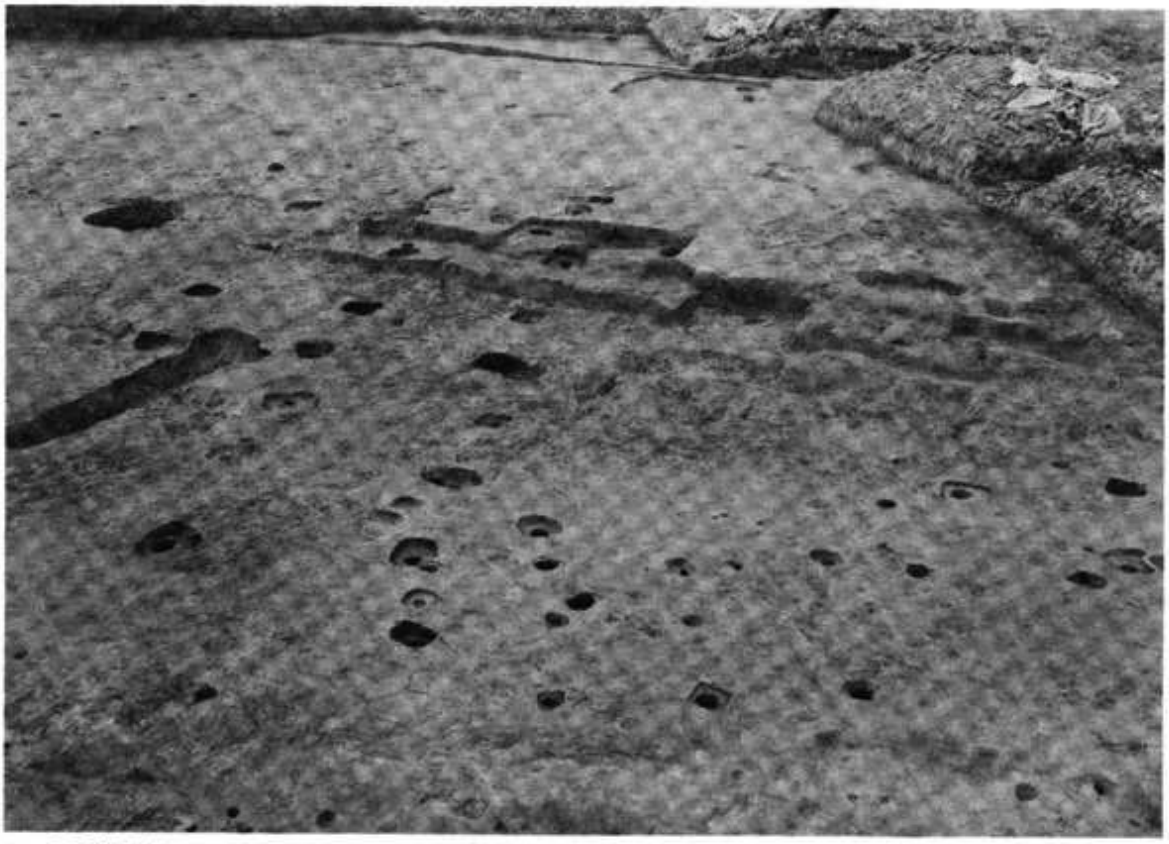
図版第2

a，遺跡近景（南から、昭和46年撮影）

b，遺跡近景（南から、昭和46年撮影）

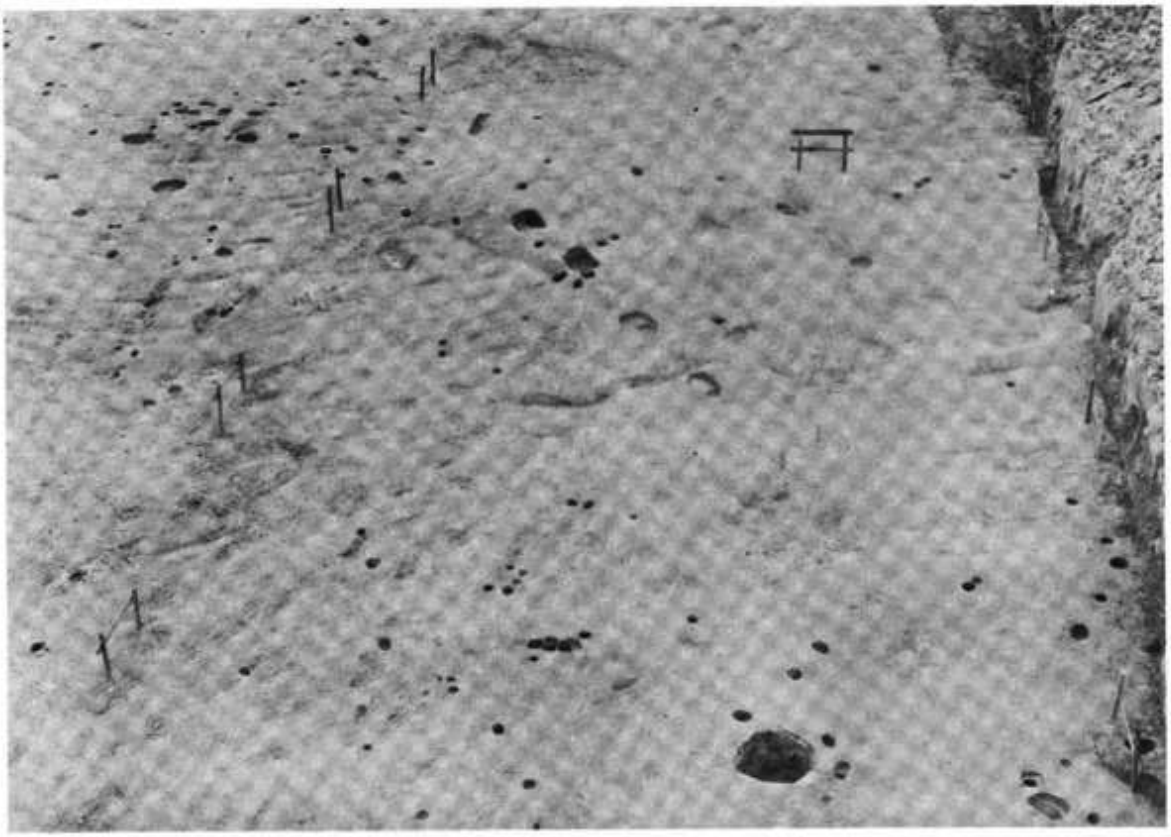


a，B区全景(西から)

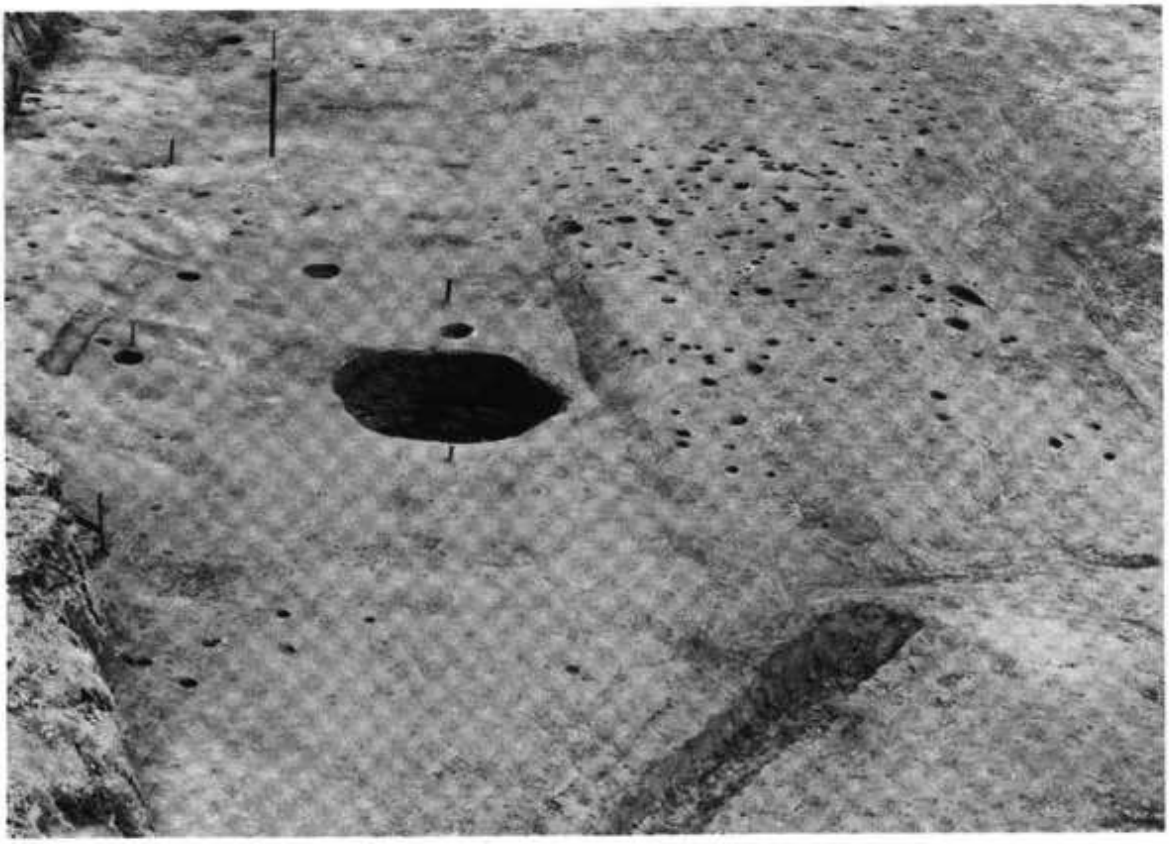


b，B区全景(東から)

図版第4



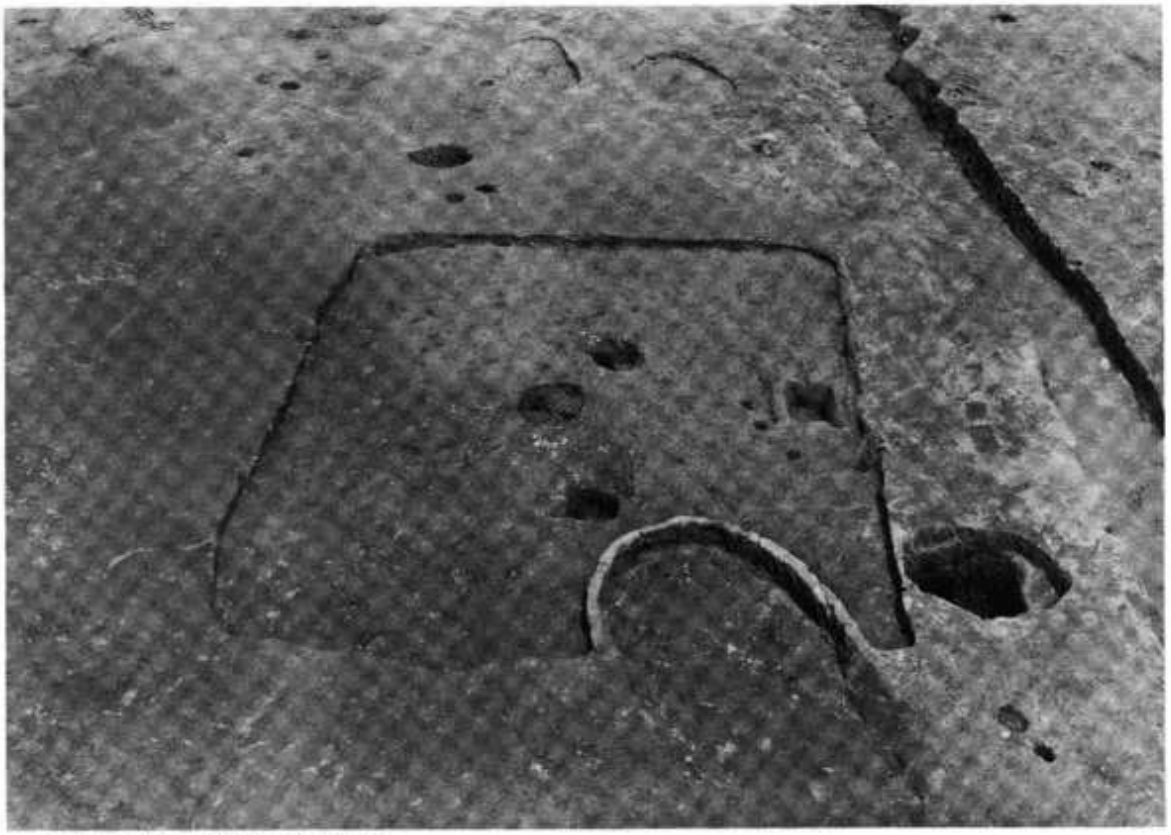
a，C区全景(東から)



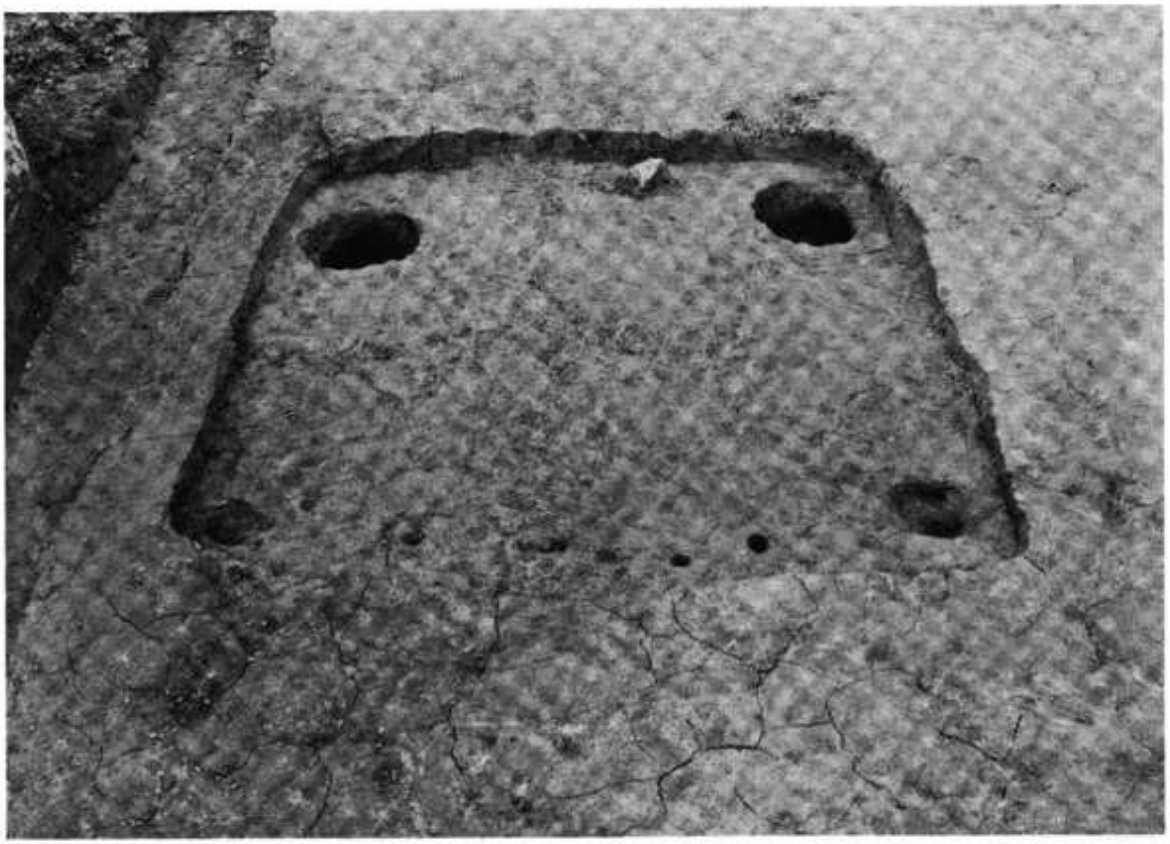
b，D区全景(北から)

C・D・E区航空写真

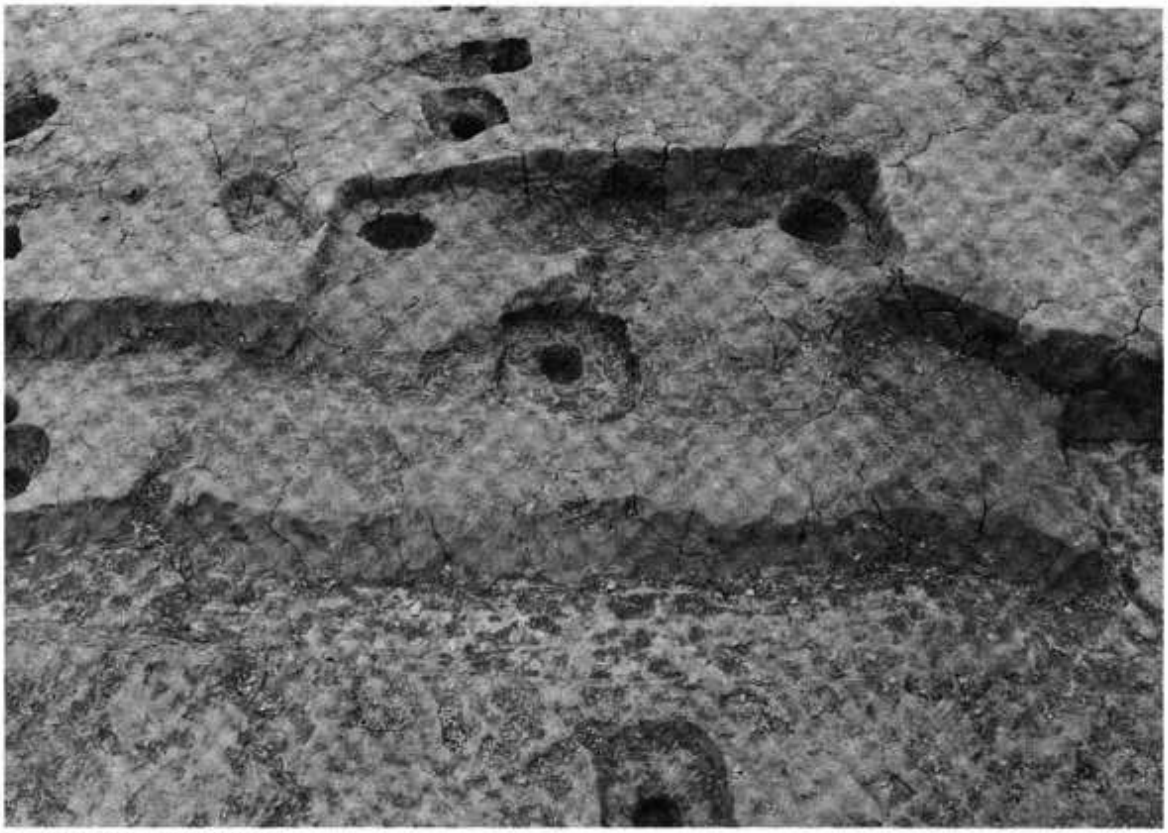
図版第6



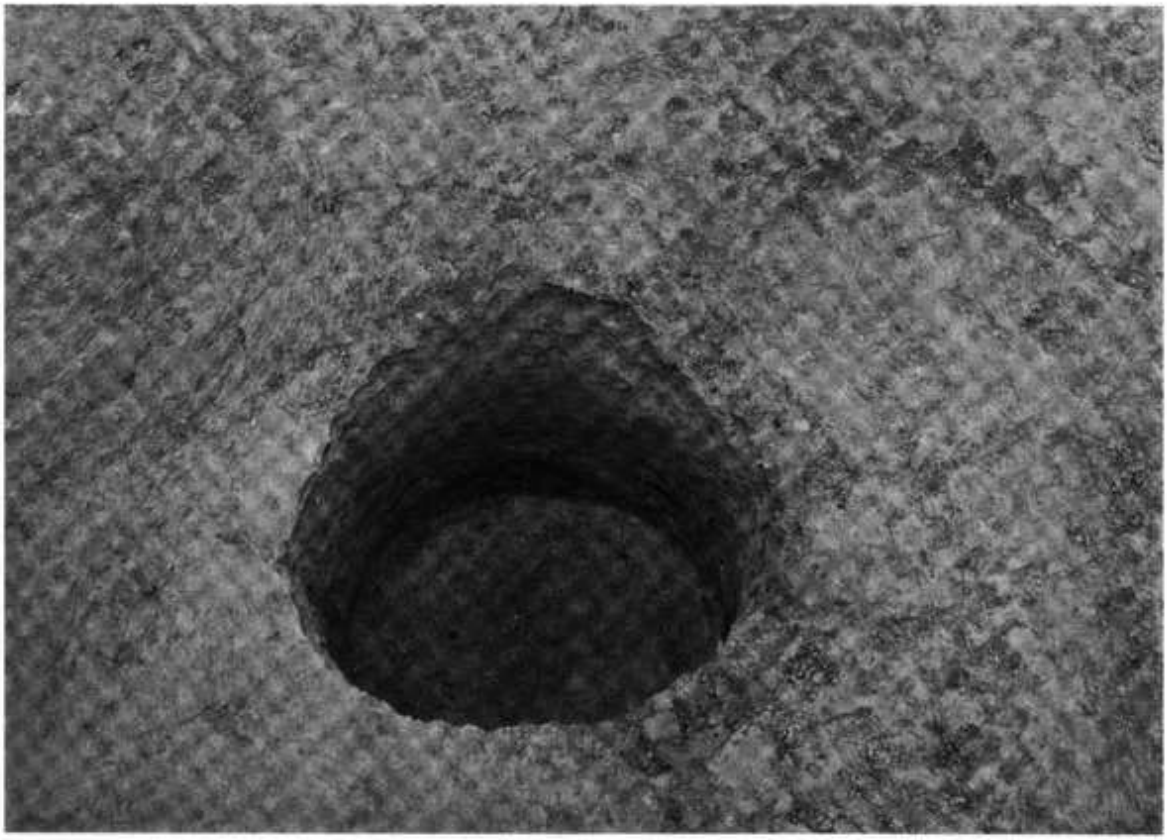
a，竪穴式住居1、土壙墓4（南から）



b，竪穴式住居2（南から）



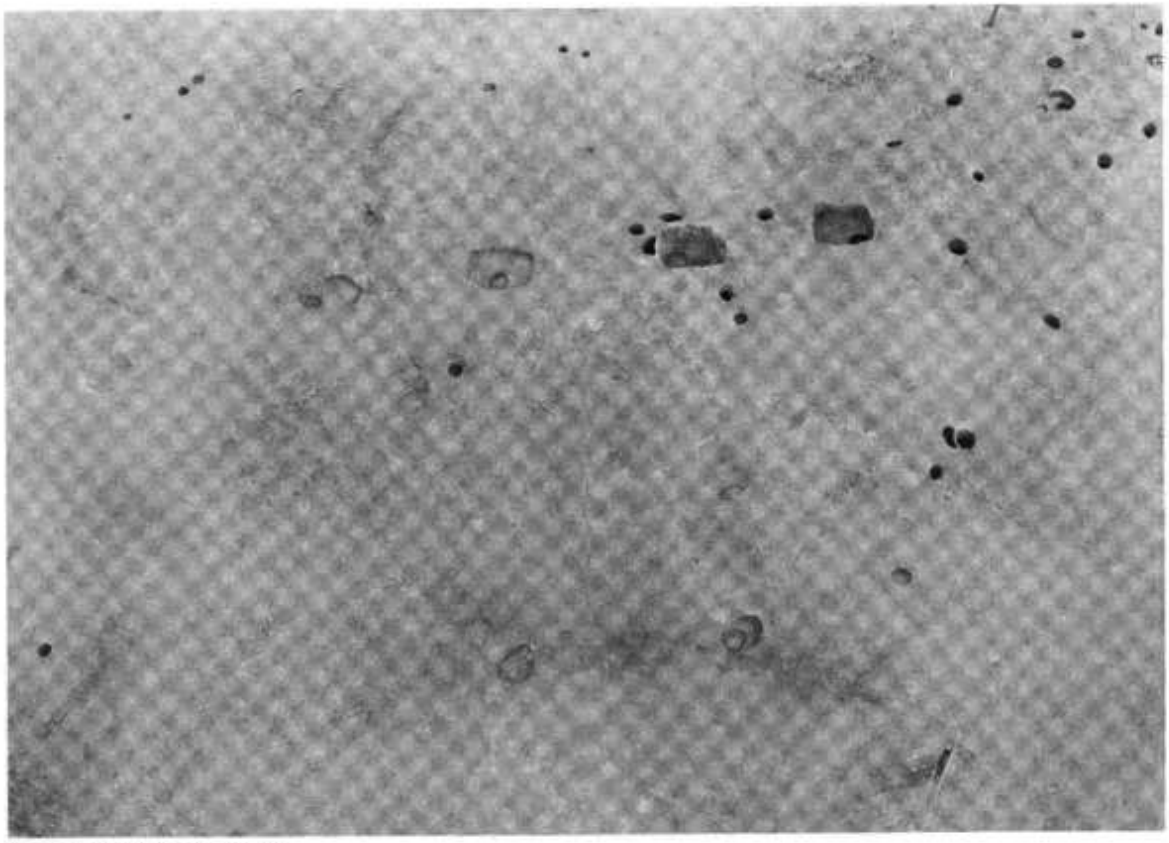
a，竪穴式住居3（東から）



b，井戸10（南から）

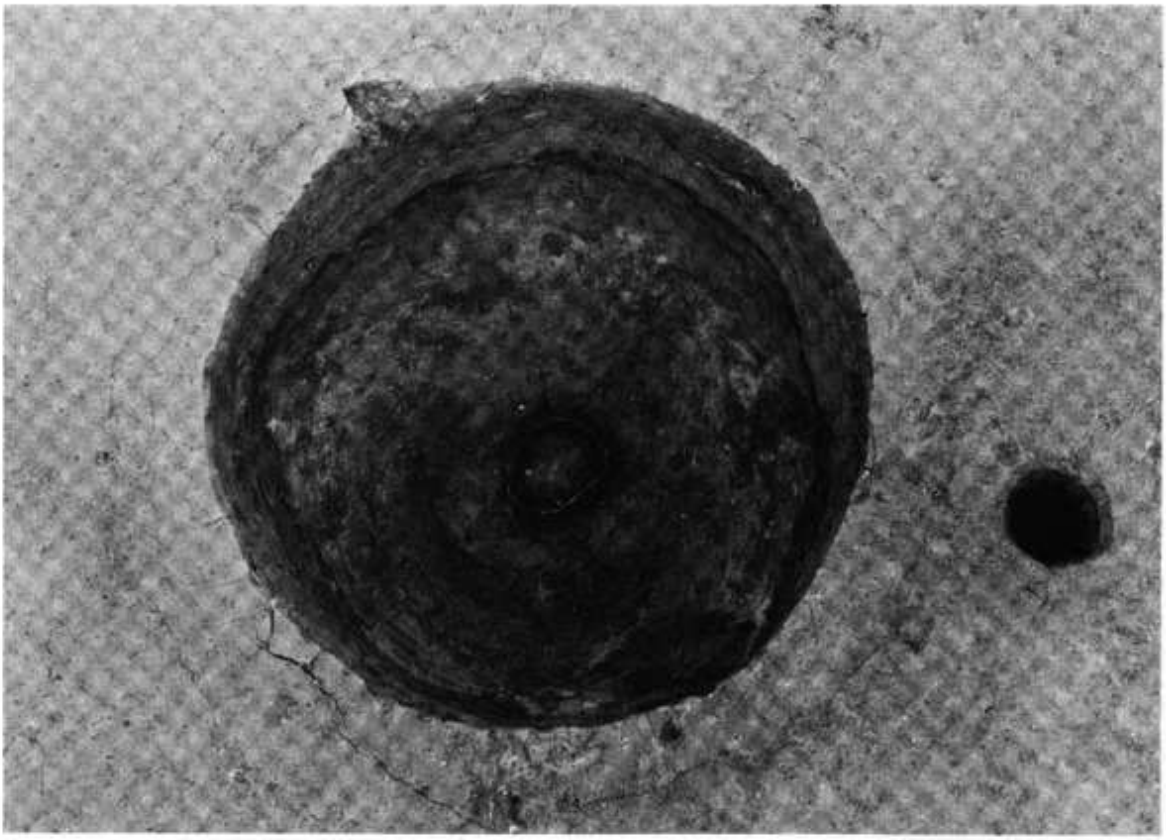
図版第8

a，掘立柱建物4（南から）



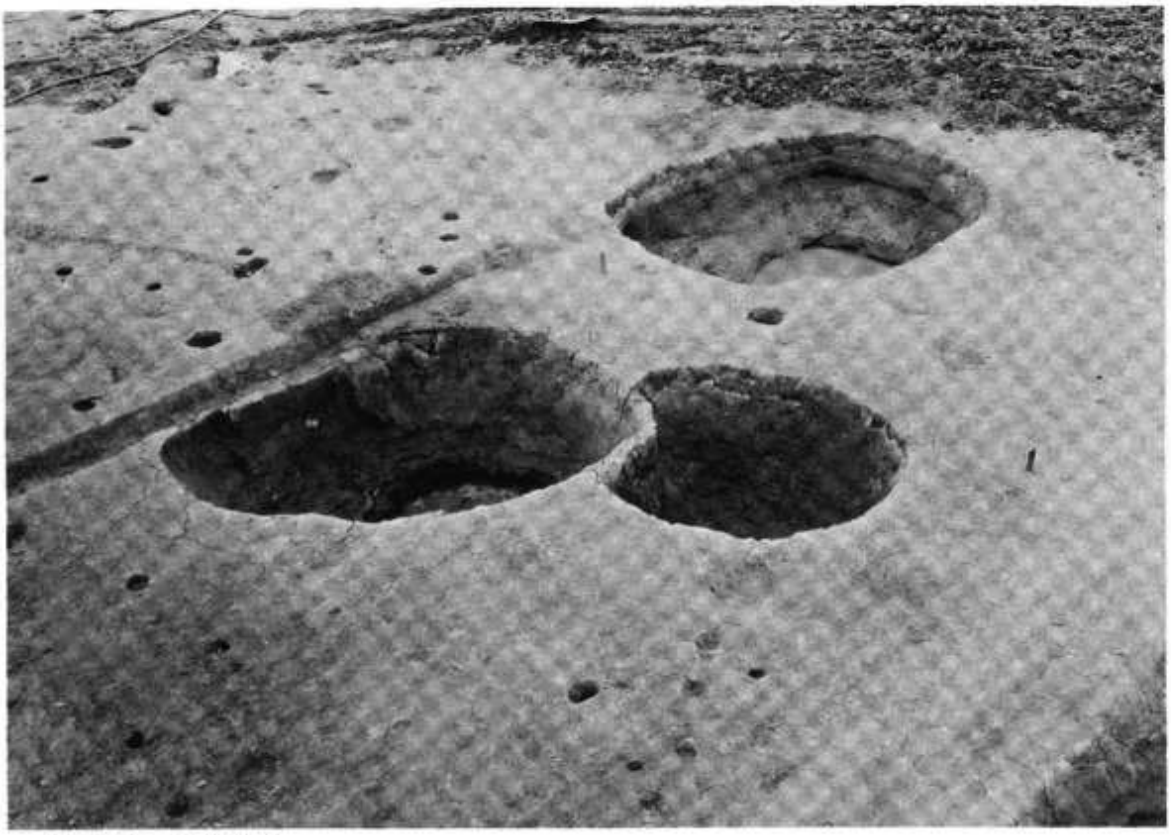
b，掘立柱建物5（北から）

a，土坑1（東から）

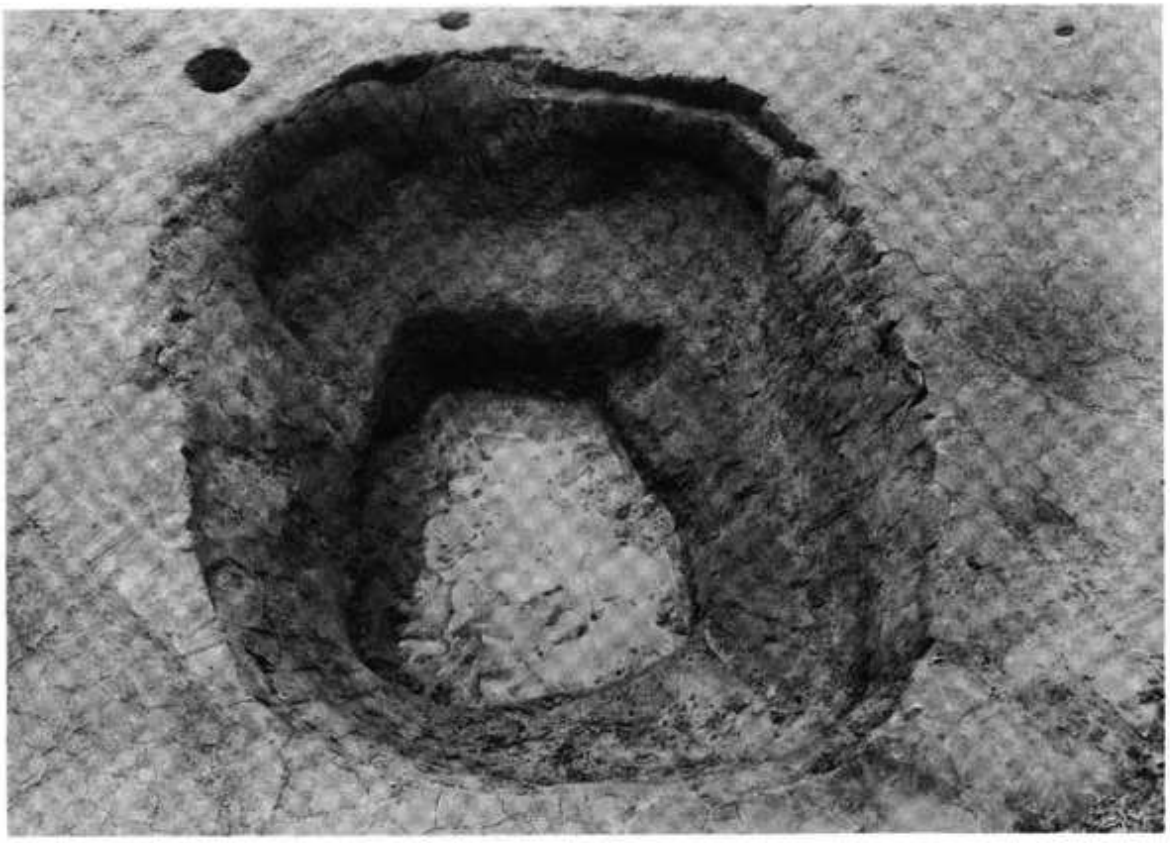


b，井戸1（東から）

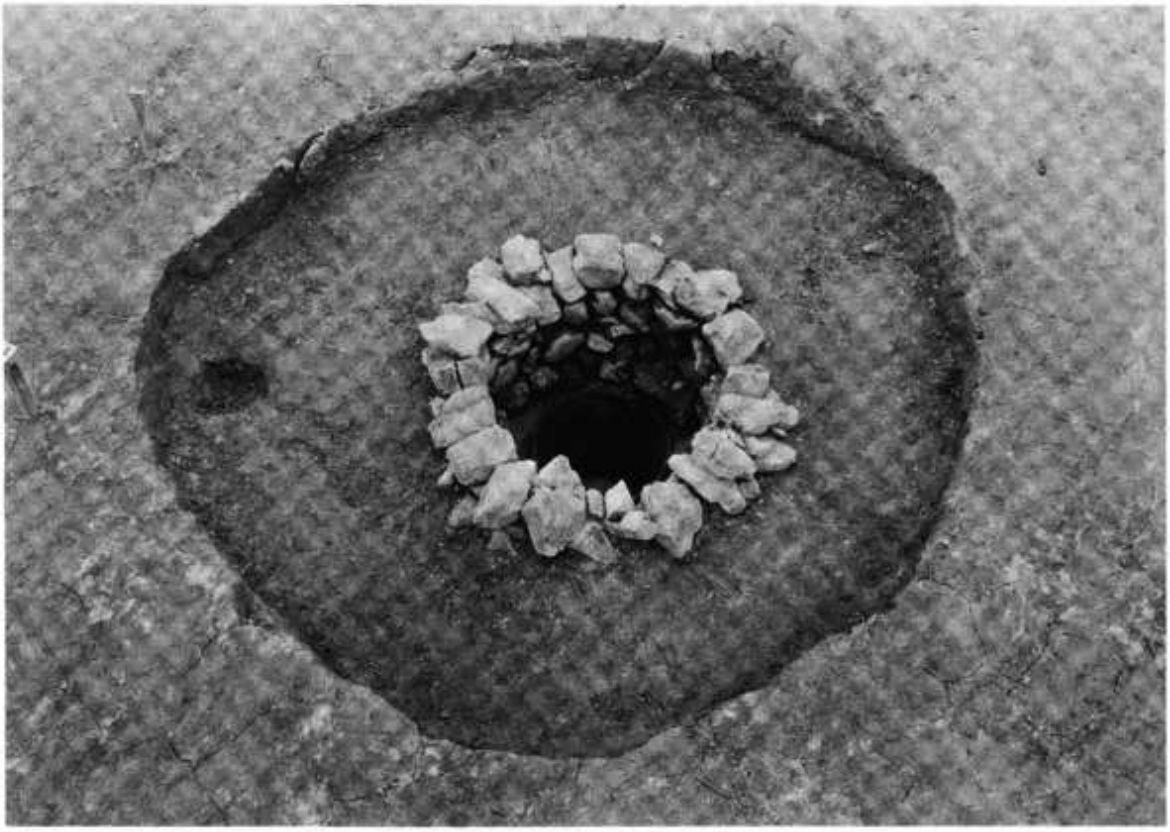
図版第10



a，井戸2・5・6（西から）



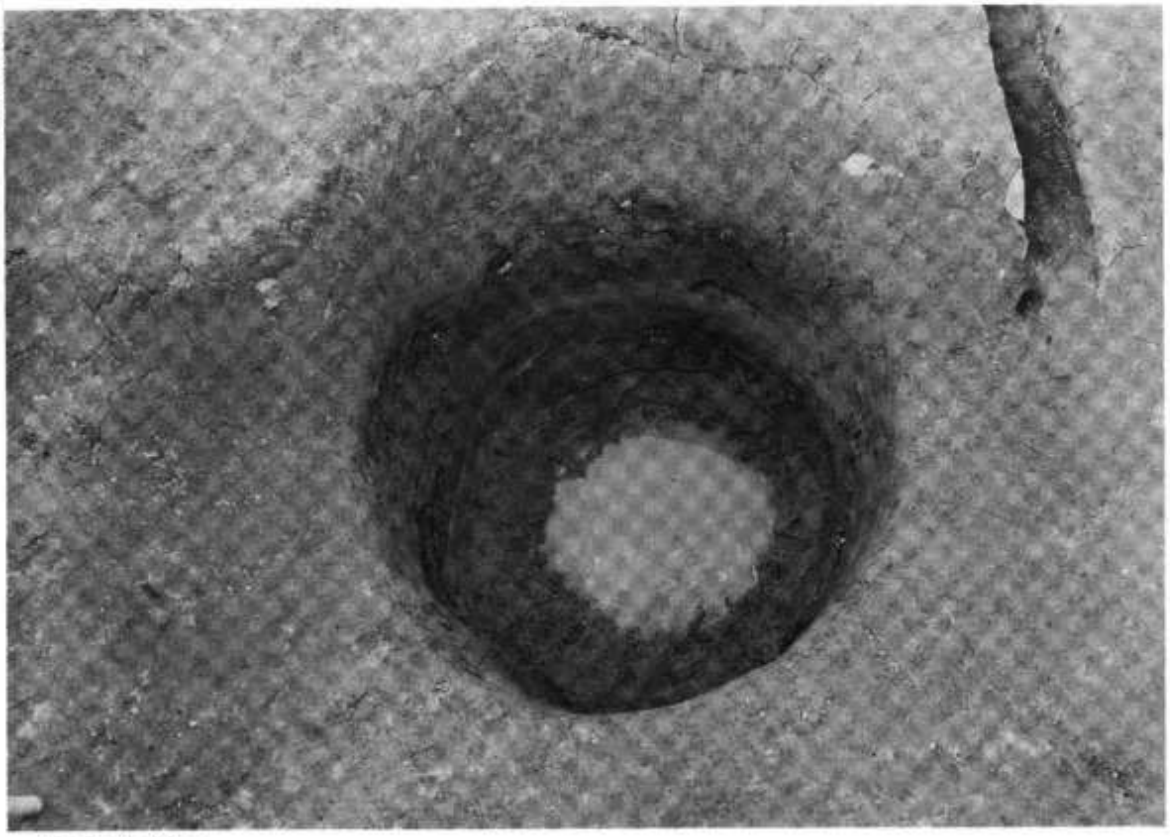
b，井戸2（東から）



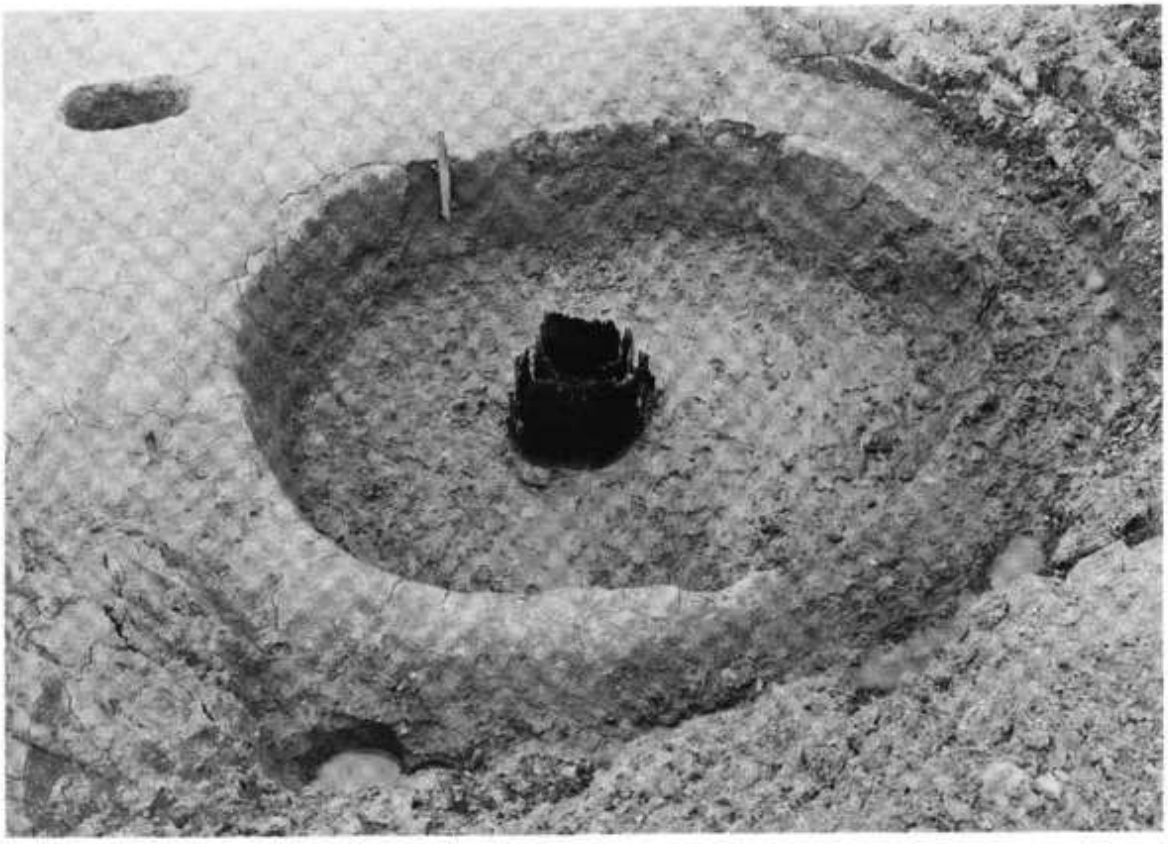
a，井戸3（南から）

b，井戸6（西から）

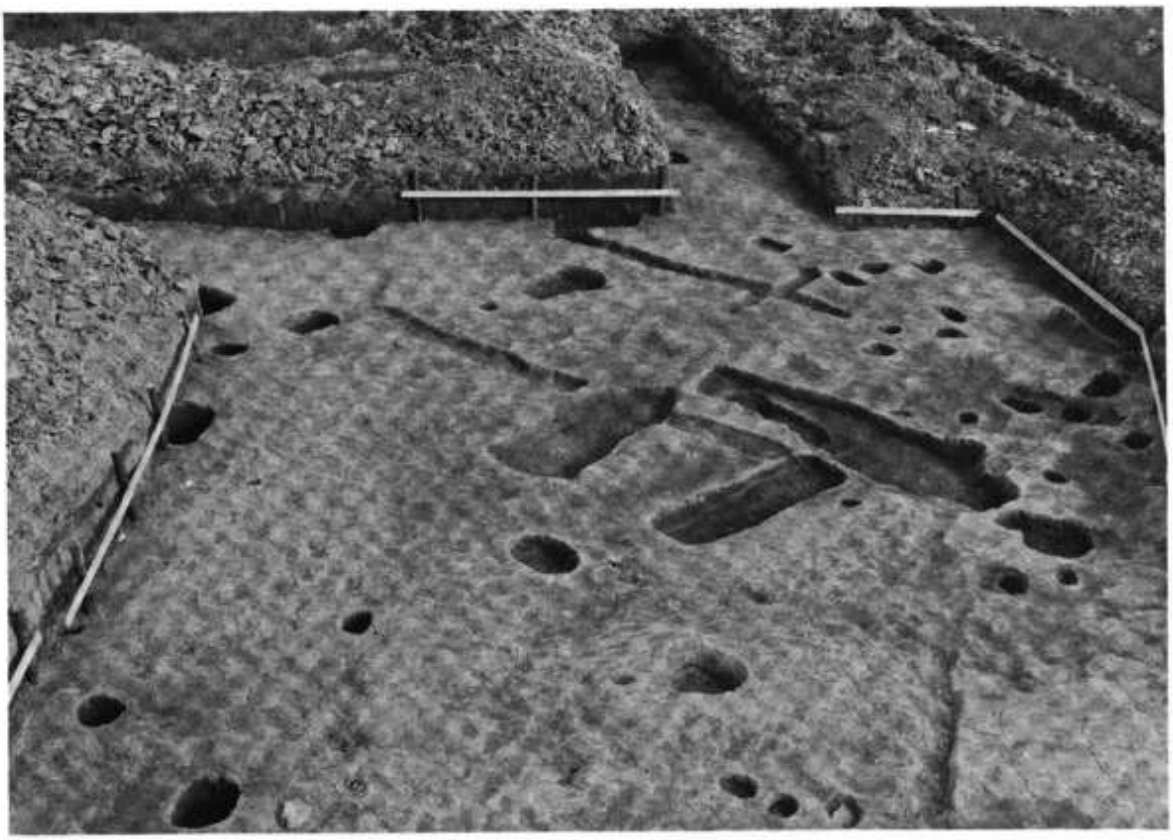
図版第12



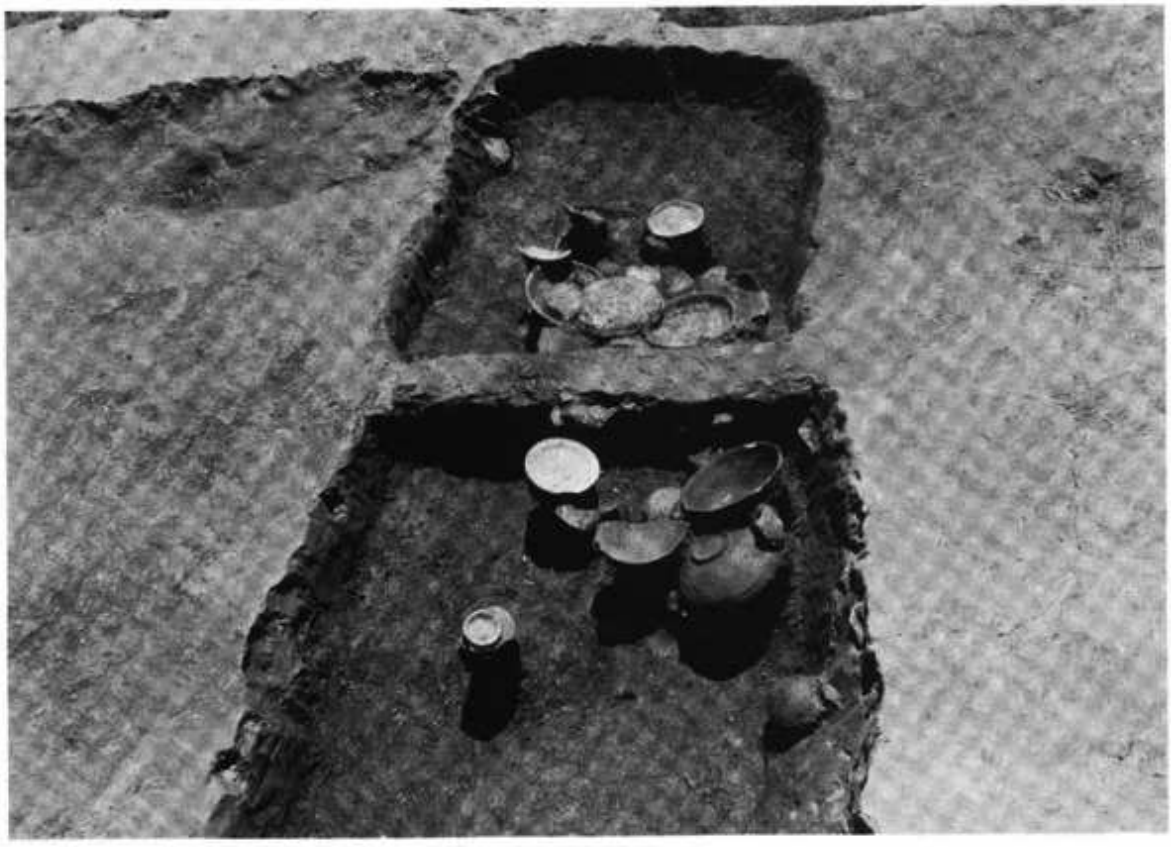
a，井戸8（南から）



b，井戸9（南から）



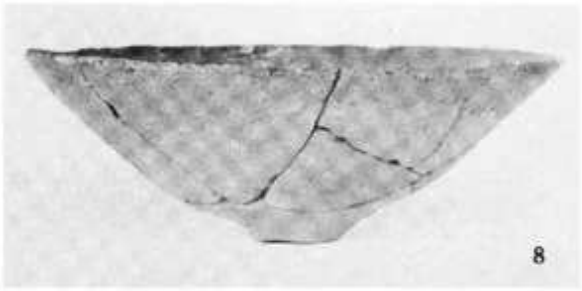
a，A区全景(北から)

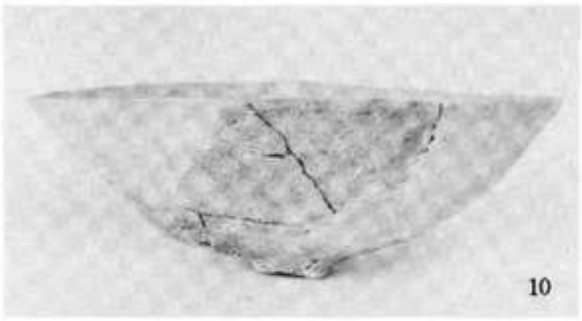


b，土坑墓1遺物出土状態(北から)

図版第14

6


8


10

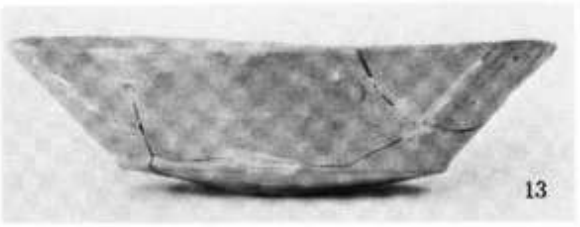
7

9

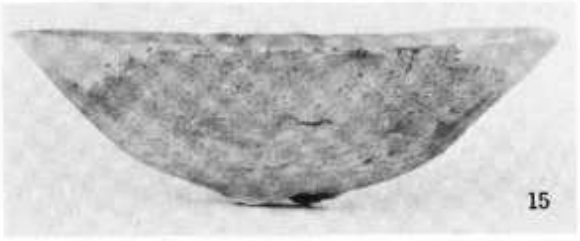
11

12

竪穴式住居2、小形丸底壺C(6・7)・高杯A_1(8)・A_2(9・10)・B_1(11)・B_2(12)


13

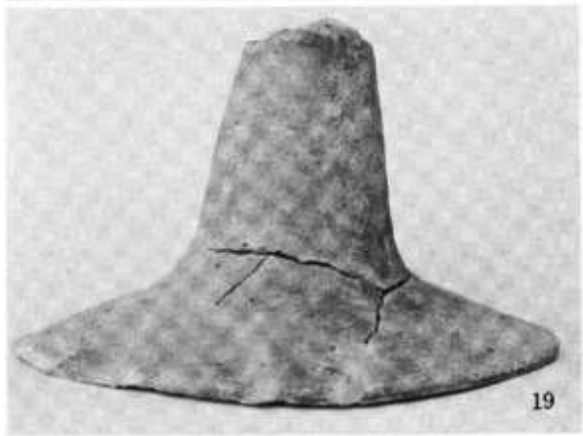
14


15

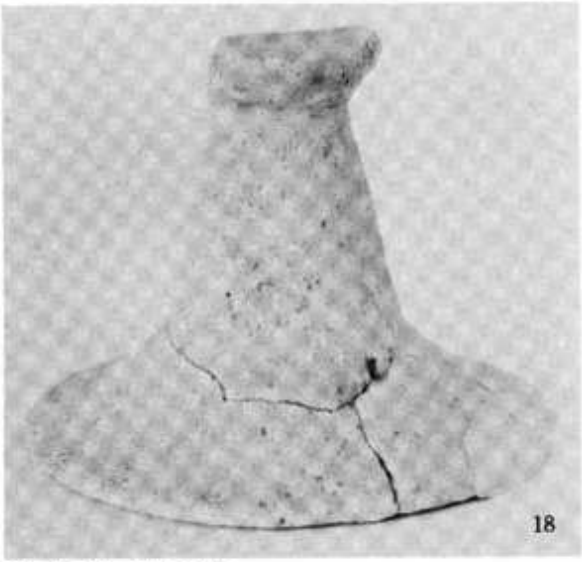
20

16

21

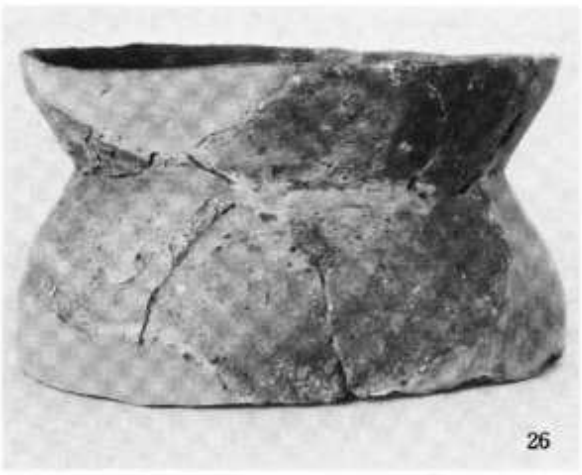

19

17


18

井戸10，高杯A_2(14～16)・B_3(13)・脚部(17～19)・鉢A(20)・小形丸底壺C(21)

22


26

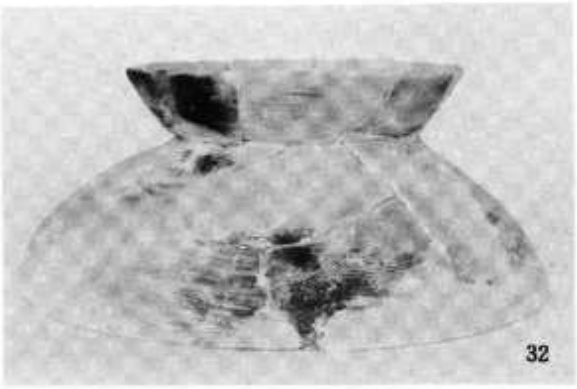
23

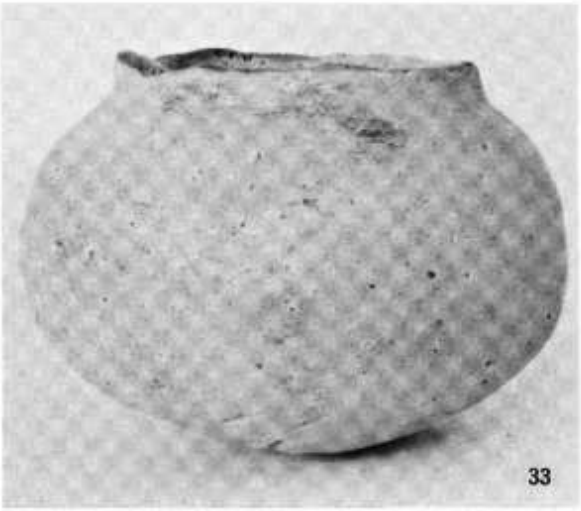
27

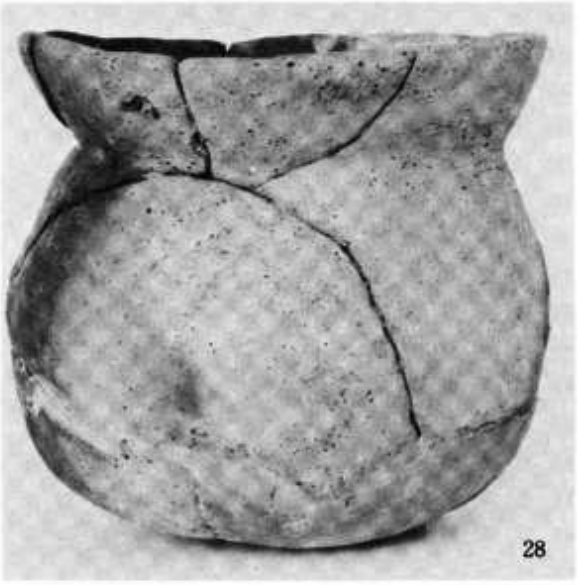
24

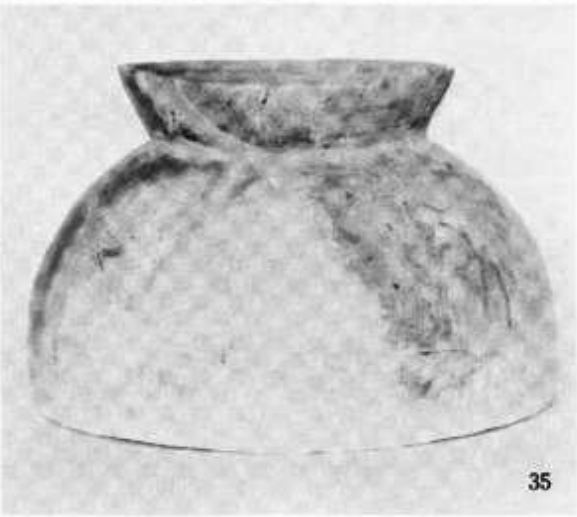
25

井戸10, 甕A$_1$(22)・A$_2$(23)・A$_3$(24)・甕体部(25)　井戸11, 小形丸底壺C(26・27)


32


33


28


35

29

30

36

井戸11，小形丸底壺C (28)・高杯A_2(29・30)・甕A_3(32)　井戸12，小形丸底壺D (33)
土壙墓5，甕A_3(35)・鉢B (36)